

茨城県教育財団文化財調査報告第362集

# 水戸城跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館  
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県教育委員会  
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第362集

水 戸 城 跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館  
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 24 年 3 月

茨城県教育委員会  
財団法人茨城県教育財団





## 序

茨城県では、健全な青少年の育成と充実した教育の実施のため、耐震補強等の現状に即した校舎の改築、より豊かな人間性と知識を育むための教育施設の建設が計画的かつ迅速に進められています。

茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事は、茨城県教育委員会が老朽化した図書館を改築し、一層の教育振興を図るために、計画されたものです。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である水戸城跡が所在することから、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県教育委員会から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成22年6月から平成22年10月までの5か月間にわたり、これを実施しました。

本書は、水戸城跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として頂ければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県教育委員会から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 鈴木 欣一



# 例 言

- 1 本書は、茨城県教育委員会財務課の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 22 年度に発掘調査を実施した、茨城県水戸市三の丸 2 丁目 7 番地の 27 に所在する水戸城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 22 年 6 月 1 日～ 10 月 31 日  
整理 平成 23 年 5 月 1 日～ 9 月 30 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 仲村浩一郎  
首席調査員 小澤重雄  
調査員 松林秀和
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、調査員松林秀和が担当した。
- 5 第 2A 号石組み遺構から採取した土壌の寄生虫卵分析、第 2A 号石組み遺構及び第 24 号土坑から出土した木材の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。
- 6 本書の作成にあたり、水戸城二の丸御殿の部屋割図を、那珂市在住の小宅近昭氏に資料を提供頂いた。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 41.640 \text{ m}$ 、 $Y = + 58.280 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット PG - ピット群 SA - 柱穴列跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡 SF - 道路跡  
SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 SX - 不明遺構

遺物 DP - 土製品 G - ガラス製品 M - 金属製品 P - 土器・陶磁器 Q - 石器・石製品 T - 瓦  
TP - 拓本記録土器





土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 100 分の 1、各遺構の実測図は 60 分の 1 の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土		炉・火床面・石・被熱痕
	竈部材・粘土範囲・砂範囲・炭化材・黒色処理		油煙・煤・墨痕
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品
■	瓦	---	硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

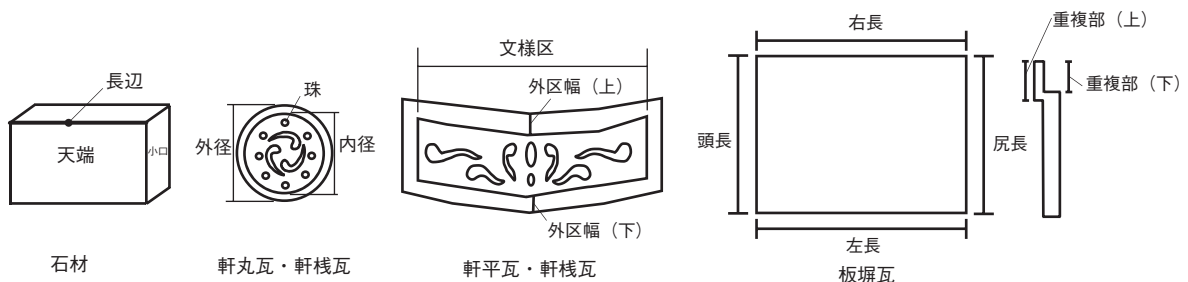
(1) 計測値の単位は m, cm, kg, g である。なお、現存値は ( ) で、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 瓦及び石組みの石材等についての計測位置は、下図に示したとおりである。



# 目 次

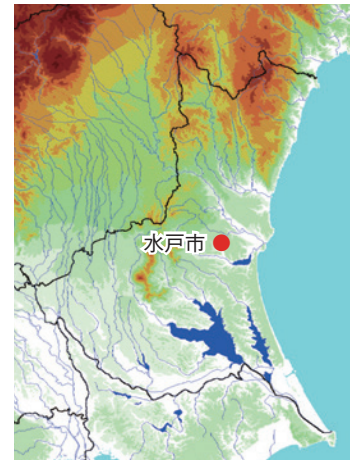
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	5
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構と遺物	14
1 平安時代の遺構と遺物（第9次面）	14
(1) 第9次面	14
① 竪穴住居跡	14
② 溝跡	17
③ 柱穴列跡	19
④ ピット群	20
⑤ 遺構外出土遺物	21
2 中世の遺構と遺物（第9・8・7・6次面）	21
(1) 第9次面	22
① 火葬土坑	22
② 土坑	22
(2) 第8次面	24
① 柱穴列跡	24
② ピット群	26
③ 不明遺構	27
④ 遺構外出土遺物	27
(3) 第7次面	28
① 井戸跡	28
② 溝跡	30
③ ピット群	31
④ 遺構外出土遺物	32
(4) 第6次面	33
① 井戸跡	33
② 炉跡	35
③ 土坑	35

④溝跡	37
⑤柱穴列跡	37
⑥ピット群	39
⑦遺構外出土遺物	41
(5) 中世遺構一覧表	42
3 近世の遺構と遺物 (第4・5・3次面)	43
(1) 第4次面	43
①石組み遺構	43
②土坑	51
③ピット群	62
④遺構外出土遺物	64
(2) 第5次面	67
①石組み遺構	67
②ピット群	70
③遺構外出土遺物	72
(3) 第3次面	74
①用排水路跡	74
②石敷き遺構	80
③土坑	84
④柱穴列跡	86
⑤ピット群	89
⑥遺構外出土遺物	92
(4) 近世遺構一覧表	94
4 近代の遺構と遺物 (第2次面)	95
(1) 第2次面	95
①用排水路跡	95
②道路跡	98
③溝跡	100
④瓦溜まり	101
⑤土坑	103
⑥ピット群	106
⑦遺構外出土遺物	106
(2) 近代遺構一覧表	107
5 遺構外出土遺物 (第1次面)	108
調査区北壁土層断面図	110
調査区位置図	111
水戸城跡近世 (第3～5次面) 遺構全体図	112
第4節 まとめ	113
付章	121
写真図版	PL 1～PL18
抄録	

# み と じょう あと 水戸城跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

水戸城跡は、J R 常磐線水戸駅の北側、那珂川と桜川に挟まれた、水戸市街を眼下に望む標高 30m の台地上に位置しています。今回、茨城県立水戸第三高等学校の図書館改築工事に伴い、遺跡の記録保存を目的として、茨城県教育財団が、平成 22 年度に発掘調査を実施しました。



調査区全景（南側から）

## 調査の内容

調査区の面積は 270㎡で、一帯は、鎌倉時代から現在まで、屋敷や城、学校など、様々な形で利用されてきた歴史があります。今回の調査で、現在の地面の下に、九つの面を確認することができました。上から、確認できた面を第1～9次面としました。第1次面は現代の面で、以下近代から古代にわたっています。





調査区の壁面で確認できた整地面の土層断面

調査は、時期の新しい面から行い、調査が終了したら次の面の調査に移るという方法で行いました。

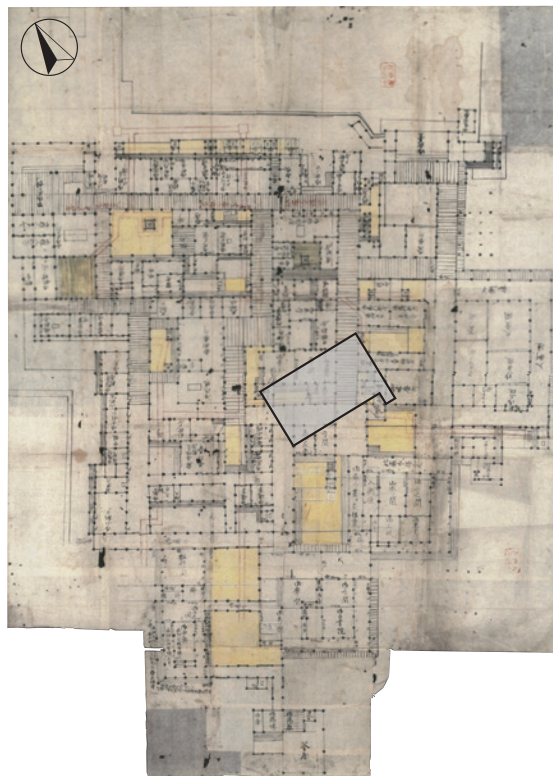
第2次面は明治時代～昭和、第3～5次面は江戸時代、第6次面は安土・桃山時代、第7・8次面は室町時代、第9次面は平安時代～鎌倉時代になると考えられます。第9次面からは平安



平安時代の住居跡（第9次面）

時代（約 1,100 年前）の<sup>たてあなじゅうきょあと</sup> 竪穴住居跡と中世の<sup>かそうどころ</sup> 火葬土坑が確認でき、この面では<sup>もりど</sup> 盛土などが行われていないことが分かりました。第8次面は、出土遺物などから、上の第7次面と近い時期と考えられ、一度の<sup>かいしゅう</sup> 改修の中で、何度も盛土を行っていた可能性があります。第6・7次面からは<sup>いどあと</sup> 井戸跡が確認でき、当時の生活面であったと考えられます。

第3～5次面は、今回の調査の中心となる江戸時代です。調査区の周辺は水戸城の二の丸にあたり、残された絵図面との対応から、徳川氏とくがわしによって築かれた二の丸御殿にまるごてんのほぼ中央に位置すると考えられます。



二の丸御殿の部屋割図と調査区の推定位置

この時期の遺構いこうは、凝灰岩ぎょうかいがんの切石きりいしを使用した石組みいしぐみ

遺構や同じ石材を凹字状おうじじょうに加工した用排水路跡ようはいすいろあとなどが確認できました。凝灰岩は、水戸黄門みとこうもんとして知られる、2代水戸藩主とくがわみつくにの徳川光圀とくがわみつくにによって作られた笠原水道かさはらすいどうでも用いられており、当時は、この石材が良く使われていたことが分かります。



石組み遺構（第4次面，写真上の二つ）



直線状に延びる用排水路跡（第3次面）



出土遺物は、土師質土器の皿や火鉢、陶磁器、大量の瓦などがあります。出土した陶器の中には、9代水戸藩主の徳川齊昭によって始められた七面焼の灯明皿や土瓶なども見られます。



第4次面で出土した遺物



七面焼の土瓶（第3次面出土）



七面焼の灯明皿（第3次面出土）

第2次面は、明治時代以降です。水戸城がその歴史に幕を下ろした後、その跡地に、茨城県尋常師範学校が移転してきました。この面の遺構からは「師」の文字がプリントされた磁器が出土しており、師範学校で支給されたものと思われる。城から学校へとその役割は変わりますが、江戸時代の用排水路跡に新たに陶製の土管を設置して使用するなど、水戸城の構造を利用して建てられていることが分かりました。



「師」の文字が入った磁器

## 調査の結果

今回の調査で、様々な時代に行われた大規模な整地の様子を確認することができました。整地が何度も行われていることから、調査区周辺は、この地域を治める者にとって、とても重要な場所であったことが分かります。その中でも、江戸時代の生活面が2面確認できたことは、改修の記録と一致し、史実を裏付ける興味深い結果となりました。また江戸時代の石組み遺構や用排水路跡が確認できたことは、詳しいことが分かっていなかった水戸城の二の丸御殿の様子を知る上で、重要な資料となります。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県教育委員会財務課は、水戸市において、県立水戸第三高等学校図書館の改築事業を進めている。

平成21年9月16日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、県立水戸第三高等学校図書館改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年9月17日に現地踏査を、平成21年9月25日に試掘調査を実施し、水戸城跡の所在を確認した。

平成21年12月7日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課に対して、事業地内に水戸城跡が所在すること、及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成22年1月8日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年2月16日、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年3月9日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、県立水戸第三高等学校図書館改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年3月15日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課に対して、水戸城跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会財務課から埋蔵文化財発掘事業について委託を受け、平成22年6月1日から10月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

水戸城跡の調査は、平成22年6月1日から10月31日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	6月	7月	8月	9月	10月
調査準備 表土除去 遺構確認	■				
遺構調査	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■	■	■
補足調査 撤収					■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

水戸城跡は、茨城県水戸市三の丸2丁目7番地の27に所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、北は那珂市・東茨城郡城里町、東はひたちなか市・東茨城郡大洗町、南は東茨城郡茨城町、西は笠間市と接している。当市は、江戸時代に水戸徳川家の城下町として栄え、明治時代以降は県庁所在地として、本県の政治、経済、文化の中心地となっている。

市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶏足山塊に属する標高60～200mの丘陵地、中央部が茨城台地の北東部にあたる標高20～30mの水戸台地、北部の一部が標高30～40mの那珂台地、北部から東部へ流れる那珂川の流域が標高10m以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられ、当遺跡は上市台地の先端部に位置している。

台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、下層から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である砂礫層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる。

当遺跡は、水戸市街地の中心部、JR常磐線水戸駅の北側に位置し、北の那珂川、南の千波湖と桜川に挟まれ、南東にせり出した舌状台地上、那珂川右岸の標高30mの台地上に立地しており、低地との標高差は約20mに及ぶ。城の構造は、東西に細長く延びる台地を堀や土塁で区画した連郭式平山城であり、東から東二の丸（浄光寺曲輪・下の丸）、本丸、二の丸、三の丸が配置されている。現在は、学校施設や県三の丸庁舎（旧県庁舎）、県立図書館などが建つ文教地区となっているほか、本丸と二の丸の間の堀がJR水郡線、二の丸と三の丸の間の堀が県道市毛水戸線として利用されている。

今回の調査地は、茨城県立水戸第三高等学校敷地内、旧二の丸御殿のほぼ中央部分にあたる。調査前の現況は学校用地である。

### 第2節 歴史的環境

遺跡の所在する水戸市は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている<sup>1)</sup>。ここでは、当遺跡に関連する周辺遺跡を中心に、時代ごとに記述する。

旧石器時代は、十万原台地上のニガサワ遺跡、二の沢B遺跡、ドウゼンクボ遺跡などで石器が採集されており、十万原遺跡では石器集中地点や集石土坑などが確認されている<sup>2)</sup>。

縄文時代には、愛宕町遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡などが上市台地の縁辺部に位置し<sup>3)</sup>、この地域が早い時期から生活域として利用されていたことがわかる。また、『常陸國風土記』に巨人伝説が記され<sup>4)</sup>、古代からその存在が知られていた大串貝塚をはじめ、柳崎貝塚〈40〉や吉田貝塚〈26〉、安楽寺遺跡など、那珂川・桜川の流域が生活に豊かな資源を与える生活に適した場であったことがうかがえる。

弥生時代に入ると那珂川流域の台地上を中心に遺跡や遺物が確認されており、上市台地上においては、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などがあげられる。

古墳時代の上市台地上の遺跡としては、愛宕山古墳群<sup>あたごやま</sup>があり、国指定史跡である愛宕山古墳が存在している。県内では石岡市の舟塚山古墳<sup>ふなつかやま</sup>、常陸太田市の梵天山古墳<sup>ぼんでんやま</sup>に次ぐ全長 136.5m の大形前方後円墳である。また、台渡里遺跡<sup>だいわたりに</sup>では一辺 75m と推定される方形の堀がめぐる豪族居館跡が発見されている<sup>5)</sup>。

奈良・平安時代の当遺跡周辺は、那賀郡常石郷<sup>なかときわ</sup>に比定されている。当時代の主な遺跡としては、国指定史跡の台渡里廢寺跡<sup>だいわたりはいじ</sup>があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、観音堂山地区<sup>かんのんどうやま</sup>では 7 世紀後半、南方地区<sup>なんぽう</sup>では 9 世紀後半の時期の異なる寺院跡が確認されている。また、周辺にはアラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡、台渡里遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが分布しており、台渡里廢寺跡を中心としたこれらの遺跡群は、那賀郡の郡庁院、正倉院、寺院、集落が一体となった官衙関連遺跡として捉えられている<sup>6)</sup>。

中世以降になると、水戸地方においても戦乱が続き、多くの城館が築かれている。当遺跡周辺の主な中世城館跡は、大掾氏の一族である吉田氏の居館と考えられる吉田城跡〈29〉、大掾氏の支城として築かれ、その後江戸氏の一族、春秋氏の居城であったとされる見川城跡、大掾氏配下の宍戸氏の居所とされる中河内館跡〈13〉や長者山城跡などがある。また、那珂川流域では枝川城跡〈22〉、堀口館跡、武田館跡、勝倉城跡、西木倉館跡、市毛館跡、那珂台地上においては島崎館跡、福田中坪館跡、玄蕃山館跡、原坪館跡、藤咲丹後館跡、高野氏館跡、堀の内館跡、新地館跡などの多くの城館跡が確認されている。那珂川を望む台地上において、有力領主層を頂点とする領地支配のネットワークがみてとれ、政治的・軍事的に重要な地であったことがうかがえる<sup>7)</sup>。

水戸城は、平安末期から鎌倉時代初期に常陸大掾馬場資幹が館を構えたのが始まりで、当初は馬場城と呼ばれていた。馬場氏は大掾職を世襲していたため、現石岡市の府中に居住していたと考えられることから、馬場城は支館であり、その規模も小さかったと推定されている。次いで応永 33 年（1426）、河和田城主江戸道房<sup>かわだ えどみち</sup>が大掾満幹の留守に水戸城を占拠し、以来 165 年間、江戸氏の支配が続いた。江戸氏時代の水戸城は、居館のあった内城とその外郭である宿城からなり、城郭としての構えが成立したと考えられている。天正 18 年（1590）、太田城の佐竹義重・義宣<sup>おおた さたけよししげ よしのぶ</sup>が江戸氏を討伐し、本拠を太田城から水戸城へ移し、領国の中心と定めた。内城を本丸、宿城を二の丸とし、また二の丸の外側にも郭を造り、三の丸としたと伝えられている<sup>8)</sup>。さらに、大掾氏時代からの古い水戸明神<sup>みとみょうじん</sup>や浄光寺のある側にも浄光寺曲輪を設けるなど、文禄 2 年（1593）から慶長 7 年（1602）ごろまで積極的に城郭の修築・拡張をおこなった。城下町においても三の丸の門前に町人町が定められ、城郭は町人町からはっきりと分離されるなど、徳川時代の城郭及び城下町の基礎は佐竹氏の時期に築かれた。慶長 7 年（1602）5 月、佐竹氏は徳川家康に秋田へ転封を命じられ、同年 11 月には家康の第五子武田信吉<sup>たけのぶよし</sup>が水戸城に入封する。しかし、翌年病死したため、家康第十子の頼宣<sup>よりのぶ</sup>が城主となる。続いて第十一子頼房<sup>よりふさ</sup>が水戸徳川家の初代藩主となり、水戸藩の基礎をなした<sup>9)</sup>。頼房は寛永 2 年（1625）に城の大修築を始め、二の丸を本丸とし、大手橋<sup>おおてばし</sup>をつくった。寛永 5 年（1628）には、本丸多聞・二の丸帯曲輪・田町水門の普請が行われ、寛永 15 年（1638）には、三の丸の南北の郭門・南見付・荒神見付などもつくられた。城下町に関しては、寛永 2 年に町人を移住させた田町周辺が下町、それに対して城郭部分の台地上は上町と呼ばれ、整備拡張が行われた。曲輪間を区画する堀もこの徳川時代のものとされている。このような整備拡張が行われたが、上町・下町ともに上用水の確保は困難であった。そこで徳川光圀は寛文 2 年（1662）、笠原不動谷の湧水を引くための笠原水道の建設に着手し、翌年完成させた<sup>10)</sup>。天保 12 年（1841）には、徳川斉昭<sup>なりあき</sup>によって藩校である弘道館<sup>こうどうかん</sup>が開かれた。

その後、幕末の争乱を迎え、水戸城周辺でも倒幕派と佐幕派による弘道館の戦いが起り、明治 4 年（1871）には廢城令が公布され、翌年、放火によりほとんどの建物が焼失した。明治 21 年（1888）、水戸城二の丸跡に





第1図 水戸城跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「水戸」「ひたちなか」）



表1 水戸城跡周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	水戸城跡					○	○	○	21	市毛上坪遺跡			○	○	○		
2	無名古墳				○				22	枝川城跡						○	
3	東照宮境内遺跡			○					23	武熊故城						○	
4	東照宮境内古墳群				○				24	お下屋敷遺跡		○	○	○	○		
5	梅香火葬墓跡					○			25	水戸南高校遺跡		○	○	○			
6	釜神町遺跡		○						26	吉田貝塚		○					
7	七面製陶所跡							○	27	吉田神社遺跡			○	○	○		
8	五軒町古墳群				○				28	吉田古墳群				○			
9	並松町遺跡		○						29	吉田城跡						○	
10	藤井町遺跡		○	○					30	薬王院東遺跡		○	○		○		
11	柳河町遺跡			○	○	○			31	安楽寺遺跡		○					
12	反町遺跡			○	○				32	大鋸町遺跡	○		○	○			
13	中河内館跡						○		33	大鋸町古墳				○			
14	津田若宮遺跡	○	○	○	○	○			34	横宿遺跡		○	○	○			
15	天神山遺跡		○	○	○	○			35	米沢町遺跡			○	○	○		
16	天神山古墳				○				36	福沢古墳群				○			
17	天神山城跡		○	○	○	○			37	払沢古墳群				○			
18	西中島遺跡		○	○	○	○			38	笠原水道							○
19	上馬場遺跡		○	○					39	下本郷遺跡		○					
20	津田久保遺跡				○	○			40	柳崎貝塚		○					



は、小学校の教員を養成するために開設された、茨城県尋常師範学校（開設当初は拡充師範学校と呼称）が移転してきた。その後、第二次世界大戦の昭和20年（1945）の水戸大空襲により、三階櫓なども焼失し、現在、当時の様子をうかがえる城郭施設はほとんど残っていない。現存するものでは、弘道館が昭和27年に国指定特別史跡に、弘道館政庁・至善堂・正門・堀が昭和39年に国指定重要文化財に、土塁・空堀が昭和42年に県指定史跡に、薬医門が昭和58年に県指定有形文化財にそれぞれ指定されている。

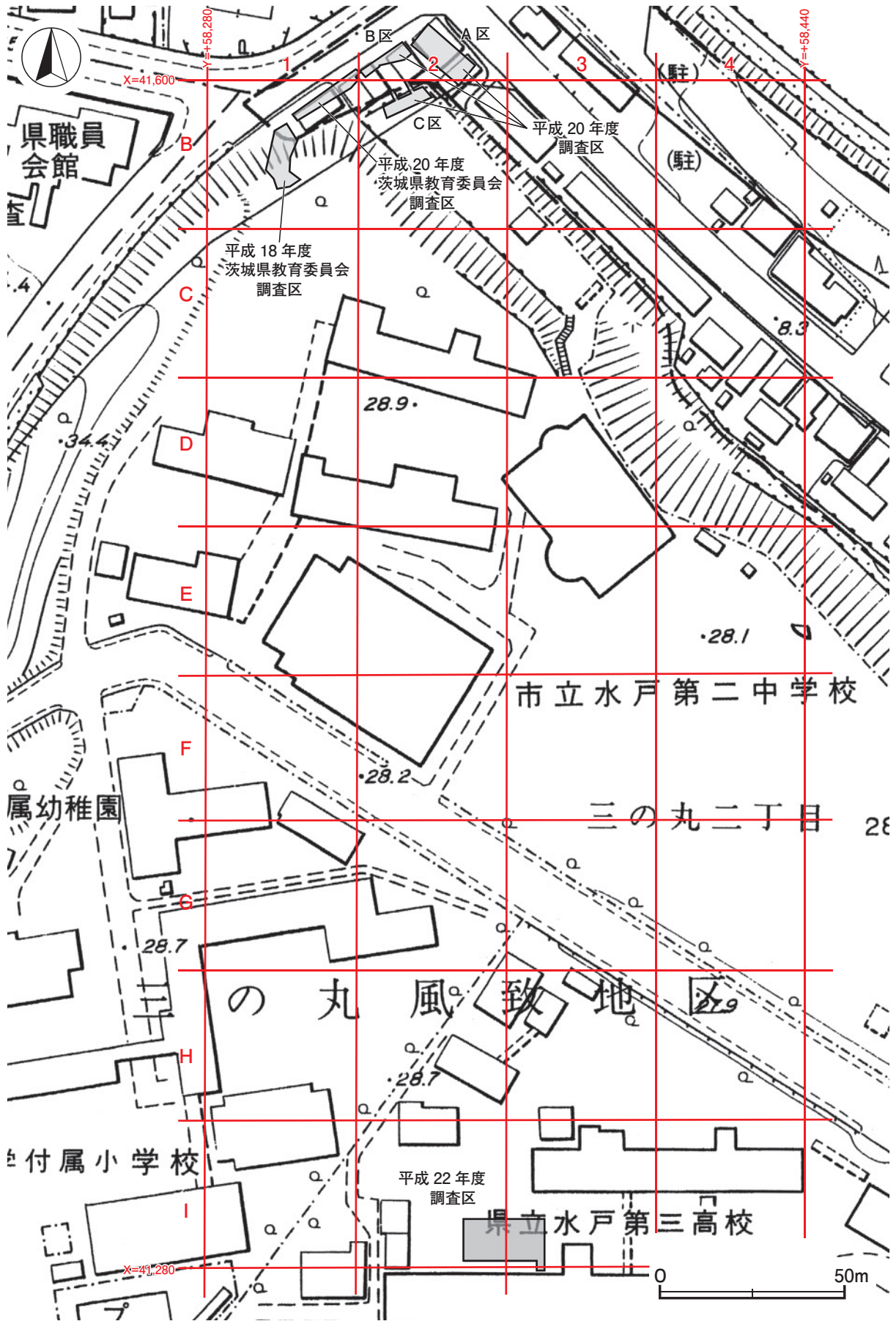
※文中の〈〉内の番号は、第1図及び表1の当該遺跡番号と同じである。なお本章は財団報告第329集を基にし、若干加筆したものである。

#### 註

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 皆川修 「十万原地区市街地開発事業地内市街地開発事業地埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集 2001年3月
- 3) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 4) 『常陸国風土記』那賀郡条 「平津駅家。西一二里有岡。名曰大櫓。上古有人。體極長大。身居丘壘之上。採鬻食之。其所食貝，積聚成岡。時人取大朽之義。今謂大櫓之岡。」
- 5) 茨城大学人文学部考古学研究室『水戸市台渡里遺跡（茨大運動場地点）発掘調査現地発表会資料』2008年9月
- 6) 佐々木藤雄他 「台渡里廃寺跡－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）－」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月
- 7) 井上琢哉 「加倉井忠光館跡主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第294集 2008年3月
- 8) 茨城地方史研究会『茨城の歴史 県北編』茨城新聞社 2002年5月
- 9) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 中巻（一）』水戸市 1968年8月
- 10) 註9)に同じ

#### 参考文献

- 経済企画庁『土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう』水戸 1969年
- 茨城県史編集委員会『茨城県史 中世編』茨城県 1986年3月
- 茨城県史編集委員会『茨城県史 近世編』茨城県 1985年3月



第2図 水戸城跡調査区設定図（水戸市都市計画図 2,500 分の 1）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

水戸城跡は、水戸市北部を東流する那珂川右岸の台地上に立地している。

調査区は、標高約30mの舌状台地上（水戸三校敷地内普通教室棟南側）に位置し、水戸城旧二の丸御殿のほぼ中央部にあたる。調査前の現況は学校用地で、調査面積は270㎡である。

今回の調査では、整地面や基礎地業面などを含めて、調査区を1次面から9次面まで分けた。文献に記録の残る改修事業や火災などの痕跡と層の対応や各面の遺物から時期決定を行い、近世の水戸城を中心に、徳川氏以前の水戸城の様相についても確認することを目的としている。

遺構は、竪穴住居跡1軒（平安時代）、火葬土坑1基（中世）、炉跡1基（中世）、井戸跡2基（中世）、道路跡1条（近代）、溝跡4条（平安時代1条、中世2条、近代1条）、石組み遺構3基（近世）、用排水路跡5条（近世2条・近代3条）、石敷き遺構1基（近世）、瓦溜まり6基（近代）、土坑16基（中世5基・近世10基・近代1基）、柱穴列跡5条（平安時代1条・中世2条・近世2条）・ピット群9か所（平安時代1か所・中世3か所・近世4か所・近代1か所）、不明遺構1基（中世）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で163箱出土している。主な遺物は、土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（坏・蓋・短頸壺・甕）、土師質土器（小皿・灯明皿・内耳鍋・鍋・鉢類・甕）、瓦質土器（植木鉢・鉢・甕・香炉）、陶磁器（碗・菊皿・蓋・播鉢・壺・土瓶・甕）、瓦（軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・板塀瓦・棟込瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鳥衾）、金属製品（釘・鍵・剃刀・煙管・銭貨）、土製品（五徳・泥面子・弾碁石）、石器・石製品（削器・石樋・茶臼）などである。

### 第2節 基本層序

調査区の北壁と西壁で堆積状況の観察を行った。各層の観察結果は以下の通りである。北壁と西壁で、14層に分層した。なお層の上面が生活面として利用されているものを整地層、人為的に盛土が行われている層を地業層として記述する。

#### 調査区北壁

第1層は、暗褐色を呈する整地層である。部分的に粘土ブロックを多く含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は10～20cmである。

第2層は、暗褐色を呈する整地層である。円礫を少量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は8～16cmである。所々に炭化物が中量、堆積している状況が確認できることから、火災の後に整地が行われたと考えられる。

第3層は、灰褐色を呈する整地層である。ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は26～32cmである。

第4層は、暗褐色を呈する整地層である。ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を微量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は16～32cmである。

第5層は、にぶい褐色を呈する地業層である。円礫を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は16～

42cmである。第4層との境界は平坦ではなく、凹凸がみられる。

第7層は、暗褐色を呈する整地層である。ローム粒子・炭化粒子・円礫を少量、焼土粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は24～40cmである。

第8層は、暗オリーブ褐色を呈する整地層である。ローム粒子を少量含み、締まりは強く、層厚は16～32cmである。

第9層は、黒褐色を呈する地業層である。ローム粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は12～28cmである。本層は、第8層との境界が平坦ではなく、凹凸がみられる。

第10層は、黒色を呈する整地層である。ローム粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は20～28cmである。

第11層は、黒色を呈する自然堆積層である。黒色パミスを少量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は4～10cmである。

第12層は、黒色を呈する自然堆積層である。赤色粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は30～32cmである。

第13層は、黒褐色を呈するローム層の漸移層である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は42～48cmである。

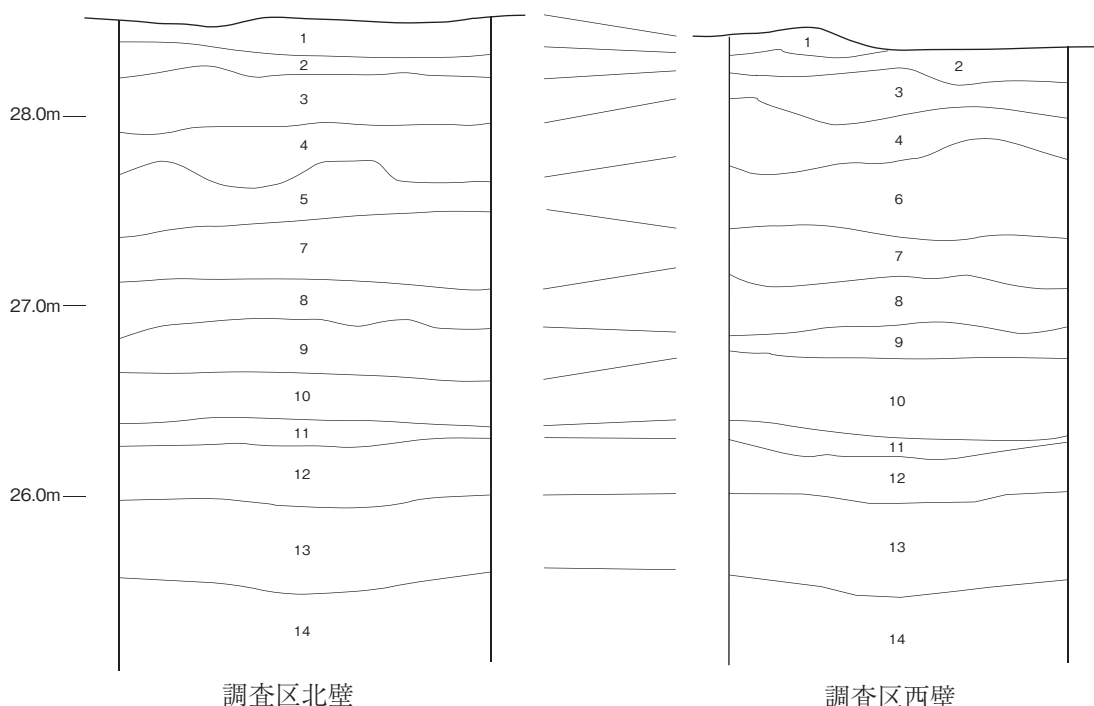
第14層は、暗褐色を呈するローム層である。ローム粒子を中量含み、粘性・締まりともに強い。下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。

#### 調査区西壁

第1～4層、第7～14層は、北壁・西壁とも共通する。

第6層は、オリーブ褐色を呈する地業層である。焼土粒子を少量、炭化材・粘土ブロック・円礫を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は28～50cmである。北壁の第5層に相当する。

第2層の上面を2次面、第3層の上面を3次面、第4層の上面を4次面、第5・6層の上面を5次面、第7層の上面を6次面、第8層の上面を7次面、第10層の上面を8次面、第11層の上面を9次面とし、各次面で遺構が確認された。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

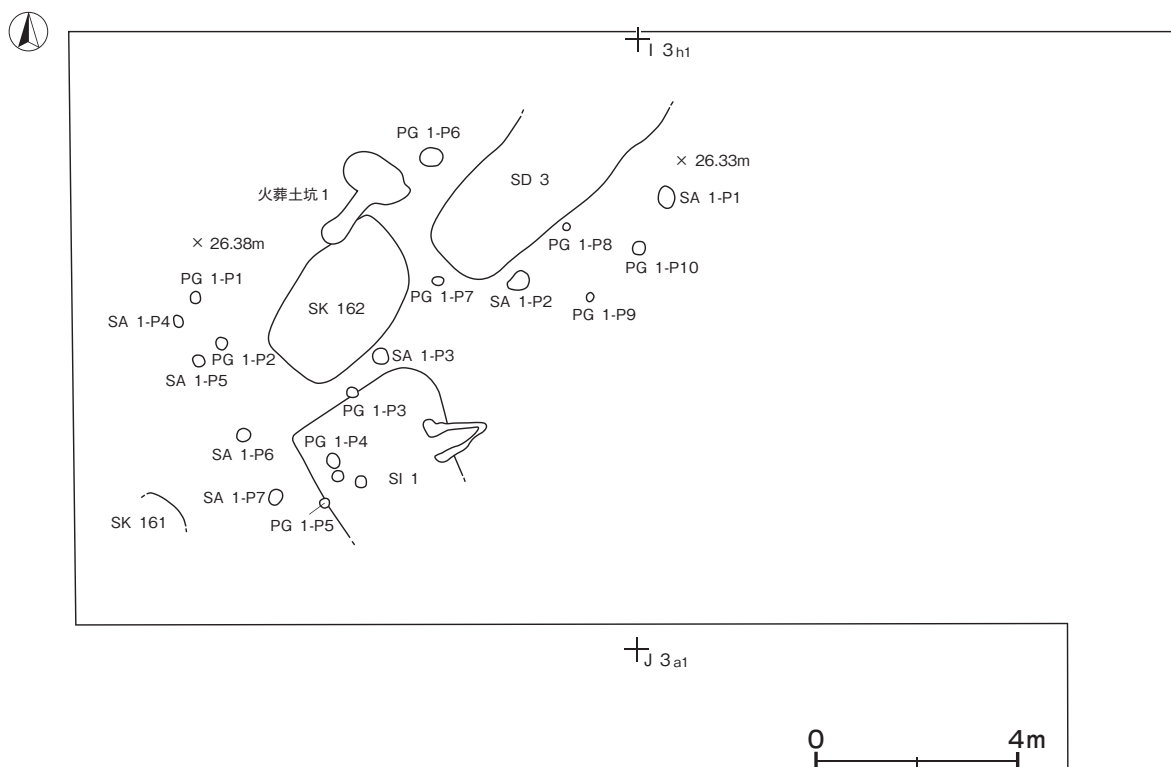
本節は、時代別に項目を設け、その中で各次面（古い順に第9～1次面）ごとに記述を行う。当調査区一带は、中世以降、現代まで改修を繰り返しながら、土地利用されてきた。本調査で、調査区が9次面に分けられることが確認され、改修の一端が垣間見える。各時代を次面ごとに記述し、改修と土地利用の過程を、時系列で捉える。なお、第1次面は、現代の整地面であることが確認でき、遺物のみを報告の対象としている。

#### 1 平安時代の遺構と遺物（第9次面）

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、柱穴列跡1条、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 第9次面（第4図）

平安時代の住居と、中世の火葬土坑が確認されており、改修が行われる以前の、自然堆積層を地山として遺構が構築されている。



第4図 第9次面全体図

##### ①竪穴住居跡

##### 第1号住居跡（第5・6図）

**位置** 調査区南部のI 2j9区、標高26.4mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号ピット群P 3～P 5、第2号ピット群P11に掘り込まれている。



**規模と形状** 南部が調査区域外に延びており、また南東コーナー部が攪乱を受けているために、北東・南西軸は2.97 mで、北西・南東軸は2.98 mしか確認できなかった。主軸方向はN - 62° - Eで、方形と推定される。壁高は23 ~ 38cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで118cmで、燃烧部幅は36cmである。袖部は、地山を掘り残して基部とし、粘土粒子を主体とした第20・21層を積み上げて構築されている。火床部は床面から10cmくぼんでおり、赤変、硬化ともに確認できない。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から階段状に立ち上がっている。

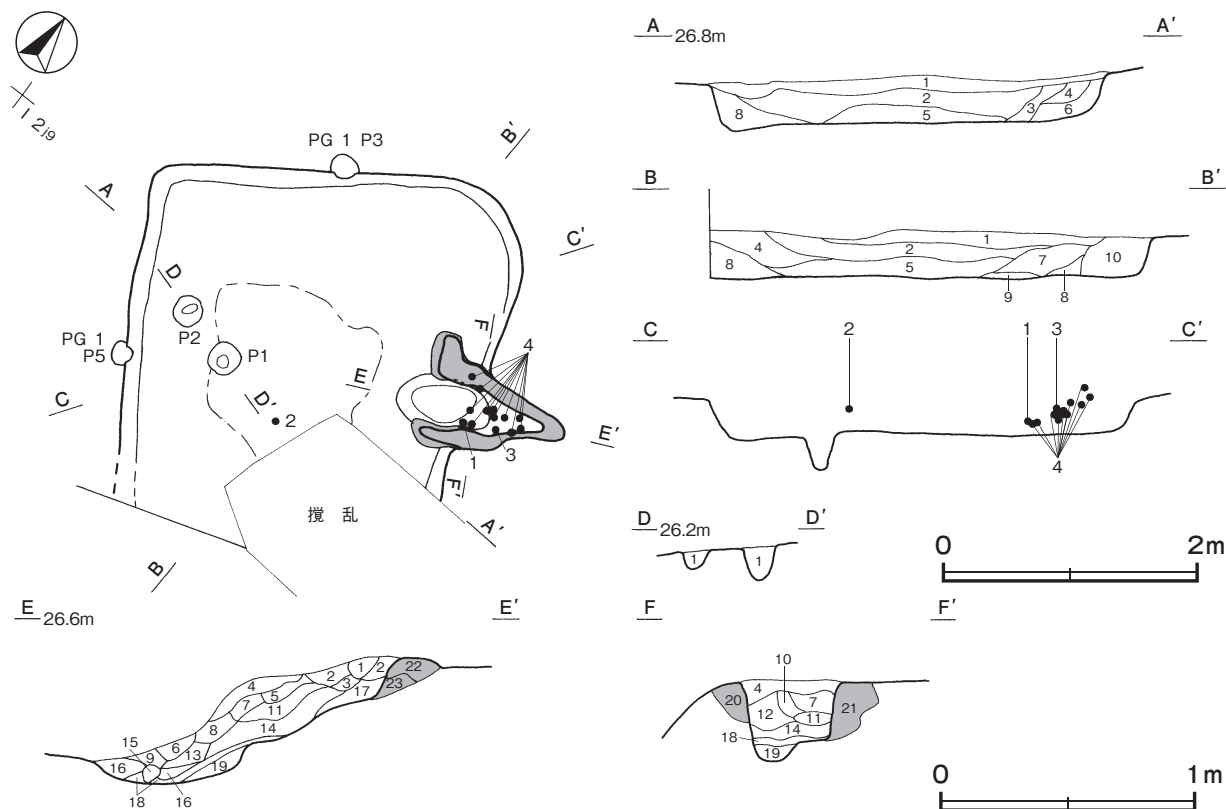
**竈土層解説**

1 黒色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	13 極暗赤褐色	焼土粒子少量
2 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	14 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
3 暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	15 赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量
4 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子微量	16 黒褐色	炭化粒子微量
5 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	17 赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
6 褐色	ローム粒子中量	18 極暗褐色	ローム粒子微量
7 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	19 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
8 暗褐色	焼土ブロック微量	20 暗赤灰色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	21 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量
10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	22 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
11 黒色	焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	23 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
12 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

**ピット** 2か所。P1は深さ26cmで、位置や硬化面の広がりから出入りに伴うピットと考えられる。P2は深さ14cmで、性格は不明である。

**ピット土層解説 (各ピット共通)**

1 黒色	ローム粒子微量
------	---------



第5図 第1号住居跡実測図

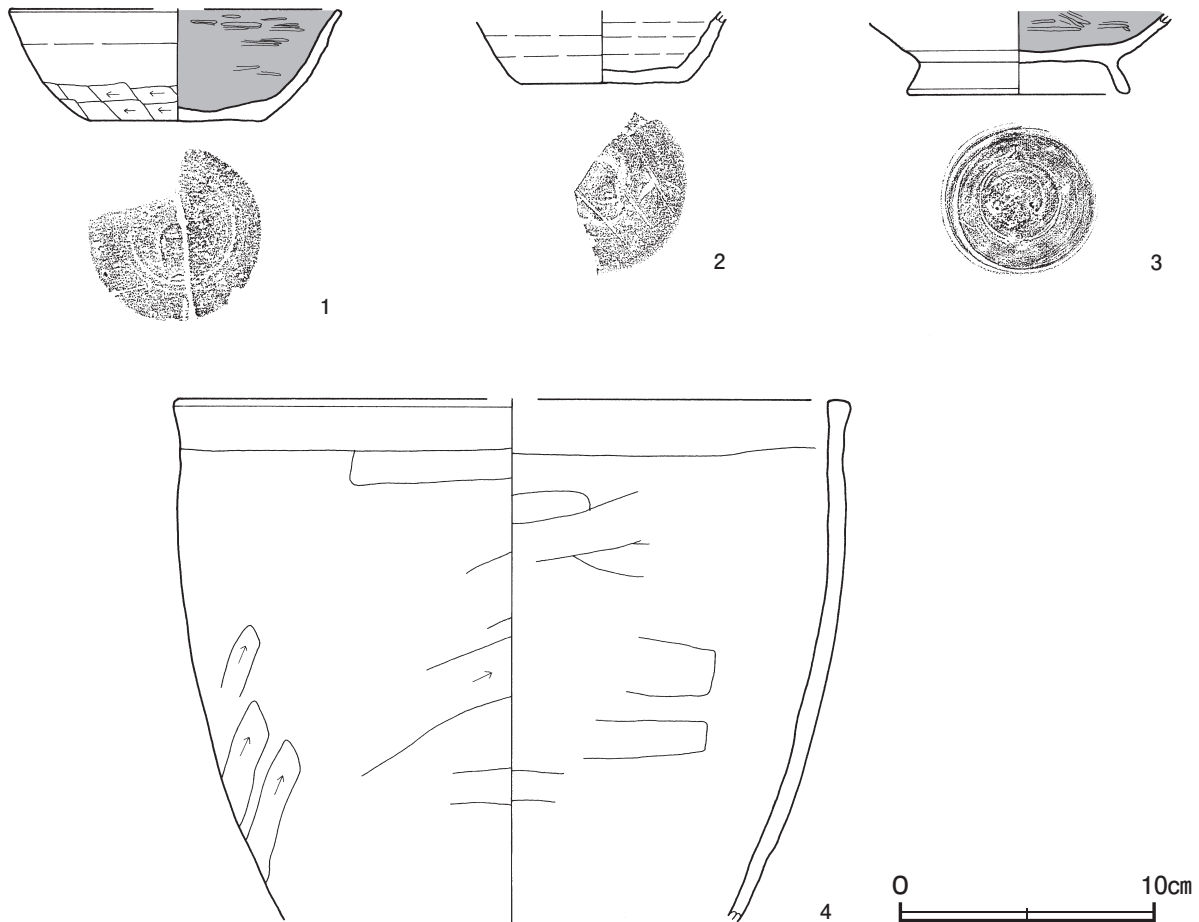
**覆土** 10層に分層できる。均質な黒色土と暗褐色土が周囲から流れ込んでいる堆積状況から自然堆積である。

**土層解説**

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量（2層よりやや明るい色調） | 6 黒褐色 ローム粒子少量              |
| 2 黒褐色 炭化粒子微量              | 7 黒褐色 ローム粒子微量（4層よりやや明るい色調） |
| 3 黒褐色 ローム粒子中量             | 8 暗褐色 ローム粒子微量              |
| 4 黒褐色 ローム粒子微量             | 9 暗褐色 ローム粒子微量（8層よりやや明るい色調） |
| 5 極暗褐色 ローム粒子微量            | 10 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量         |

**遺物出土状況** 土師器片 49点（坏 28, 高台付椀 1, 甕 18, 甌 2）, 須恵器片 32点（坏 15, 高台付坏 1, 蓋 1, 甕 15）, 鉄滓 1点（74.5g）が出土している。また、流れ込みによる縄文土器片 1点（深鉢）が出土している。1は竈の覆土中層, 3は竈の覆土上層から出土している。4は竈の覆土上層と燃焼部から出土した破片が接合したものである。2は中央部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	土師器	坏	[13.0]	4.4	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り	体部下端手持ちヘラ削り	竈覆土中層	50%
2	須恵器	坏	-	(2.8)	[6.4]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	底部外周ナデ		覆土中層	20%
3	土師器	高台付椀	-	(3.2)	8.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 貼り付け	底部回転ヘラ削り後、高台	竈覆土上層	30% PL 9
4	土師器	甕	[26.4]	(20.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部クロロナデ	体部外・内面ヘラ削り	竈覆土上層 燃焼部	20% PL 9

②溝跡

第3号溝跡 (SE 2) (第7・8図)

**位置** 調査区北東部の I 2h0 区, 標高 26.8 m の台地上に位置している。

**規模と形状** I 2i0 区から北東方向 (N - 41° - E) に直線状に伸び, 北端が調査区域外に伸びているため, 長さは 4.00 m しか確認できなかった。規模は上幅 2.05 m, 下幅 0.90m, 深さ 82cm ほどで, 横断面は東側に向かってなだらかに立ち上がり, 中位に段を有している。

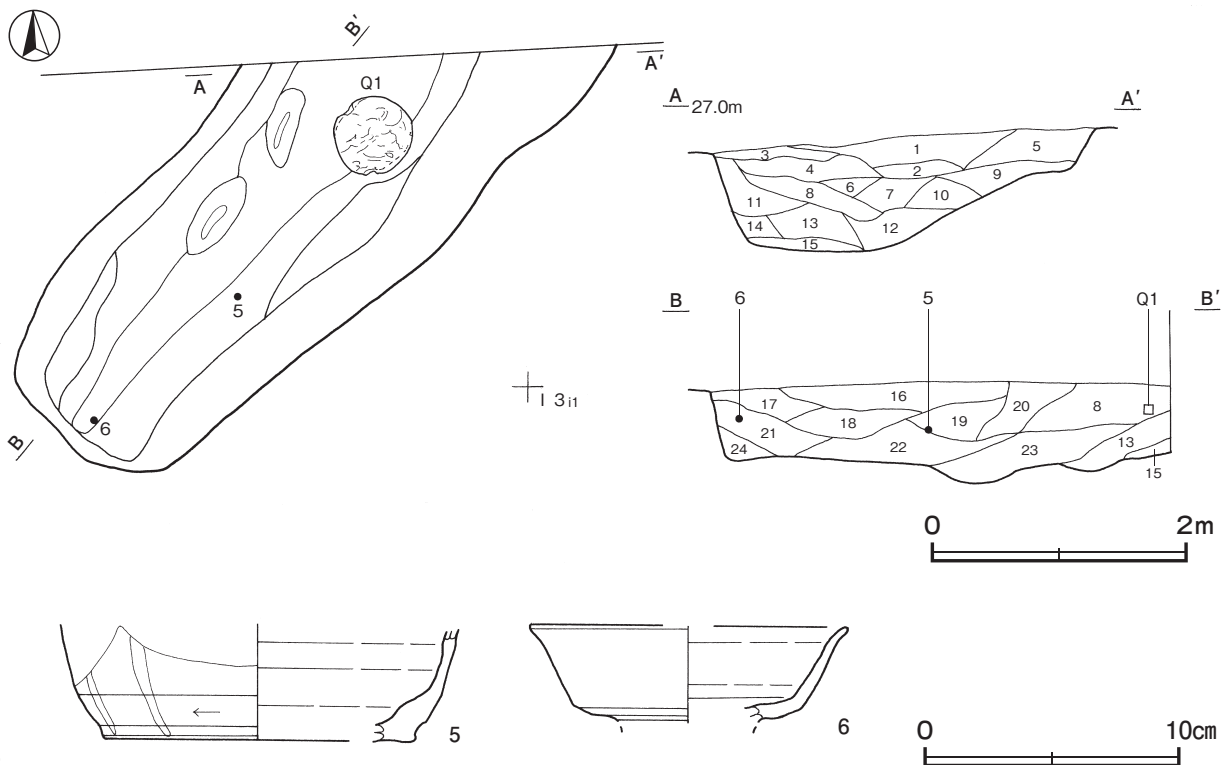
**覆土** 24 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	13	黒色	ローム粒子微量 (17層より粘性・締まりともに強い)
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	14	黒色	ローム粒子極微量
3	黒褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量	15	黒色	炭化粒子微量, ローム粒子極微量
4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	16	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子微量
5	黒褐色	赤色粒子少量	17	黒色	ローム粒子微量
6	黒色	焼土粒子極微量	18	黒色	焼土粒子微量
7	黒色	赤色粒子微量, ローム粒子極微量	19	黒褐色	ローム粒子極微量
8	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量 (20層より締まりが強い)	20	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
9	黒色	赤色粒子微量, 焼土粒子極微量	21	極暗褐色	赤色粒子微量
10	暗褐色	ローム粒子微量	22	黒褐色	ローム粒子極微量 (19層より粘性・締まりともに強い)
11	黒色	ローム粒子微量, 炭化粒子極微量	23	黒色	ローム粒子・炭化粒子微量
12	黒色	赤色粒子微量	24	黒色	ローム粒子極微量 (14層より粘性・締まりともに強い)

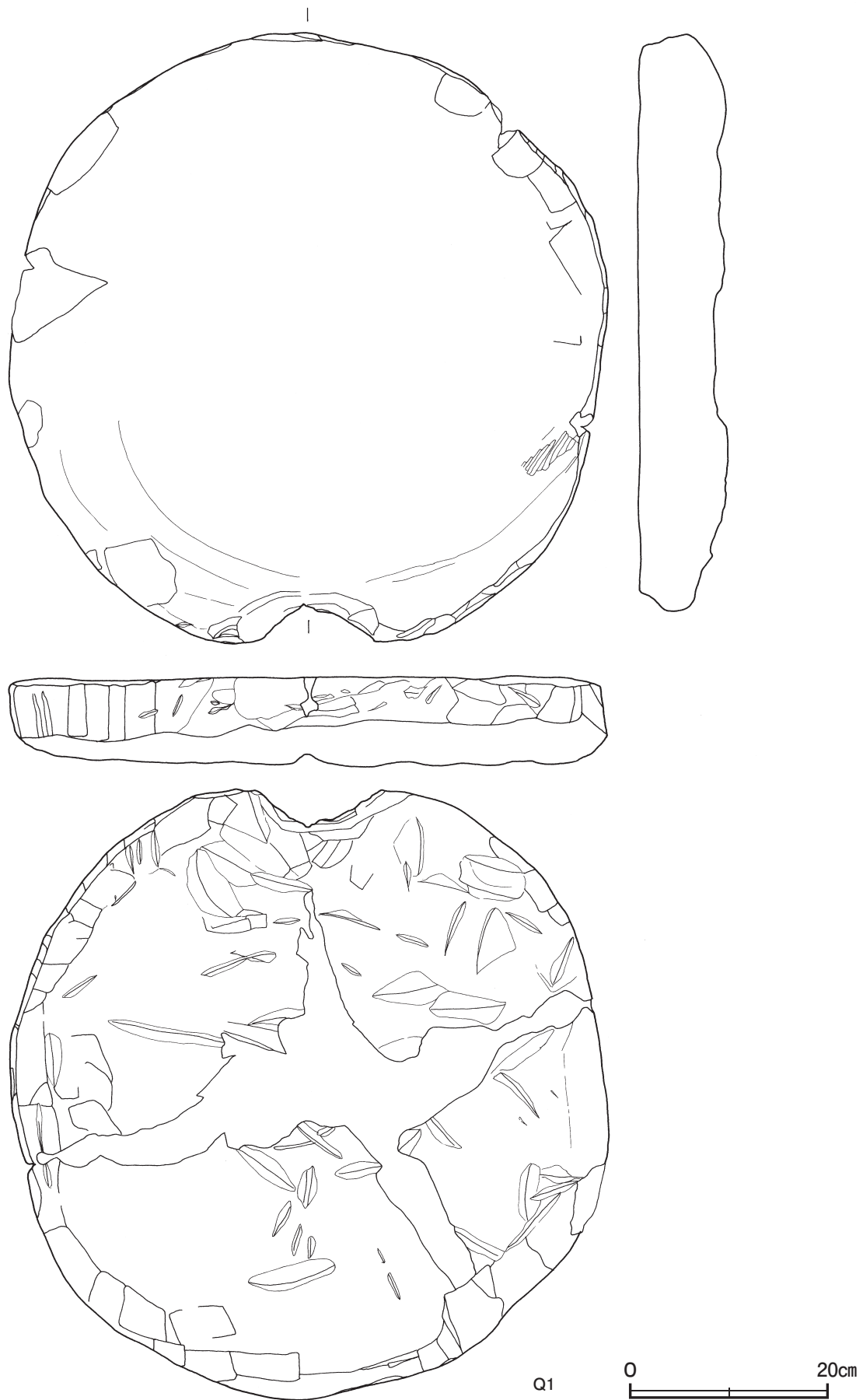
**遺物出土状況** 土師器片 55 点 (坏 5, 甕 50), 須恵器片 46 点 (坏 22, 高台付坏 1, 蓋 3, 甕 20), 灰釉陶器片 2 点 (長頸瓶), 石製品 1 点 (蓋カ), 鉄滓 2 点 (220g) が出土している。また, 混入した縄文土器片 1 点 (深鉢) が出土している。5 は中央部, 6 は南西部, Q 1 は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第7図 第3号溝跡・出土遺物実測図





第8图 第3号沟迹出土遗物实测图

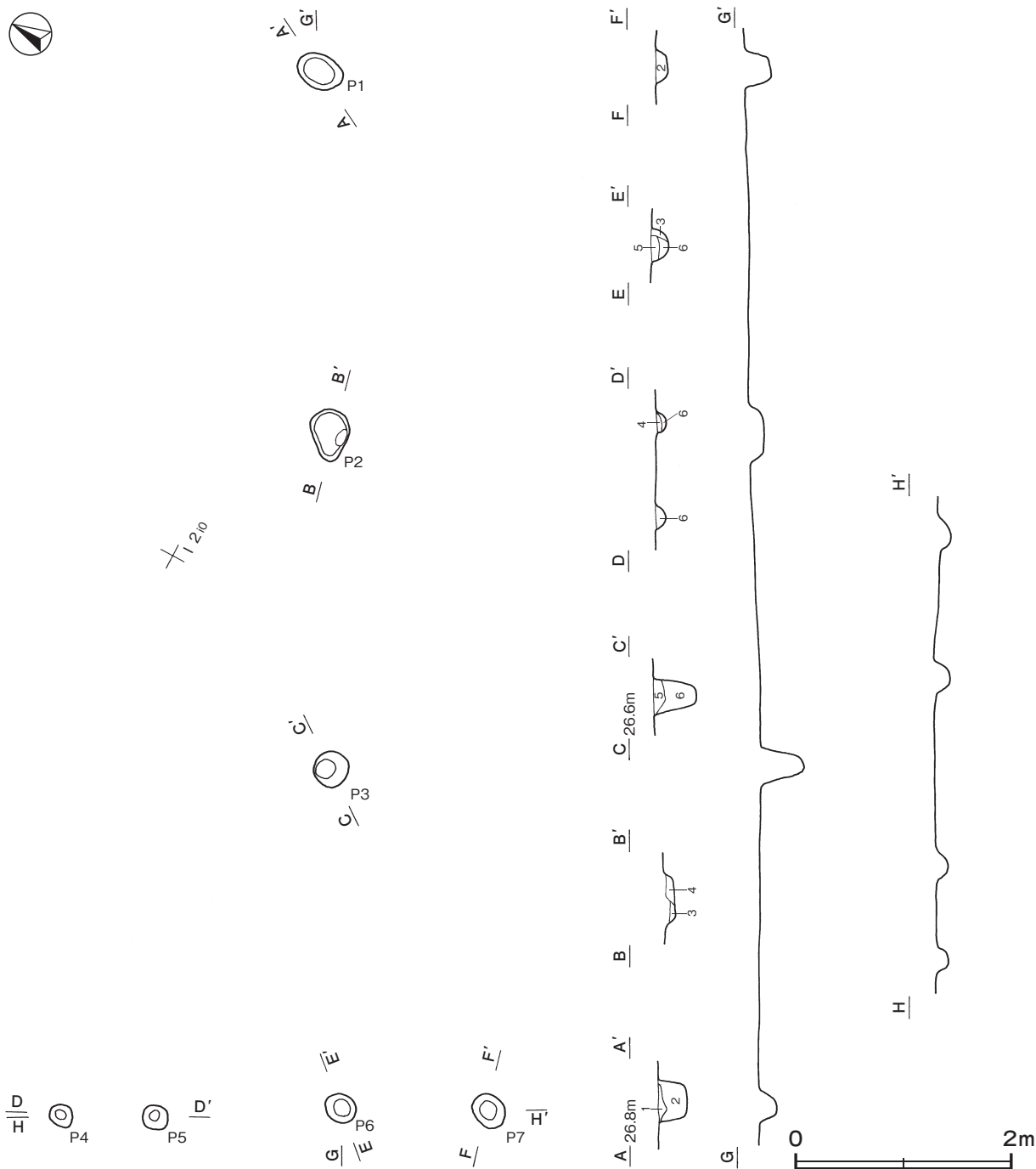
第3号溝跡出土遺物観察表 (第7・8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	灰釉陶器	長頸瓶	-	(4.5)	[12.0]	長石・石英・ 黒色粒子	灰	普通	体部下端へら削り 釉だれあり	覆土中層	10% PL 9
6	須恵器	高台付坏	[12.4]	(3.8)	-	長石・石英・ 白色針状鋳物	灰黄	普通	体部下端へら削り	覆土中層	30%

番号	器種	長径	短径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	蓋カ	61.3	60.1	9.4	(2003)	凝灰質泥岩	片面の周縁を面取り 周縁の一角所に把手状の凹み 両面に不規則な 工具痕	覆土中層	PL12

③柱穴列跡

第1号柱穴列跡 (第9図)



第9図 第1号柱穴列跡実測図

**位置** 調査区中央部の I 2i8 ~ I 3h1 区, 標高 26.5 m の平坦な台地上に位置している。

**規模と構造** 短軸の P 4 ~ P 7 は, I 2j9 区から I 2i8 区にかけて, N - 27° - W で直線上に並び, 確認できた長さは 4.0m である。それに直交して, P 6 から N - 62° - E 方向へ P 3 ~ P 1 が直線上に並び, 確認できた長さは 9.6m である。柱間寸法は, P 4 ~ P 7 が 0.88m ~ 1.76m, P 6 · P 3 ~ P 1 が 3.16m ~ 3.40m で, 柱筋はほぼ揃っている。調査範囲内では T 字状で, 全容は不明である。

**柱穴** 平面形は円形または楕円形で, 長径 21 ~ 48cm, 短径 21 ~ 36cm である。深さは 9 ~ 40cm で, 断面形は U 字状及び皿状である。

**柱穴土層解説 (各柱穴共通)**

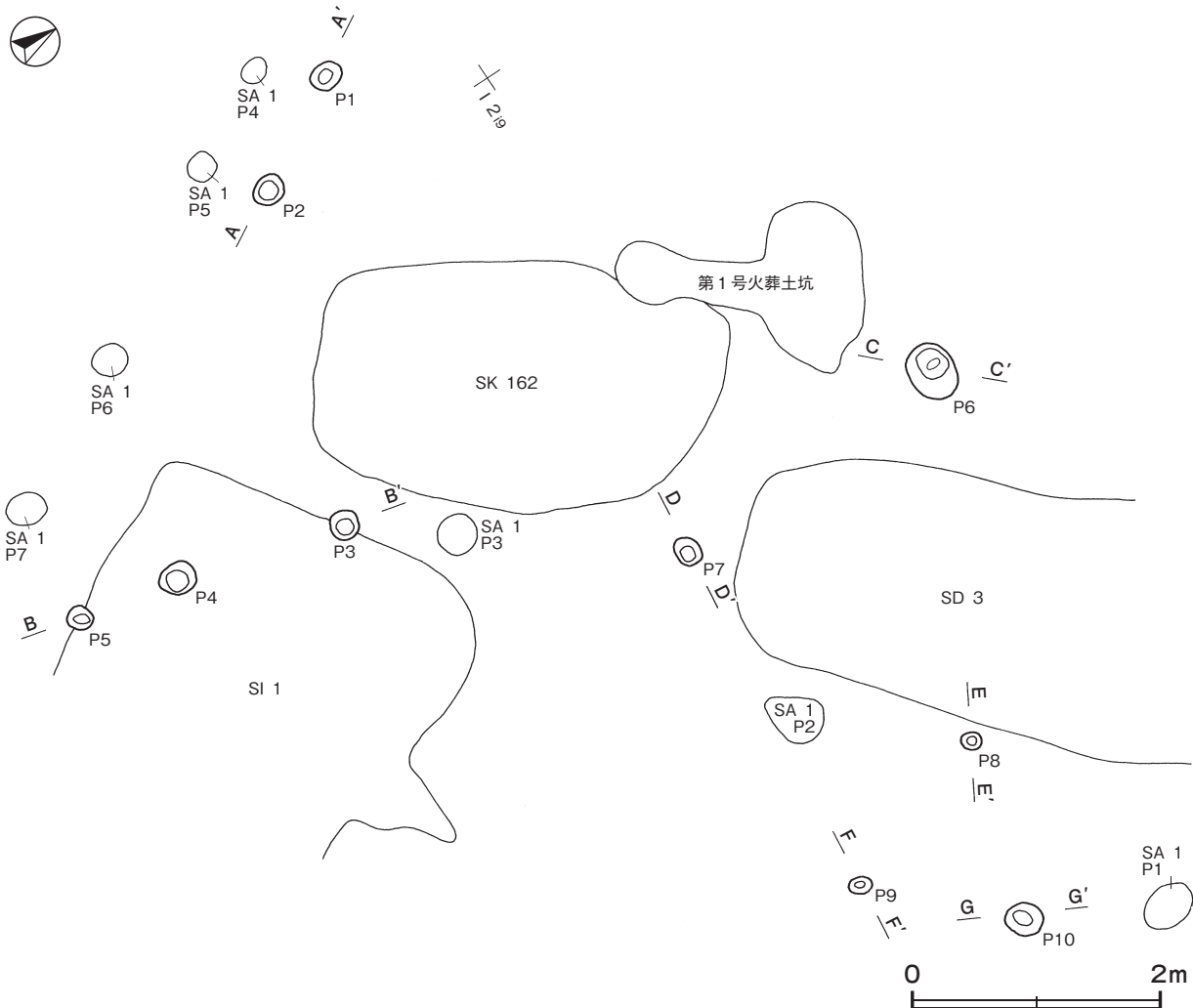
- |         |                           |         |                       |
|---------|---------------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子微量                   | 4 黒 褐 色 | ローム粒子少量               |
| 2 黒 色   | ローム粒子微量(第3層より粘性・締まりともに強い) | 5 暗 褐 色 | ローム粒子少量               |
| 3 黒 色   | ローム粒子微量                   | 6 黒 褐 色 | ローム粒子微量 (第1層より締まりが強い) |

**遺物出土状況** 土師器片 3 点 (甕), 須恵器片 2 点 (坏, 甕) が柱穴から出土している。いずれも細片のため図示できない。

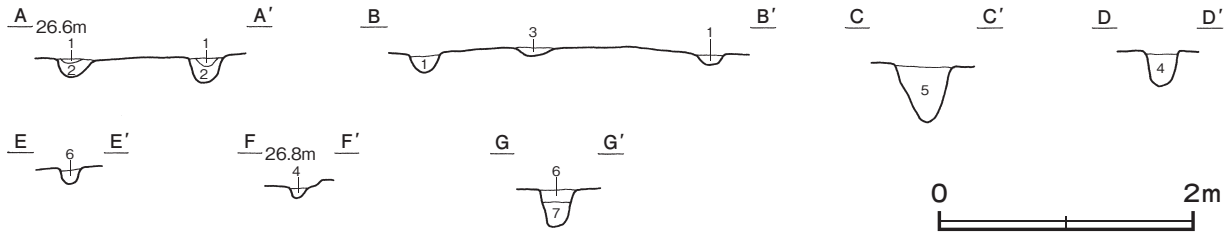
**所見** 時期は, 出土土器や, 同じ面で確認できた第 1 号住居跡と軸方向が近似することから, 平安時代と推定できるが, 時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。

④ピット群

第 1 号ピット群 (第 10・11 図)



第 10 図 第 1 号ピット群実測図 (1)



第 11 図 第 1 号ピット群実測図 (2)

**位置** I 2h9 区から I 3i1 区, 標高 26.5 m の平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 1 号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南北 7.2 m, 東西 9.0m の範囲に, 10 か所のピットを確認した。

**ピット** 10 か所。長径 0.17 ~ 0.47 m, 短径 0.16 ~ 0.37 m の円形または楕円形で, 深さは 8 ~ 46cm である。

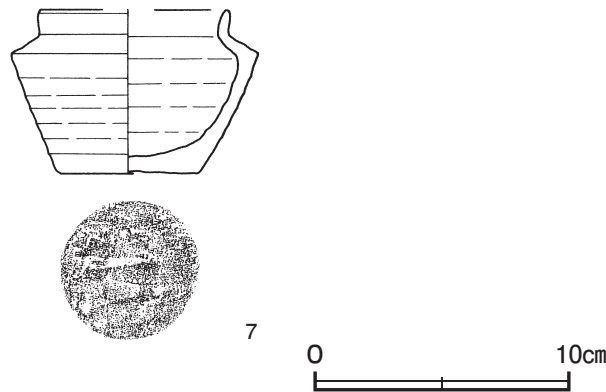
**ピット土層解説 (各ピット共通)**

- |         |                              |           |         |
|---------|------------------------------|-----------|---------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量                      | 4 極 暗 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒 褐 色 | ローム粒子微量 (第 6 層より粘性・縮まりともに強い) | 5 極 暗 褐 色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 | ローム粒子少量 (第 1 層より粘性・縮まりともに強い) | 6 黒 褐 色   | ローム粒子微量 |
|         |                              | 7 黒 色     | ローム粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片 5 点 (坏 2, 甕 3), 須恵器片 1 点 (甕) が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は, 出土土器から平安時代の可能性があるが, 出土量が少ないため明確でない。

⑤遺構外出土遺物 (第 9 次面) (第 12 図)



第 12 図 遺構外出土遺物実測図

第 9 次面遺構外出土遺物観察表 (第 12 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
7	須恵器	小形短頸壺	[7.3]	6.4	5.4	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後, ナデ	I 2h0	65% PL 9

2 中世の遺構と遺物 (第 9・8・7・6 次面)

当時代の遺構は, 火葬土坑 1 基, 炉跡 1 基, 井戸跡 2 基, 溝跡 2 条, 土坑 5 基, 柱穴列跡 2 条, ピット群 3 か所, 不明遺構 1 基を確認した。

(1) 第9次面

①火葬土坑

第1号火葬土坑 (SK160) (第13図)

位置 調査区北部のI 2h9区, 標高26.4mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第162号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 T字状を呈している。燃焼部は, 長軸1.38m, 短軸0.80mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-37°-Eである。北東壁は外傾し, 南西壁は開口部に向かって緩やかに立ち上がっている。燃焼部の中央が, 隅丸長方形に落ち込み, 深さは30cmで, 底面は皿状である。開口部は, 長軸1.20m, 短軸0.48mの隅丸長方形である。南西壁は外傾し, 北東壁は燃焼部に向かって緩やかに落ち込んでいる。深さは22cmで, 底面は平坦である。燃焼部の中央で赤変が見られる。

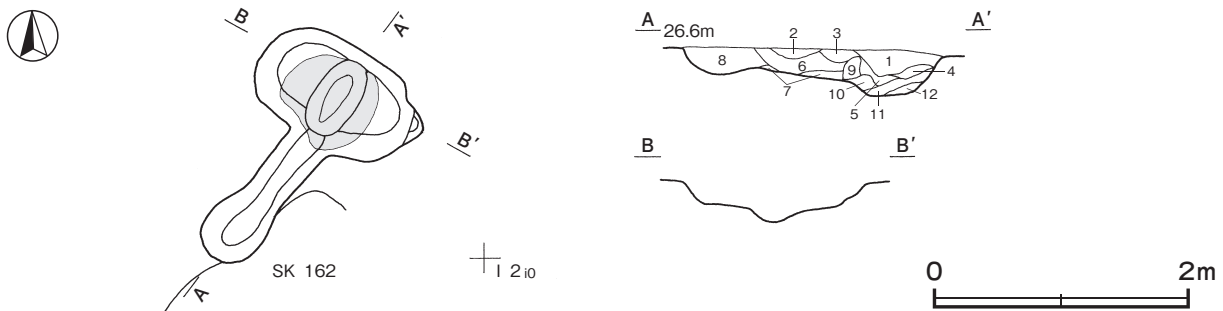
覆土 12層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第12層からは骨片が検出されている。

土層解説

- |                           |  |
|---------------------------|--|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量     | 8 黒褐色 炭化物・焼土粒子微量                             |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量              | 9 暗褐色 焼土粒子少量(第2層より粘性・締まりともに強く, 第10層より締まりが強い) |
| 3 極暗褐色 焼土粒子微量             | 10 暗褐色 焼土粒子少量(第2層より粘性が強い)                    |
| 4 黒褐色 ローム粒子微量             | 11 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量                          |
| 5 黒褐色 ローム粒子微量(第4層より粘性が強い) | 12 黒褐色 炭化物・焼土粒子・骨片微量                         |
| 6 黒褐色 焼土粒子微量              |  |
| 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量         |  |

遺物出土状況 混入した陶器片1点(碗), 土師器片10点(坏1, 甕9), 須恵器片12点(坏7, 蓋2, 甕3)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 遺構の形状から, 15世紀後葉から16世紀代と推定されるが, 時期決定の根拠となる遺物が出土していないため, 明確でない。



第13図 第1号火葬土坑実測図

②土坑

第161号土坑 (第14図)

位置 調査区西部のI 2j8区, 標高26.7mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第163号土坑に掘り込まれている。

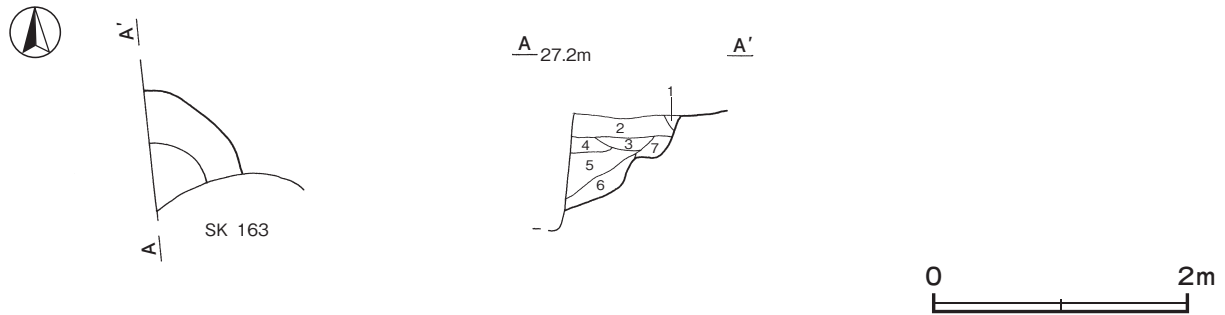
規模と形状 西側が調査区外に延び, 南側が第163号土坑に掘り込まれているため, 南北軸0.84m, 東西軸0.70mしか確認できなかった。円形もしくは楕円形と推定される。深さは78cmで, 底面は皿状であり, 壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 7層に分層できる。各層に粘土粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                  |       |               |
|-------|------------------|-------|---------------|
| 1 黒色  | ローム粒子・粘土粒子少量     | 5 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量  |
| 2 黒色  | 粘土ブロック微量         | 6 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量   | 7 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量  |
| 4 黒褐色 | 粘土ブロック少量・ローム粒子微量 |       |               |

**所見** 時期は、確認面から平安時代から中世と推定されるが、遺物が出土していないため明確でない。



第14図 第161号土坑実測図

**第162号土坑 (第15図)**

**位置** 調査区中央部のI 2i9区、標高26.4mの台地上平坦部に位置している。

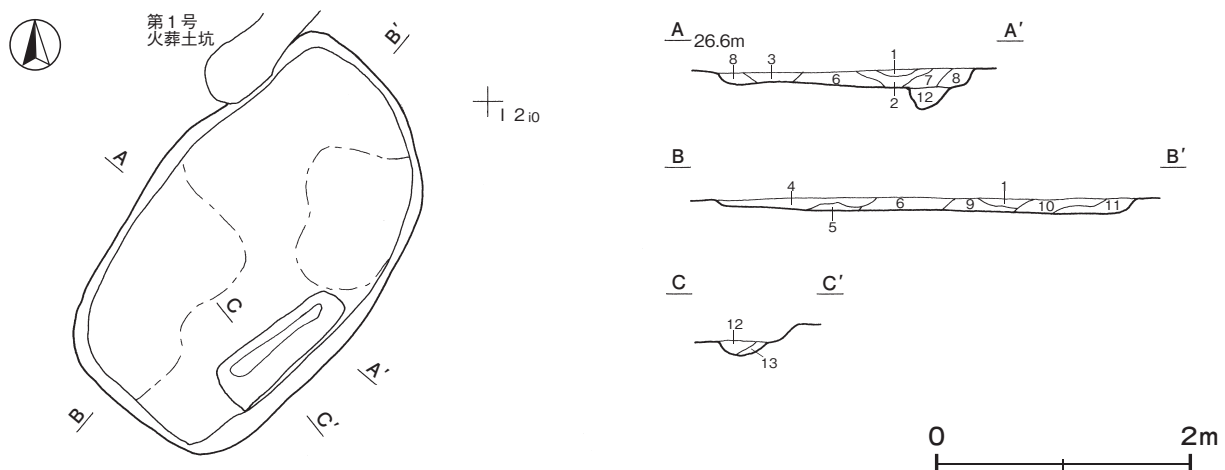
**重複関係** 第1号火葬土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.20m、短軸2.03mの隅丸長方形で、長軸方向はN-40°-Eである。深さは11cmで、底面は平坦であるが、南東の壁に平行して長軸1.16m、短軸0.40mの隅丸長方形に16cm程下がっている。北東及び南西のコーナー部は硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 13層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |                |        |                             |
|--------|----------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子微量        | 8 黒色   | ローム粒子微量                     |
| 2 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量   | 9 黒色   | ローム粒子・粘土粒子微量 (第4層よりやや明るい色調) |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子微量        | 10 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量              |
| 4 黒色   | ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子微量 (第1層よりやや明るい色調)      |
| 5 黒褐色  | ローム粒子少量        | 12 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量                |
| 6 黒褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ローム粒子少量 (第5層よりやや明るい色調)      |
| 7 黒褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |        |                             |



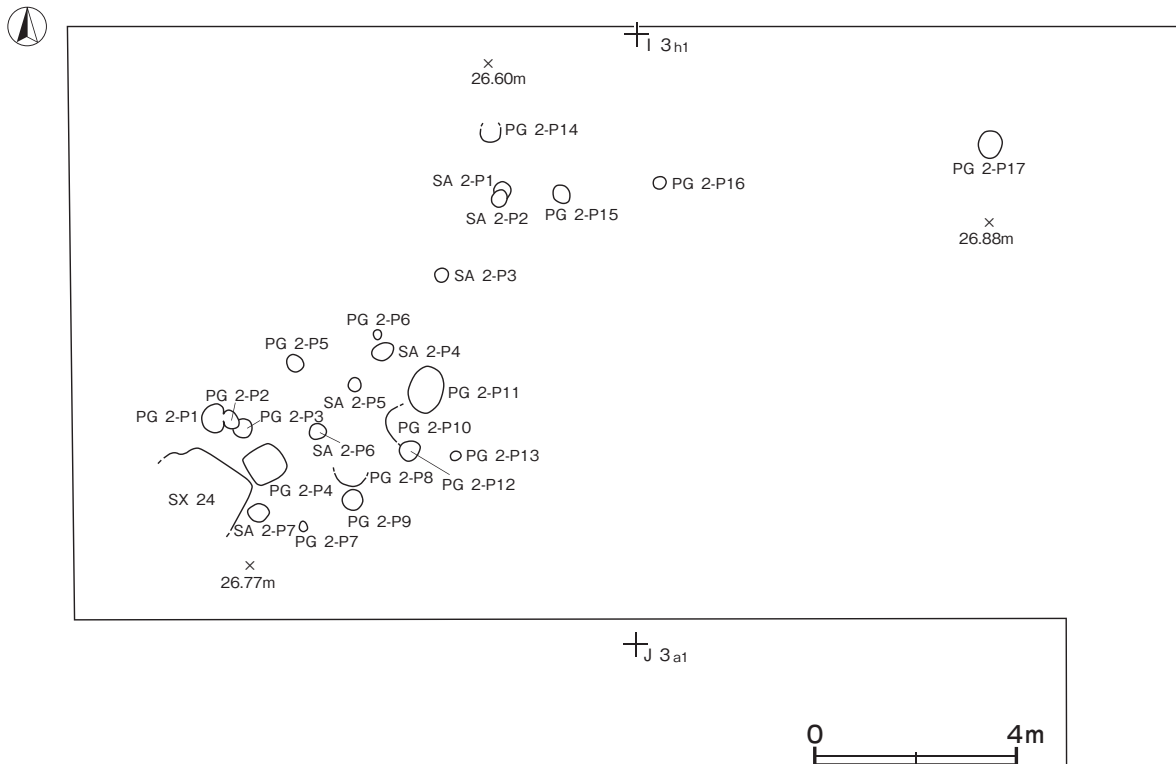
第15図 第162号土坑実測図

**遺物出土状況** 陶器片1点(甕), 鉄滓1点(15.3g)が出土している。また混入した土師器片15点(坏7, 高台付坏1, 甕7), 須恵器片6点(坏5, 甕1)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は, 確認面と出土土器から中世と推定される。

(2) 第8次面(第16図)

当次面は第9次面の, 中世に比定される火葬土坑を埋め戻して構築されており, 中世に行われた, 改修の初期段階と推定される。



第16図 第8次面全体図

①柱穴列跡

第2号柱穴列跡(第17図)

**位置** 調査区中央部のI 2h0～I 2j9区, 標高26.8mの平坦な台地上に位置している。

**規模と構造** I 2j9区から北東方向に, N-38°-Eで直線上に並んでいる。確認できた長さは, 8.0mで, 柱間寸法は, 2.0mを基調としている。P1はP2に掘り込まれており, P5は, P4から0.9m, P6から1.2mの不規則な位置に配され, 建て替え又は補修が行われたと想定される。柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 平面形は円形または楕円形で, 長径27～45cm, 短径26～39cmである。深さは17～54cmで, 断面形はU字状である。

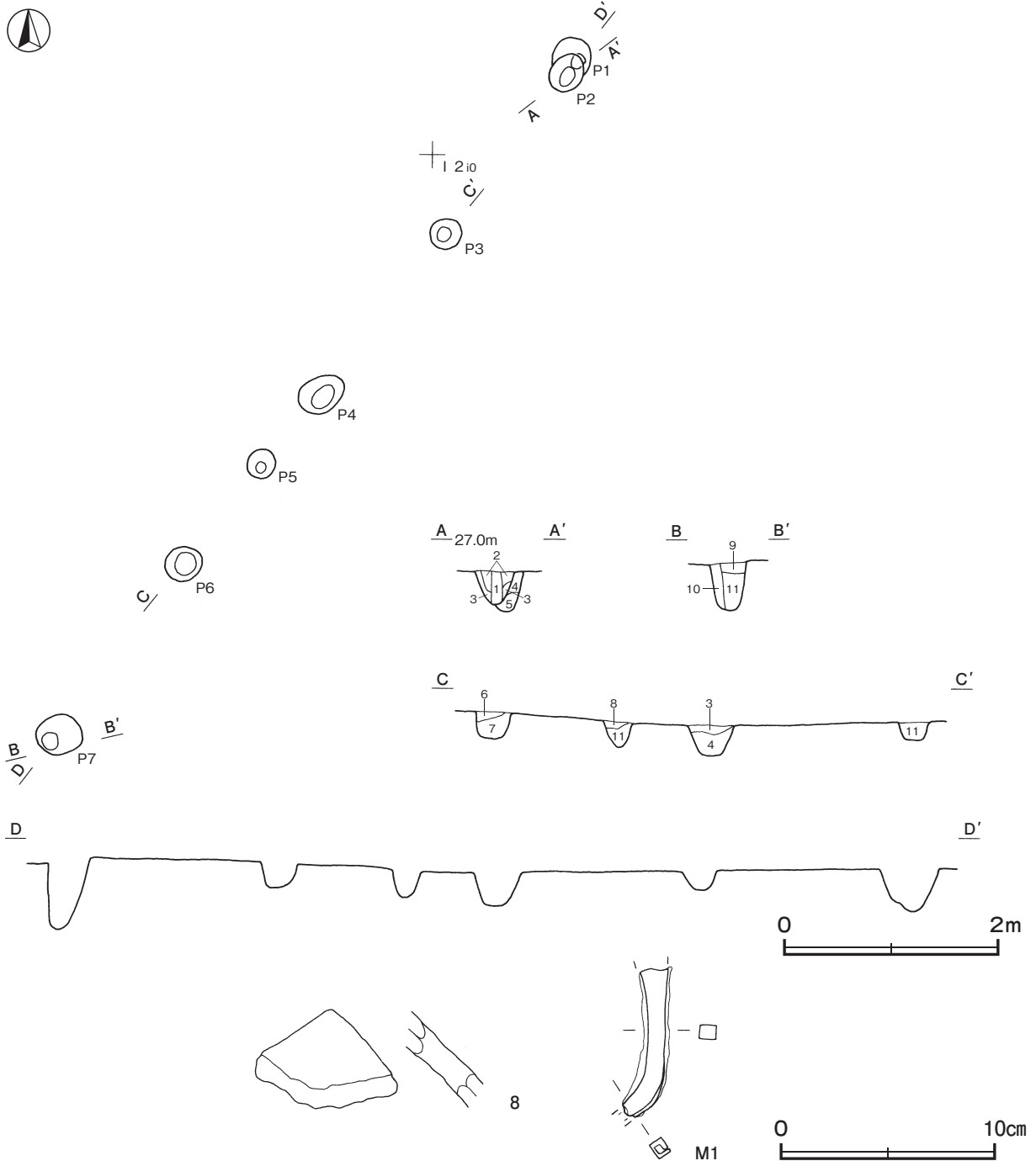
柱穴土層解説(各柱穴共通)

- |                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量     | 7 黒色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒色 粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黒色 ローム粒子微量         |
| 3 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量        | 9 暗褐色 ローム粒子少量        |
| 4 黒褐色 粘土粒子少量, ローム粒子微量     | 10 黒褐色 ローム粒子少量       |
| 5 暗褐色 ローム粒子微量             | 11 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量   |
| 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |                      |

**遺物出土状況** 陶器片1点(甕), 土製品1点(羽口), 鉄製品1点(釘カ), 鉄滓4点(3357.8g)が各柱穴か

ら出土している。また、混入した土師器片2点(坏, 甕), 須恵器片5点(坏3, 甕2)が出土している。8・M1はP7から出土しており, 鉄滓3点(3204g)も出土している。

所見 時期は, 出土遺物や確認面から中世と推定されるが, 詳細な時期は明確でない。



第17図 第2号柱穴列・出土遺物実測図

第2号柱穴列跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	陶器	甕	-	(4.5)	-	長石・石英・礫	にぶい褐	普通	無釉	P7 (SK154)	5%常滑
番号	器種	長さ	幅	厚さ	内径	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M1	不明	(7.0)	0.8	0.7	0.4	(24.2)	鉄	断面方形	先端が中空 釘カ	P7 (SK154)	



②ピット群

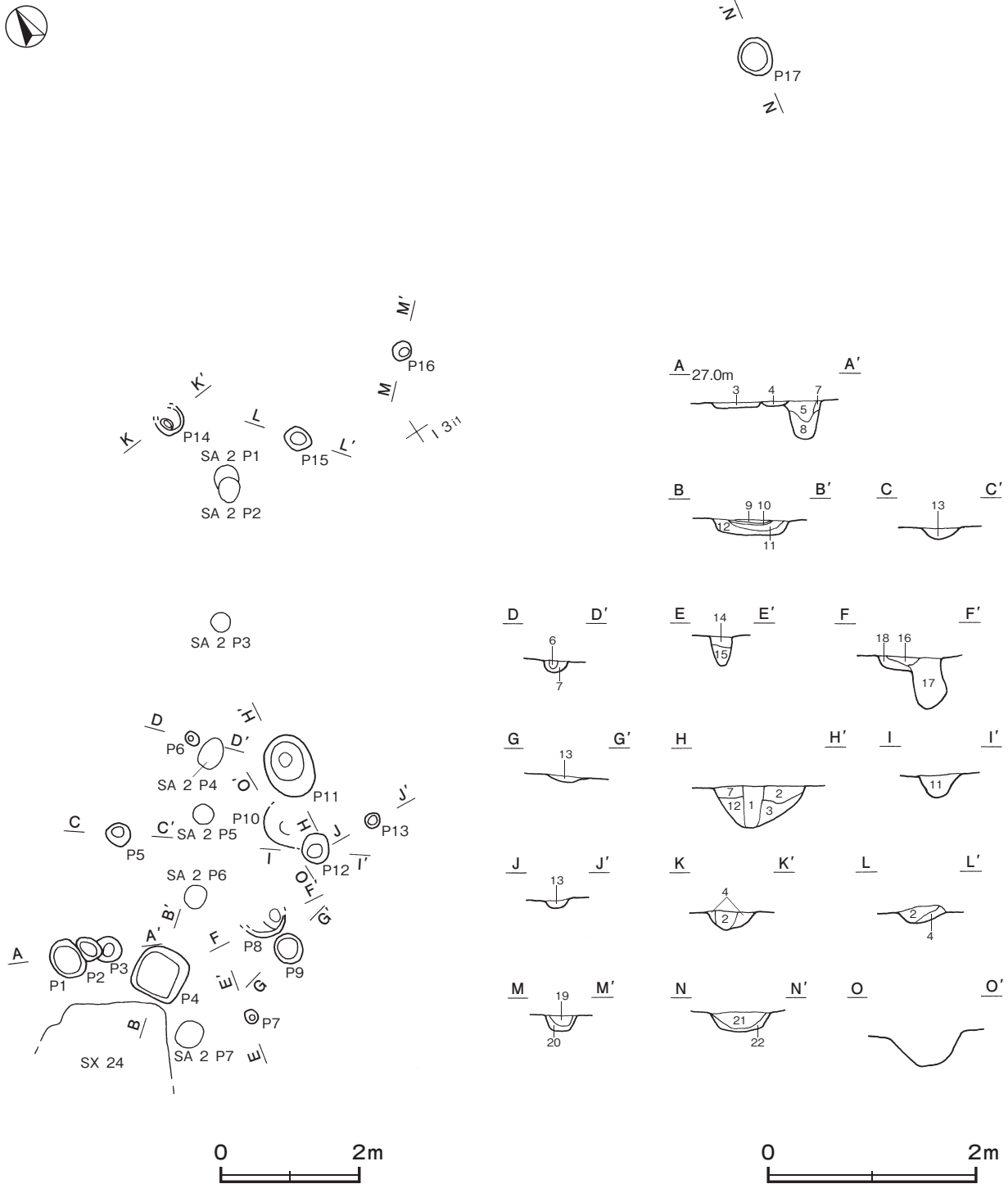
第2号ピット群 (第18図)

位置 I 2 i8 区から I 3 h2 区, 標高 26.6 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北 8.4 m, 東西 15.9m の範囲に, 17 か所のピットを確認した。

ピット 17 か所。長径 20 ~ 93cm, 短径 18 ~ 74cm の円形・楕円形及び隅丸方形で, 深さは 5 ~ 50cm である。



第18図 第2号ピット群実測図

ピット土層解説 (各ピット共通)

1 黒褐色	ローム粒子少量 (第7層よりやや明るい色調)	12 黒色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子少量
3 黒色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	14 黒褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
4 極暗褐色	ローム粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子中量
5 黒褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量	16 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
6 黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	17 黒色	ローム粒子少量
7 黒褐色	ローム粒子少量	18 黒色	ローム粒子・粘土粒子微量
8 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	19 黒色	ローム粒子・炭化粒子微量
9 黒褐色	ローム粒子微量	20 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
10 黒色	粘土粒子微量	21 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子微量 (第9層よりやや明るい色調)	22 黒色	炭化粒子中量, ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 10点 (甕), 須恵器片 7点 (坏5, 甕2), 鉄滓 10点 (50.3g), 鉄片 1点 (3.1g) が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 確認面から中世と考えられるが, 時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。

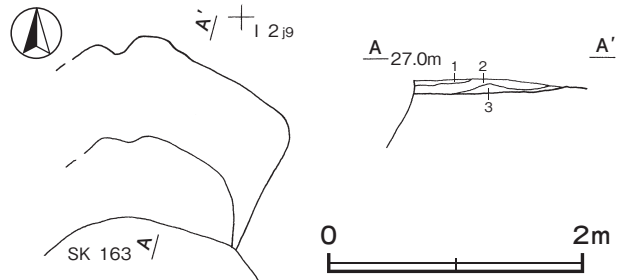
③不明遺構

第24号不明遺構 (第19図)

位置 調査区南西部の I 2j8 区, 標高 26.8 m の台地上平坦部に位置している。

重複関係 第163号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第163号土坑に掘り込まれており, また西部が調査区外に延びているため, 東西軸 1.66m, 南北軸 1.32m しか確認できなかった。形状は不定形である。壁高は 8cm で, 緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。



第19図 第24号不明遺構実測図

覆土 3層に分層できる。各層にローム粒子を含み, 締まりが強いことから, 整地を行う際に埋め戻されたと考えられる。

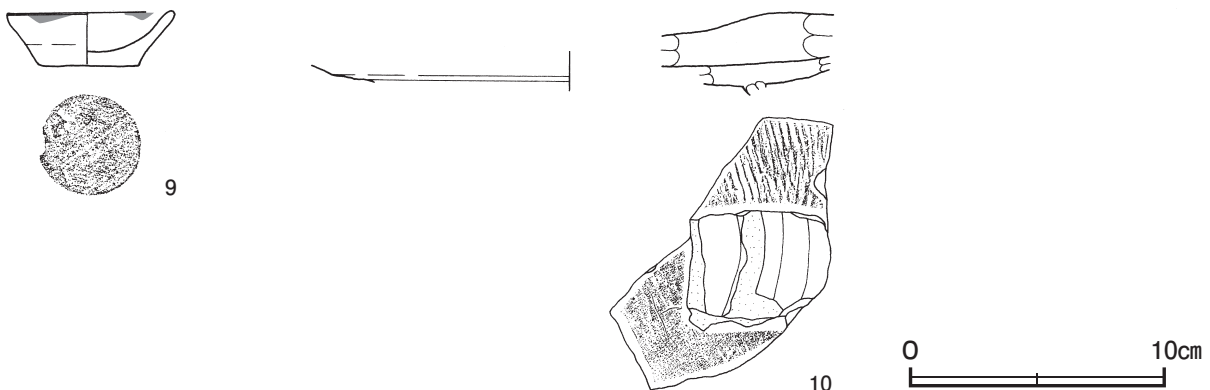
土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量	3 黒褐色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量		

所見 時期は, 確認面から中世と推定される。

④遺構外出土遺物 (第8次面) (第20図)

10は, 当次面の時期を決定するものではないが, 参考資料として掲載する。



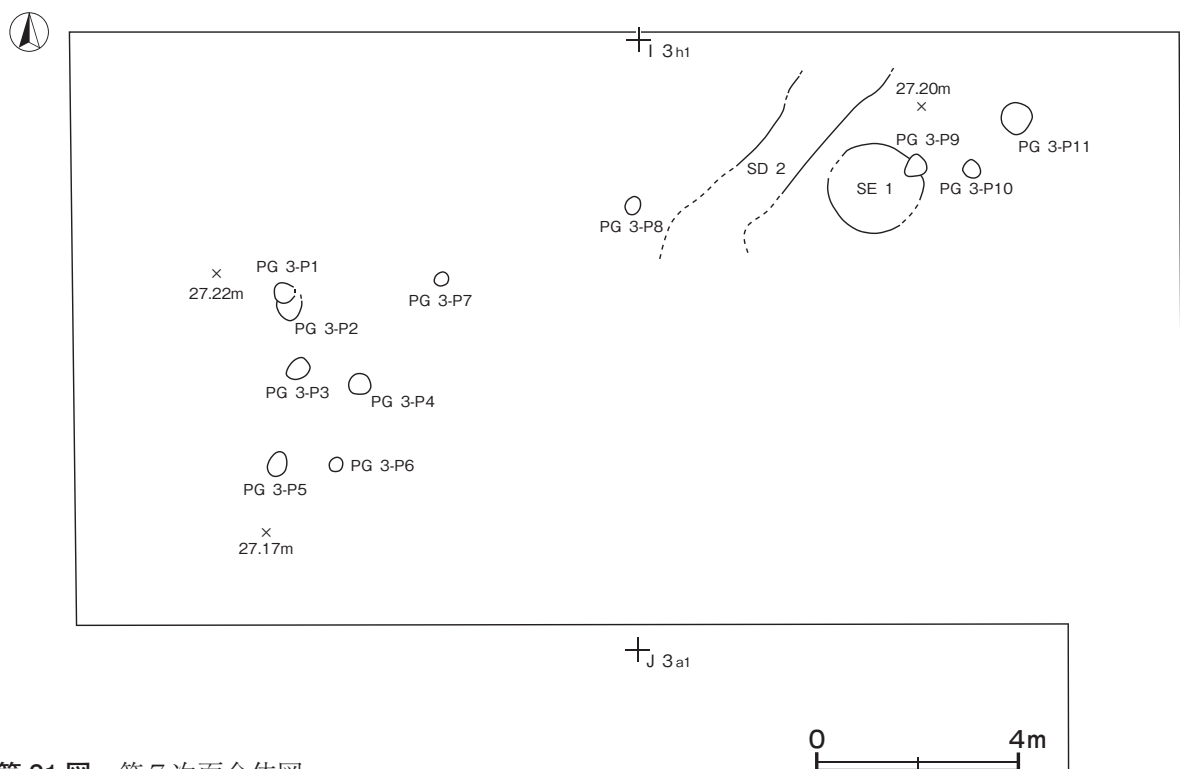
第20図 遺構外出土遺物実測図

第8次面遺構外出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師質土器	小皿	6.5	2.2	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 底部に板目状圧痕 口縁部油煙付着	I 2 h0	70% PL 9
10	須恵器	高台付盤	-	(1.6)	-	長石・黒色粒子	灰	普通	盤に須恵器の甕が附着	I 2 i0	5% PL 9
10	須恵器	甕	-	(10.7)	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	体部外面斜位の平行叩き	I 2 i0	5% PL 9

(3) 第7次面（第21図）

当次面で、井戸跡や溝跡を確認した。このことから、生活面として機能していたことが推定される。出土遺物から、当次面は15世紀～16世紀代に比定される。



第21図 第7次面全体図

①井戸跡

第1号井戸跡（SE1・SX23）（第22図）

**位置** 調査区東部のI 3 h2区、標高27.2mの台地上に位置している。

**重複関係** 第3号ピット群P 9，第4号ピット群P29・P32に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.88m，短径1.76mの円形で，確認面から1.0mまでは，ほぼ垂直に掘り込まれ，そこから漏斗状にすぼまりながら0.3m程下がり，その下は円筒状に掘り込まれる。約2.0m掘り下げた段階で，崩落のおそれがあることから，下部の調査を断念した。

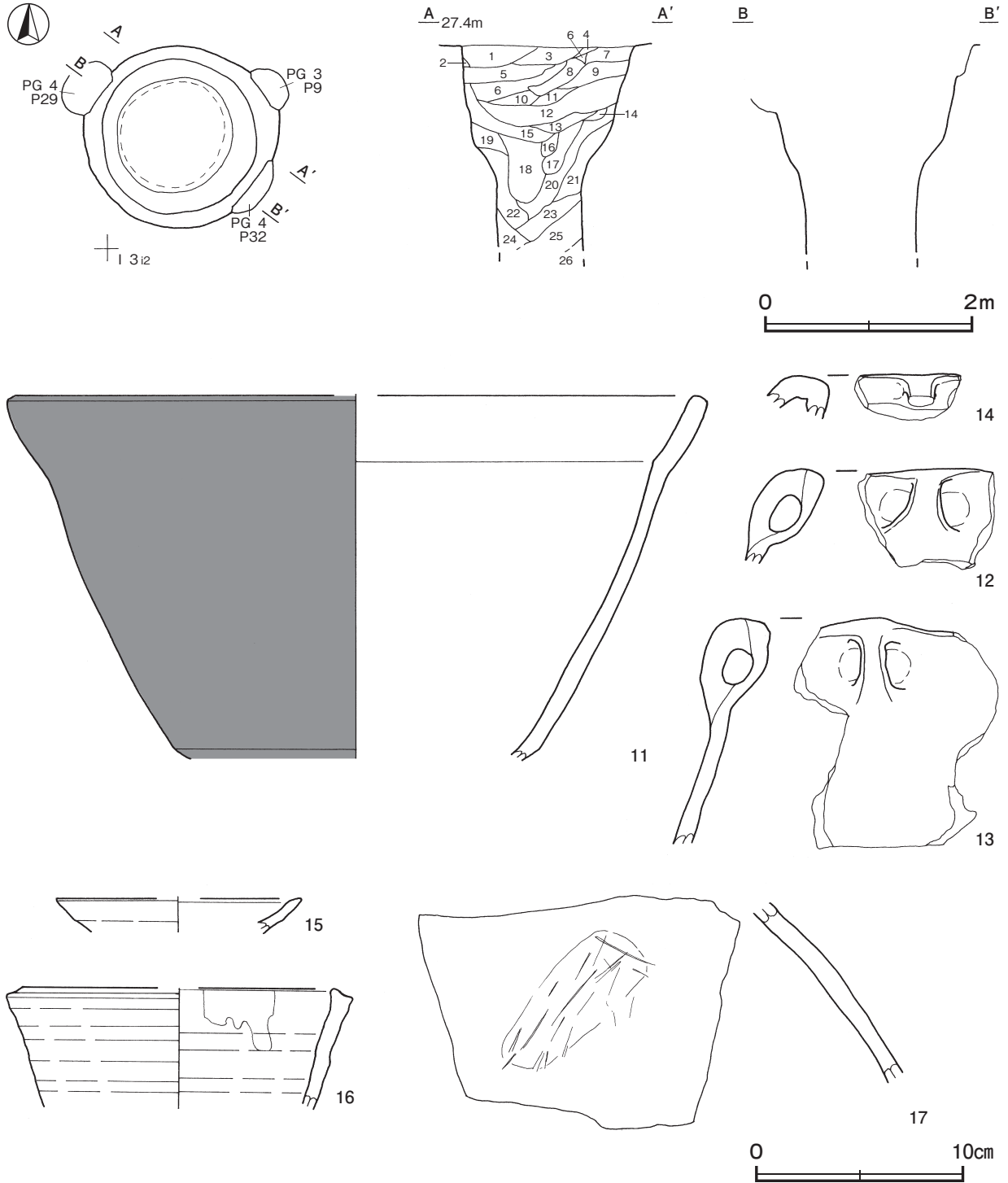
**覆土** 26層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- |         |                          |           |                          |
|---------|--------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量      | 3 極 暗 褐 色 | 粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒 色   | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 黒 褐 色   | 粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量      |

- 5 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
- 6 極暗褐色 焼土粒子微量
- 7 黄橙色 粘土粒子多量
- 8 にぶい橙色 粘土粒子多量
- 9 暗褐色 細礫中量, 粘土粒子少量
- 10 黒褐色 粘土ブロック少量
- 11 暗褐色 粘土ブロック・細礫微量
- 12 暗褐色 円礫・炭化粒子・粘土粒子微量
- 13 黒褐色 焼土粒子少量, 粘土粒子・細礫微量
- 14 にぶい黄褐色 砂粒少量
- 15 暗褐色 粘土粒子少量

- 16 暗褐色 細礫微量
- 17 暗褐色 細礫・砂粒少量, 粘土粒子微量
- 18 オリーブ黒色 粘土粒子微量
- 19 黒褐色 円礫微量
- 20 オリーブ黒色 細礫・砂粒微量
- 21 オリーブ黒色 粘土粒子少量, 細礫微量
- 22 黒褐色 細礫少量
- 23 暗オリーブ色 粘土粒子・細礫少量
- 24 オリーブ色 砂粒少量, 円礫微量
- 25 暗オリーブ色 細礫微量
- 26 暗オリーブ色 砂粒中量



第22図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 陶器片 3 点 (丸皿, 鍋類, 甕), 土師質土器片 9 点 (内耳鍋), 鉄製品 1 点 (釘), 鉄滓 11 点 (694.1g) が出土している。また, 混入した土師器片 17 点 (坏 5, 甕 12), 須恵器片 20 点 (坏 16, 甕 4) が出土している。11 は覆土中層と下層から出土した破片が接合したものである。14・15・16 は覆土上層, 13 は覆土中層から出土している。12・17 は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から 15 世紀中葉から 16 世紀代に比定できる。

第 1 号井戸跡出土遺物観察表 (第 22 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師質土器	内耳鍋	[32.6]	(17.5)	[17.6]	長石・石英・雲母 針状鉱物	橙	普通	外面煤付着	覆土中層・ 下層	30%
12	土師質土器	内耳鍋	-	(4.5)	-	長石・石英・角尖石・ 針状鉱物	橙	普通	外面煤付着	覆土中	5% PL 9
13	土師質土器	内耳鍋	-	(11.0)	-	長石・石英・ 黒色粒子・針状鉱物	にぶい橙	普通	外面煤付着	覆土中層	10% PL 9
14	土師質土器	内耳鍋	-	(2.2)	-	長石・石英・角尖石・ 針状鉱物	橙	普通	外面煤付着	覆土上層	5%
15	陶器	丸皿	[11.8]	(1.7)	-	精良 灰釉	浅黄	良好	外・内面施釉	覆土上層	5% 瀬戸・美濃
16	陶器	鍋類	[15.0]	(5.8)	-	石英・赤色粒子 鉄釉 錆釉	暗赤褐	普通	ロクロ成形 外面・口縁部内面鉄釉 体部内面錆釉	覆土上層	5% 瀬戸・美濃
17	陶器	甕	-	(8.9)	-	石英・礫・ 黒色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面を砥石転用	覆土中	5% 常滑

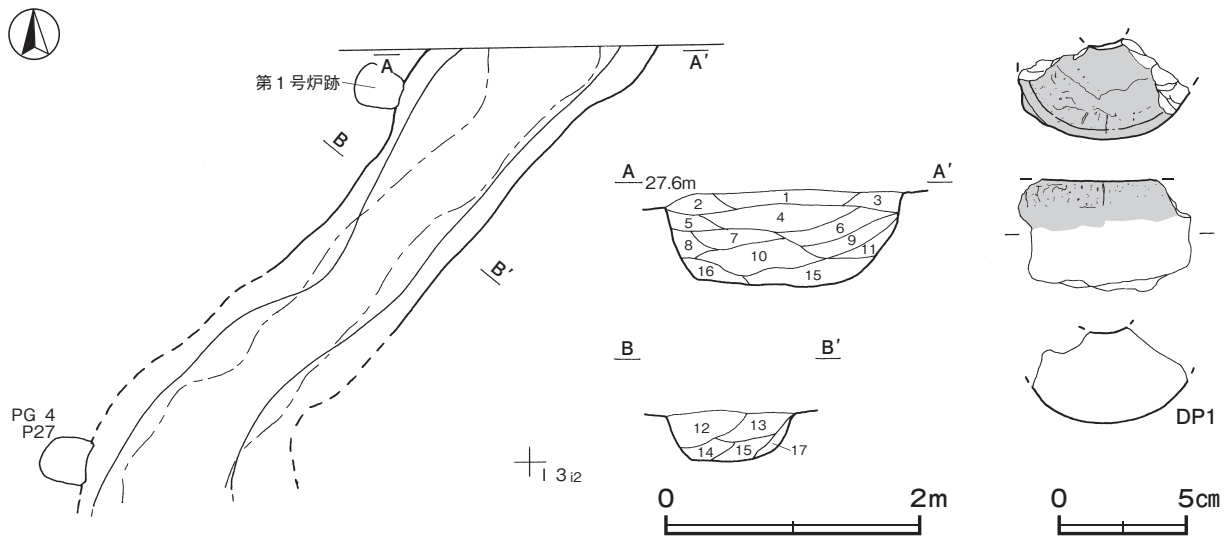
②溝跡

第 2 号溝跡 (第 23 図)

**位置** 調査区東部の I 3 h1 区, 標高 27.5 m の台地上に位置している。

**重複関係** 第 1 号炉, 第 4 号ピット群 P27・P28 に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部が調査区外に延び, 南西部が攪乱を受けているため, 長さは 4.74 m しか確認できなかった。I 3 il 区から北東方向 (N - 44° - E) に直線状に延び, 規模は上幅 1.26m, 下幅 0.94m, 深さ 74cm ほどで, 断面は U 字状である。底面に, 硬化が確認できる。



第 23 図 第 2 号溝跡・出土遺物実測図

**覆土** 17層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒 褐 色	細礫少量, ローム粒子・炭化粒子微量	10 黒 褐 色	炭化粒子・赤色粒子・細礫少量, ローム粒子微量
2 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・細礫微量	11 黒 褐 色	ローム粒子少量, 炭化粒子・細礫微量
3 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒 褐 色	ローム粒子・赤色粒子少量, 炭化粒子微量
4 極 暗 褐 色	細礫中量, ローム粒子・炭化粒子微量	13 黒 褐 色	ローム粒子・赤色粒子・細礫少量, 炭化粒子微量
5 黒 褐 色	赤色粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・細礫微量	14 黒 褐 色	ローム粒子少量, 炭化粒子・細礫微量
6 黒 褐 色	炭化粒子・細礫少量, ローム粒子微量	15 黒 褐 色	赤色粒子・細礫中量, ローム粒子少量
7 黒 褐 色	炭化粒子・赤色粒子少量, ローム粒子・細礫微量	16 黒 褐 色	細礫中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
8 黒 色	ローム粒子・炭化粒子微量	17 黒 色	赤色粒子少量, ローム粒子・粘土粒子微量
9 黒 褐 色	細礫中量, ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量		

**遺物出土状況** 混入した土師器片2点(甕), 須恵器片6点(坏1, 高台付坏1, 蓋1, 甕2, 高台付盤1), 土師質土器片2点(鍋), 土製品1点(羽口)が出土している。DP 1は覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 同じ面で, 15世紀中葉から16世紀代の第1号井戸跡が確認できることから, 本跡も近い時期に機能していたと推定される。性格は不明であるが, 底面に硬化が認められることから, 道としても利用されていたと推定される。

**第2号溝跡出土遺物観察表 (第23図)**

番号	器種	長さ	厚さ	径	重量	胎土	特 徴	出土位置	備 考
DP 1	羽口	(45)	(38)	(68)	(91.4)	長石・石英・赤色粒子	外面褐灰色 内面におい橙 褐灰色部は炉との連結部カ	覆土中	

③ピット群

**第3号ピット群 (第24図)**

**位置** I 2i9区からI 3h2区, 標高27.4mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号井戸跡を掘り込み, 第2B号石組み遺構に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北6.8m, 東西15.2mの範囲に, 11か所のピットを確認した。

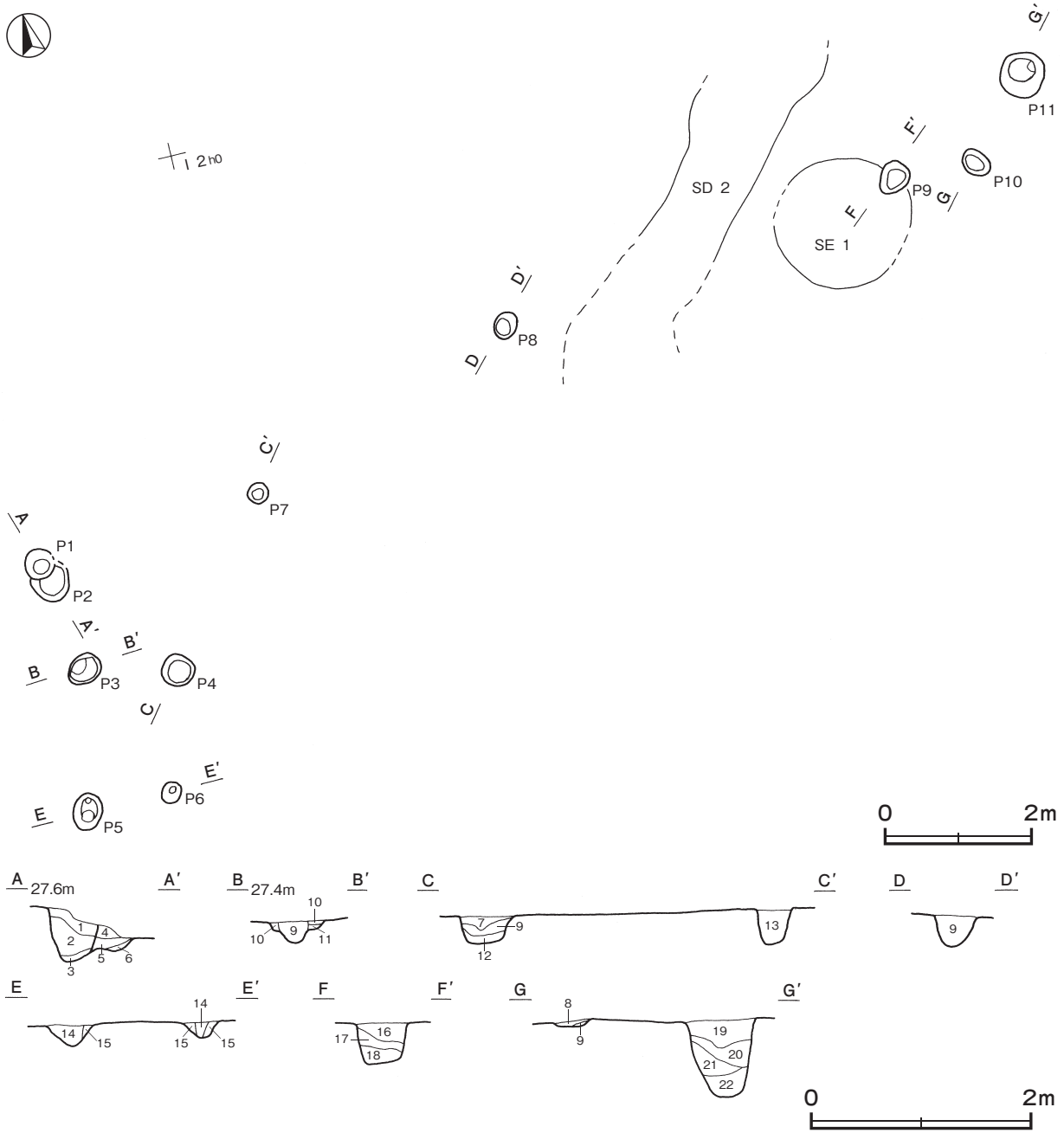
**ピット** 11か所。長径28~64cm, 短径28~62cmの円形または楕円形で, 深さは6~70cmである。

**ピット土層解説 (各ピット共通)**

1 暗 褐 色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	13 極 暗 褐 色	ローム粒子微量
2 暗 褐 色	焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量	14 暗 褐 色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
3 黒 褐 色	粘土粒子多量, ローム粒子少量	15 暗 褐 色	ローム粒子少量
4 黒 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	16 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・細礫微量
5 極 暗 褐 色	焼土粒子・炭化粒子微量	17 黒 色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
6 黒 褐 色	赤色粒子少量	18 黒 褐 色	ローム粒子少量, 炭化粒子・細礫微量
7 極 暗 褐 色	赤色粒子少量	19 黒 褐 色	ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
8 黒 褐 色	ローム粒子少量, 細礫微量	20 黒 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子・細礫微量
9 黒 褐 色	ローム粒子微量	21 黒 褐 色	粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
10 極 暗 褐 色	ローム粒子少量	22 暗 褐 色	ローム粒子・粘土粒子微量
11 暗 褐 色	中円礫微量		
12 黒 色	ローム粒子微量		

**遺物出土状況** 混入した土師器片4点(坏1, 甕3), 須恵器片2点(坏, 甕), 鉄滓1点(86.8g)が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は, 同じ面で15世紀中葉から16世紀代に比定できる第1号井戸跡が確認されていることから, 同時期と推定されるが, 伴う遺物がないため明確でない。



第24図 第3号ピット群実測図

④遺構外出土遺物（第7次面）（第25図）

18は、古瀬戸後期様式の直縁大皿に形状は類似するが、同じ時期の遺物かは不明である。



第25図 遺構外出土遺物実測図

第7次面遺構外出土遺物観察表（第25図）

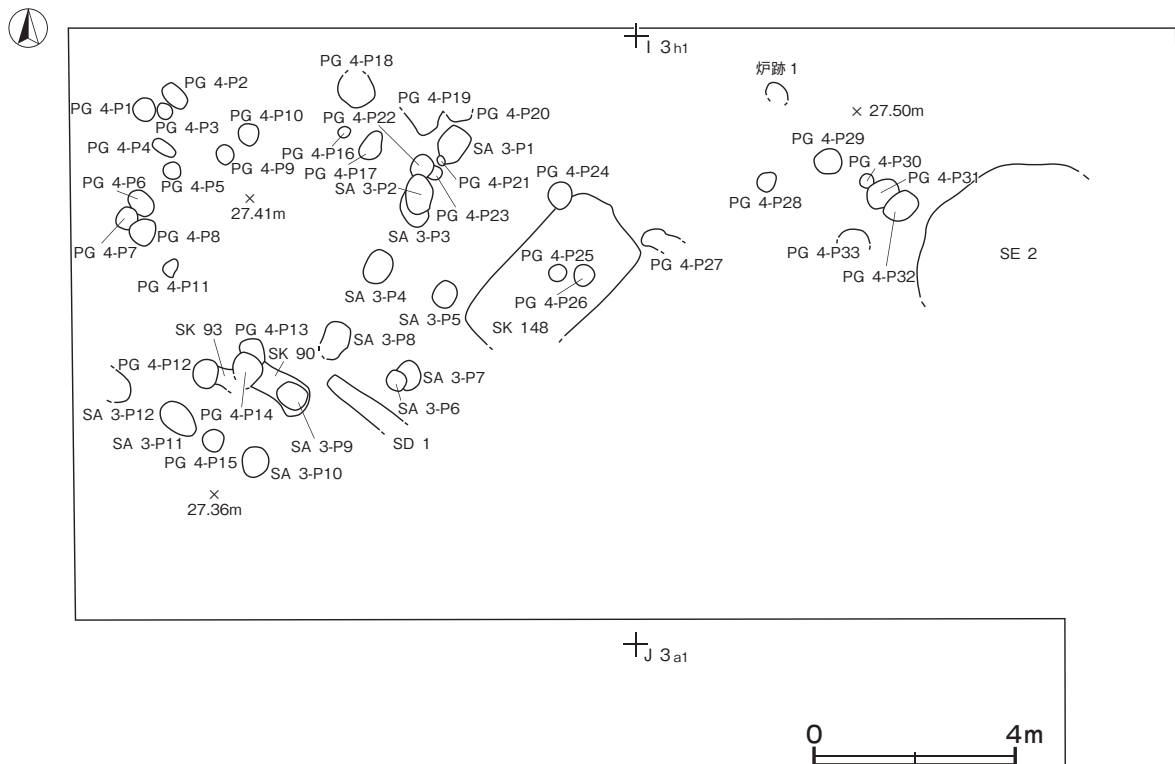
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	陶器	有足鉢	-	(5.3)	[8.8]	石英 鉛釉	にぶい褐	良好	体部上面・内面鉛釉主体, 部分的に自然釉 体部下端露胎 足部貼付	I 2h9	5% PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	瓦質土器	火鉢	長石・石英・針状鉱物	暗灰	体部外面にスタンプによる雷文	I 2i8	PL12
TP 2	瓦質土器	火鉢	長石・石英・針状鉱物	橙	体部外面に2段のスタンプによる雷文	I 2i9	PL12

(4) 第6次面（第26図）

当次面は、井戸跡や溝跡、柱穴列跡などを確認した。当次面は、第7次面と異なる生活面として機能していたことが推定される。出土遺物から、16世紀後葉～17世紀代に比定でき、中世から近世への過渡期と推定される。



第26図 第6次面全体図

①井戸跡

第2号井戸跡（SK36下）（第27図）

**位置** 調査区東部のI 3h2区、標高27.4 mの台地上に位置している。

**重複関係** 第36号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が調査区外に延び、南部が攪乱を受けているため、東西径は3.60 m、南北径は2.60 mしか確認できなかった。平面形は円形と推定でき、確認面から1.5mまでは漏斗状に掘り込まれ、その下は円筒状に掘り込まれている。約1.8m掘り下げた段階で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。



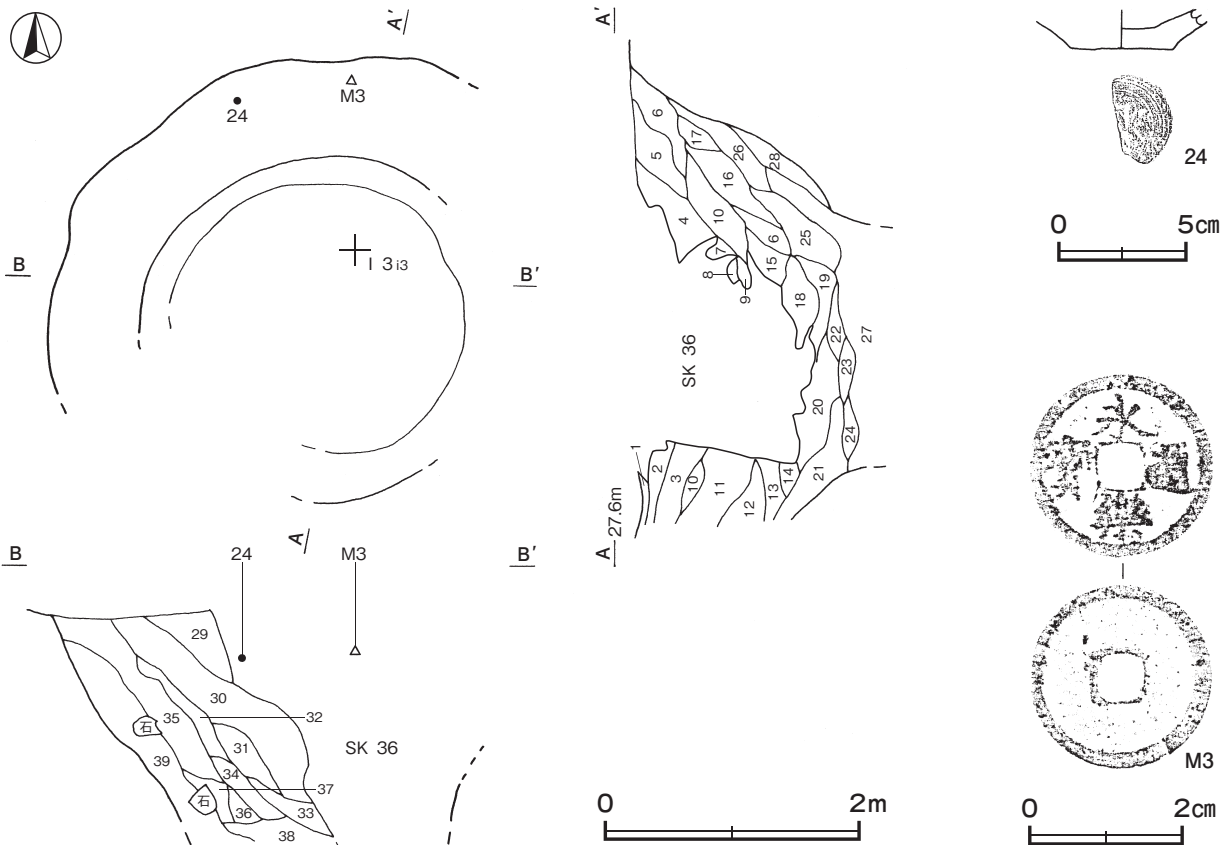
覆土 39層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- |        |                        |         |                           |
|--------|------------------------|---------|---------------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量, 粘土粒子微量        | 21 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子微量              |
| 2 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 22 黒褐色  | 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量   | 23 黒褐色  | 粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量      |
| 4 黒褐色  | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量    | 24 黒褐色  | ローム粒子微量                   |
| 5 黒褐色  | 炭化粒子・細礫微量              | 25 黒褐色  | 炭化粒子・粘土粒子・細礫微量            |
| 6 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      | 26 黒褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子・円礫微量        |
| 7 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量      | 27 黒褐色  | 粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・円礫微量   |
| 8 黒褐色  | 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量   | 28 黒褐色  | 円礫少量, ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 9 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      | 29 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子微量              |
| 10 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量   | 30 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・細礫微量           |
| 11 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      | 31 黒褐色  | ローム粒子少量, 炭化物微量            |
| 12 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量           | 32 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量         |
| 13 黒褐色 | 炭化粒子・粘土粒子微量            | 33 暗褐色  | 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量       |
| 14 黒褐色 | 炭化粒子微量                 | 34 極暗褐色 | 円礫少量, ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 15 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量       | 35 極暗褐色 | 細礫少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 16 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・細礫微量        | 36 黒褐色  | ローム粒子・細礫微量                |
| 17 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・細礫微量        | 37 黒褐色  | ローム粒子・円礫微量                |
| 18 黒褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量    | 38 黒褐色  | 炭化粒子少量, ローム粒子微量           |
| 19 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量       | 39 黒褐色  | 細礫中量, ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 20 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量      |         |                           |

遺物出土状況 土師質土器片3点(小皿), 銭貨1点(永樂通寶)が出土している。24・M3は, 覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器と, 近世の土坑に掘り込まれていることから, 16世紀後半に比定できる。



第27図 第2号井戸跡・出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
24	土師質土器	小皿	-	(1.5)	[4.0]	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土上層	20%

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M3	永樂通寶	24	0.6	0.1	1.8	銅	1408	明銭 無背銭	覆土上層	PL13

## ②炉跡

### 第1号炉跡 (第28図)

**位置** 調査区北部のI 3h1区, 標高27.5mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南部が攪乱を受けているため, 東西軸は0.44mで, 南北軸は0.38mしか確認できなかったが, 楕円形と推定される。深さは12cmで, 底面は皿状であり, 壁は緩やかに立ち上がっている。ほぼ全面で焼土が確認でき, その周囲に灰が不定形に広がっている状況が確認できた。底面や壁に赤変硬化は確認できなかった。

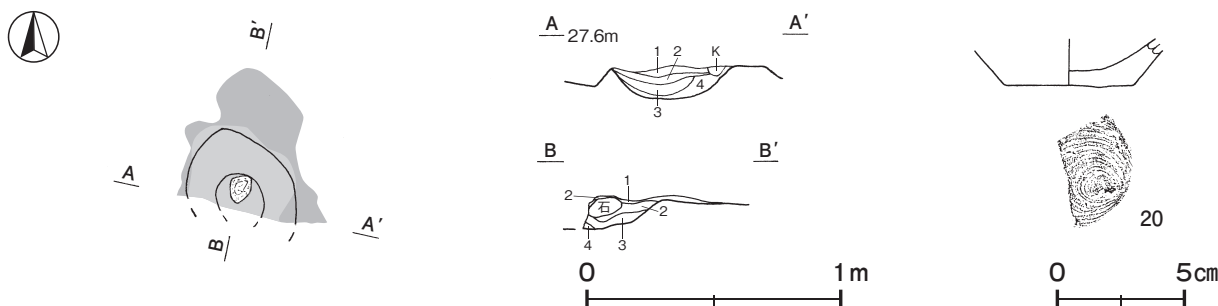
**覆土** 4層に分層できる。各層が焼土を多く含むことから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |                               |                      |
|-------------------------------|----------------------|
| 1 灰褐色 灰多量, 焼土ブロック・炭化材少量, 骨片微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 円礫微量  |
| 2 赤褐色 焼土粒子多量, 円礫微量            | 4 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 円礫微量 |

**遺物出土状況** 混入した土師器片3点(甕), 土師質土器片1点(小皿), 瓦1点(平瓦), 鉄製品1点(不明)が出土している。20は覆土上層から出土している。

**所見** 時期は, 出土遺物や同じ面の遺構から, 16世紀後葉から17世紀代と考えられるが, 時期決定の根拠となる遺物が出土していないため, 明確でない。第1層から骨片が検出されているが, 微量のため, 火葬施設かは不明である。



第28図 第1号炉跡・出土遺物実測図

### 第1号炉跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師質土器	小皿	-	(1.8)	[5.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土上層	20%

## ③土坑

### 第90号土坑 (第29図)

**位置** 調査区西部のI 2i9区, 標高27.4mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号柱穴列P9, 第4号ピット群P13・P14, 第5号ピット群P10に掘り込まれている。

**規模と形状** 北西部が, 第4号ピット群P13・P14に掘り込まれているため, 短軸は0.67mで, 長軸は1.12mしか確認できなかった。長軸方向がN-58°-Wの長方形と推定できる。深さは21cmで, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。礫を含み、締まりが強いことから、整地を行う際に埋め戻したと考えられる。

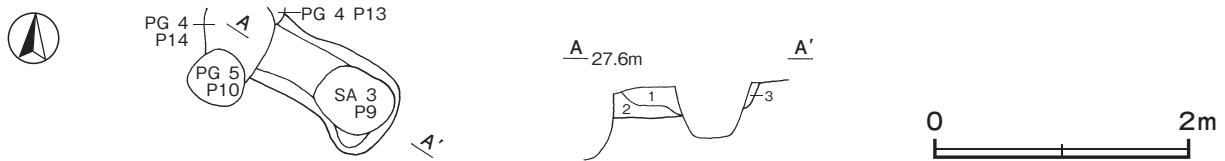
**土層解説**

- 1 暗褐色 円礫・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量

- 3 黒褐色 円礫・焼土粒子微量

**遺物出土状況** 瓦片1点（平瓦）が出土している。細片のため図示できない

**所見** 時期は、同じ面の遺構から16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第29図 第90号土坑実測図

**第93号土坑（第30図）**

**位置** 調査区西部のI 2i8区、標高27.3mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第4号ピット群P12・P14、第5号ピット群P10に掘り込まれている。

**規模と形状** 東西の立ち上がりが掘り込まれているため、短軸は0.29mで、長軸は0.37mしか確認できなかった。深さは19cmで、底面は平坦であり、南北の壁は外傾して立ち上がっている。

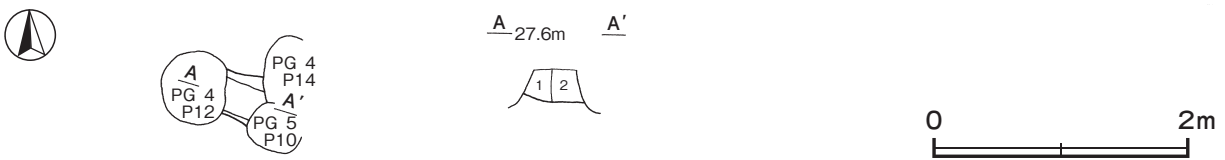
**覆土** 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・赤色粒子少量

**所見** 時期は、同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、遺物が出土していないため明確でない。



第30図 第93号土坑実測図

**第148号土坑（第31図）**

**位置** 調査区中央部のI 2i0区、標高27.2mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第4号ピット群P24～P26に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.53m、短軸1.90mの隅丸長方形で、長軸方向はN-46°-Eである。深さは59cmで、底面は平坦であり、壁は直立している。

**覆土** 9層に分層できる。各層にローム粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

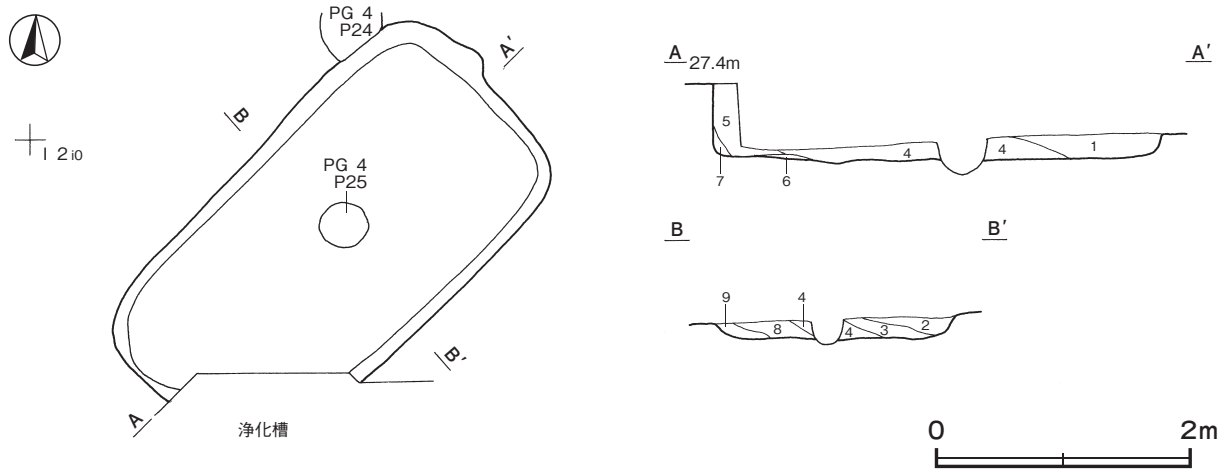
**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 6 黒褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 7 黒色 ローム粒子微量
- 8 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 混入した土師器片 23 点（坏 11，甕 12），須恵器片 13 点（坏 6，高台付坏 1，蓋 1，甕 5），鉄滓 2 点（118.2g）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は，同じ面の遺構から，16 世紀後葉から 17 世紀代と推定されるが，時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第 31 図 第 148 号土坑実測図

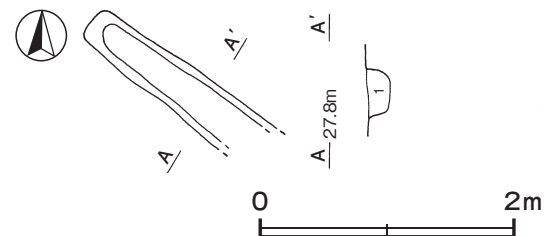
④溝跡

第 1 号溝跡（第 32 図）

**位置** 調査区西部の I 2j9 区，標高 27.5 m の台地上に位置している。

**規模と形状** 南東部が攪乱を受けているため，長さは 1.65 m しか確認できなかった。I 2j0 区から北西方向（N - 55° - W）に直線状に延び，規模は上幅 0.40m，下幅 0.27m，深さ 18cm ほどで，断面は U 字状である。

**覆土** 単一層である。締まりが極めて強く，整地を行う際に埋め戻されたとみられる。



第 32 図 第 1 号溝跡実測図

土層解説

1 暗褐色 炭化物・焼土粒子少量，粘土粒子微量

**遺物出土状況** 混入した土師器片 1 点（坏），土師質土器片 1 点（内耳鍋），鉄製品 1 点（釘），瓦 6 点（丸瓦 1，平瓦 5）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は，出土土器や同じ面の遺構から，16 世紀後葉から 17 世紀代と推定されるが，時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。性格も不明である。

⑤柱穴列跡

第 3 号柱穴列跡（第 33 図）

**位置** 調査区西部の I 2h0～I 2j9 区，標高 27.5 m の平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 90 号土坑，第 4 号ピット群 P21・P22 を掘り込み，第 5 号ピット群 P 14 に掘り込まれている。

**規模と構造** I 2j9 区から北東方向に，N - 33° - E で，P 1～P 4，P 8～P10 が直線上に並び，P 4 と P 8 に平行して，南東に，P 5～P 7 が配される。P 2 が P 3 を，P 6 が P 7 を掘り込んでおり，補修が行



第 33 图 第 3 号柱穴列跡・出土遺物実測図

われたものと推定される。P10に直交して、北西に、P11とP12が並ぶ。確認できた長さは、P1～P10が7.6m、P10～P12が3.2mである。柱間寸法は、1.50mを基調とする。

**柱穴** 平面形は円形または楕円形で、長径40～86cm、短径36～55cmである。深さは16～53cmで、断面形はU字状及び皿状である。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

1	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	20	灰黄褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子少量、炭化物微量	21	暗褐色	焼土粒子少量
3	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	22	褐色	ローム粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子微量	23	黒褐色	焼土粒子微量
5	褐色	ローム粒子微量	24	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
6	にぶい黄褐色	焼土粒子微量	25	暗褐色	ロームブロック微量
7	褐色	ローム粒子少量	26	褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
8	暗褐色	焼土粒子微量	27	褐色	焼土粒子微量
9	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	28	黒褐色	焼土粒子多量
10	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	29	褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
11	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	30	暗褐色	ローム粒子少量、細礫微量
12	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	31	褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
13	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	32	暗褐色	ローム粒子少量
14	暗褐色	ローム粒子少量	33	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
15	黒褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	34	褐色	ローム粒子少量
16	黒褐色	ローム粒子少量	35	暗褐色	赤色粒子少量
17	暗褐色	炭化物・焼土粒子微量	36	暗褐色	焼土粒子少量、炭化物・粘土粒子微量
18	黒褐色	ローム粒子微量	37	にぶい黄褐色	焼土粒子少量、粘土粒子微量
19	にぶい黄褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	38	黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・赤色粒子微量

**遺物出土状況** 陶器片3点（甕）、磁器片1点（碗）、瓦片19点（丸瓦3、平瓦16）、鉄滓1点（81.1g）が各柱穴から出土している。また、混入した土師器片1点（甕）、須恵器片4点（坏2、甕2）が出土している。T1は、P4の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物や同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代に比定できる。構造は、全容が確認できておらず、柱穴列が延びる可能性もあり、不明である。

**第3号柱穴列跡出土遺物観察表（第33図）**

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区					色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)	高さ						
T1	瓦	軒丸瓦	(3.5)	-	(6.0)	(3.8)	1.0	(2)	-	-	-	-	-	暗灰	長石・石英・礫	普通	巴文右	P4 (SK107)	PL14

**⑥ピット群**

**第4号ピット群（第34・35図）**

**位置** I2h8区からI3h2区、標高27.5mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号井戸跡、第2号溝跡、第90・93・148号土坑を掘り込み、第3号柱穴列P1・P2、第5号ピット群P10に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北6.4m、東西16.0mの範囲に、33か所のピットを確認した。

**ピット** 33か所。長径20～100cm、短径22～68cmの円形または楕円形で、深さは5～91cmである。

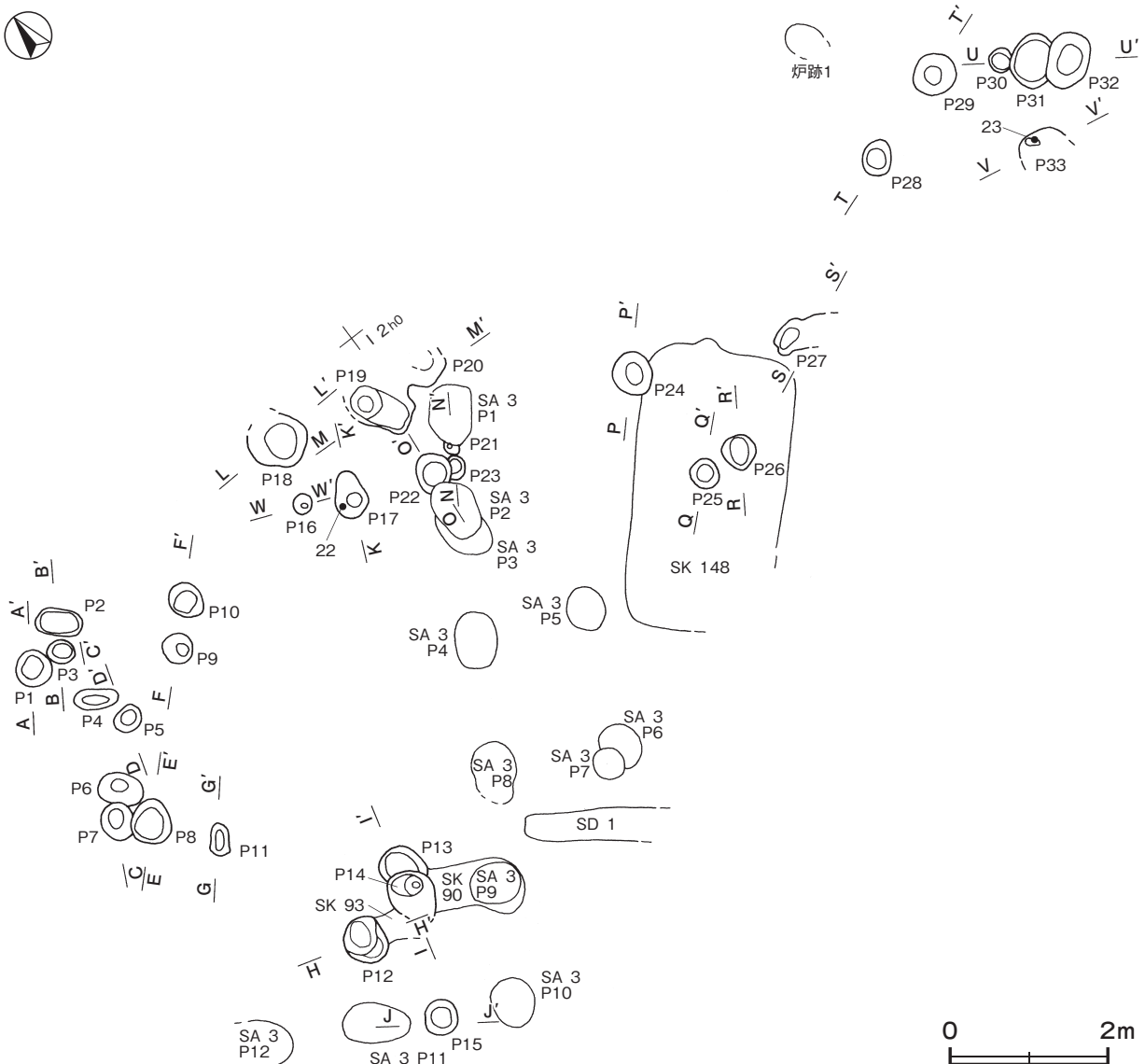
**ピット土層解説（各ピット共通）**

1	灰黄褐色	焼土粒子少量、粘土粒子・細礫微量	10	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	灰褐色	炭化粒子・粘土粒子微量	11	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3	灰黄褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	12	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	灰褐色	焼土粒子少量、粘土ブロック微量	13	褐色	炭化粒子微量
5	黒褐色	焼土粒子微量	14	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
6	にぶい黄褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	15	褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	16	褐色	ローム粒子少量
8	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	17	黒褐色	ローム粒子少量
9	黒色	ローム粒子・細礫微量	18	暗褐色	炭化粒子多量、ローム粒子・焼土粒子少量

19	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	32	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
20	黒褐色	ローム粒子・細礫微量	33	黒色	ローム粒子微量
21	褐色	焼土粒子中量	34	黒色	炭化物・ローム粒子微量
22	暗褐色	炭化粒子微量	35	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
23	暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	36	暗褐色	ローム粒子少量
24	褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	37	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
25	暗褐色	赤色粒子少量	38	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・細礫微量
26	褐色	ローム粒子微量	39	黒褐色	礫中量, ローム粒子・粘土粒子微量
27	褐色	ローム粒子中量	40	黒色	ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子・細礫微量
28	黒褐色	ローム粒子微量	41	極暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子・細礫微量
29	褐色	ローム粒子少量	42	黒色	ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子・円礫微量
30	暗褐色	焼土粒子微量	43	黒色	ローム粒子・粘土粒子微量
31	黒褐色	ローム粒子少量 (第17層より粘性・締まりともに強い)	44	暗褐色	細礫中量
			45	灰褐色	円礫・ローム粒子・焼土粒子微量

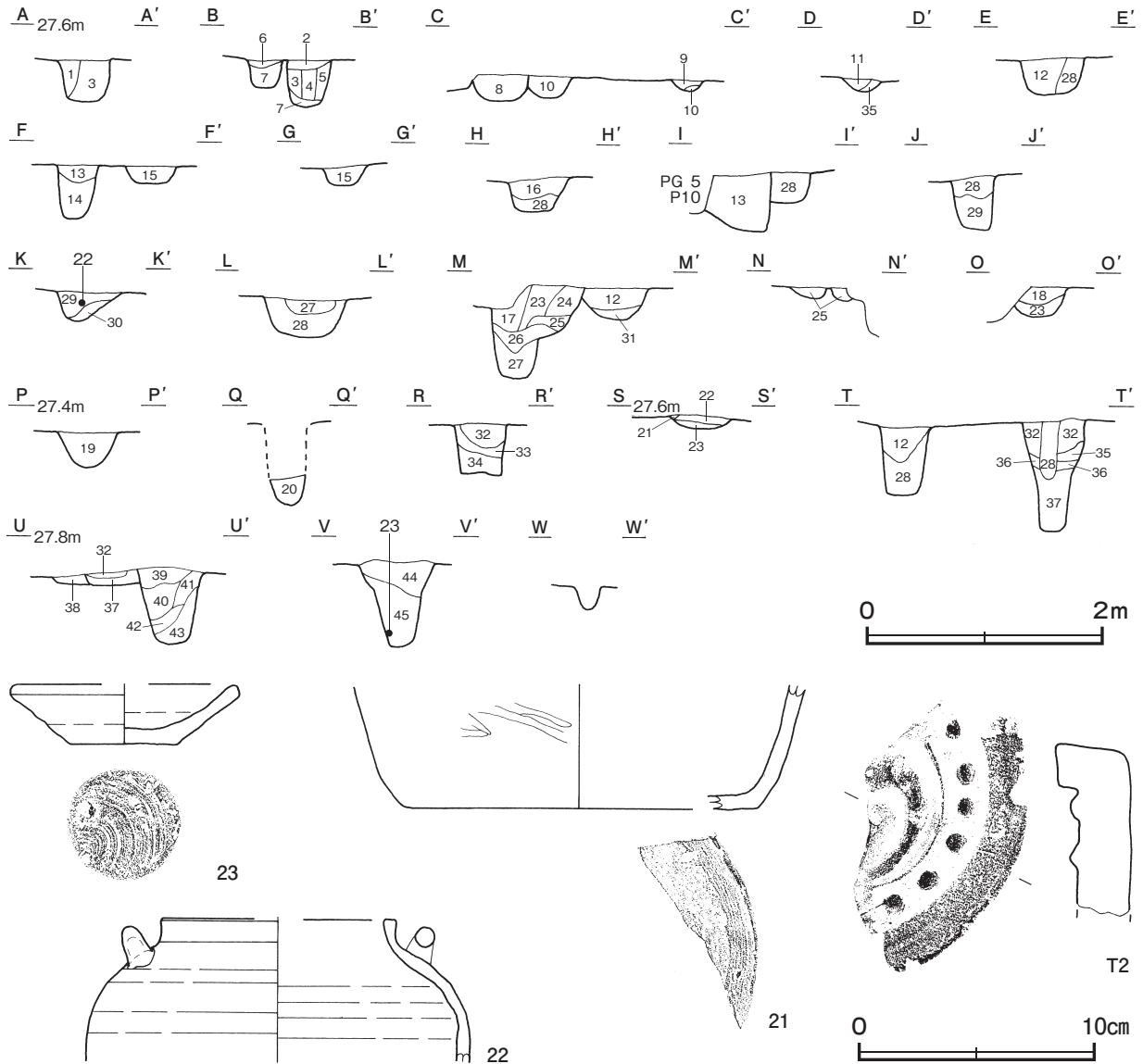
**遺物出土状況** 陶器片4点(甕3, 壺1), 磁器片2点(碗), 土師質土器片8点(小皿2, 内耳鍋6), 瓦質土器片1点(鉢), 瓦片10点(丸瓦3, 平瓦7), 鉄製品2点(釘, 不明)が各ピットから出土している。また混入した土師器片5点(甕), 須恵器片2点(坏, 甕)が出土している。22は, P17の覆土中層, 23は, P33の覆土下層から出土している。21はP2, T2はP19からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から, 17世紀前葉に比定できる。



第34図 第4号ピット群実測図





第35図 第4号ピット群・出土遺物実測図

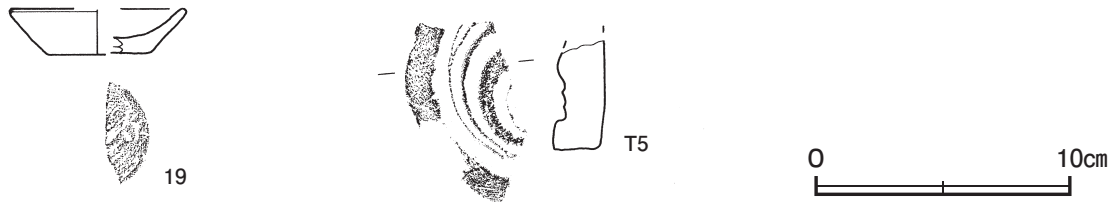
第4号ピット群出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	瓦質土器	鉢	-	(5.3)	[15.2]	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面へラ磨き	P 2 (SK81)	5%
22	陶器	有耳壺	[10.0]	(6.1)	-	鉄釉	黒褐色	良好	外面・口縁部内面施釉、耳貼付	P 17 (SK95)	20% 瀬戸・美濃 PL16
23	土師質土器	小皿	[9.3]	2.5	4.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P 33(SK108)	50% PL 9

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T 2	瓦	軒丸瓦	(3.2)	-	(7.0)	(4.9)	0.9	(6)	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・霰	普通	巴文右	P19 (SK101)	PL14

⑦遺構外出土遺物（第6次面）（第36図）

遺構外の遺物は、実測図と観察表で記載する。



第36図 遺構外出土遺物実測図

第6次面遺構外出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
19	土師質土器	小皿	[6.8]	1.8	[4.0]	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	—	40%

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T5	瓦	軒丸瓦	(1.9)	—	(3.7)	(2.7)	—	—	—	—	—	—	—	灰	長石	普通	巴文右	I 2 h8	

(5) 中世遺構一覧表

表2 井戸一覧表

番号	次面	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	7	I 3 h2	—	円形	1.88 × 1.76	(200)	—	漏斗状	人為	陶器, 土師質土器	本跡→PG 3・4
2	6	I 3 h2	—	[円形]	(3.60 × 2.60)	(180)	—	漏斗状	人為	土師質土器, 銭貨	本跡→SK36

表3 溝跡一覧表

番号	次面	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
2	7	I 3 h1	N - 44° - E	直線状	(4.74)	1.26	0.94	74	U字状	外傾	人為	—	本跡→炉1, PG 4
1	6	I 2 i9	N - 55° - W	直線状	(1.65)	0.40	0.27	18	U字状	外傾	人為	—	—

表4 土坑一覧表

番号	次面	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)					
161	9	I 2 j8	—	[円形]	(0.84 × 0.70)	(78)	皿状	緩斜	人為	—	本跡→SK163
162	9	I 2 i9	N - 40° - E	隅丸長方形	3.20 × 2.03	11	平坦	緩斜	人為	陶器	本跡→第1号火葬土坑
90	6	I 2 i9	N - 58° - W	[長方形]	(1.12) × 0.67	21	平坦	外傾	人為	瓦	本跡→SA 3, PG 4・5
93	6	I 2 i8	—	—	(0.37) × 0.29	19	平坦	外傾	人為	—	本跡→PG 4・5
148	6	I 2 i0	N - 46° - E	隅丸長方形	3.53 × 1.90	59	平坦	直立	人為	—	本跡→PG 4

表5 柱穴列跡一覧表

番号	次面	位置	方向	長さ(m)	柱間寸法(m)	柱穴				主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
						柱穴数	平面形	長径/短径(m)	深さ(cm)		
2	8	I 2 h0 ~ I 2 j9	N - 38° - E	8.0	2.0	7	円形 楕円形	0.27 ~ 0.45/ 0.26 ~ 0.39	17 ~ 54	陶器, 土製品, 鉄製品	—
3	6	I 2 h0 ~ I 2 j9	N - 33° - E	7.6 3.2	1.5	12	円形 楕円形	0.40 ~ 0.86/ 0.36 ~ 0.55	16 ~ 53	陶器, 磁器, 瓦	SK90, PG 4 → 本跡 → PG 5

表6 ピット群一覧表

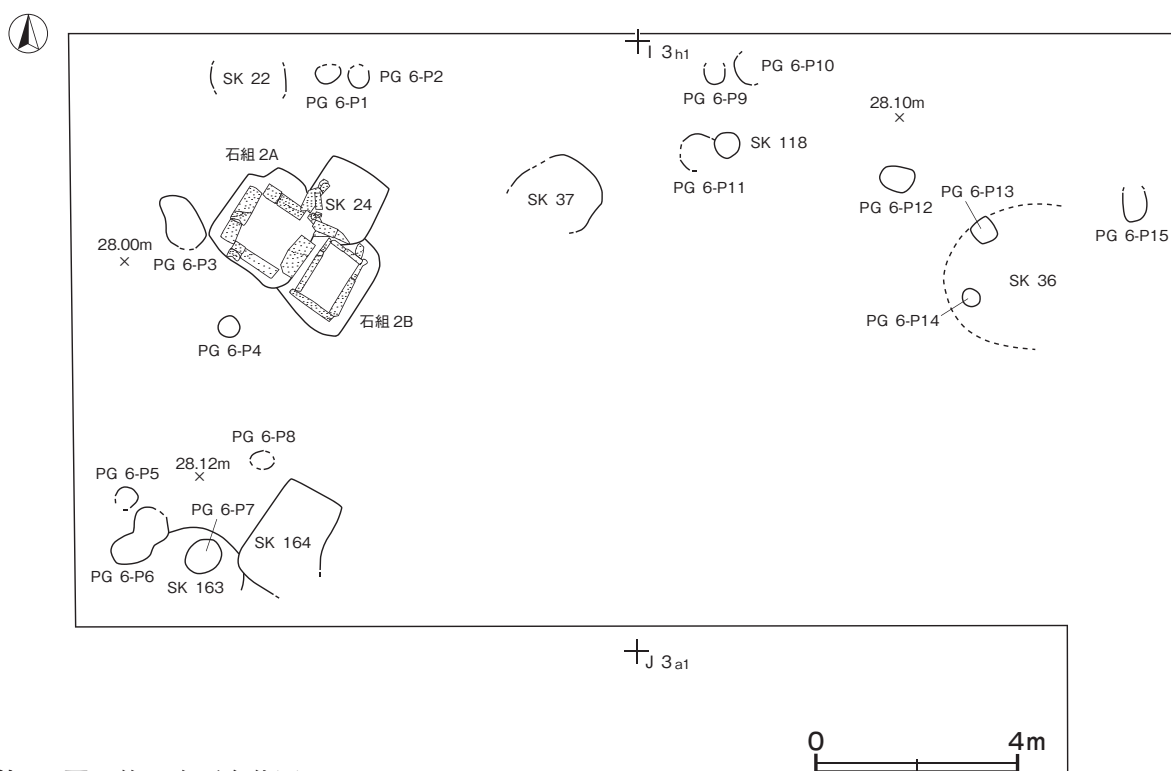
番号	次面	位置	形状	範囲 (m)	柱 穴				主な出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
					柱穴数	平面形	長径 / 短径 (m)	深さ (cm)		
2	8	I 2h8 ~ I 3h2	不定形	[8.4 × 15.9]	17	円形 楕円形 隅丸方形	0.20 ~ 0.93/ 0.18 ~ 0.74	5 ~ 50	土師器, 須恵器	SI 1 → 本跡
3	7	I 2h9 ~ I 3h2	不定形	[6.8 × 15.2]	11	円形 楕円形	0.28 ~ 0.64/ 0.28 ~ 0.62	6 ~ 70	—	SE 1 → 本跡 → 第 2 B 号石組み遺構
4	6	I 2h8 ~ I 3h2	不定形	[6.4 × 16.0]	33	円形 楕円形	0.20 ~ 1.00/ 0.22 ~ 0.68	5 ~ 91	陶器, 磁器, 土師質土器 瓦質土器, 瓦, 鉄製品	SE 1, SD 2, SK 90・93・ 148 → 本跡 → SA 3, PG 5

### 3 近世の遺構と遺物 (第4・5・3次面)

当時代の遺構は、石組み遺構3基、用排水路跡2条、石敷き遺構1基、土坑10基、柱穴列跡2条、ピット群4か所を確認した。第4次面は生活面であり、その構築に伴う基礎地業面が第5次面である。そのため本項では第4次面から順に記述する。

#### (1) 第4次面

当次面は、近世の中で、最も長期間に渡り、生活面として機能していたと考えられる。おおよその時期は、17世紀中葉～18世紀代に比定できる。



第37図 第4次面全体図

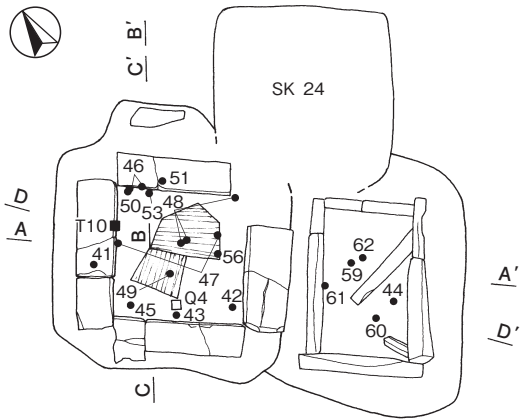
#### ①石組み遺構

##### 第2A号石組み遺構 (SX14西) (第38～42図)

**位置** 調査区西部のI 2h9区、標高28.0mの台地上に位置している。

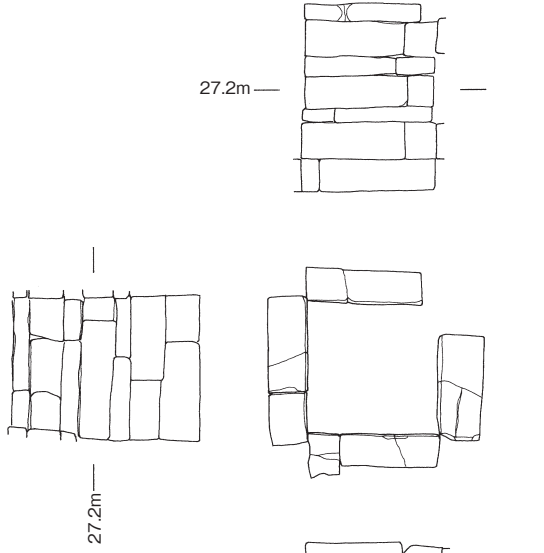
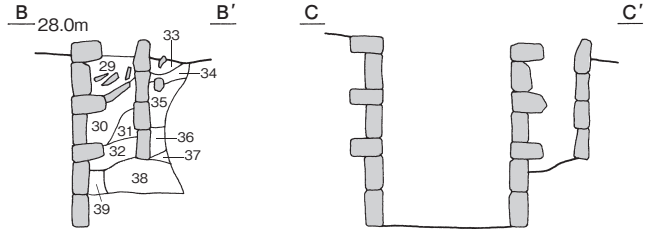
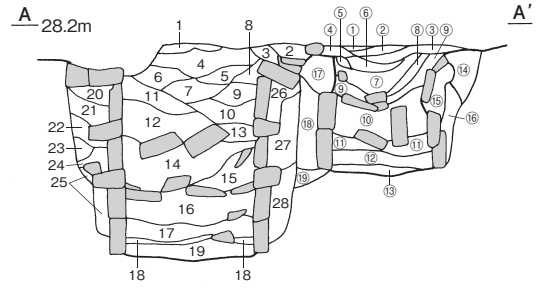
**重複関係** 第2B号石組み遺構を掘り込み、第24号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 石組みの規模は、北東・南西軸1.92m、北西・南東軸1.52mで、方形の石組みの北東部に、同じ石材を用いた台形状の張り出しが構築される。掘方の規模は北東・南西軸2.08m、北西・南東軸1.88mの不

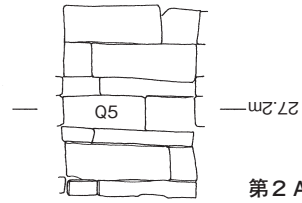
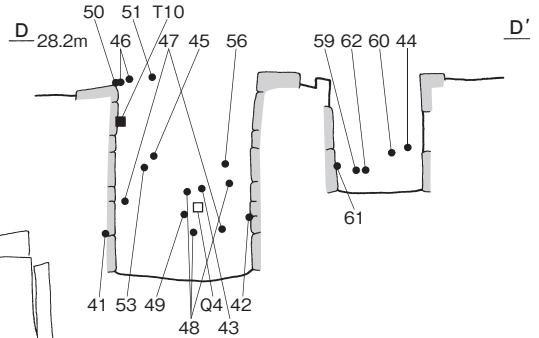


第2 A号石組み

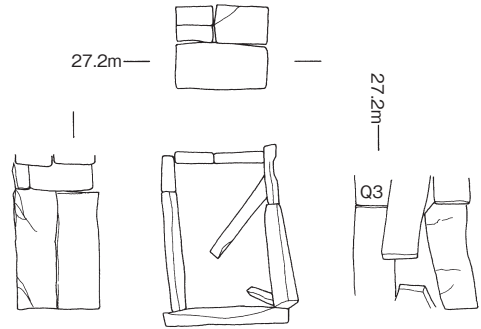
第2 B号石組み



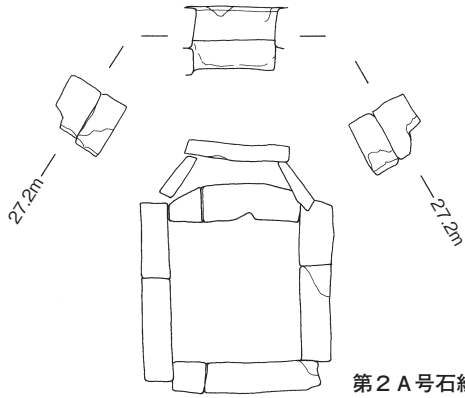
第2 A号石組み



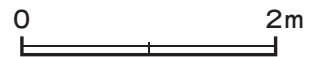
第2 A号石組み



第2 B号石組み



第2 A号石組み



第38図 第2A・2B号石組み遺構実測図



定形で、北東・南西軸方向はN - 29° - Eである。深さは1.67mで、底面は平坦である。

**石組みの構築状況** 石材60点（北東15, 南西14, 南東15, 北西16）を確認した。長さ78～84cm, 幅24～29cm, 厚さ11～14cm, 重量40～46kgの凝灰岩の切石が最も多く、長さ62～66cm・92～98cmの石材も含まれる。積み方は、各段の高さを揃える布積みで、すべての石材が、長辺を横にして積まれている。最下段は、天端を垂直に2段に積み、その後は天端を水平と垂直に積む工程を一段ずつ繰り返している。石材の端が揃わないように互い違いに積み、18～38cmの石材で、隙間ができないように調節されている。底面に石材は確認されない。張り出し部は、天端を垂直に積み、ハの字状を呈する短い石材に合わせて、方形の石組みの角が落とされている。

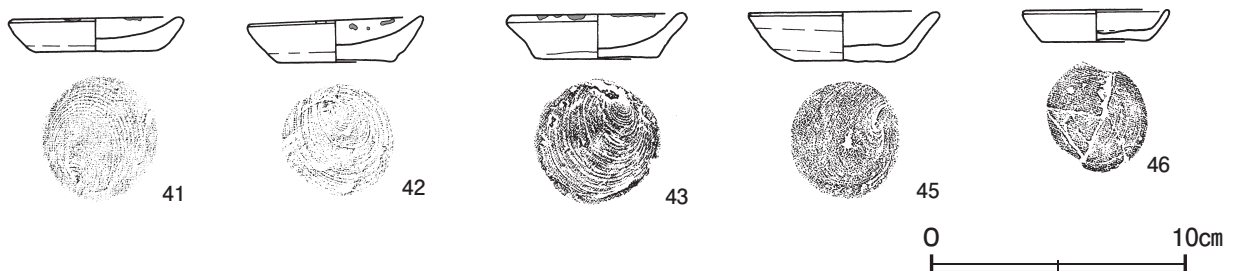
**覆土** 19層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第20～39層は掘方への埋土である。

**土層解説**

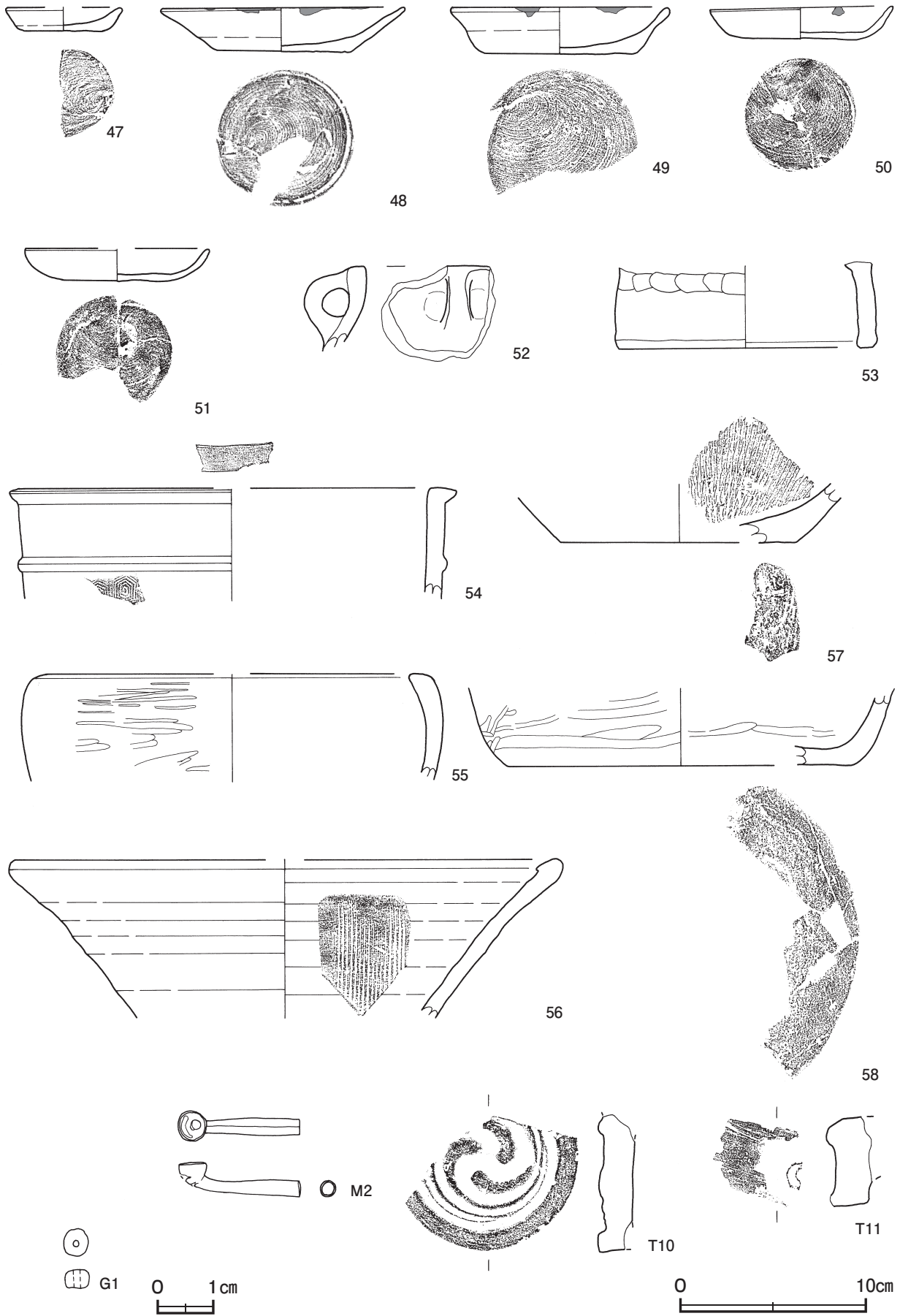
1 褐色	ローム粒子多量	21 暗褐色	焼土粒子中量, 凝灰岩片少量
2 暗褐色	炭化粒子微量	22 黒褐色	焼土粒子微量
3 黄褐色	ローム粒子少量	23 黄褐色	ローム粒子多量
4 黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	24 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
5 暗褐色	焼土粒子少量, 炭化物微量	25 暗褐色	粘土粒子少量, ローム粒子微量
6 暗褐色	大円礫・焼土粒子微量	26 暗褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量
7 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	27 黒褐色	粘土粒子少量, ローム粒子微量
8 褐色	ローム粒子少量	28 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
9 灰黄褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	29 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・凝灰岩片微量
10 におい黄褐色	焼土粒子微量	30 黒褐色	ローム粒子微量
11 灰黄褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・赤色粒子微量	31 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量
12 灰オリーブ色	焼土粒子微量	32 黒褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
13 オリーブ黒色	ローム粒子・炭化粒子微量	33 オリーブ黒色	焼土粒子少量, 大円礫微量
14 暗オリーブ色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	34 黒色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量
15 暗オリーブ色	ローム粒子少量	35 黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量
16 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	36 褐色	ローム粒子・粘土粒子・細礫少量, 炭化粒子微量
17 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	37 黒褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子・細礫微量
18 灰褐色	粘土粒子中量	38 黒色	ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
19 黒色	ローム粒子微量	39 黒色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
20 暗褐色	大円礫・焼土粒子少量, 粘土粒子微量		

**遺物出土状況** 陶器片8点（碗1, 播鉢3, 鉢2, 甕2）, 磁器片6点（碗）, 土師質土器片22点（小皿11, 皿6, 内耳鍋1, 焙烙1, 火鉢1, 鉢1, 甕1）, 瓦質土器片4点（火鉢2, 甕2）, 瓦片162点（丸瓦60, 平瓦98, 棟込瓦1, 不明3）, 銅製品1点（煙管）, 鉄製品2点（釘）, ガラス製品1点（小玉）が出土している。また混入した土師器片11点（坏4, 甕7）, 須恵器片16点（坏9, 高台付坏1, 蓋1, 甕5）, 鉄滓1点（209g）, 鉄片1点（10.7g）, 自然遺物2点（牡蠣貝殻, 板材）が出土している。41は掘方の埋土下層, 42・49は覆土下層, 43・45・53は覆土中層, 46・50・51・T10は覆土上層から出土している。47・48は覆土下層と中層, 56は覆土中層と第5次面の遺構外から出土した破片が接合したものである。52・54・55・57・58・T11・M2・G1は覆土中から出土している。工具痕が明瞭な石材はサンプルとし、拓影図及び観察表に記載する。

**所見** 時期は、出土遺物と確認面から、17世紀中葉から18世紀代に比定できる。隣接する第2B号石組みから作り替えられたものと推定される。性格は不明である。



第39図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(1)

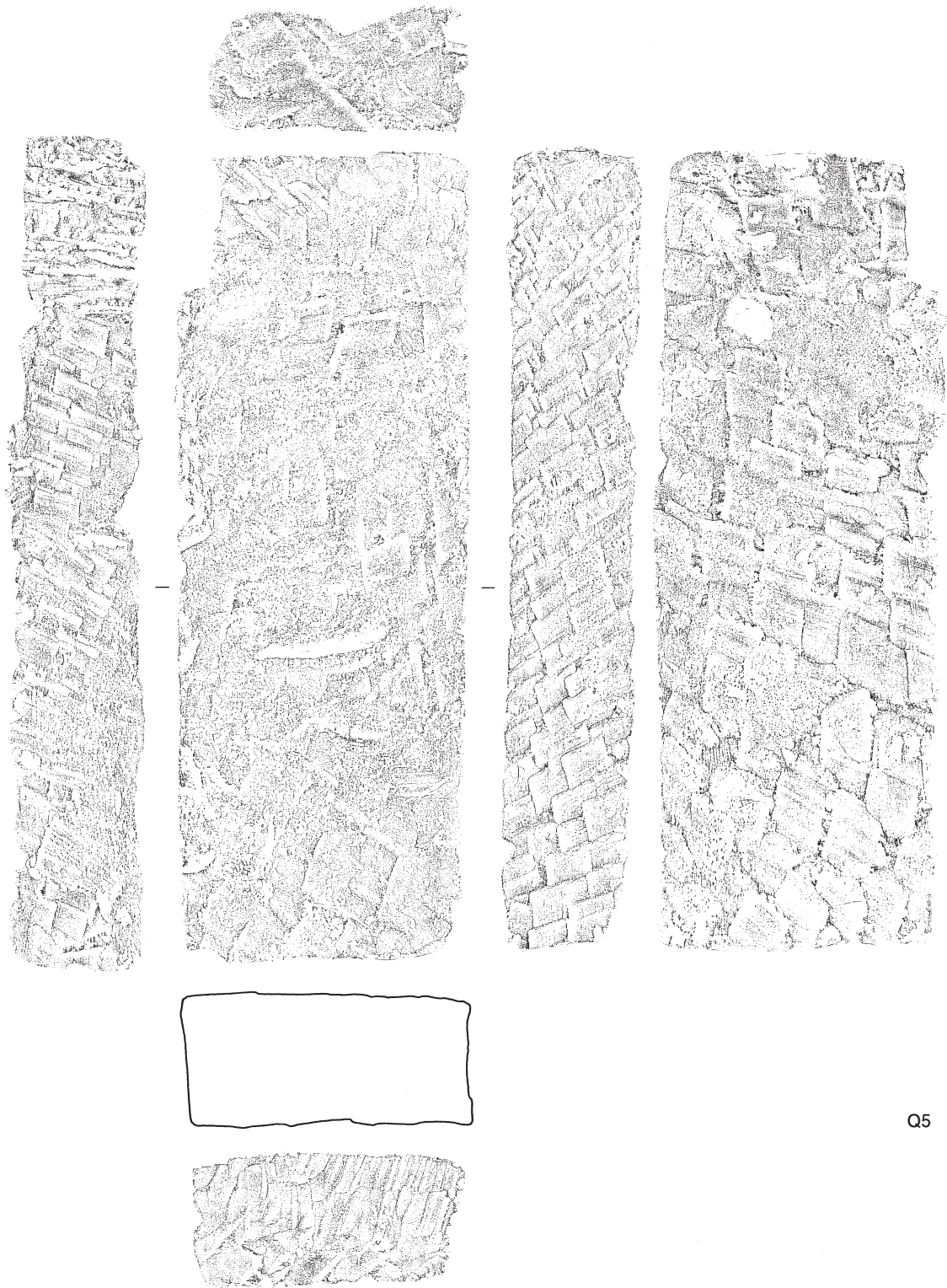


第40図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(2)



第41図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(3)





Q5

0 20cm

第42図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(4)

第2A号石組み遺構出土遺物観察表（第39～42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師質土器	小皿	6.6	1.3	4.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 口縁部油煙付着	掘方埋土下層	100% PL10
42	土師質土器	小皿	6.8	1.8	4.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 口縁部・体部内面油煙付着	覆土下層	98% PL10
43	土師質土器	小皿	6.7	1.8	4.8	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 見込みに若干の突出 口縁部油煙付着	覆土中層	95% PL10
45	土師質土器	小皿	7.4	2.0	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ	覆土中層	100% PL10
46	土師質土器	小皿	5.6	1.2	4.1	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ	覆土上層	80% PL10
47	土師質土器	小皿	[6.2]	1.3	4.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土下層	50% PL10
48	土師質土器	皿	13.0	2.4	7.3	長石・石英・雲母・礫	橙	普通	底部回転糸切り 口縁部に油煙付着	覆土中層	70% PL10
49	土師質土器	皿	11.6	2.5	8.0	長石・雲母・角尖石・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、外周ナデ 口縁部油煙付着	覆土下層	60% PL10
50	土師質土器	皿	9.8	1.8	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 口縁部内面油煙付着	覆土上層	70% PL10
51	土師質土器	皿	[10.0]	1.7	6.0	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 底部内面煤付着	覆土上層	60% PL10
52	土師質土器	内耳鍋	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ナデ	覆土中	5%
53	土師質土器	火鉢	-	(4.6)	[13.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部から剥離した脚部カ 上面に強い横ナデ	覆土中層	20%
54	瓦質土器	火鉢	[23.0]	(6.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	灰	普通	体部外面に隆帯貼付 隆帯下にスタンプによる亀甲文	覆土中	5%
55	瓦質土器	火鉢	[20.4]	(5.8)	-	長石・石英・礫	灰	普通	体部外面ヘラ磨き 口縁部内湾	覆土中	5%
56	陶器	播鉢	[29.2]	(8.5)	-	長石・礫 鉄釉	暗赤褐	良好	口縁部折り返し 播り目17条一単位カ	覆土中層 第5次面遺構外	20%瀬戸・美濃 PL10・16
57	陶器	播鉢	-	(3.2)	[12.7]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	播り目6条一単位カ	覆土中	10%
58	瓦質土器	甕	-	(4.2)	[18.6]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端ヘラ削り 外・内面ヘラ磨き	覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	石材	86.0	27.5	10.5	(32.5)	凝灰岩	幅4cm程の工具痕 天端は斜めに工具痕	-	
Q 5	石材	76.5	27.5	12.3	30.0	凝灰岩	幅4cm程の工具痕 角の切り落としにはより細い工具が用いられている 石材を組むための加工カ	-	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	煙管	6.6	1.6	0.9	(8.6)	銅	雁首 火皿が広がる	覆土中	PL13

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G 1	小玉	0.5	0.4	0.1	0.1	ガラス	若干の気泡	覆土中	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T10	瓦	棟込瓦	(18)	-	(9.7)	(7.6)	-	-	-	-	-	-	-	黒	長石・石英	普通	巴文右	覆土上層	PL14
T11	瓦	軒平瓦	-	-	-	-	-	(1.7)	(2.5)	0.5	-	(4.9)	灰	長石・石英・雲母	普通	唐草文	覆土中		

第2B号石組み遺構（SX14東）（第38・43図）

位置 調査区西部のI 2:9区、標高28.0mの台地上に位置している。

重複関係 第3号ピット群P 1・P 2を掘り込み、第2A号石組み遺構、第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 石組みの規模は、北東・南西軸1.37m、北西・南東軸0.97mの長方形で、掘方の規模は、北東・南西軸は2.04mで、北西・南東軸は1.38mしか確認できなかつたが、隅丸長方形と推定される。北東・南西軸方向はN-34°-Eである。深さは1.04mで、底面は平坦である。

石組みの構築状況 石材17点（北東4、南西3、南東6、北西4）を確認した。南東・北西壁は、長さ72～80cm、幅28～32cm、厚さ約10cm、重量16.5～44kg、北東・南西壁は、長さ92～98cm、幅30～34cm、厚さ9～12cm、重量13～42kgの凝灰岩の切石を主に用い、隙間を様々な大きさの石材で埋めている。いずれも石材の劣化が著しく、剥離などが確認でき、計測した重量は均一でない。天端を垂直に積み、石材の端を揃えて積んでいる。



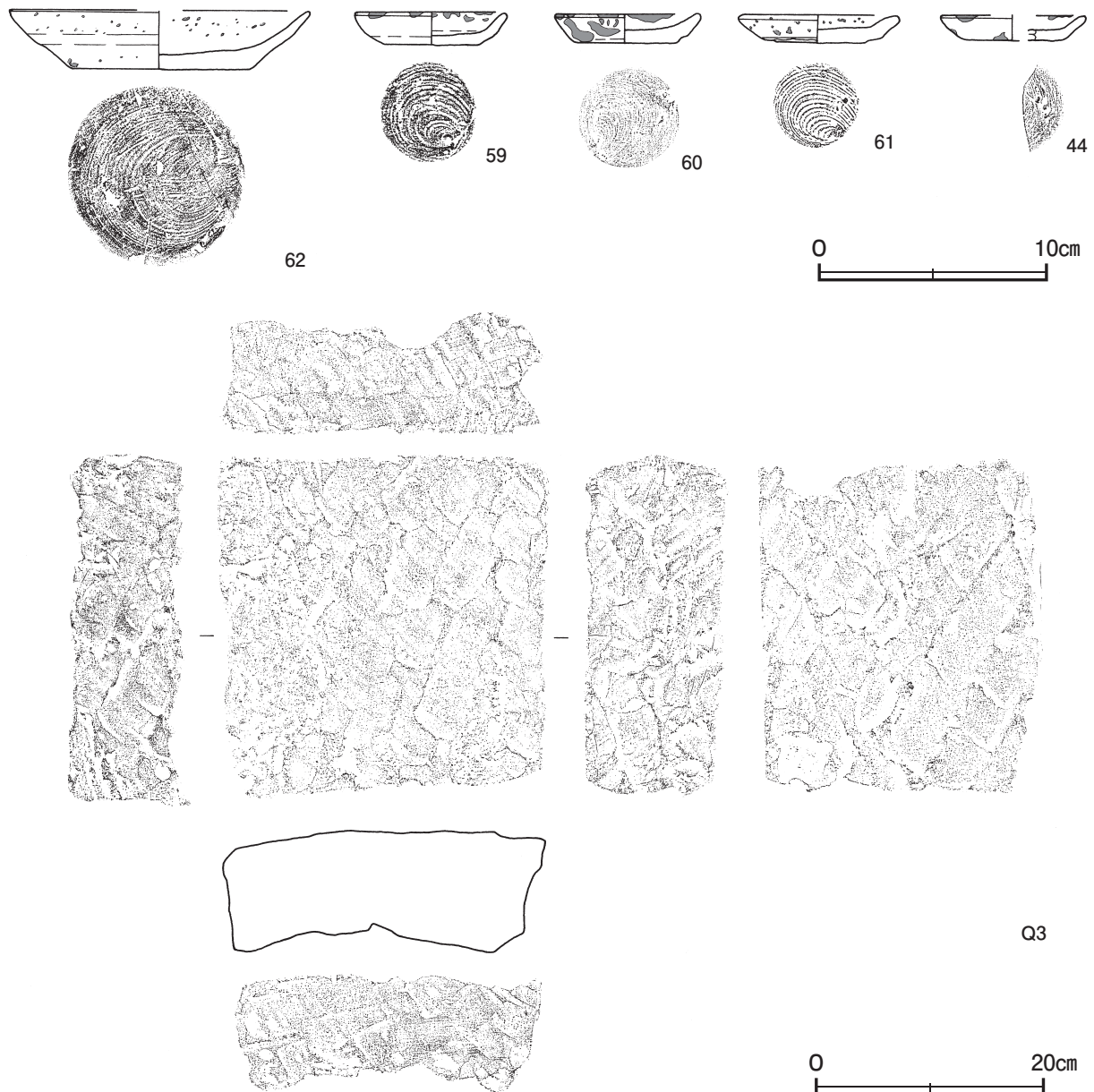
**覆土** 13層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第14～19層は掘方への埋土である。

**土層解説**

- |          |                       |          |                           |
|----------|-----------------------|----------|---------------------------|
| ① 明褐色    | ロームブロック多量, 白色粘土ブロック少量 | ⑪ 黒褐色    | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| ② 褐色     | ローム粒子多量               | ⑫ 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| ③ 暗褐色    | 焼土粒子・粘土粒子少量           | ⑬ 黒褐色    | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量      |
| ④ 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子微量          | ⑭ 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子微量               |
| ⑤ 灰褐色    | 焼土粒子・粘土粒子微量           | ⑮ 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量         |
| ⑥ 黒褐色    | 焼土粒子・粘土粒子微量           | ⑯ 褐色     | 焼土粒子・粘土粒子少量               |
| ⑦ 黒褐色    | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量      | ⑰ オリーブ褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量               |
| ⑧ 灰褐色    | 粘土粒子微量                | ⑱ 灰褐色    | 焼土粒子少量, 粘土ブロック微量          |
| ⑨ 褐色     | 粘土粒子少量, 大円礫微量         | ⑲ 黒色     | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量         |
| ⑩ にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量, 灰粒子微量         |          |                           |

**遺物出土状況** 陶器片1点(壺), 磁器片1点(碗), 土師質土器片5点(小皿4, 皿1)が出土している。また混入した須恵器片1点(蓋), 灰釉陶器片1点(瓶)が出土している。59・61・62は覆土下層, 44・60は覆土中層から出土している。工具痕が確認された石材はサンプルとし, 拓影図及び観察表に記載する。

**所見** 時期は, 確認面と出土遺物から, 17世紀中葉から18世紀代に比定できる。性格は不明である。



第43図 第2B号石組み遺構出土遺物実測図

第2B号石組遺構出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師質土器	小皿	[6.2]	1.1	[4.0]	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転系切り 口縁部・体部外面油煙付着	覆土中層	40%
59	土師質土器	小皿	6.5	1.5	4.2	石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転系切り 口縁部・体部内面油煙付着 見込みに若干の凹み 内面に同心円状のナデ	覆土下層	100% PL10
60	土師質土器	小皿	6.2	1.3	4.5	長石・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転系切り 口縁部・体部外・内面油煙付着	覆土中層	100% PL10
61	土師質土器	小皿	6.7	1.3	4.0	長石・石英・雲母	淡黄	普通	底部回転系切り 口縁部・体部外・内面油煙付着 内面に同心円状のナデ	覆土下層	90% PL10
62	土師質土器	皿	[13.2]	2.6	7.6	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	底部回転系切り 体部外・内面油煙付着	覆土下層	80% PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	石材	30.0	29.5	10.8	8.9	凝灰岩	幅4cm程の工具痕 側面はより密な工具痕	-	

②土坑

第22号土坑（第44図）

**位置** 調査区西部のI 2h9区，標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

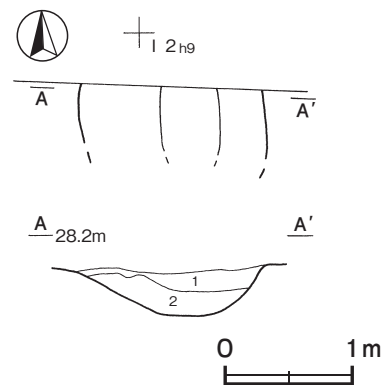
**規模と形状** 北部が調査区外に延び，南部が攪乱を受けているため，長径は1.48mで，短径は0.50mしか確認できなかった。深さは39cmで，底面は皿状であり，壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。礫を含み，ブロック状の堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子・細礫少量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・細礫微量

**所見** 時期は，同じ面の遺構から17世中葉から18世紀代と推定できるが，時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第44図 第22号土坑実測図

第24号土坑（第45・46図）

**位置** 調査区西部のI 2h9区，標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

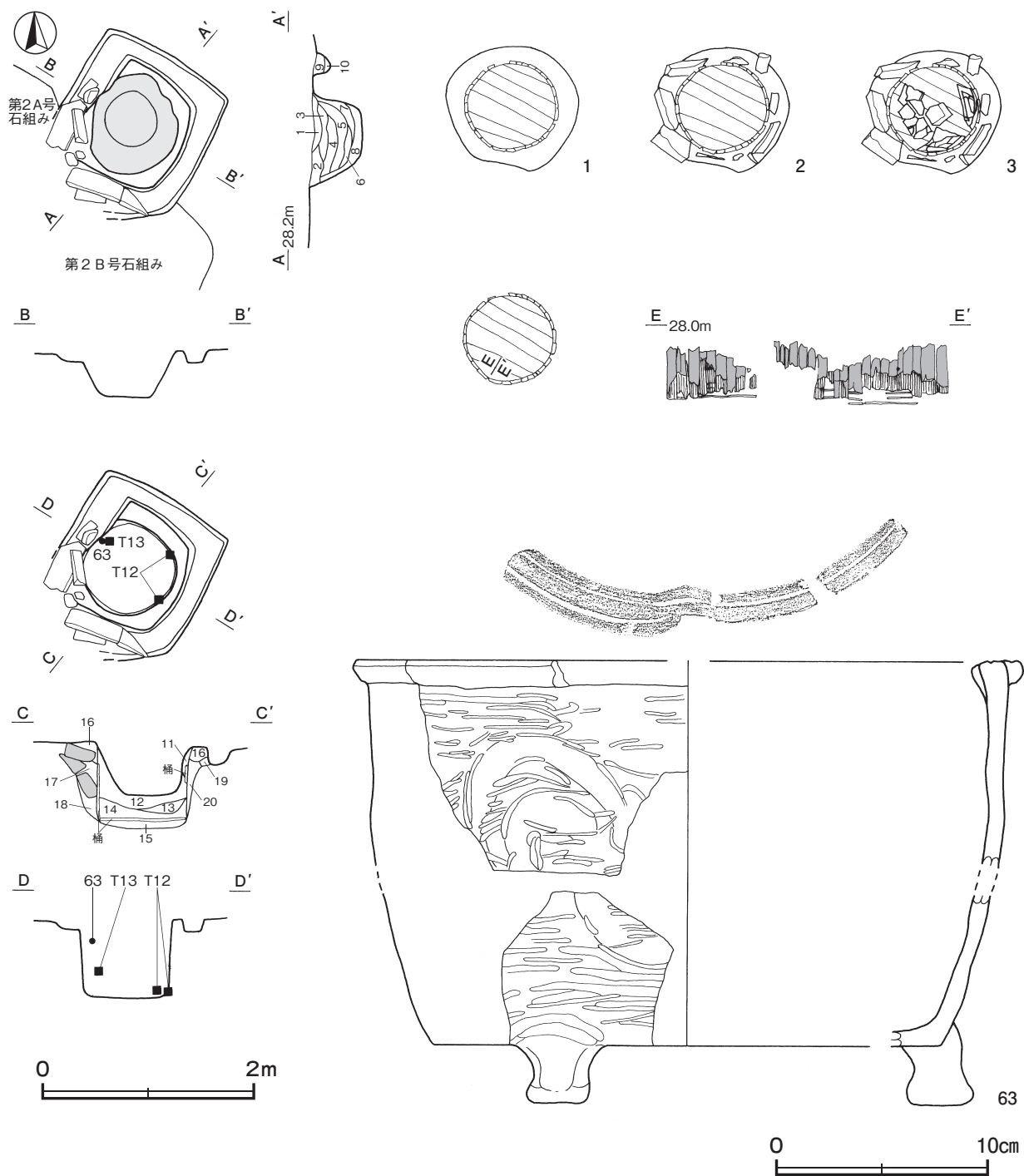
**重複関係** 第2A・2B号石組み遺構を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸1.56m，短軸1.42mで，長軸方向がN-30°-Eの方形である。底面は平坦で，深さは44cmである。上幅20～30cmの溝が方形に巡り，その中央部が円形に掘り下げられ，焼土粒子や炭化粒子が多く確認されることから，燃焼部として使用されていたと考えられる。燃焼部の下には桶が埋設されている。桶と掘方の間には凝灰岩が入れ込まれており，桶の固定，あるいは耐火が目的と想定される。また，板塀瓦が，桶内で確認され，耐火性を強める役割を果たしていると考えられる。桶の底面までの深さは，確認面から68cmである。

**覆土** 10層に分層できる。第1～6層，第9・10層は，締まりが強いことから，整地の際に埋め戻されたと推定される。第7・8層は，焼土粒子や炭化粒子を含む，本跡使用時の自然堆積層である。第11～14層は，燃焼部を構築するための埋土である。第12層は，焼土粒子・炭化粒子を顕著に含んでいることから，本層の上面が燃焼部として用いられていたと考えられる。第15～20層は，掘方への埋土である。

土層解説

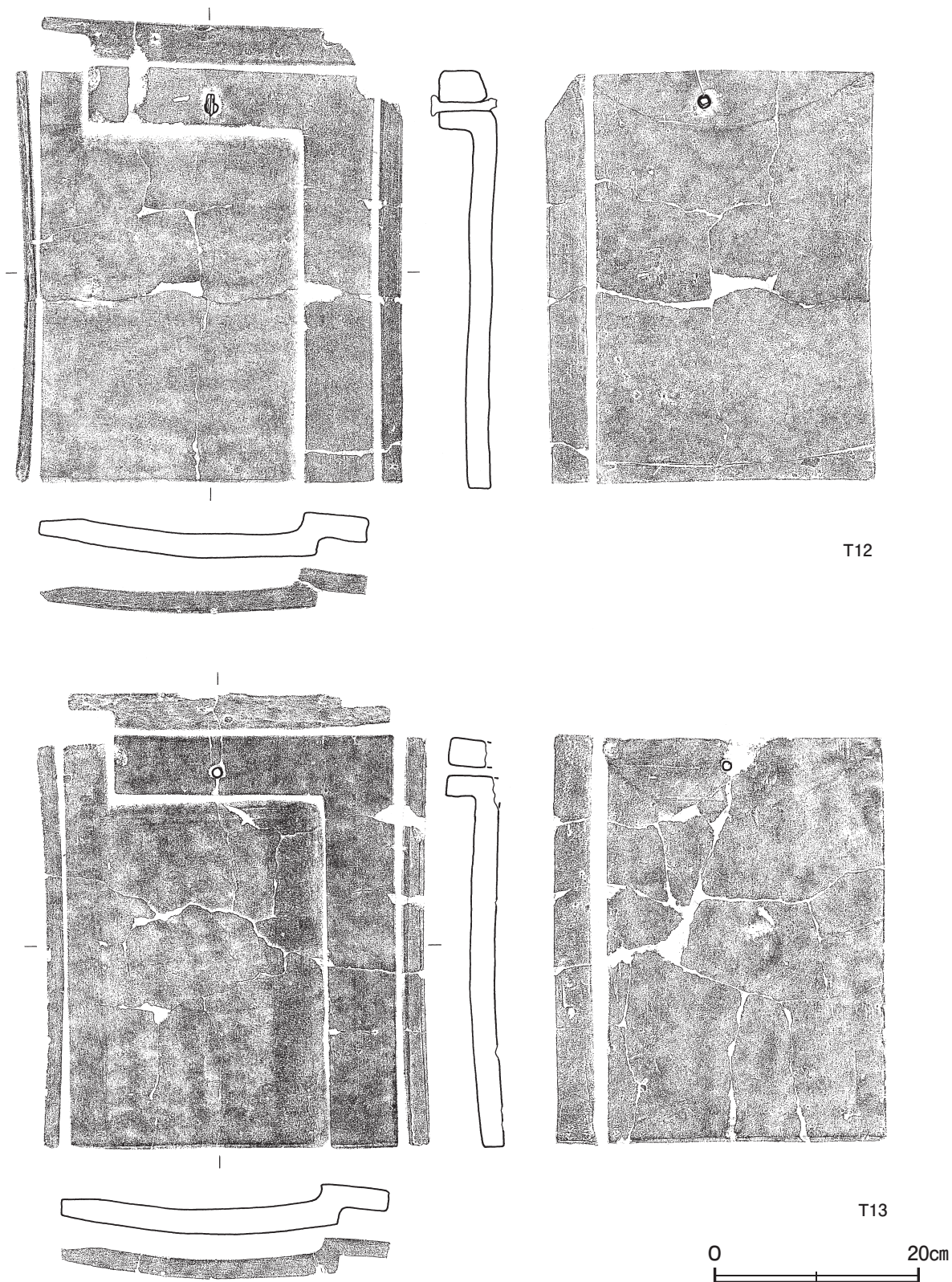
- |          |                                 |           |                           |
|----------|---------------------------------|-----------|---------------------------|
| 1 褐色     | ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・細礫微量    | 10 暗褐色    | 炭化物微量                     |
| 2 にぶい赤褐色 | 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子・細礫微量            | 11 明赤褐色   | 焼土ブロック多量, 炭化粒子中量, ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色    | 粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量           | 12 赤褐色    | 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子少量   |
| 4 黒褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 13 褐色     | 大円礫・焼土粒子微量                |
| 5 暗褐色    | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量            | 14 暗褐色    | ローム粒子微量                   |
| 6 褐色     | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量            | 15 暗褐色    | 大円礫・焼土粒子・炭化粒子少量           |
| 7 極暗褐色   | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量          | 16 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・凝灰岩片微量    |
| 8 黒褐色    | 焼土粒子中量, 炭化物少量, ローム粒子微量          | 17 暗赤色    | 焼土粒子少量                    |
| 9 黒褐色    | 焼土粒子・粘土粒子微量                     | 18 オリーブ黒色 | 焼土粒子少量                    |
|          |                                 | 19 暗褐色    | 大円礫・焼土粒子・粘土粒子微量           |
|          |                                 | 20 にぶい黄褐色 | 粘土粒子少量, 炭化物微量             |



第45図 第24号土坑・出土遺物実測図



遺物出土状況 陶器片3点(碗2, 壺1), 磁器片2点(碗), 土師質土器片5点(小皿3, 火鉢1, 鉢1), 瓦質土器片2点(火鉢, 鉢), 瓦片36点(丸瓦10, 平瓦20, 板塀瓦5, 不明1), 鉄製品1点(釘)が出土している。63は掘方の埋土上層, T12・T13は掘方の埋土下層から出土している。



第46図 第24号土坑出土遺物実測図

所見 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代と推定できる。掘方に充填されている凝灰岩は、石組み遺構の石材から転用したものと推定でき、性格は、何らかの火に関わる遺構であると考えられるが、不明である。

第24号土坑出土遺物観察表(第45・46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
63	土師質土器	火鉢	[31.2]	[21.0]	[24.0]	長石・石英・礫	橙	普通	体部外面ナデで施文後、ヘラ磨き 口縁部外面隆帯貼付 口縁部を押圧で部分的に湾曲 口唇部に2条の沈線 脚部貼付後、接合部をナデ	掘方埋土上層	30% PL11

番号	種別	器種	左長	右長	頭長	尻長	重複部(上)	重複部(下)	高さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T12	瓦	板塀瓦	41.2	(38.1)	(30.7)	33.2	6.4	4.3	4.6	長石・石英・赤色粒子・針状鉱物	橙	普通	釘で固定するために穿孔	掘方埋土下層	釘残存 PL15
T13	瓦	板塀瓦	40.0	40.7	32.2	32.2	6.7	4.5	3.9	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	橙	普通	釘で固定するために穿孔	掘方埋土下層	PL15

第36号土坑(第47～50図)

位置 調査区東部のI 3i2区、標高27.9mの台地上平坦部に位置している。

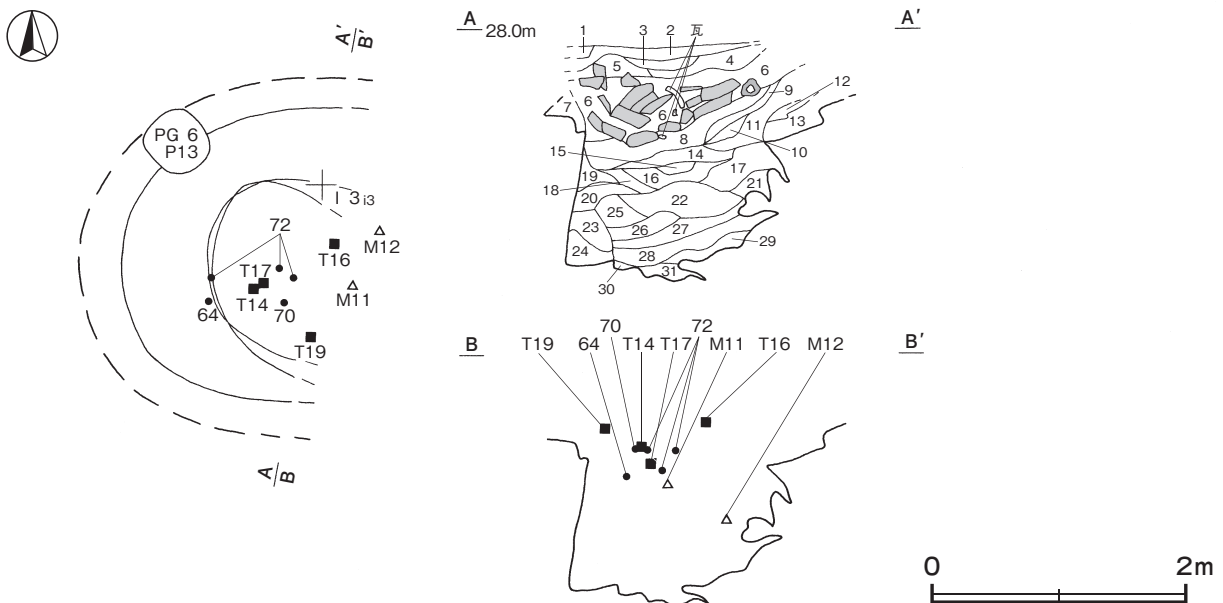
重複関係 第2号井戸跡を掘り込み、第6号ピット群P13・P14、第8号ピット群P2・P6に掘り込まれている。

規模と形状 東部が、調査区外に延びているため、長径2.39mで、短径は1.54mしか確認できなかったが、円形と推定できる。深さは182cmで、南壁は内傾して立ち上がっている。北壁は波状を呈して立ち上がっており、本跡の構築時に、重複している第2号井戸跡の覆土が崩れたためと推定される。

覆土 31層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- |  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 1 褐色 円礫少量、炭化物・鹿沼パミス微量                  | 9 赤褐色 焼土粒子多量                     |
| 2 暗褐色 鹿沼パミス中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量        | 10 赤褐色 焼土粒子少量、粘土粒子微量             |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量              | 11 赤褐色 焼土粒子少量、円礫微量               |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量                | 12 黄褐色 粘土粒子・砂粒・細礫少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 褐色 灰中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量           | 13 にぶい黄褐色 粘土粒子多量                 |
| 6 灰褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量                 | 14 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 にぶい黄褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・細礫少量、ローム粒子微量 | 15 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量     |
| 8 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量                   | 16 暗褐色 鹿沼パミス・細礫少量、ローム粒子微量        |
|  | 17 にぶい黄褐色 細礫中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量    |

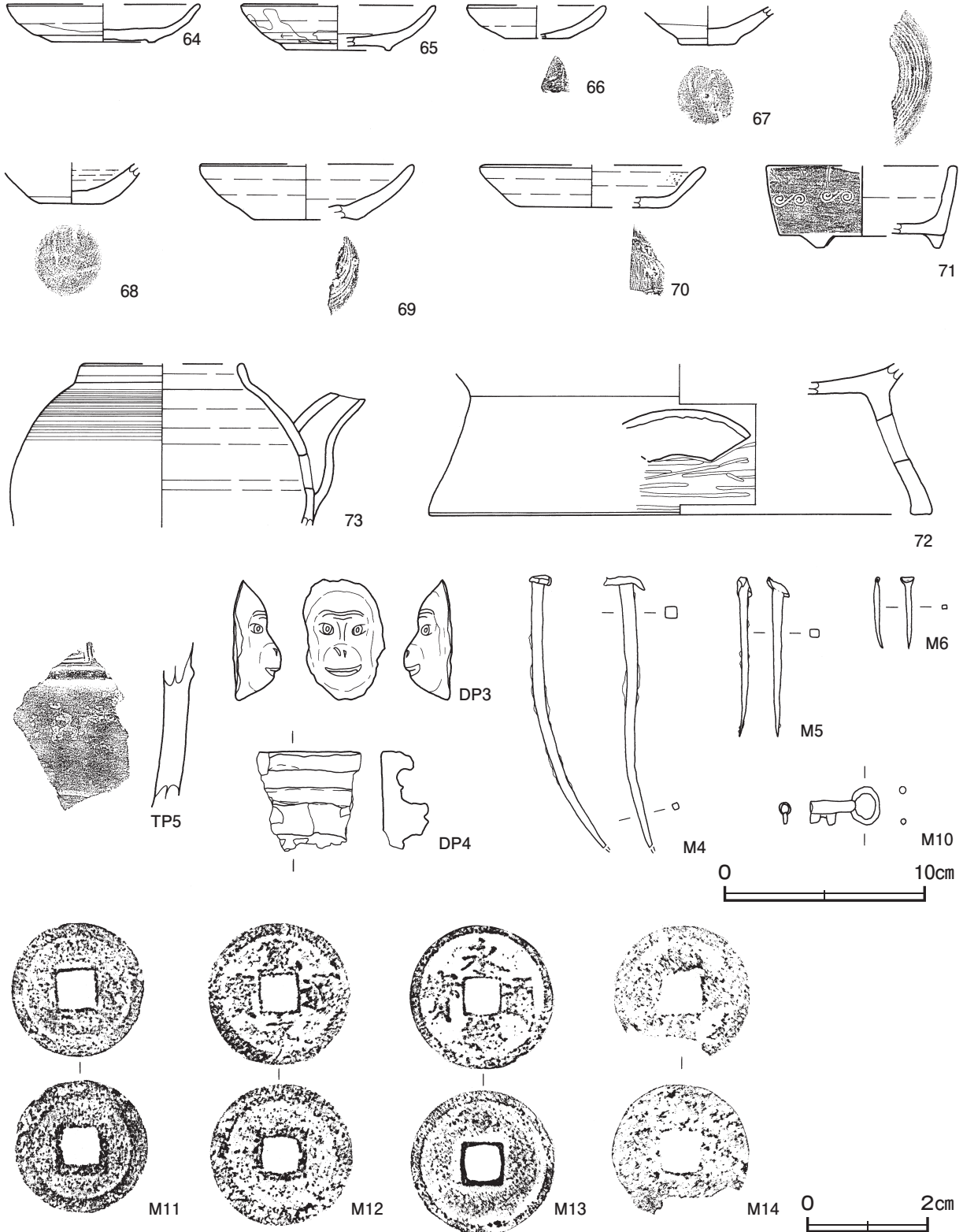


第47図 第36号土坑実測図



- 18 褐色 粘土粒子・細礫少量，炭化粒子微量
- 19 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
- 20 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
- 21 褐色 粘土ブロック中量，砂粒・細礫少量，ローム粒子微量
- 22 にぶい黄褐色 粘土粒子・細礫少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 23 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 24 褐色 粘土ブロック中量，細礫微量

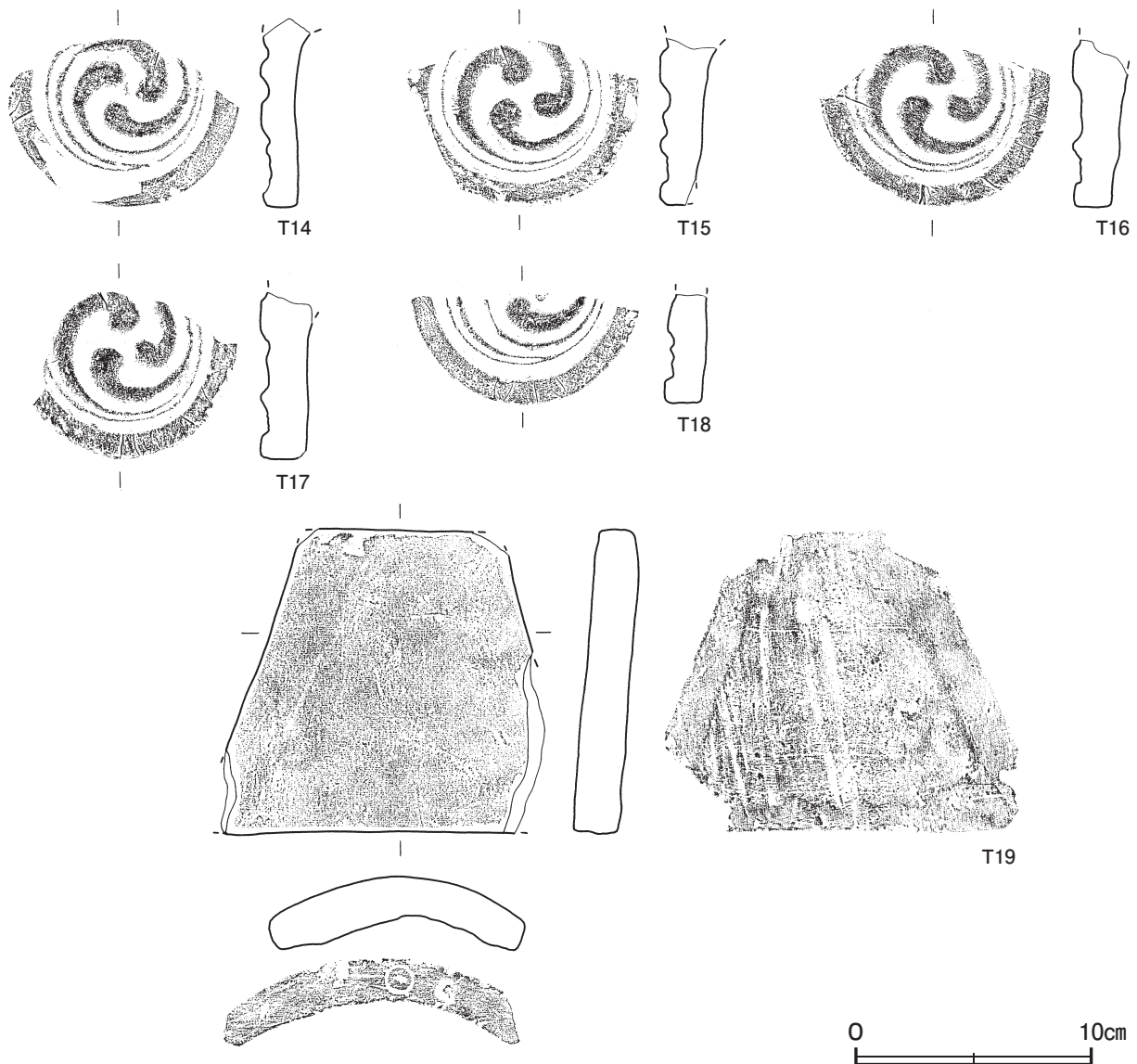
- 25 褐色 粘土粒子少量，ロームブロック・炭化物・細礫微量
- 26 黒褐色 焼土粒子少量
- 27 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子・円礫微量
- 28 黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・細礫少量，炭化粒子微量
- 29 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，炭化粒子微量
- 30 にぶい黄色 粘土粒子中量，ローム粒子微量
- 31 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，細礫微量



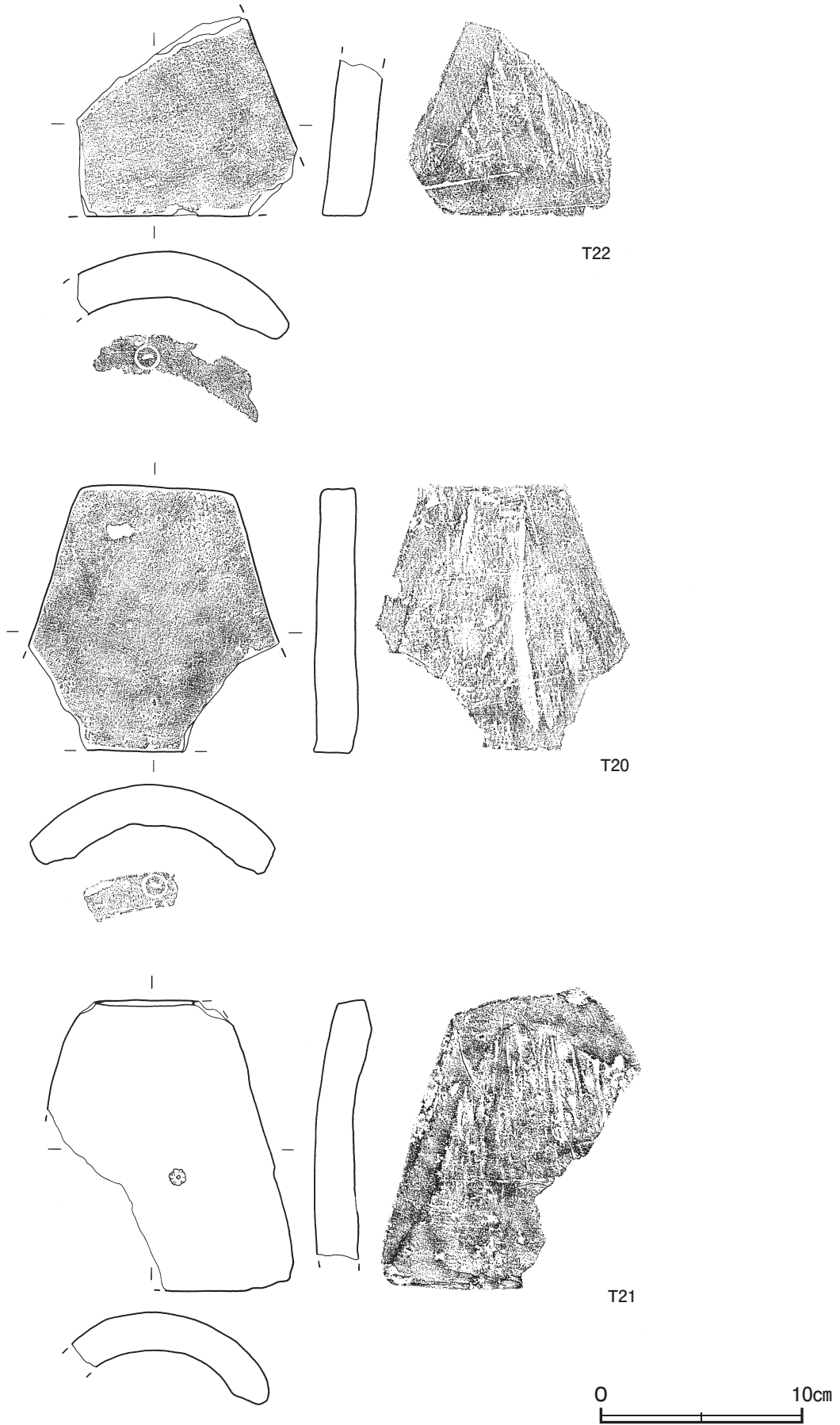
第48図 第36号土坑出土遺物実測図(1)

**遺物出土状況** 陶器片 10 点 (碗 1, 丸皿 2, 鉢 1, 甕 5, 土瓶 1), 磁器片 1 点 (碗), 土師質土器片 56 点 (小皿 22, 皿 4, 火鉢 3, 植木鉢 2, 鉢 25), 瓦質土器片 5 点 (碗, 火鉢, 播鉢, 植木鉢, 香炉), 瓦片 492 点 (丸瓦 69, 平瓦 337, 板塀瓦 9, 輪違瓦 44, 棟込瓦 22, 雁振瓦 2, 不明 9), 土製品 7 (泥面子 1, 不明 6), 鉄製品 4 点 (釘 3, 鍵 1), 銭貨 5 点 (寛永通寶 2, 永樂通寶 1, 不明 2), 銅製品 (環状銅製品), 鉄滓 (6438.4g), 鉄片 (2140g) が出土している。68・M13 は覆土中・下層, 64・70・72・M11・M12・T14・T17 は覆土中層, T16・T19 は覆土上層から出土している。65～67・69・71・73・TP 5・DP 3・DP 4・M 4～M 6・M10・M14・M15・T15・T18・T20～T22 は覆土中から出土している。なお M15 は破損が著しいため, 観察表の記載に止める。

**所見** 時期は, 同じ面の遺構や出土遺物から, 17 世紀中葉から 18 世紀代と推定できる。第 6 次面で確認された第 2 号井戸跡を掘り込んで構築されている。性格は, 切石の凝灰岩や, 焼土・炭化材, 以前の生活面に帰属する 16 世紀後葉の遺物が確認されることから, 焼却の伴う廃棄土坑である。当次面は, 徳川期の二の丸御殿跡であり, 御殿内に, 本跡が開口していたことは想定しにくい。改修を行う際に, 本跡を利用し, 整地が完了した時には, 本跡上も整地されていたと想定される。



第 49 図 第 36 号土坑出土遺物実測図 (2)



第 50 图 第 36 号土坑出土遺物実測図 (3)

第 36 号土坑遺構出土遺物観察表（第 48～50 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	陶器	丸皿	[9.6]	1.9	5.2	長石・石英・礫鉄釉	暗赤褐にぶい赤褐	良好	体部下端露胎	覆土中層	50%瀬戸・美濃 PL16
65	陶器	丸皿	[9.6]	2.3	[5.2]	長石・石英・礫鉄釉	にぶい赤褐	良好	体部下端露胎	覆土中	40%瀬戸・美濃 PL16
66	土師質土器	小皿	[6.8]	1.6	[3.2]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ロクロナデ	覆土中	30%
67	土師質土器	小皿	-	(1.9)	2.8	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り 底部が約3mm突出	覆土中	50% PL 9
68	土師質土器	小皿	-	(2.0)	3.2	長石・石英・雲母・針状鉱物	橙	普通	底部回転糸切り 内面ロクロ目	覆土中・下層	30%
69	土師質土器	皿	[10.6]	3.8	[5.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	明赤褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	30%
70	土師質土器	皿	[11.0]	2.1	[7.4]	長石・石英・赤色粒子	黄灰	普通	底部回転糸切り 内面油煙付着 二次焼成	覆土中層	20%
71	瓦質土器	香炉	[9.6]	4.1	[8.2]	長石・石英	にぶい褐	普通	脚部貼付 体部外面、底部周縁、口唇部へラ磨き 体部外面スタンプによる唐草文カ 底部内面同心円に7条の沈線	覆土中	30% PL11
72	土師質土器	火鉢	-	(7.5)	[25.2]	長石・石英・雲母・礫・赤色粒子	橙	普通	体部欠失 脚部外面へラ磨き 脚部扇形の透かし	覆土中層	10% PL11
73	陶器	土瓶	[8.0]	(8.0)	-	長石・石英・白色粒子	灰褐	良好	一単位6条の櫛状工具による横位の沈線	覆土中	10% PL17

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 5	瓦質土器	火鉢	長石・石英	黒	外面隆帯貼付 外面スタンプによる雷文	覆土中	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	泥面子	6.0	4.1	2.4	36.3	長石・石英・赤色粒子	裏面ナデ 猿カ	覆土中	PL13
DP 4	不明	(5.0)	(5.0)	(2.4)	(32.6)	長石・石英	2条の篠竹が入っていた痕跡 すき混入 土壁片カ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	釘	(13.5)	2.1	0.6	(26.2)	鉄	断面方形 頭部折り返し	覆土中	PL13
M 5	釘	8.0	1.1	0.4	7.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	覆土中	PL13
M 6	釘	3.6	0.7	0.2	1.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	覆土中	PL13
M 10	鍵	3.5	1.9	0.6	4.5	鉄	差し込み部中空	覆土中	PL13

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 11	寛永通寶	2.2	0.6	0.1	2.5	銅	1626	日本銭 無背銭	覆土中層	PL13
M 12	寛永通寶	2.4	0.6	0.14	3.0	銅	1626	日本銭 無背銭	覆土中層	PL13
M 13	永樂通寶	2.4	0.6	0.18	3.4	銅	1408	明銭 無背銭	覆土中・下層	PL13
M 14	不明	2.3	0.6	0.13	(1.3)	銅	-	-	覆土中	PL13
M 15	不明	[2.0]	[0.5]	0.16	(0.8)	銅	-	-	覆土中	

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T14	瓦	棟込瓦	(2.1)	-	9.7	7.4	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	巴文右	覆土中層	PL14
T15	瓦	棟込瓦	(2.4)	-	9.3	7.4	-	-	-	-	-	-	灰	長石・赤色粒子	普通	巴文右	覆土中	PL14	
T16	瓦	棟込瓦	(2.5)	-	9.4	7.3	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・礫	普通	巴文右	覆土上層	PL14	
T17	瓦	棟込瓦	(2.2)	-	(7.0)	(5.9)	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英	普通	巴文右	覆土中層	PL14	
T18	瓦	棟込瓦	(1.9)	-	(9.4)	(7.4)	-	-	-	-	-	-	灰	石英・黒色粒子	普通	巴文右	覆土中	PL14	

番号	種別	器種	全長	全幅	厚さ	全高	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T19	瓦	輪違瓦	13.0	(13.9)	2.0	4.8	長石	黒褐	普通	内面布目痕と3条の縄目痕 ⊖ の刻印	覆土上層	PL14
T20	瓦	輪違瓦	13.2	(12.5)	2.1	4.6	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	内面布目痕と2条の縄目痕 ⊖ の刻印	覆土中	PL14
T21	瓦	輪違瓦	14.5	(12.1)	2.1	(6.1)	長石・石英・礫	黄灰	普通	内面布目痕 外面に花文の刻印	覆土中	
T22	瓦	輪違瓦	(9.9)	(10.4)	2.3	(5.1)	長石・石英・赤色粒子	にぶい横橙	普通	内面に8条の縄目痕 ⊖ の刻印	覆土中	PL14

第 37 号土坑（第 51 図）

位置 調査区中央部の I 2 h0 区、標高 27.9 m の台地上平坦部に位置している。



**規模と形状** 南西部が攪乱を受けているため、長軸は1.60mで、短軸は1.22mしか確認できなかったが、長軸方向がN-55°-Eの隅丸方形と推定できる。深さは24cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。また部分的に粘土が確認できた。

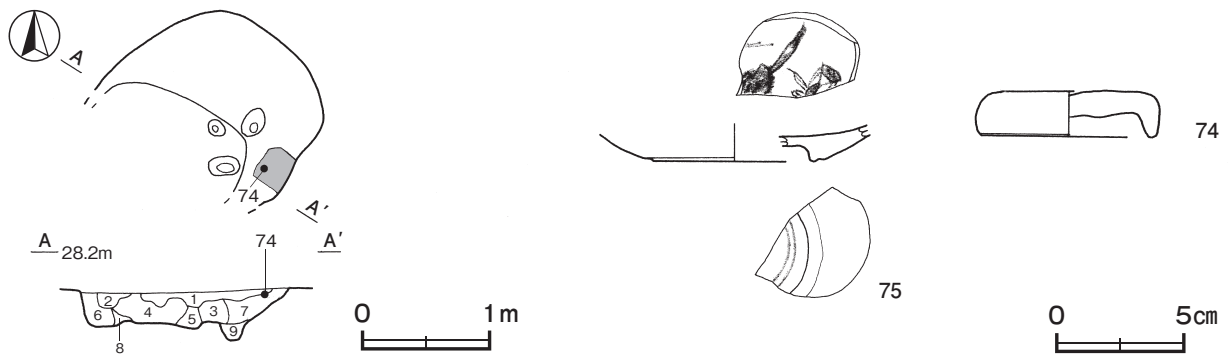
**覆土** 9層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                              |       |                          |
|-------|------------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量          | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量      |
| 2 褐色  | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量          | 7 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量          | 8 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量      |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量     | 9 黒褐色 | ローム粒子少量                  |
| 5 黒褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量 |       |                          |

**遺物出土状況** 磁器片6点（碗4，小鉢2），土師質土器片1点（焼塩壺蓋）が出土している。74は覆土上層，75は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代に比定できる。



第51図 第37号土坑・出土遺物実測図

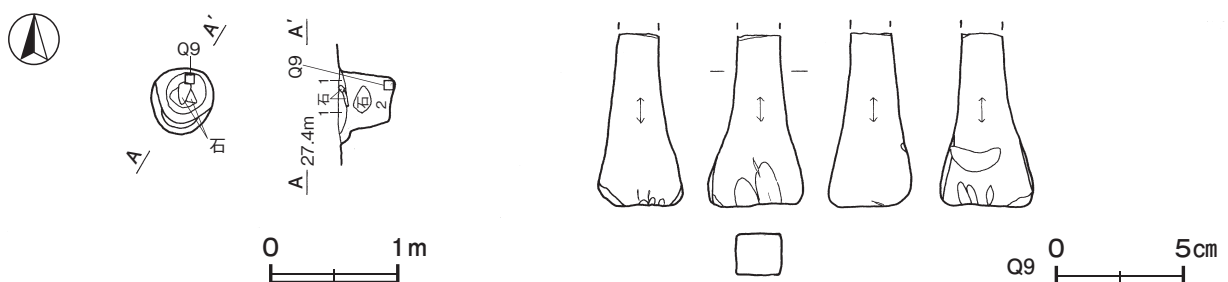
第37号土坑出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	土師質土器	焼塩壺蓋	6.7	1.8	-	長石・石英・礫	褐灰 におい黄橙	普通	内面ナデ 内面が黒色に燻されている	覆土上層	80% PL11
75	磁器	小鉢	-	(1.4)	[6.3]	緻密 透明釉	灰白	良好	見込みに花文	覆土中	5%肥前カ

**第118号土坑（第52図）**

**位置** 調査区中央部のI3h1区、標高27.2mの台地上平坦部に位置している。

**規模と形状** 径0.50mの円形である。深さは45cmで、底面は平坦であり壁は外傾して立ち上がっている。覆土中に20cm程の礫が確認できた。



第52図 第118号土坑・出土遺物実測図

**覆土** 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量                      2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 瓦片2点(棧瓦), 銭貨1点(不明), 石製品1点(砥石)が出土している。Q9は覆土下層, M16は覆土中から出土している。M16は, 破損が著しいため観察表の記載に止める。

**所見** 掘り込み面は不明であるが, 出土遺物から近世に比定できる。

第118号土坑出土遺物観察表(第52図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	砥石	(6.8)	3.8	3.3	(98.9)	凝灰岩	砥面4面 端部に鋭利なものを研いだ凹み	覆土下層	PL12

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初铸件	特徴	出土位置	備考
M16	不明	4.6	0.7	0.1	(1.72)	銅	-	-	覆土中	計測のみ

第163号土坑(第53図)

**位置** 調査区南西部のI2j8区, 標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第161号土坑, 第5号ピット群P25・P26, 第24号不明遺構を掘り込み, 第1A・1B号用排水路, 第164号土坑, 第6号ピット群P6・P7に掘り込まれている。

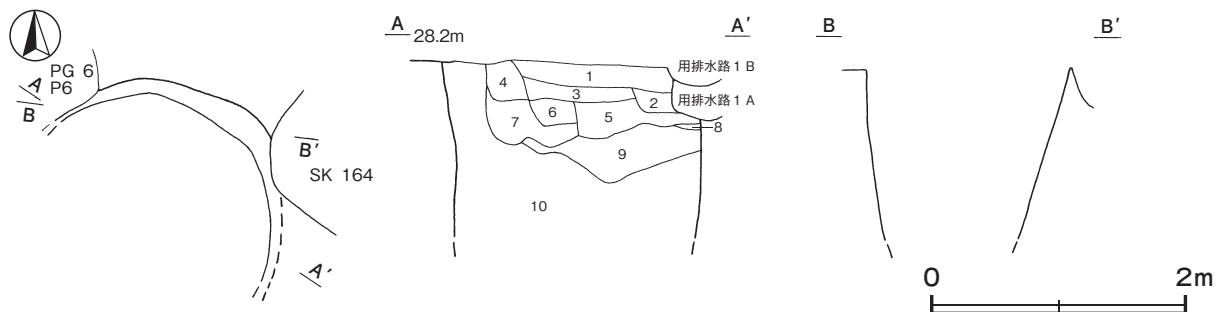
**規模と形状** 南部及び西部が調査区域外に延びているため, 長軸は2.06mで, 短軸は1.00mしか確認できなかったが, 円形と推定できる。調査区際に位置し, 調査区壁の崩落の危険性があるため, 約140cm下げた段階で, 下部の調査を断念した。

**覆土** 10層に分層できる。砂粒が主体であり, ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量                      7 オリーブ黒色 焼土粒子・細礫微量  
 2 オリーブ黒色 ロームブロック・炭化粒子微量                      8 オリーブ黒色 ローム粒子少量, 細礫微量  
 3 褐色 瓦片少量, 炭化物微量                      9 暗オリーブ色 砂粒少量, ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子微量  
 4 灰オリーブ色 粘土ブロック・中円礫少量  
 5 褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子微量                      10 暗オリーブ色 砂粒多量, 細礫少量  
 6 灰オリーブ色 細礫少量, 焼土粒子微量

**所見** 時期は, 同じ面の遺構から17世紀代中葉から18世紀代と推定できるが, 遺物が伴わないため, 明確ではない。



第53図 第163号土坑実測図

第164号土坑(第54図)

**位置** 調査区南部のI2j9区, 標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第163号土坑, 第5号ピット群P24を掘り込み, 第1A・1B号用排水路に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.18m, 短軸1.54mで, 長軸方向がN-34°-Eの長方形である。深さは94cmで, 外傾し



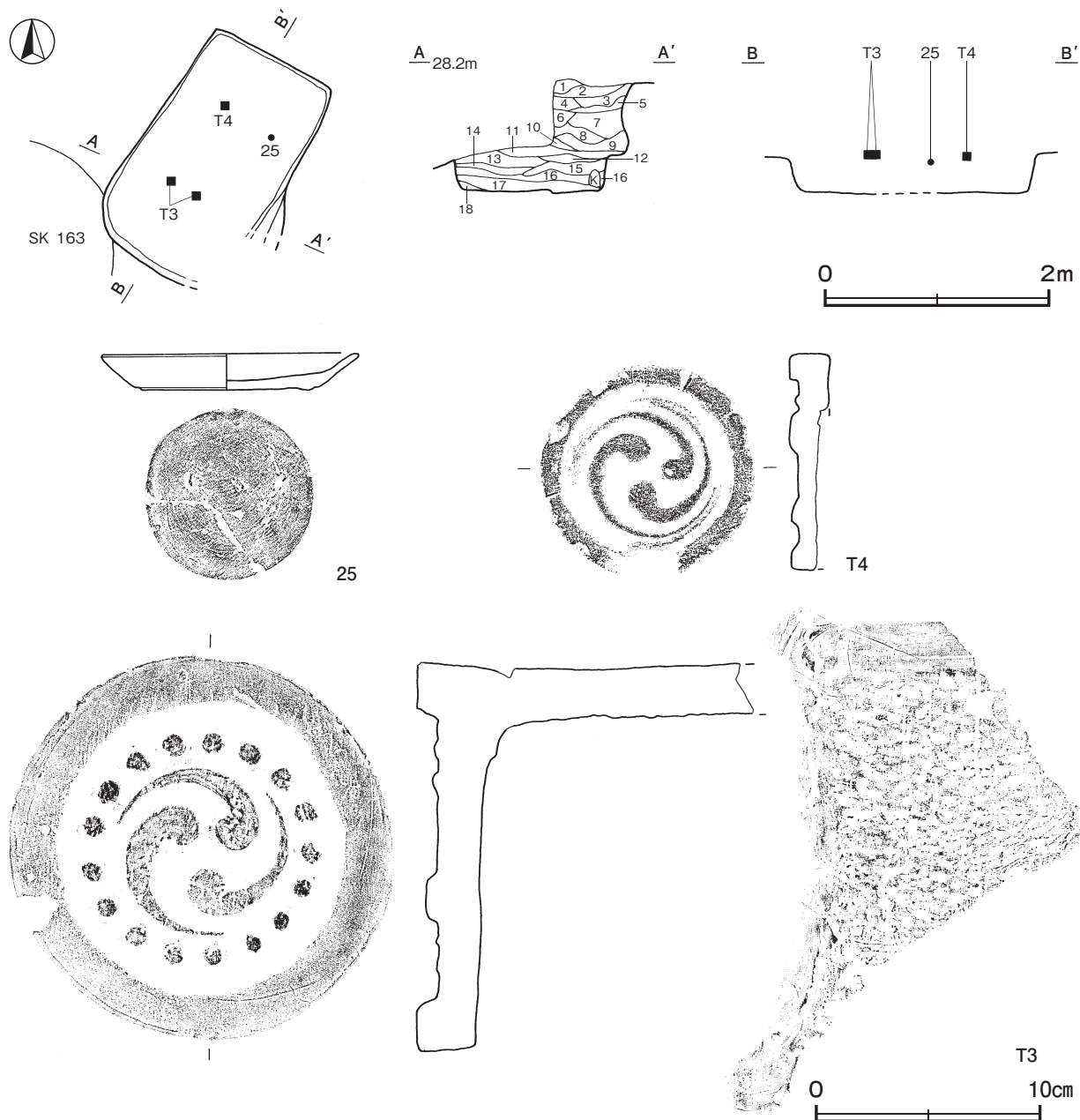
て立ち上がっている。底面は平坦である。

**覆土** 18層に分層できる。各層にローム粒子を含み、締まりが強いことから、整地を行う際に埋め戻されたと推定される。

**土層解説**

- |          |                      |           |                        |
|----------|----------------------|-----------|------------------------|
| 1 暗オリーブ色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量      | 10 灰オリーブ色 | 焼土粒子少量                 |
| 2 暗オリーブ色 | 炭化物・細礫微量             | 11 暗褐色    | 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 オリーブ色  | ローム粒子多量, 炭化粒子・細礫微量   | 12 暗褐色    | 赤色粒子少量, 焼土粒子微量         |
| 4 オリーブ色  | 焼土粒子・炭化粒子微量          | 13 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子微量            |
| 5 オリーブ黒色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量       | 14 灰褐色    | 砂粒少量                   |
| 6 オリーブ黒色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 灰褐色    | 炭化粒子少量                 |
| 7 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量    | 16 褐色     | 焼土粒子少量                 |
| 8 褐色     | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量    | 17 灰オリーブ色 | 炭化粒子・粘土粒子微量            |
| 9 暗褐色    | 炭化物・焼土粒子少量, 細礫微量     | 18 オリーブ黒色 | 焼土粒子微量                 |

**遺物出土状況** 陶器片1点(碗), 土師質土器片1点(皿), 瓦質土器片1点(鉢), 瓦片18点(丸瓦4, 平瓦13, 棟込瓦1), 鉄製品1点(釘), 銅製品1点(鋏)が出土している。また, 混入した土師器片3点(坏1, 甕2),



第54図 第164号土坑・出土遺物実測図

灰釉陶器片1点(碗), 鉄滓1点(73.6g)が出土している。25・T3・T4は覆土下層から出土している。

所見 時期は, 同じ面の遺構と出土遺物から, 18世紀代に比定できる。

第164号土坑出土遺物観察表(第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土師質土器	皿	11.3	1.7	7.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後, ナデ	覆土下層	80% PL9

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)						
T3	瓦	軒丸瓦	(15.0)	17.3	17.3	13.5	0.9~1.0	17	-	-	-	-	灰	長石・石英・赤色粒子	普通	巴文右	覆土下層	PL14
T4	瓦	棟込瓦	(2.0)	9.6	9.6	7.3	-	-	-	-	-	-	黄灰	長石・石英・赤色粒子	普通	巴文右	覆土下層	PL14

③ピット群

第6号ピット群(第55・56図)

位置 I2h9区~I3h3区, 標高28.1mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第36・163号土坑を掘り込み, 第1号石敷き遺構, 第4号柱穴列P2~P5, 第5号柱穴列P2, 第7号ピット群P7に掘り込まれている。

規模と形状 南北10.5m, 東西25.5mの範囲に, 15か所のピットを確認した。

ピット 15か所。長径39~132cm, 短径33~76cmの円形・楕円形・不整楕円形で, 深さは4~84cmである。P9・P12・P13では礫を確認した。

ピット土層解説(各ピット共通)

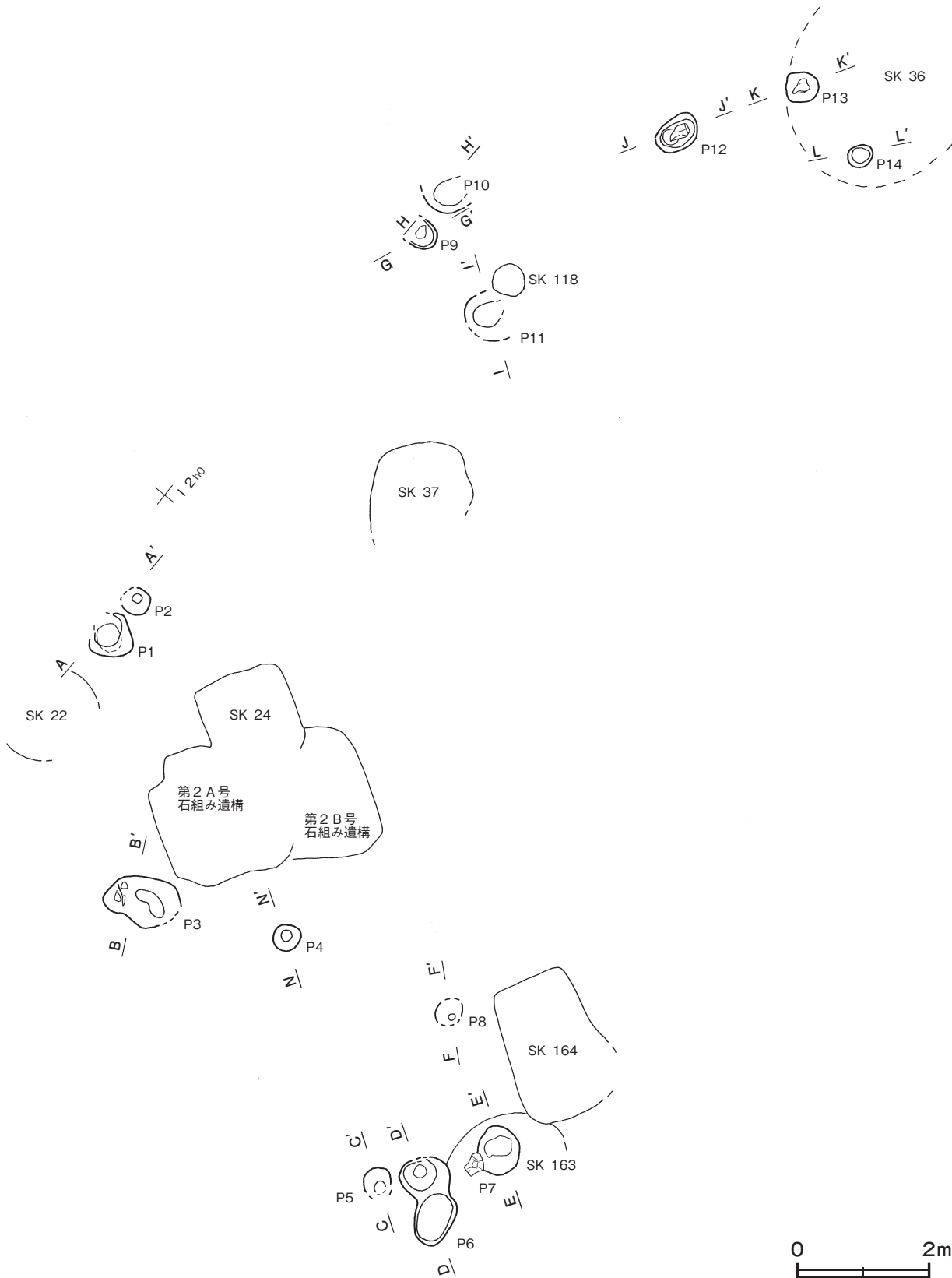
1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量	19 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子・細礫微量
2 褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量	20 褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・細礫微量
3 黒褐色	細礫少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	21 暗褐色	ローム粒子少量, 中円礫微量
4 極暗褐色	ローム粒子少量, 大円礫・焼土粒子・炭化粒子微量	22 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	細礫多量, 焼土粒子・炭化粒子微量	23 褐色	焼土ブロック・大円礫少量
6 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	24 灰褐色	焼土粒子微量
7 明褐色	中円礫中量, ローム粒子少量	25 灰褐色	大円礫・焼土ブロック・凝灰岩片微量
8 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	26 褐色	ローム粒子多量
9 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	27 暗褐色	炭化粒子少量, 焼土粒子微量
10 黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	28 にぶい黄褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
11 極暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	29 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
12 黒褐色	細礫中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	30 褐色	焼土ブロック少量, 炭化物微量
13 灰褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	31 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, 大円礫微量
14 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量	32 褐色	中円礫多量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
15 褐色	細礫中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量	33 暗褐色	中円礫少量, 炭化物・焼土粒子微量
16 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	34 にぶい黄褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 粘土ブロック・細礫微量
17 黒褐色	炭化粒子中量, 焼土粒子微量	35 褐色	ローム粒子中量, 細礫微量
18 黒褐色	炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・細礫微量		

遺物出土状況 陶器片4点(鉢1, 蓋1, 甕2), 磁器片11点(碗6, 鉢5), 土師質土器片13点(小皿7, 火鉢2, 鉢1, 甕2, 壺1), 瓦質土器片2点(火鉢, 鉢), 瓦片68点(丸瓦24, 平瓦20, 棧瓦2, 板塀瓦13, 不明9), 鉄製品1点(釘)が出土している。また, 混入した鉄滓1点(165g)が出土している。39はP6から, 40はP9からそれぞれ出土している。

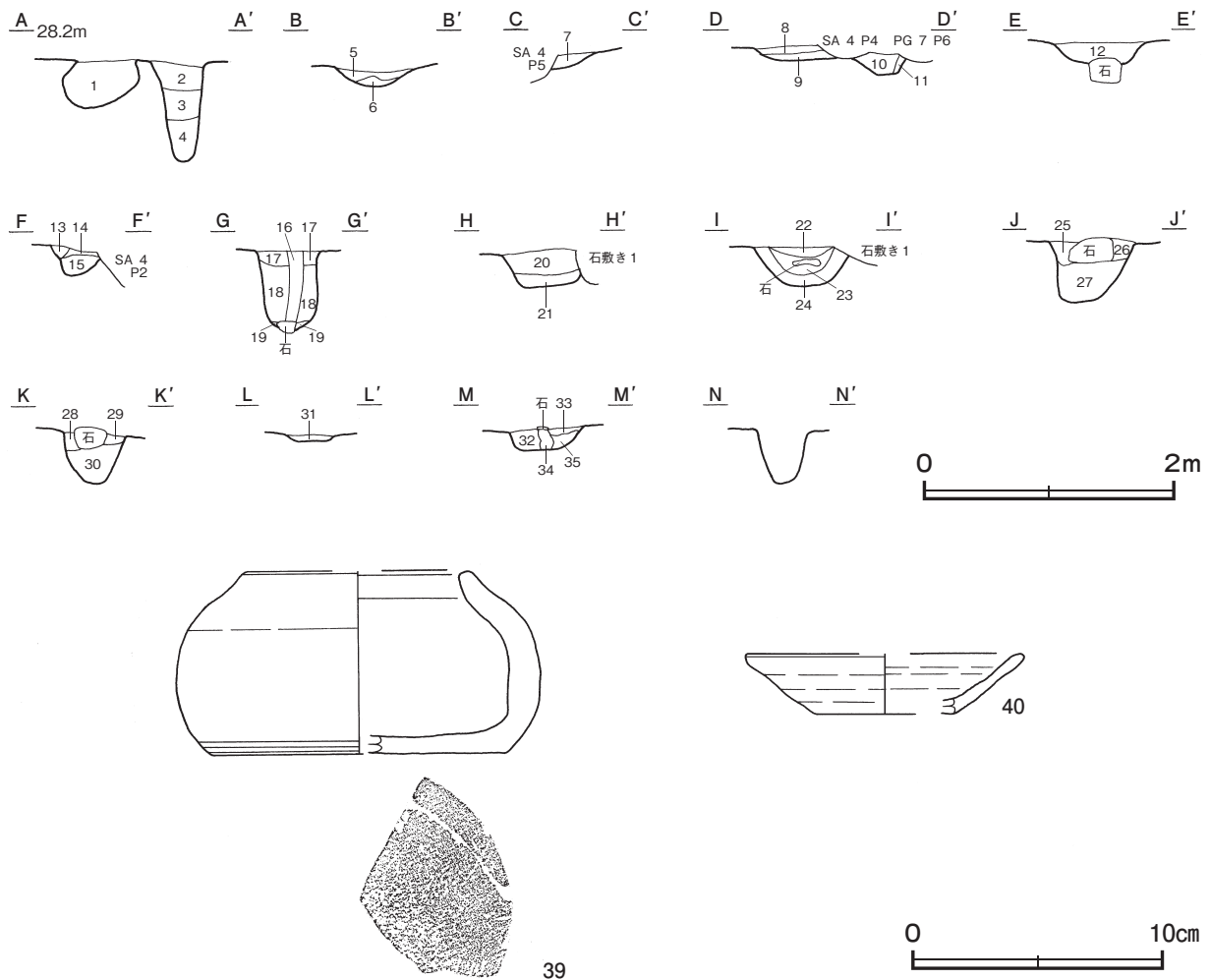
所見 時期は, 同じ面の遺構と出土遺物から, 17世紀中葉から18世紀代と推定できるが, 明確でない。

第6号ピット群出土遺物観察表(第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
39	土師質土器	壺	[9.0]	7.3	[11.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面底部に同心円のロクロ目	P6(SX15)	30%
40	土師質土器	小皿	[11.0]	2.4	[5.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロ成形	P9(SK30)	10%



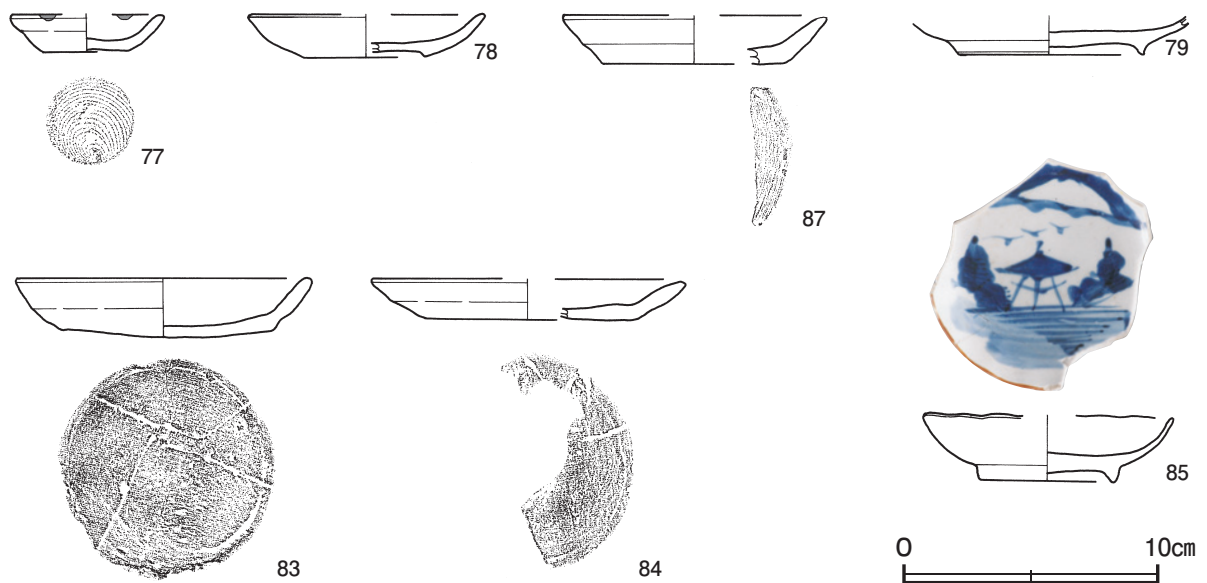
第 55 図 第 6 号ピット群実測図



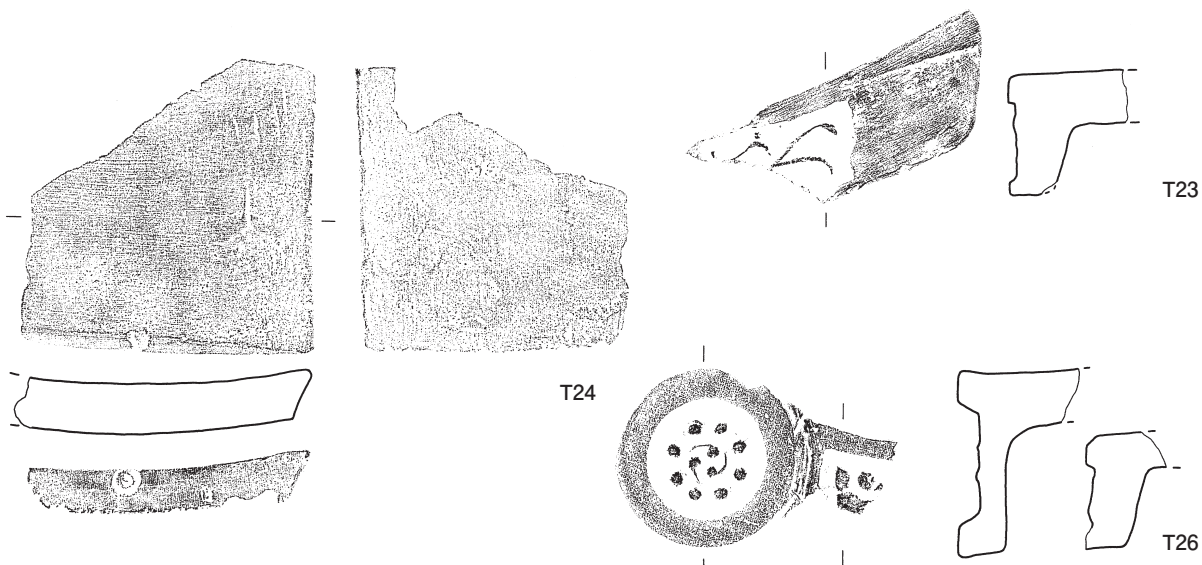
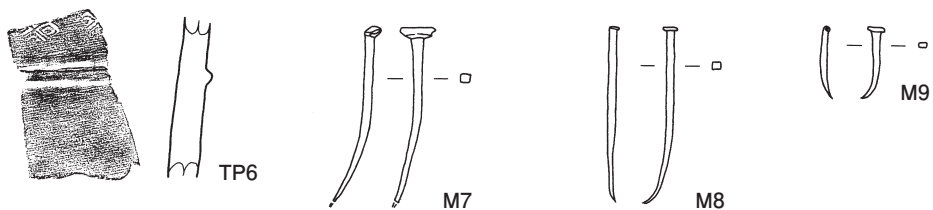
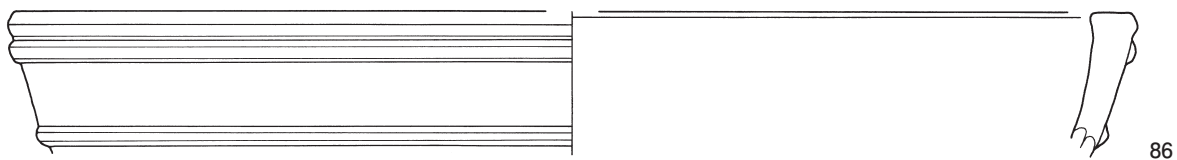
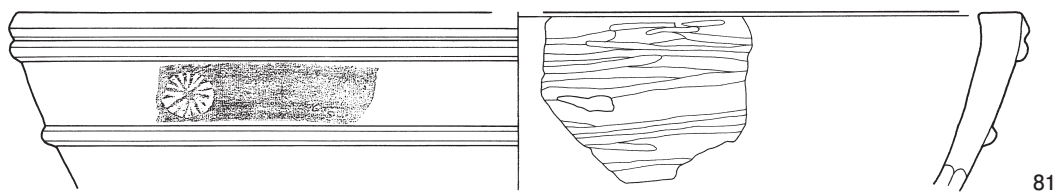
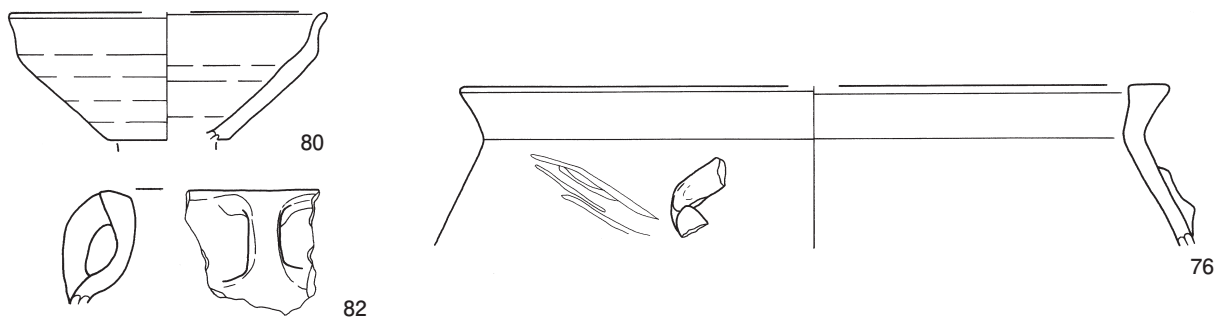
第56図 第6号ピット群・出土遺物実測図

④遺構外出土遺物（第4次面）（第57～59図）

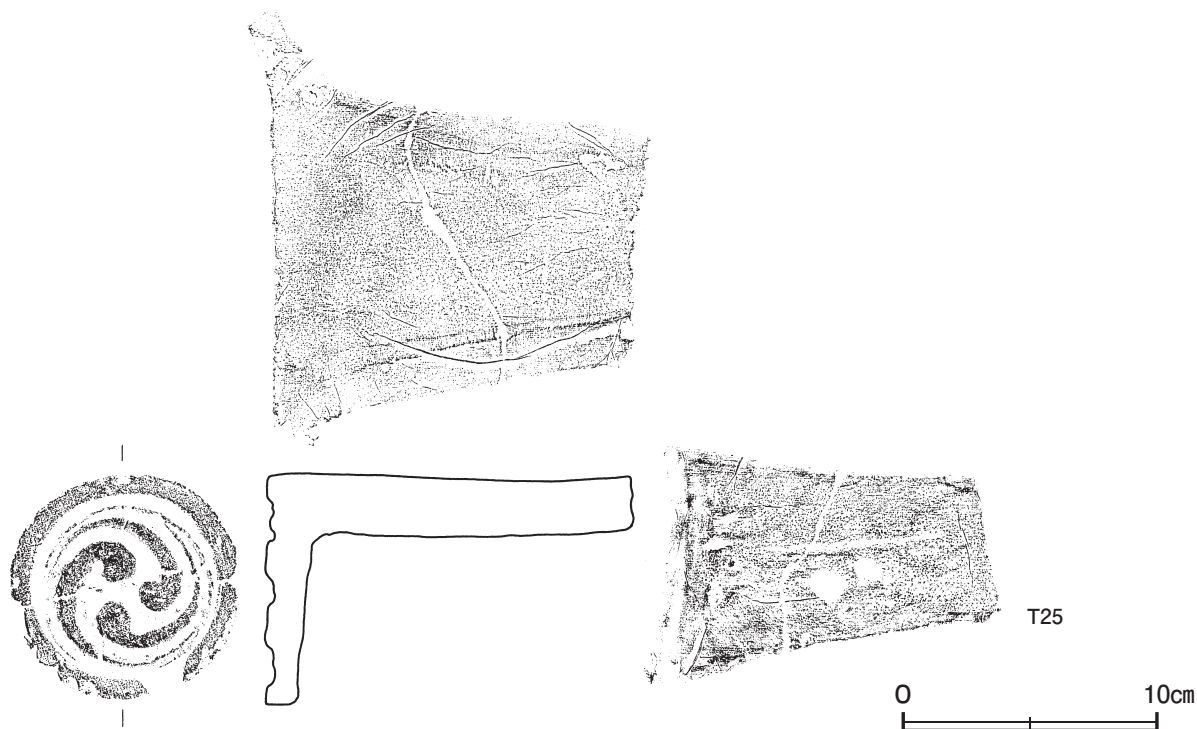
当次面の遺物は、17世紀中葉から18世紀代の遺物が主体となる。



第57図 遺構外出土遺物実測図（1）



第 58 図 遺構外出土遺物実測図 (2)



第 59 図 遺構外出土遺物実測図 (3)

第 4 次面遺構外出土遺物観察表 (第 57 ~ 59 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
76	瓦質土器	甕	[27.8]	(6.4)	-	長石・礫	灰	普通	体部外面へラ磨き 外面隆帯貼付	I 2h0	5%
77	土師質土器	小皿	[6.0]	1.4	3.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	底部回転糸切り 口縁部油煙付着	I 2j9	60% PL 9
78	陶器	小皿	[9.1]	1.7	[4.8]	長石 灰釉	オリーブ黄	普通	外・内面施釉	I 2j9	30% 瀬戸・美濃 PL16
79	陶器	皿	-	(1.5)	[7.4]	精良 長石釉	灰白	良好	外・内面施釉 細かな貫入	I 2j9	20% 唐津
80	陶器	天目茶碗	[12.4]	(5.0)	-	長石 鉛釉	褐	良好	外・内面施釉 底部露胎	I 2j9	5% 瀬戸・美濃 PL17
81	瓦質土器	火鉢	[39.4]	(7.0)	-	長石・石英・礫	灰	普通	体部外面 2 条の隆帯貼付 隆帯間にスタンプによる花文 体部内面へラ磨き	I 2j9	5%
82	土師質土器	内耳鍋	-	(4.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面煤付着	I 2i0	5%
83	土師質土器	皿	11.6	2.4	8.4	長石・礫・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 体・底部外面の一部に赤変	I 2j9	80% PL 9
84	土師質土器	皿	[12.4]	1.6	[8.2]	長石・礫・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ	I 2j9	30%
85	磁器	小皿	[9.7]	2.6	5.3	緻密 透明釉	灰白	良好	内面染付の楼閣山水文	I 2j9	60% 肥前系 PL17
86	瓦質土器	火鉢	[43.8]	(5.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・礫	灰	普通	体部外面 2 条の隆帯貼付 隆帯間に文様が押印されているが、劣化が激しく明瞭ではない	I 2j9	5%
87	土師質土器	小皿	[10.4]	1.9	[7.2]	長石・角尖石・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	-	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 6	瓦質土器	火鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	体部外面へラ磨き 外面隆帯貼付 外面スタンプによる菱形文	I 2j9	PL12

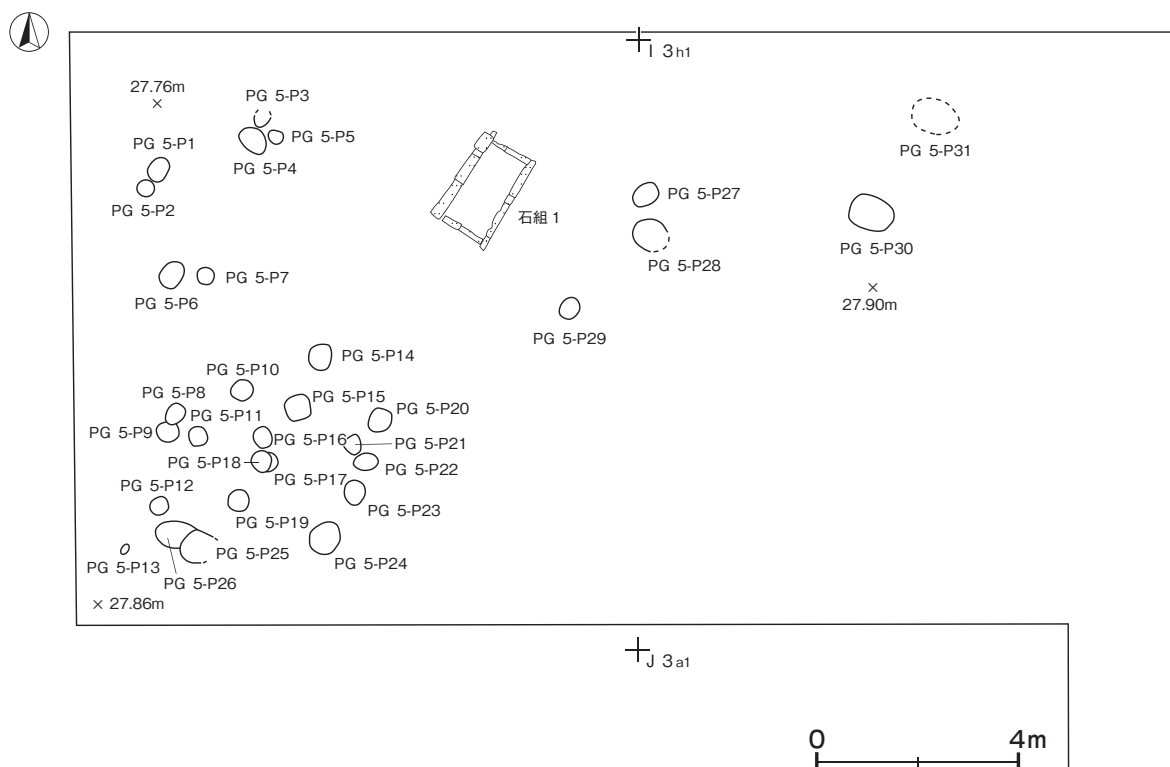
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	釘	(6.9)	1.4	0.4	(7.2)	鉄	断面方形 頭部折り返し	-	PL13
M 8	釘	6.9	0.6	0.3	5.0	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	-	PL13
M 9	釘	2.8	0.7	0.2	1.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	I 2j9	PL13



番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区					色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)	高さ						
T23	瓦	軒平瓦	(4.7)	(12.4)	-	-	-	-	(6.2)	3.0	1.0	0.5	4.7	灰	長石・石英	普通	唐草文	I 2j9	
T24	瓦	平瓦	(11.7)	(11.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・針状鉱物	普通	◎の刻印	I 2j9	PL15	
T25	瓦	棟込瓦	8.9	8.9	8.9	7.4	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	巴文右 内面1条の縄痕 内面指頭痕	I 2j0	PL14	
T26	瓦	軒棧瓦	(5.6)	(11.6)	7.4	4.9	0.6	8	(2.8)	2.5	0.7	-	4.5	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	巴文右	-	

## (2) 第5次面

当次面は、第4次面に伴う、礫を主体とした基礎地業面である。



第60図 第5次面全体図

### ①石組み遺構

#### 第1号石組み遺構 (SX20) (第61・62図)

**位置** 調査区中央部のI 2h0区、標高27.6mの台地上に位置している。

**規模と形状** 石組みの規模は、長軸2.02m、短軸1.17mの長方形で、掘方の規模は、北東・南西軸は2.30mで、長軸方向はN - 32° - Eである。壁高は0.80mで、底面は平坦である。

**石組みの構築状況** 石材28点(北東3, 南西3, 南東9, 北西13)を確認した。長さ84~88cm, 幅23~26cm, 厚さ10~12cm, 重量33.5~47.8kgの凝灰岩の切石が多く用いられている。積み方は、各段の高さを揃える布積みで、すべての石材が、長辺を横にして積まれている。下から3段は天端を垂直に積み、4段目を水平に積んでいる。南西・北東壁の石材は、端を揃えて積み、南東壁・北西壁は、端が揃わないよう、互い違いに積み、

長さ16～20cmの石材で、隙間ができないように調節している。底面に、石材は確認されなかった。

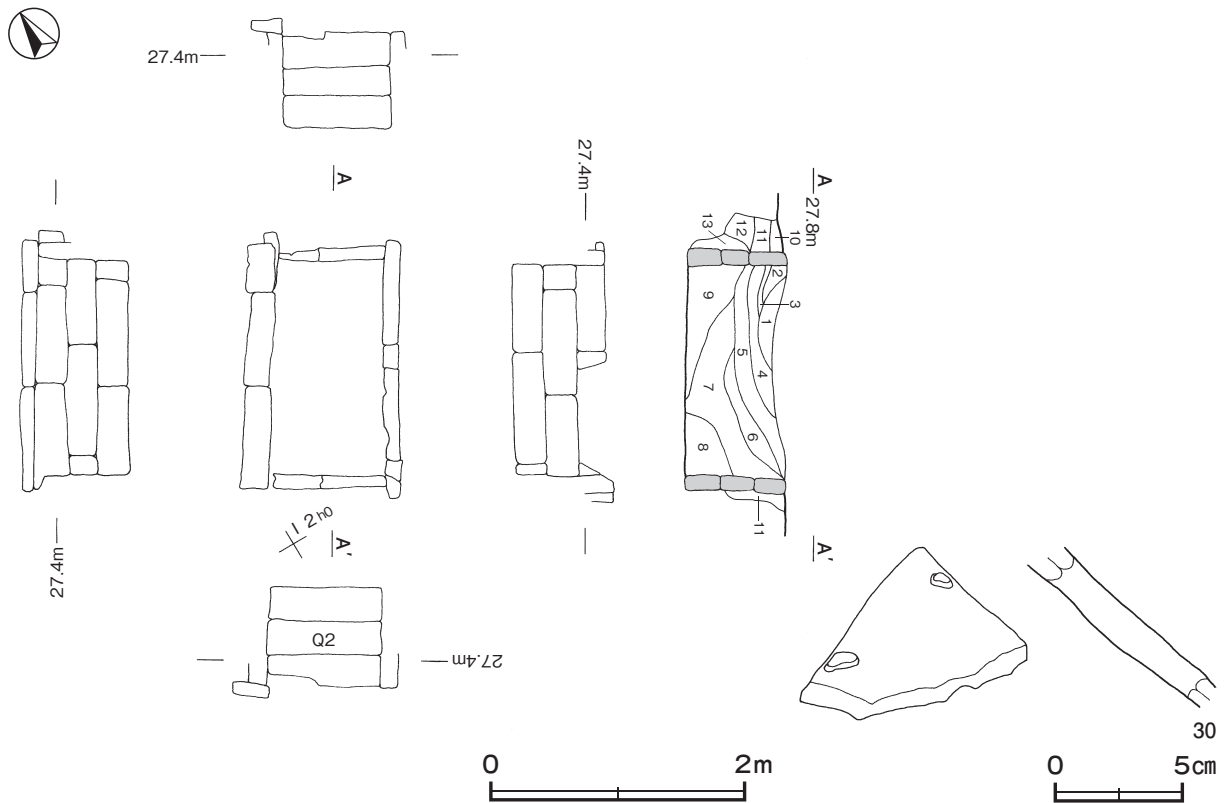
**覆土** 9層に分層できる。各層に、細礫や粘土ブロックなどが含まれ、締まりが強いことから、整地の際に埋め戻されたと推定される。第10～13層は、掘方への埋土である。

**土層解説**

- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 細礫少量, 炭化物微量  |
| 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量           | 9 褐色 粘土粒子中量           |
| 3 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量  | 10 暗褐色 粘土粒子・細礫少量      |
| 4 暗褐色 炭化粒子・赤色粒子微量          | 11 褐色 ローム粒子中量, 赤色粒子微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・粘土粒子微量  | 12 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量    |
| 6 黒褐色 ロームブロック微量            | 13 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 炭化粒子微量               |                       |

**遺物出土状況** 混入した陶器片1点(甕), 瓦片6点(平瓦), 鉄製品3点(釘)が出土している。30は覆土中から出土している。石材のサンプルは拓影図及び観察表に記載する。

**所見** 時期は、当次面が第4次面に伴う地業面と推定されることから、17世紀代に比定できる。本跡は、生活面である第4次面で、機能していたと推定される。性格は不明である。

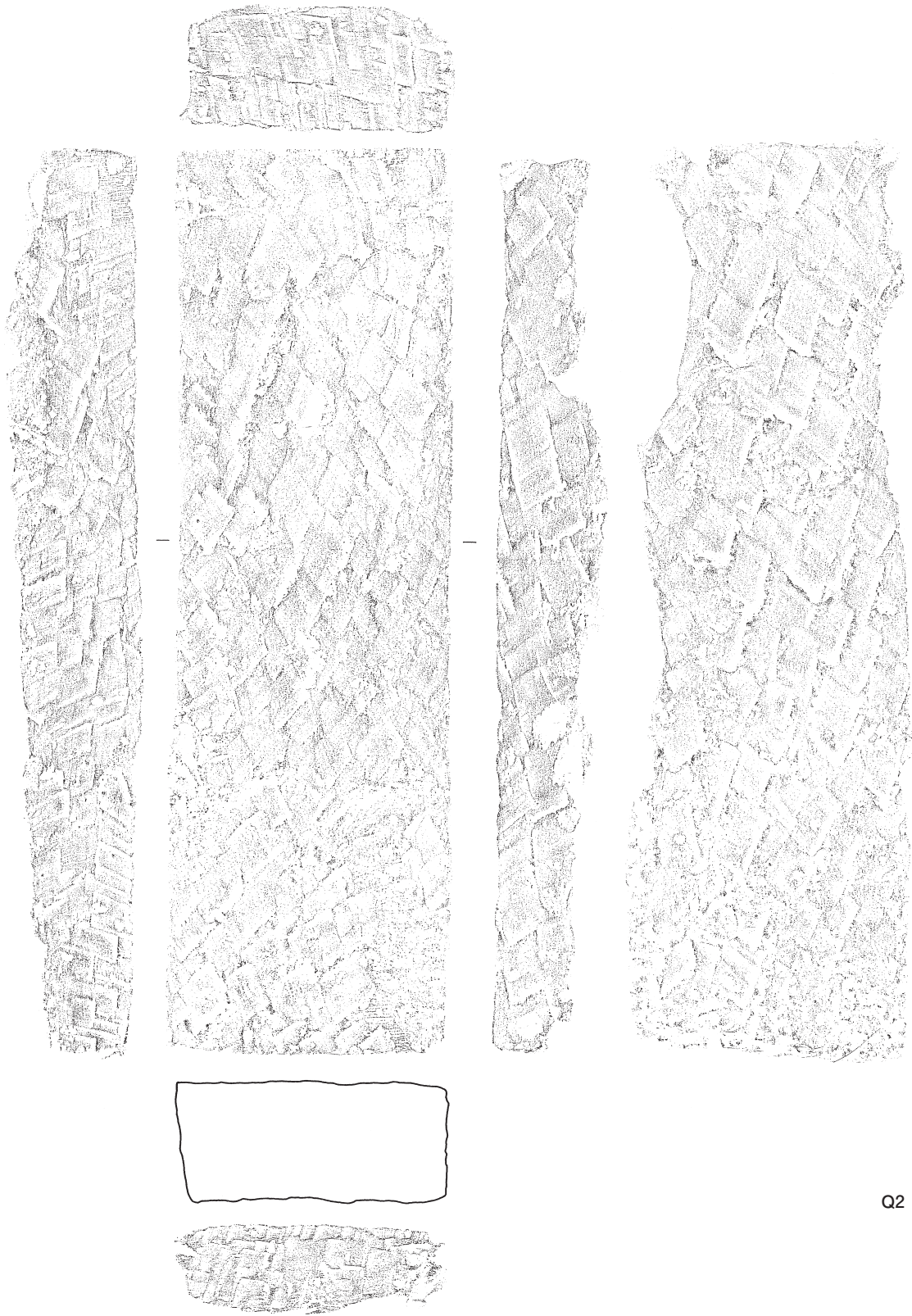


第61図 第1号石組み遺構・出土遺物実測図

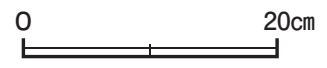
第1号石組み遺構出土遺物観察表 (第61・62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	陶器	甕	-	(6.3)	-	長石・石英・赤色粒子	暗オリーブ	普通	体部外面自然釉	覆土中	5%常滑

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	石材	88.5	27.0	11.6	(30.3)	凝灰岩	幅4cm程の刃先が斜めの工具痕 側面はより密な工具痕		



Q2



第 62 図 第 1 号石組み遺構出土遺物実測図

②ピット群

第5号ピット群（第63・64図）

位置 I 2h8区～I 3h2区，標高27.8mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第93号土坑，第3号柱穴列跡P 8，第4号ピット群P 14を掘り込み，第163・164号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北9.0m，東西16.7mの範囲に，31か所のピットが確認できた。

ピット 31か所。長径32～86cm，短径27～68cmの円形・楕円形・隅丸方形で，深さは7～65cmである。

P31は掘り込みが浅く，石材が確認できたのだが，礎石の可能性を考慮し，本跡に含めて記述する。

ピット土層解説（各ピット共通）

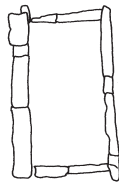
1	明褐色	ローム粒子少量，粘土粒子・細礫微量	33	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	灰褐色	ローム粒子少量，粘土ブロック微量	34	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量	35	暗褐色	焼土粒子少量，炭化物微量
4	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・細礫微量	36	褐色	中円礫・ローム粒子中量，粘土ブロック微量
5	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	37	黒色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
6	褐色	炭化粒子・粘土粒子・細礫微量	38	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
7	橙褐色	細礫中量，粘土ブロック・ローム粒子少量	39	暗褐色	炭化粒子少量，焼土粒子微量
8	にぶい褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量	40	褐色	中円礫少量
9	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量	41	褐色	細礫中量
10	黒褐色	炭化粒子少量，粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量	42	黒褐色	ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
11	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	43	暗褐色	ローム粒子少量，粘土ブロック・炭化粒子微量
12	褐色	炭化粒子少量，ローム粒子微量	44	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
13	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・円礫微量	45	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
14	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	46	暗褐色	炭化粒子・粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
15	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	47	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
16	黒色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	48	暗褐色	ローム粒子微量
17	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	49	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
18	黒色	ローム粒子少量，粘土粒子微量	50	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
19	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	51	明黄褐色	粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
20	褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	52	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
21	極暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量	53	極暗褐色	ローム粒子微量
22	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量	54	にぶい褐色	ローム粒子少量，粘土粒子・細礫微量
23	黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	55	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子微量
24	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	56	黄褐色	粘土ブロック中量，炭化粒子少量，ロームブロック微量
25	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	57	黒褐色	炭化粒子少量，焼土粒子微量
26	黒褐色	ローム粒子少量	58	にぶい橙褐色	ローム粒子・粘土粒子・細礫少量
27	褐色	細礫中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	59	褐色	炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
28	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	60	褐色	焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子微量
29	灰褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	61	暗褐色	焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
30	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量	62	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
31	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量	63	灰褐色	焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
32	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	64	明褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
			65	褐色	焼土ブロック微量
			66	暗褐色	炭化物・焼土粒子少量，ロームブロック微量
			67	にぶい黄褐色	ローム粒子多量，粘土ブロック・細礫微量
			68	にぶい黄褐色	粘土粒子少量，ローム粒子微量

遺物出土状況 陶器片3点（碗，挿鉢，甕），磁器片5点（碗4，皿1），土師質土器片11点（小皿9，内耳鍋1，鉢1），瓦質土器片3点（鍋，火鉢，鉢），瓦片78点（丸瓦17，平瓦57，輪違瓦1，棟込瓦2，不明1），鉄製品6点（釘1，不明5）が出土している。また混入した土師器片1点（甕），須恵器片1点（甕），石製品1点（不明）が出土している。26はP17，28はP24，29はP25の覆土中からそれぞれ出土している。27はP24から出土しており，覆土上層と覆土中から出土した破片が接合したものである。

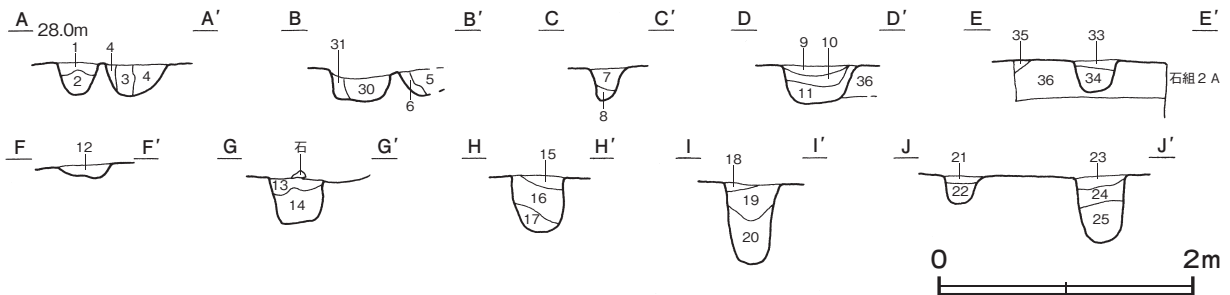
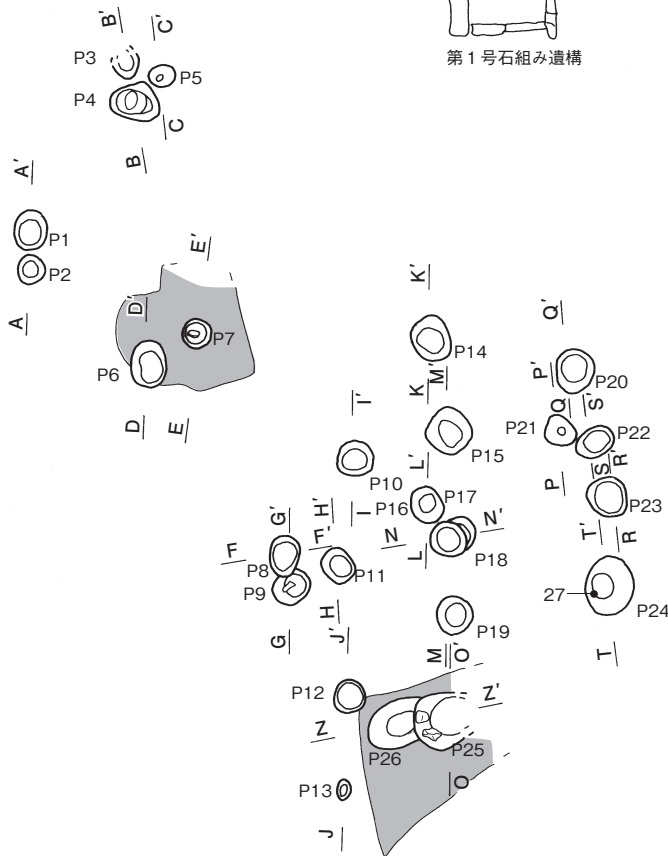
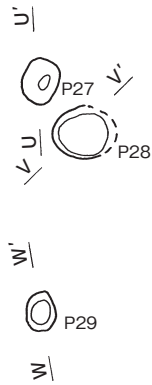
所見 時期は，当次面が第4次面に伴う地業面と推定されることから，17世紀代に比定できる。性格は，不明である。網伏せ部はロームを主体とした土が，部分的に確認できたところである。



1/200

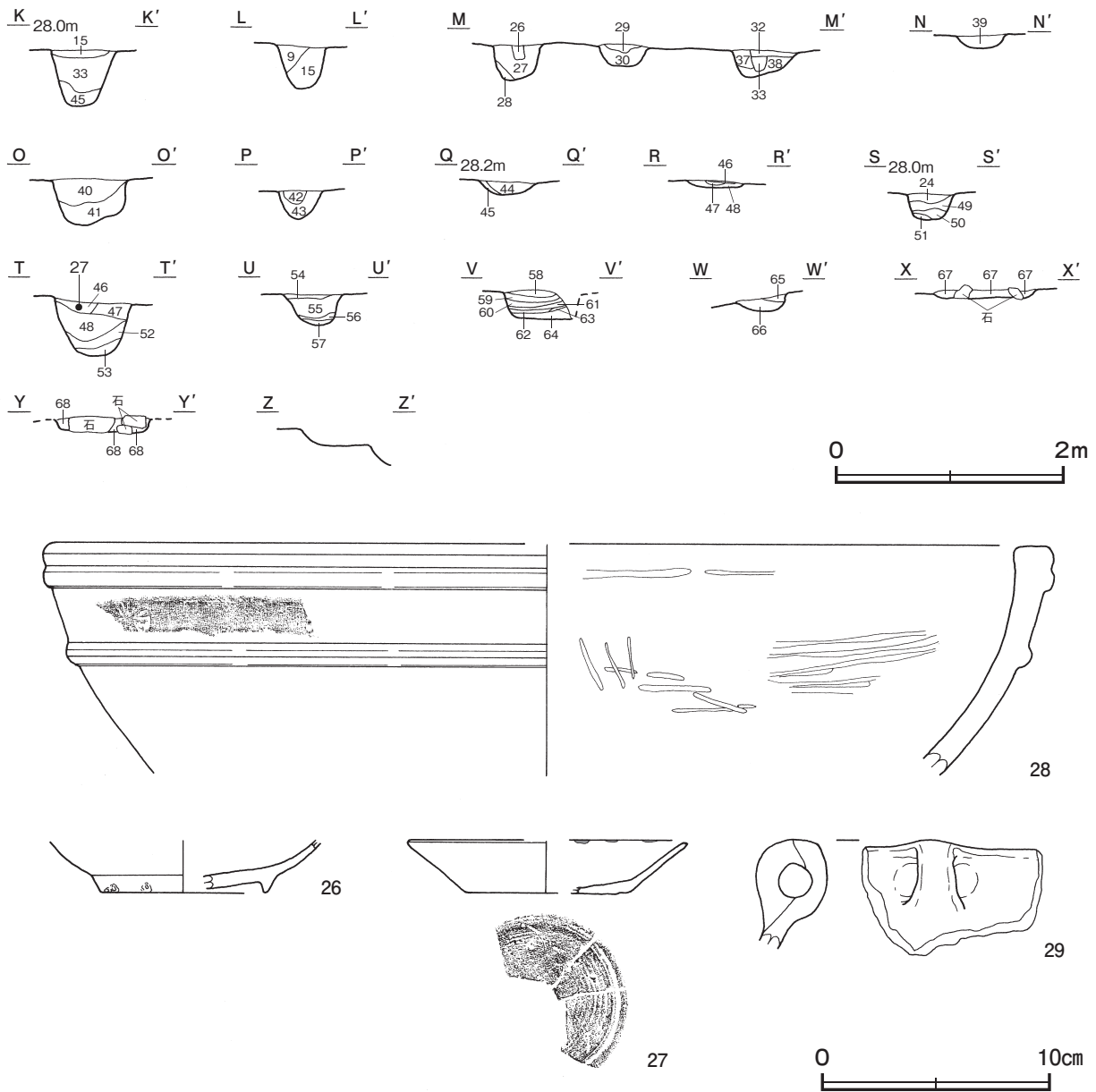


第1号石組み遺構



第63図 第5号ピット群実測図





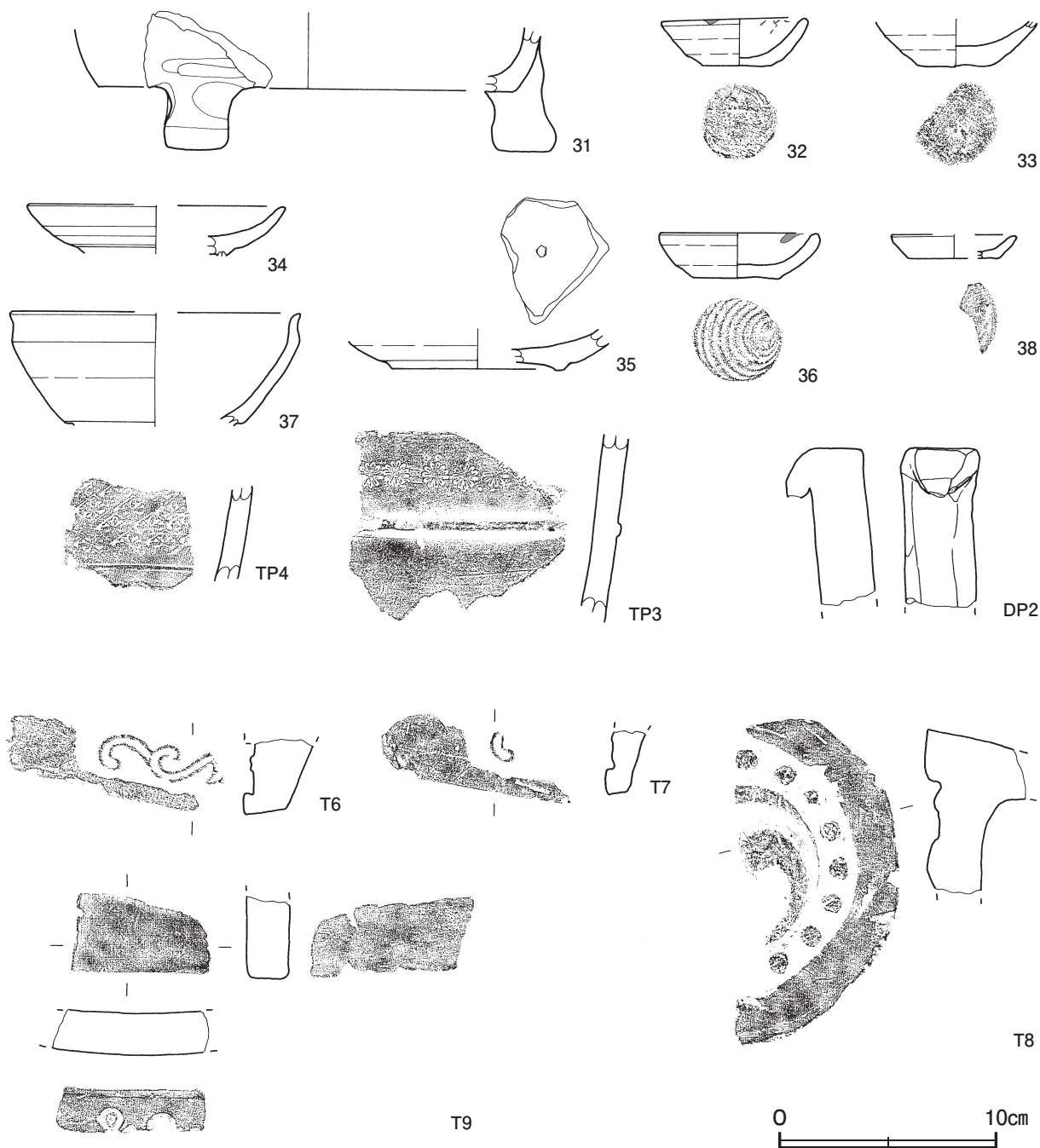
第64図 第5号ピット群・出土遺物実測図

第5号ピット群出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	磁器	皿	-	(2.3)	[7.4]	緻密 灰釉	明オリブ灰	良好	外・内面施釉 高台部砂粒付着	P17 (SK59)	10% PL16
27	土師質土器	小皿	[12.2]	2.3	[7.0]	石英・角尖石・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 口縁部油煙付着	P24 (SK66)	30%
28	瓦質土器	火鉢	[44.0]	(10.1)	-	長石・石英・礫	灰	普通	体部外面2条の隆帯貼付 隆帯間にスタンプによる花文 体部内面ヘラ磨き	P24 (SK66)	10% PL 9
29	土師質土器	内耳鍋	-	(4.8)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄	普通	口縁部内面ナデ	P25 (SK65)	5% PL11

③遺構外出土遺物（第5次面）（第65図）

当次面の出土遺物は、16世紀後葉から17世紀代に比定できる。



第 65 図 遺構外出土遺物実測図

第 5 次面遺構外出土遺物観察表 (第 65 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	瓦質土器	火鉢	—	(6.3)	[19.1]	長石・石英・ 白色粒子	暗灰	普通	体部外面ヘラ磨き 脚部くびれ部分に指頭痕	I 2h9	5%
32	土師質土器	小皿	6.6	2.3	3.0	長石・石英・砂粒	橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ 口縁部油煙付着	I 2i8	95% PL 9
33	土師質土器	小皿	—	(2.2)	3.2	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り後、ナデ	I 2i9	40%
34	陶器	皿	[11.8]	(2.3)	—	長石・石英 長石釉	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り 外・内面施釉 貫入 志野 被熱カ	I 2i9	10% 瀬戸・ 美濃 PL16
35	陶器	皿	—	(1.9)	[7.8]	長石 長石釉	灰白	普通	外・内面施釉 貫入 志野	I 2i9	5% 瀬戸・ 美濃 PL16
36	土師質土器	小皿	7.1	2.1	4.0	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・針状鉱物	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 口縁部・内面油煙付着	I 2i0	90% PL 9
37	陶器	天目茶碗	[13.4]	(5.3)	—	石英 鉄釉	にぶい赤褐	普通	高台削りだし 体部下端露胎	I 3h2	5% 瀬戸・ 美濃 PL16
38	土師質土器	小皿	[5.6]	1.1	[4.2]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	—	30%

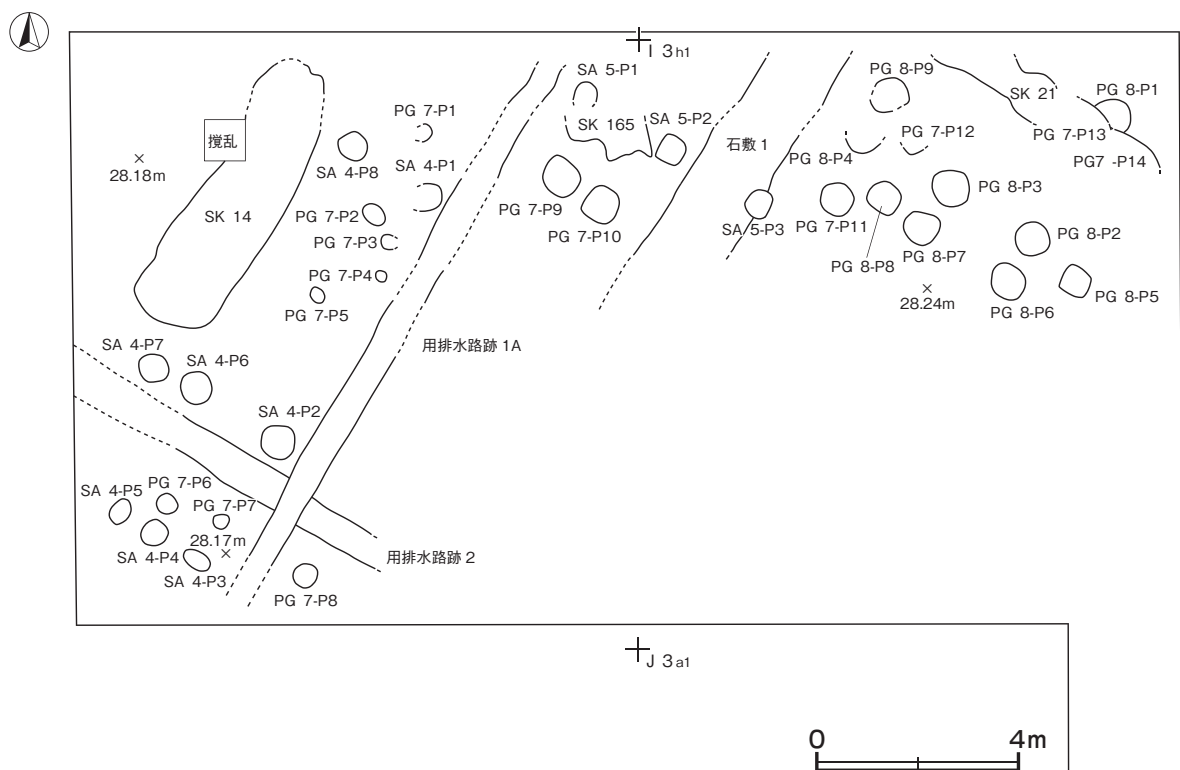
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 3	瓦質土器	火鉢	長石・石英・礫	黒褐	体部外面ヘラ磨き 外面隆帯貼付 外面スタンプによる花文	I 2i0	PL12
TP 4	瓦質土器	火鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	体部外面に2条の沈線 沈線上部にスタンプによる菱形文	I 3h3	PL12

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 2	五徳	(7.3)	-	-	(88.6)	長石・石英	ヘラ削りによる角張った形状	I 2h9	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T 6	瓦	軒平瓦	(11.0)	(2.1)	-	-	-	-	(6.7)	(2.3)	-	1.0	(3.3)	暗灰	長石・石英	普通	唐草文	I 2h8	PL14
T 7	瓦	軒平瓦	(9.1)	(1.5)	-	-	-	-	(4.3)	(1.7)	-	1.0	(2.9)	灰	長石・石英・針状鉱物	普通	唐草文	I 2i8	
T 8	瓦	軒丸瓦	(4.6)	(7.3)	(15.8)	(11.4)	0.8	(8)	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・礫	普通	巴文左	I 2i0	PL14
T 9	瓦	平瓦	(3.9)	(7.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	◎の刻印	I 2j9	

(3) 第3次面 (第66図)

当次面は、ロームを主体とした化粧土が施され、生活面として機能していたと考えられる。時期は、出土遺物から18世紀から19世紀代に比定でき、当次面以降は、近代から現代の整地面となる。当次面が近世の最終面となる。

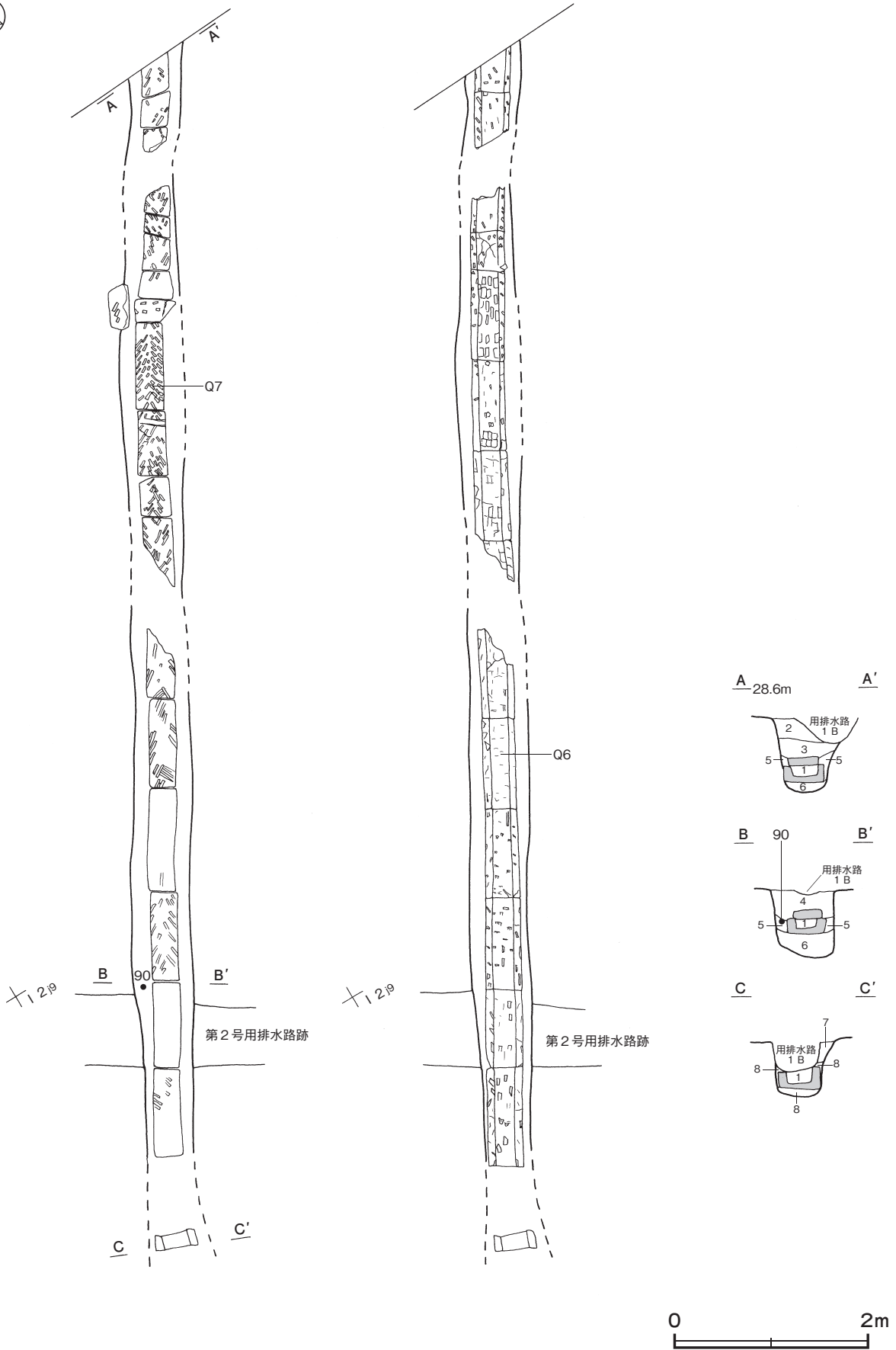


第66図 第3次面全体図

①用排水路跡

第1A号用排水路跡 (SX 7旧) (第67～69図)

位置 調査区北西部のI 2h0～I 2j9区、標高28.2mの台地上に位置している。



第 67 图 第 1 A 号用排水路跡实测图

**重複関係** 第2号用排水路跡，第163・164号土坑を掘り込み，第1B号用排水路，第3・4号瓦溜まり，第5号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** I 2j9区から北東方向（N - 30° - E）に直線状に延びている。凹字状に加工された凝灰岩製の石樋16点と，その上部に，同じ石材の蓋19点が埋設されている状況を確認した。完存の石樋は，長さ約0.90m，幅約0.30m，重量41.2～48.6kg，蓋は，長さ0.90～1.06m，幅約0.34m，重量29.2～36.6kgである。南西・北東端が調査区域外に延びているため，長さは12.2mしか確認できなかった。掘方の規模は，上幅0.48～0.62m，下幅約0.20m，深さ60cmほどで，U字状に掘り込まれている。

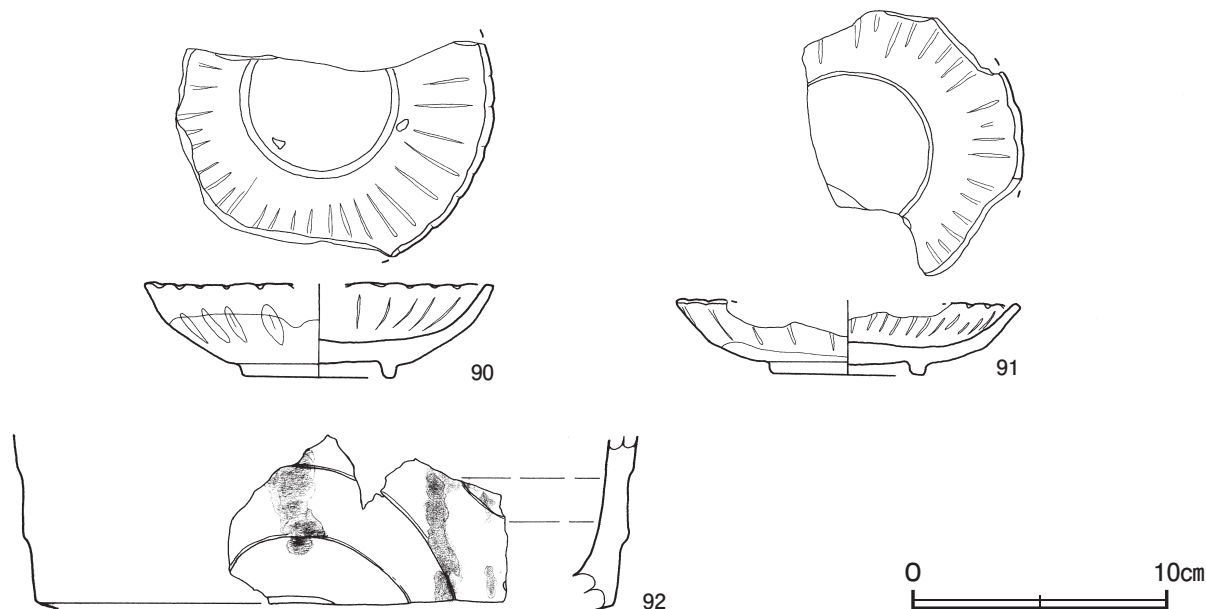
**覆土** 単一層である。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第2～8層は，掘方への埋土である。

**土層解説**

- |                                     |                              |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 オリーブ黒色 炭化粒子少量                     | 5 にぶい褐色 炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量   |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量 | 6 灰褐色 細礫少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子・細礫微量         | 7 黒褐色 炭化粒子微量                 |
| 4 暗褐色 焼土粒子少量，ロームブロック・炭化物微量          | 8 暗褐色 赤色粒子少量，炭化粒子微量          |

**遺物出土状況** 陶器片17点（碗1，菊皿3，皿3，水鉢1，火鉢1，播鉢1，植木鉢1，小鉢1，小形壺1，土瓶1，瓶1，甕2），磁器片9点（碗），土師質土器片5点（小皿2，鉢2，甕1），瓦片376点（丸瓦38，平瓦17，棧瓦320，不明1）が出土している。また混入した土師器片4点（坏），須恵器片1点（甕）が出土している。90は掘方の埋土中層から出土している。91は掘方の埋土中と，第4次面の遺構外から出土した破片が接合したものである。92は埋土中から出土している。完存の石樋と蓋をサンプルとし，拓影図及び観察表で記載する。

**所見** 時期は，出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから19世紀代に比定できる。

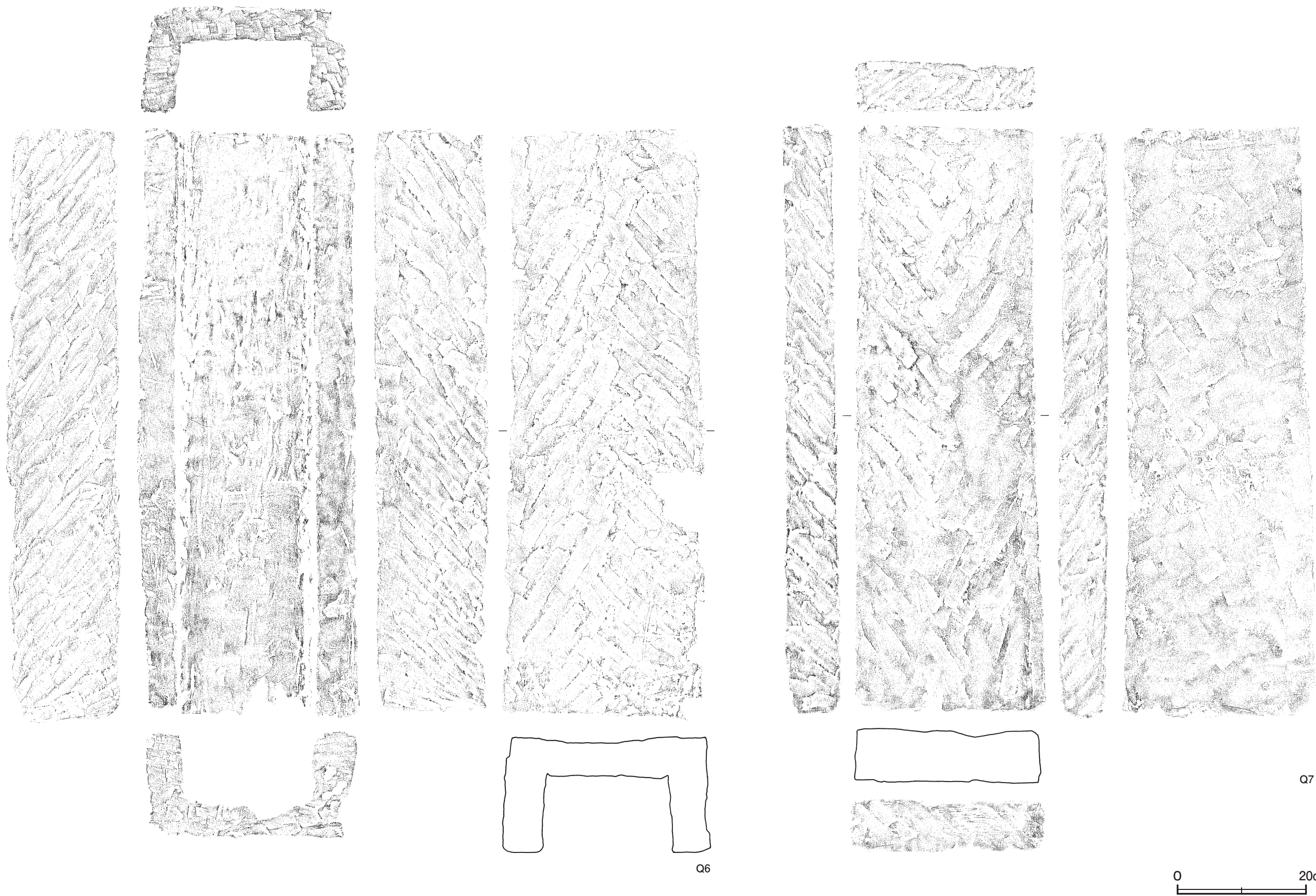


第68図 第1A号用排水路跡出土遺物実測図（1）

第1A号用排水路跡出土遺物観察表（第68・69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
90	陶器	菊皿	[13.8]	3.8	[6.0]	精良 赤色粒子 灰釉	にぶい黄橙 浅黄	良好	口唇部輪花 内面打出し菊花文 高台部貼付 トチン跡赤変	埋土中層	40% 瀬戸・美濃 PL18
91	陶器	菊皿	[13.2]	2.9	[6.0]	精良 灰釉	浅黄	良好	口唇部輪花 内面打出し菊花文 高台部貼付	埋土中 第4次面遺構外	40% 瀬戸・美濃 PL18
92	陶器	水鉢	-	(6.9)	-	精良 石英 灰釉	灰白	良好	外・内面施釉 体部外面流水文カ	埋土中	5% 瀬戸・美濃





第69图 第1A号用排水路跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	樋内幅	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	石樋	92.5	33.5	18.1	19.2	28.9	凝灰岩	幅2.6cm程の工具痕 底部外面は矢羽根状、側面は斜位の工具痕	-	PL12
Q 7	石樋蓋	92.0	30.0	8.2	-	21.5	凝灰岩	片面は矢羽根状に幅2.6cm程、反対面は斜位に幅5cm程の工具痕 側面は斜位の工具痕	-	PL12

### 第2号用排水路跡 (SX13) (第70図)

**位置** 調査区北西部のI 2 i8 ~ I 2 j9区, 標高28.2mの台地上に位置している。

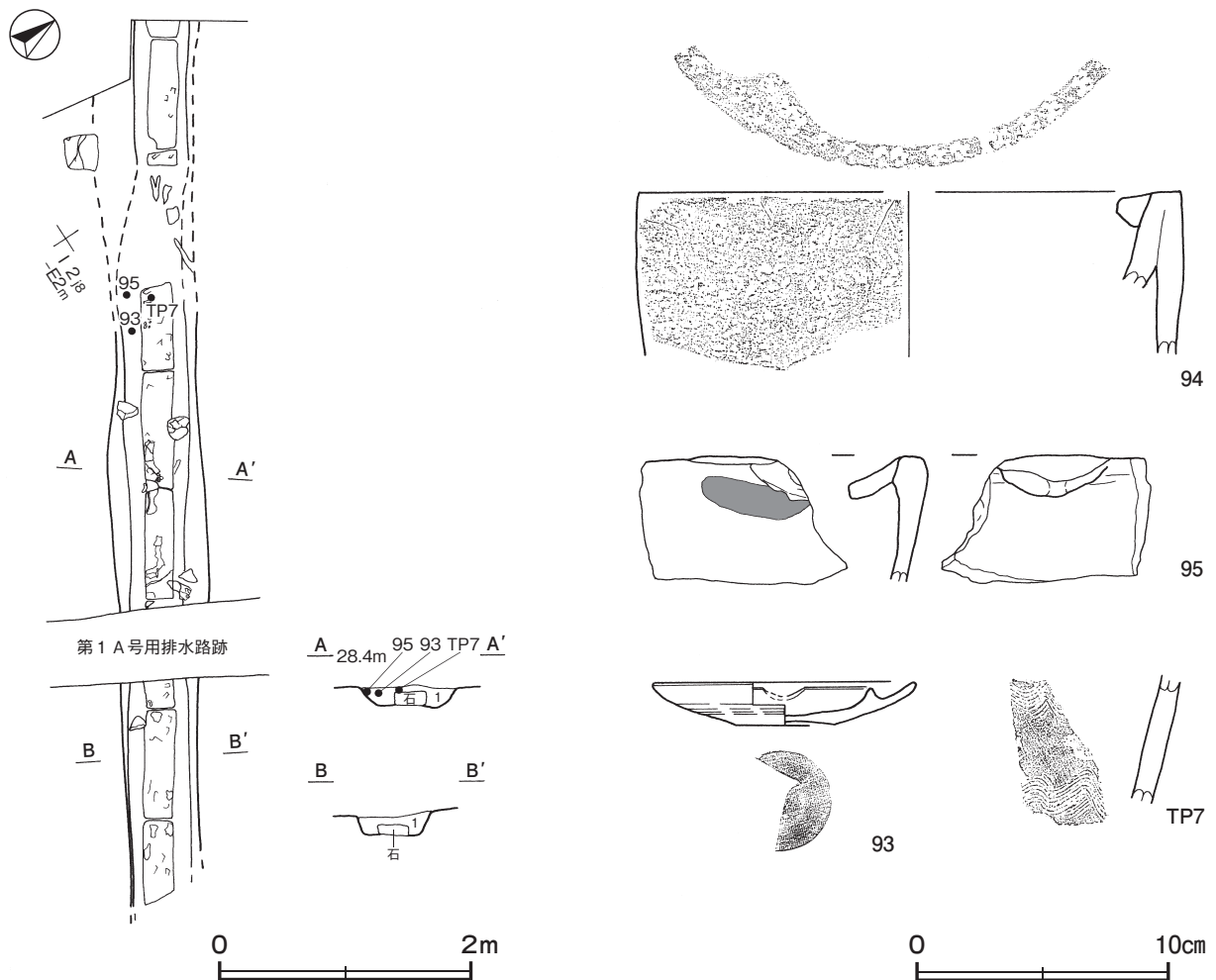
**重複関係** 第1A号用排水路に掘り込まれている。

**規模と形状** I 2 j9区から北西方向(N - 58° - W)に直線状に延びている。凝灰岩の切り石10点が、天端を水平にし、小口を接して一列に設置されている状況を確認した。完存の石材は、長さ約0.90m, 幅約0.24m, 重量17.5 ~ 25.0kgである。北西端が調査区域外に延びており、南東端が攪乱を受けているため、長さは7.0mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.60 ~ 0.74m, 下幅約0.44 ~ 0.50m, 深さ14cmほどで、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層である。焼土粒子を中量含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量



第70図 第2号用排水路跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 陶器片 38 点（碗 11, 灯明受皿 1, 皿 1, 鉢 13, 土瓶 11, 瓶 1）, 磁器片 8 点（碗）, 土師質土器片 15 点（皿 2, 焙烙 1, 七輪 1, 火鉢 3, 植木鉢 1, 鉢 6, 甕 1）, 瓦片 44 点（丸瓦 4, 棧瓦 40）, 鉄製品 1 点（釘）が出土している。また混入した土師器片 4 点（坏）, 須恵器片 1 点（甕）が出土している。93・95 は覆土上層, 94 は覆土中から出土している。TP 7 は石材の直上から出土している。石材はいずれも遺存状態が不良なため, サンプルとはしていない。

**所見** 時期は, 出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから, 18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる。長さ 0.16 ~ 0.28m の石材が散見でき, 本跡で確認された石材を底石とし, 両側面に石材を立てていたと推測できる。形状から用排水路として機能していたと考えられる。

第 2 号用排水路跡出土遺物観察表（第 70 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	陶器	灯明受皿	[10.4]	1.7	4.0	精良・長石・石英 透明釉	灰黄 にぶい・橙	良好	内面施釉 外面露胎	覆土上層	50% 七面 PL17
94	土師質土器	七輪	[21.6]	(6.6)	-	長石・石英・礫	灰	普通	口縁部折り返し 掛け部貼付 口唇部に縄目	覆土中	10%
95	土師質土器	焙烙	-	(5.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部内面耳貼付 耳部無孔 外面墨痕有り	覆土上層	5% PL11

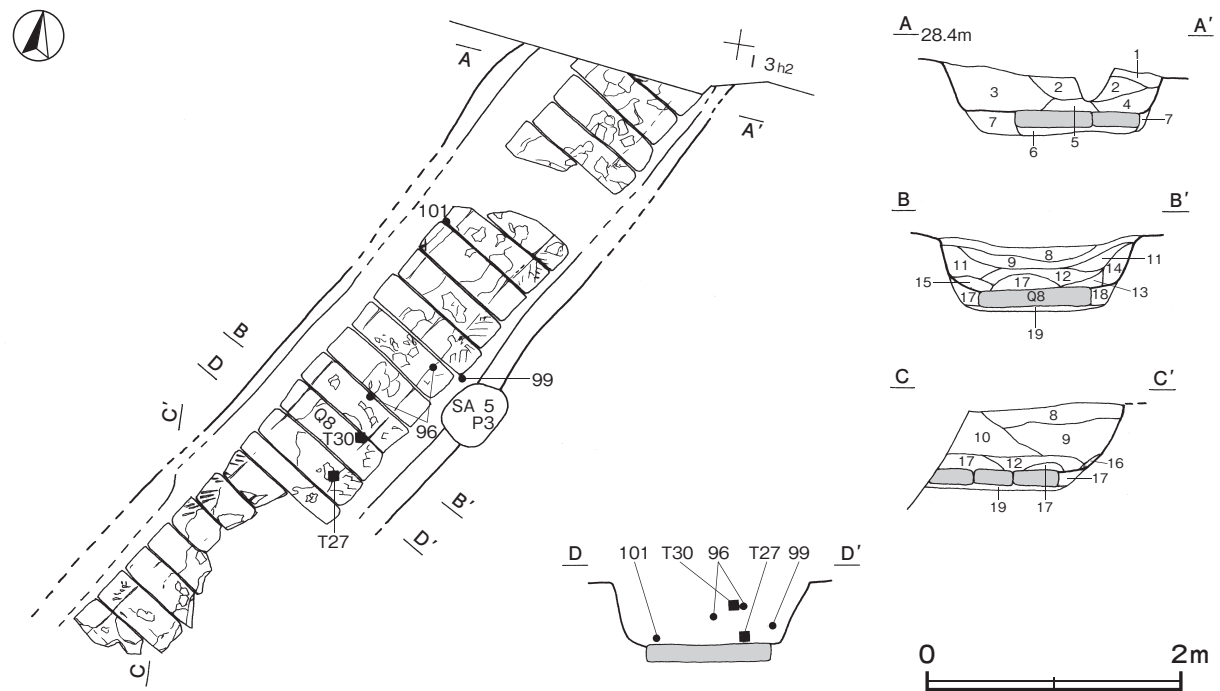
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 7	土師質土器	鉢	長石・石英	黒	体部外面櫛状工具による波状文	石材直上	

②石敷き遺構

第 1 号石敷き遺構（SX10）（第 71 ~ 74 図）

**位置** 調査区西部の I 3h1 ~ I 3i1 区, 標高 28.2 m の台地上に位置している。

**重複関係** 第 6 号ピット群 P 10・P 11 を掘り込み, 第 4 号用排水路, 第 6 号瓦溜まり, 第 5 号柱穴列 P 3, 第 9 号ピット群 P 5・P 7 に掘り込まれている。



第 71 図 第 1 号石敷き遺構実測図

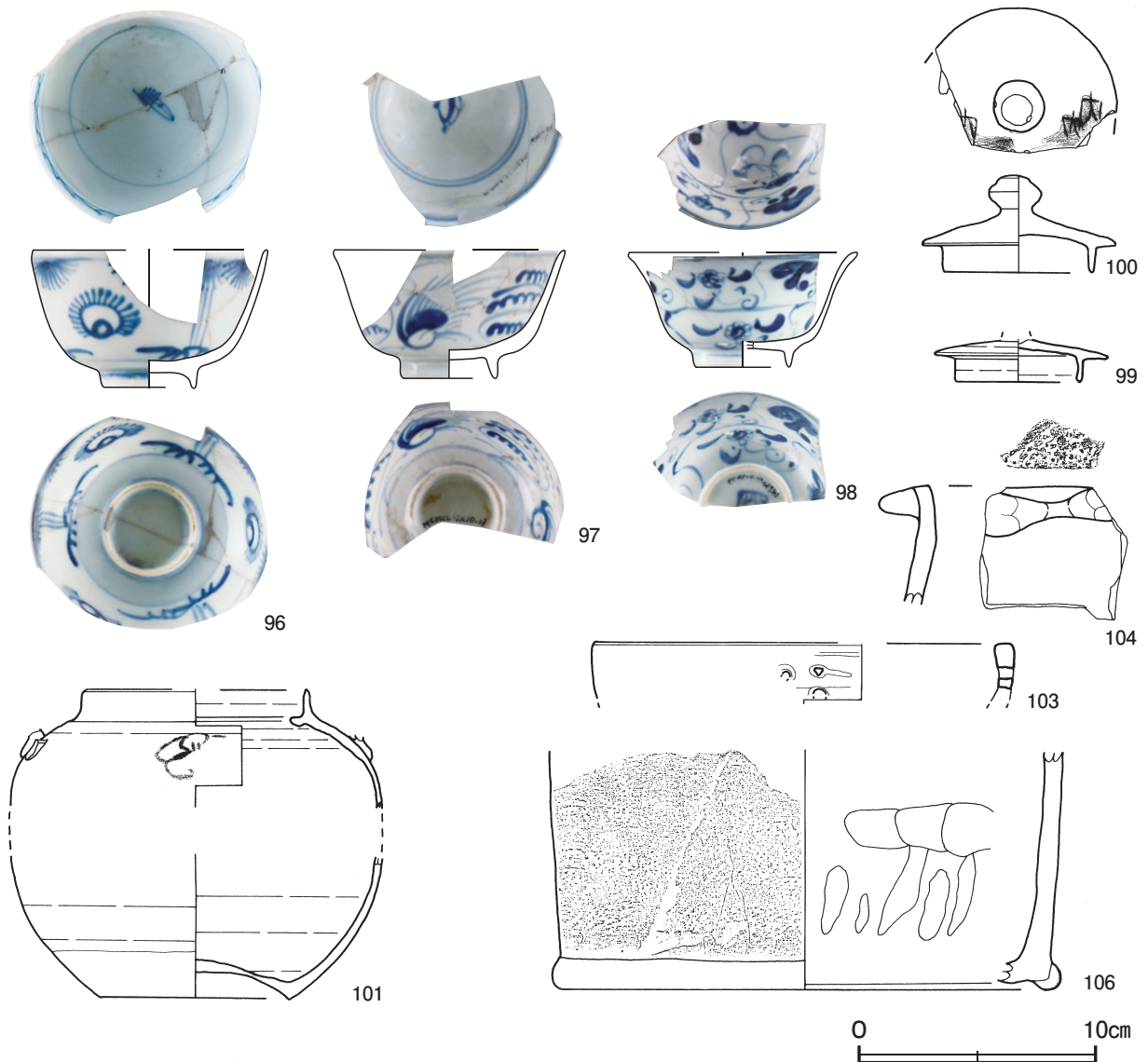


**規模と形状** I 3il 区から北東方向 (N - 33° - E) に延びている。23 点の凝灰岩の切り石が、天端を水平にし、長辺を接して一列に敷かれている状況を確認した。完存の石材は、長さ約 0.90m、幅約 0.20 ~ 0.30m、重量 30.4 ~ 41.2kg である。北東端が調査区外に延び、南西部が攪乱を受けているため、長さ 6.30m しか確認できなかった。掘方の規模は、上幅約 1.50 ~ 1.70m、下幅約 1.20 ~ 1.30m、深さは 48cm ほどで、壁は外傾して立ち上がっている。

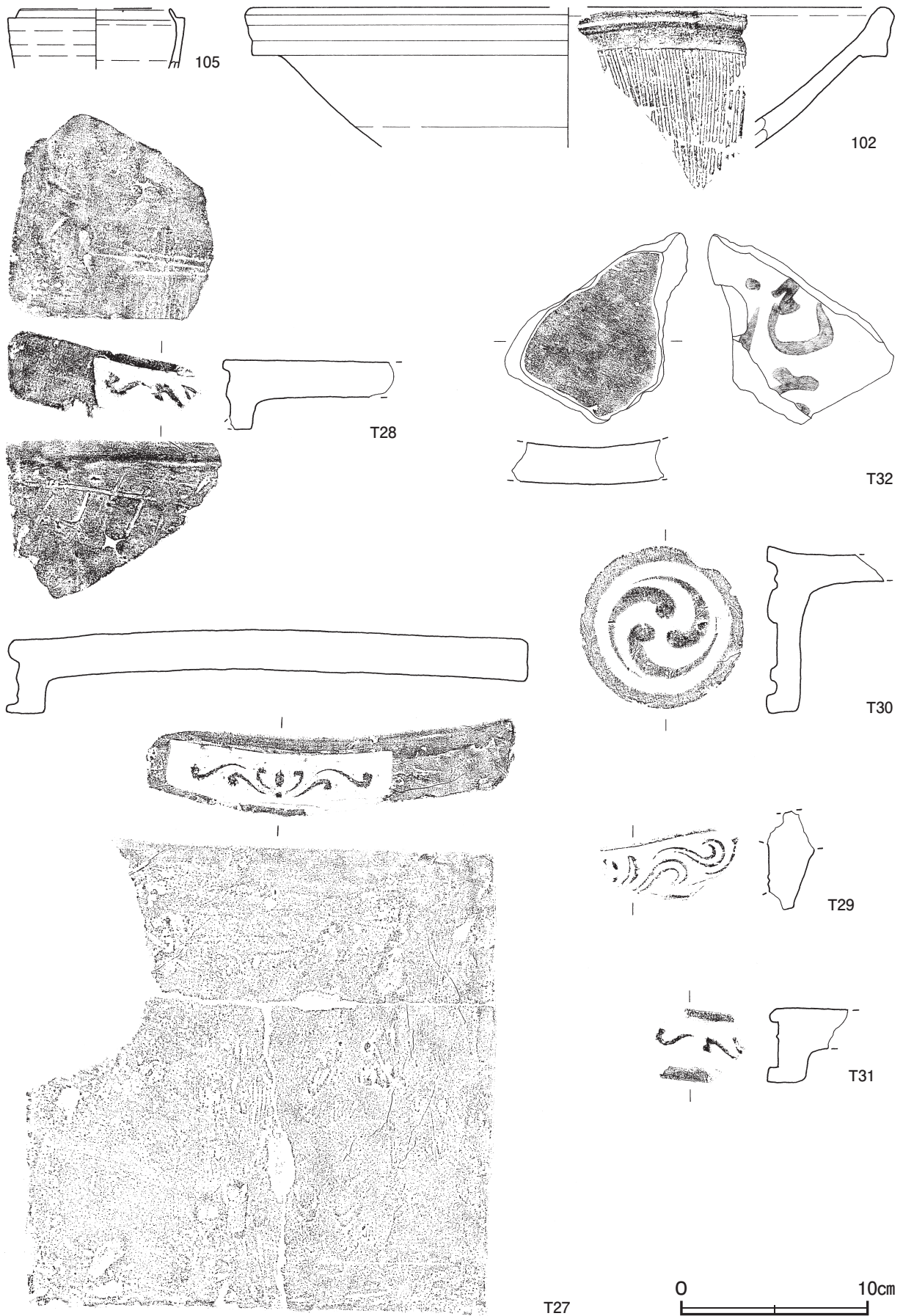
**覆土** 14 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 6・7・17 ~ 19 層は掘方への埋土である。

**土層解説**

- |          |                     |           |                     |
|----------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗オリーブ色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・細礫微量  | 11 灰黄褐色   | 焼土粒子少量              |
| 2 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   | 12 褐色     | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量    |
| 3 暗褐色    | 細礫少量, ローム粒子・焼土粒子微量  | 13 褐色     | 炭化物中量, 焼土粒子少量       |
| 4 黒褐色    | 焼土ブロック・炭化物微量        | 14 オリーブ色  | ローム粒子多量             |
| 5 暗褐色    | 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 暗褐色    | 焼土粒子少量              |
| 6 暗オリーブ色 | ローム粒子少量, 細礫微量       | 16 褐色     | 粘土粒子多量              |
| 7 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック・細礫少量         | 17 褐色     | 炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 8 暗褐色    | 大円礫・焼土粒子・炭化粒子少量     | 18 オリーブ黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 9 黒褐色    | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量    | 19 暗オリーブ色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量     |
| 10 黒褐色   | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量      |           |                     |

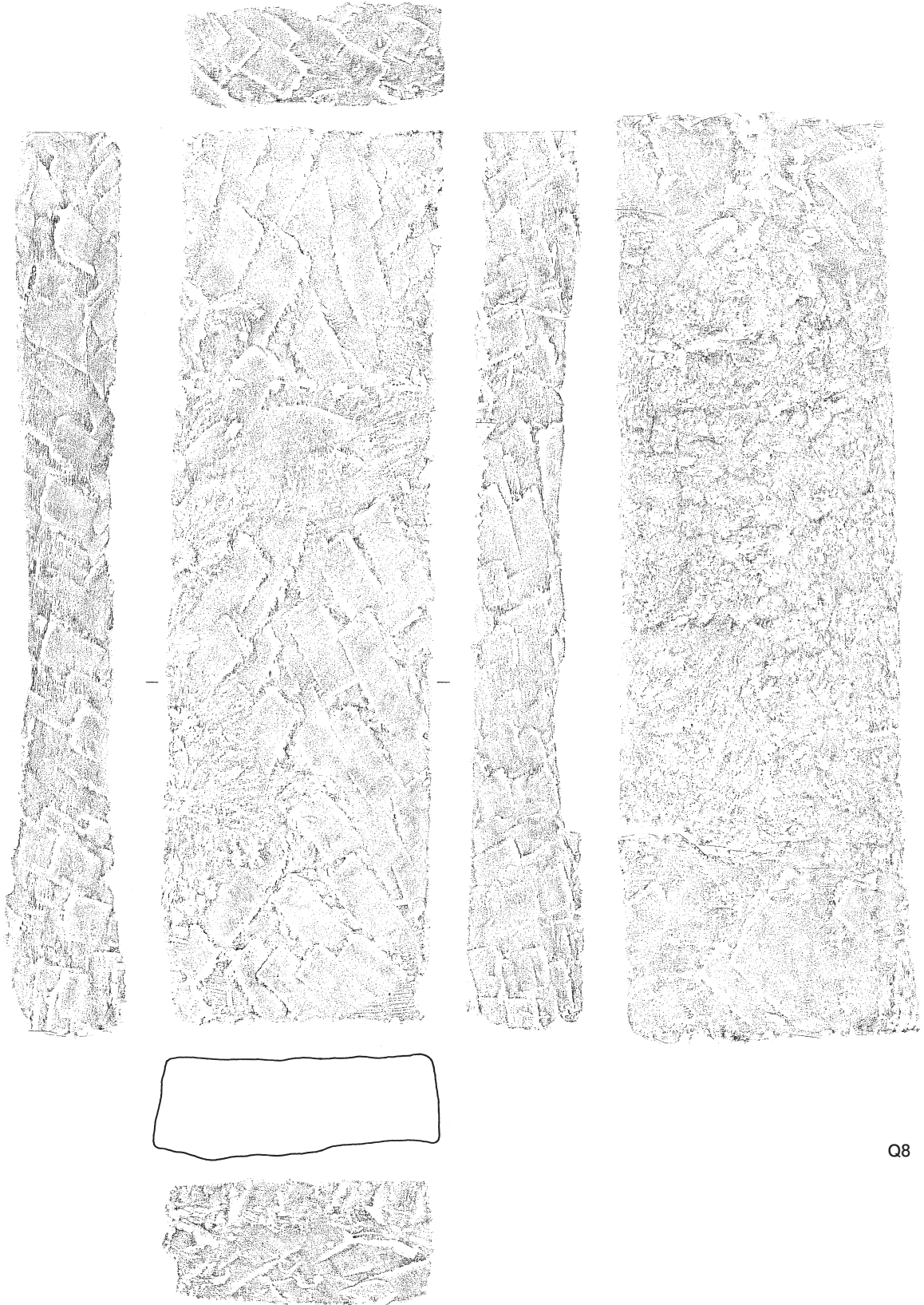


第 72 図 第 1 号石敷き遺構出土遺物実測図 (1)



第73図 第1号石敷き遺構出土遺物実測図(2)





Q8

第74図 第1号石敷き遺構出土遺物実測図(3)

**遺物出土状況** 陶器片 34 点 (碗 7, 皿 1, 播鉢 4, 鉢 1, 土瓶 17, 急須 2, 小形壺 1, 甕 1), 磁器片 18 点 (碗 17, 皿 1), 土師質土器片 63 点 (小皿 2, 火鉢 7, 鉢 23, 鍋 12, 壺 7, 甕 12), 瓦質土器片 3 点 (鉢, 甕, 不明), 瓦片 418 点 (丸瓦 65, 平瓦 3, 棧瓦 347, 板塀瓦 2, 輪違瓦 1), 鉄製品 9 点 (釘 8, 不明 1) が出土している。また, 混入した自然遺物 1 点 (貝殻) が出土している。101 は石材の直上, 99・T27 は覆土下層, 96・T30 は覆土中層から出土している。97・98・100・102～106・T 28・T 29・T 31・T 32 は覆土中から出土している。遺存状態が良好で, 明瞭な工具痕が認められる石材はサンプルとし, 拓影図及び観察表に記載する。

**所見** 時期は, 出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから, 18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる。凝灰岩が用いられている他の遺構の様に, 水に関わる遺構と想定もできるが, 性格は不明である。

第 1 号石敷き遺構出土遺物観察表 (第 72～74 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	磁器	碗	[10.0]	5.9	3.8	緻密	明緑灰	良好	染付 体部外面草花文カ	覆土中層	60% 瀬戸 PL17
97	磁器	碗	[9.8]	5.5	4.0	緻密	灰白	良好	染付 体部外面鳥文 見込み亀文カ	覆土中	50% 肥前系 PL17
98	磁器	端反碗	[9.6]	4.9	[4.0]	緻密	明緑灰	良好	染付 外・内面草花文	覆土中	40% 瀬戸
99	陶器	土瓶蓋	5.2	(1.8)	-	精良 石英 海鼠釉	明緑灰にぶい黄橙	良好	外面施釉 内面露胎 外面貫入	覆土下層	80% 松岡 PL17
100	陶器	土瓶蓋	[6.2]	4.1	-	精良	灰白	普通	白泥の上に鉄絵による帆船文カ	覆土中	50% 益子カ
101	陶器	土瓶	[9.5]	-	[8.1]	精良 長石 透明釉	灰オリーブ 灰黄	良好	外面上部に梅文と蝶文カ 耳貼付	石材直上	20% 七面 PL17
102	陶器	播鉢	[34.0]	(8.5)	-	長石・礫	灰赤	普通	播り目 10 条一単位カ	覆土中	5% 常滑
103	瓦質土器	鉢	[17.6]	(2.5)	-	長石・石英	灰	普通	外面 3 か所を穿孔 孔周囲をヘラ磨き	覆土中	5%
104	土師質土器	鍋	-	(5.1)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	掛け部貼付 掛け部上面縄痕カ	覆土中	5%
105	陶器	小壺	[8.0]	(3.2)	-	石英 透明釉	浅黄	良好	体部外面施釉	覆土中	20% 七面カ PL17
106	土師質土器	火鉢	-	(10.1)	[20.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部外周に隆帯貼付 体部外面に縄目 体部内面に縦位のナデ	覆土中	20% PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 8	石材	90.5	26.0	10.0	28.2	凝灰岩	片面は矢羽根状に幅 4 cm 程の工具痕 反対面は両端から 10～20 cm の位置に直線の刻みが認められる 他の石材にも同様の刻み	-	

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T27	瓦	軒平瓦	28.0	24.2	-	-	-	-	12.0	2.4	0.8	0.5	4.0	黄灰	長石・石英・黒色粒子	普通	唐草文	覆土下層	PL15
T28	瓦	軒平瓦	(11.2)	(12.0)	-	-	-	-	6.0	2.5	0.6	-	3.7	黄灰	長石・石英・礫	普通	唐草文	覆土中	PL15
T29	瓦	軒平瓦	(2.4)	(8.6)	-	-	-	-	(7.7)	(2.6)	-	-	5.2	にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒子	普通	内面透かしの唐草文	覆土中	
T30	瓦	棟込瓦	(6.2)	9.0	9.0	7.1	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・雲母・針状鉱物	普通	外面ヘラ削り 巴文右	覆土中層	PL15	
T31	瓦	軒平瓦	(4.4)	(7.5)	-	-	-	-	5.0	2.4	0.7	0.8	4.0	黄灰	長石・石英・針状鉱物	普通	唐草文	覆土中	
T32	瓦	棧瓦	(10.4)	(10.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	2.0	灰	長石・石英	良好	外面朱書き 「泥六(シロク)」カ	覆土中	PL15

### ③土坑

#### 第 14 号土坑 (第 75 図)

**位置** 調査区西部の I 2h9 区, 標高 28.2 m の台地上平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸 5.86m, 短軸 1.75m で, 長軸方向が N - 30° - E の隅丸長方形である。深さは 24cm で, 底面は皿状であり, 壁は緩やかに立ち上がっている。

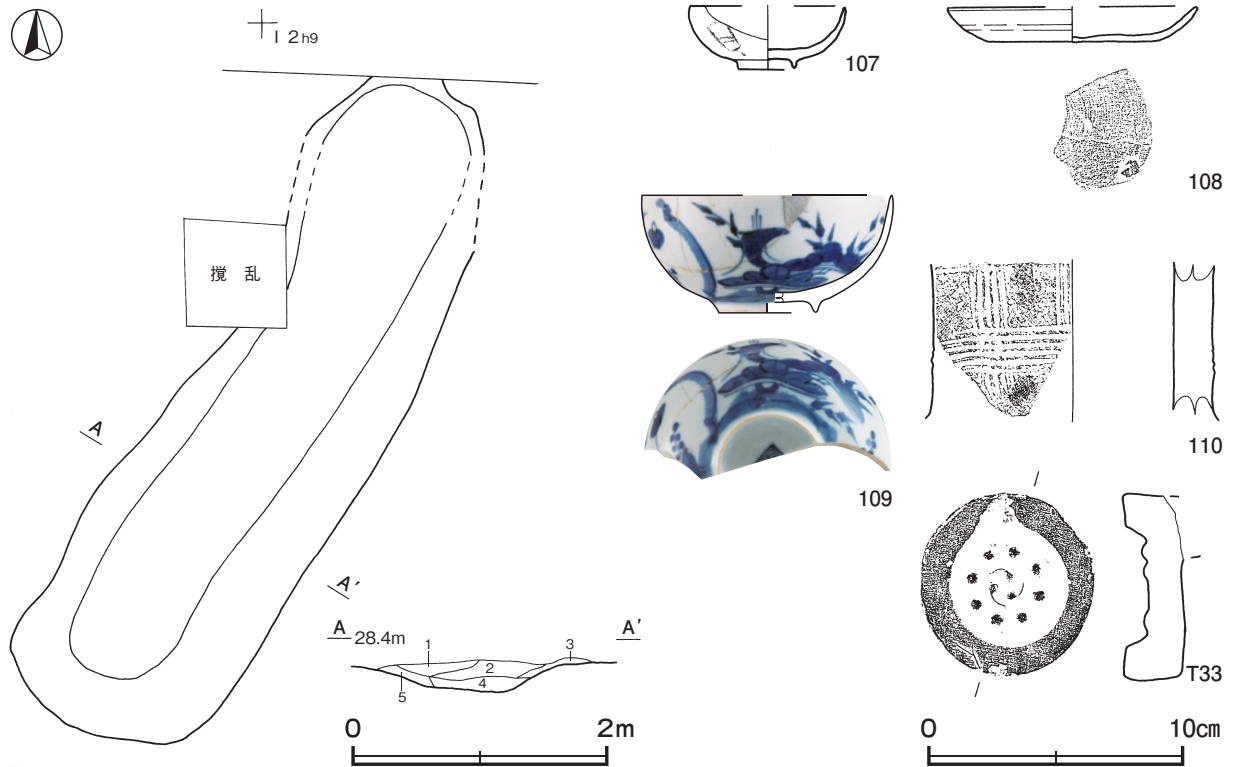
**覆土** 5 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

#### 土層解説

- |     |   |                       |     |   |         |                         |
|-----|---|-----------------------|-----|---|---------|-------------------------|
| 1 褐 | 色 | 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化物微量 | 4 暗 | 褐 | 色       | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 褐 | 色 | 焼土粒子・炭化粒子微量           | 5 褐 | 色 | ローム粒子多量 |                         |
| 3 褐 | 色 | 炭化粒子微量                |     |   |         |                         |

**遺物出土状況** 陶器片6点(碗, 皿, 播鉢, 瓶, 花生, 甕), 磁器片3点(碗2, 小杯1), 土師質土器片2点(小皿), 瓦質土器片4点(火鉢1, 甕3), 瓦片42点(丸瓦6, 棧瓦36)が出土している。107~110・T33は覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 出土土器と, 当次面が近代の直前まで使用されていることから, 19世紀代に比定できる。



第75図 第14号土坑・出土遺物実測図

第14号土坑出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
107	磁器	小杯	[6.0]	2.5	2.2	緻密	灰白	良好	体部外面扇文	覆土中	20%肥前系
108	土師質土器	小皿	[9.7]	1.4	[6.4]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 見込みが若干突出	覆土中	30%
109	磁器	碗	[9.8]	4.7	[3.8]	緻密	灰白	良好	染付 草花文	覆土中	40%肥前系 PL17
110	陶器	花生	-	(6.3)	-	長石・石英・礫鉄釉	褐	良好	外面施釉 外面櫛状工具による格子状の沈線	覆土中	5%

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T33	瓦	軒棧瓦	(3.7)	(8.1)	7.2	4.7	0.6	8	-	-	-	-	-	灰	長石・黒色粒子	普通	接合面に掻き目 巴文右	覆土中	PL15

**第21号土坑(第76図)**

**位置** 調査区東部のI 3h2区, 標高28.1mの台地上平坦部に位置している。

**重複関係** 第4号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部が調査区外に延び, 南東部が第4号溝に掘り込まれているため, 短軸は0.60mで, 長軸は1.32mしか確認できなかった。深さは25cmで, 底面は皿状であり, 壁は外傾して立ち上がっている。

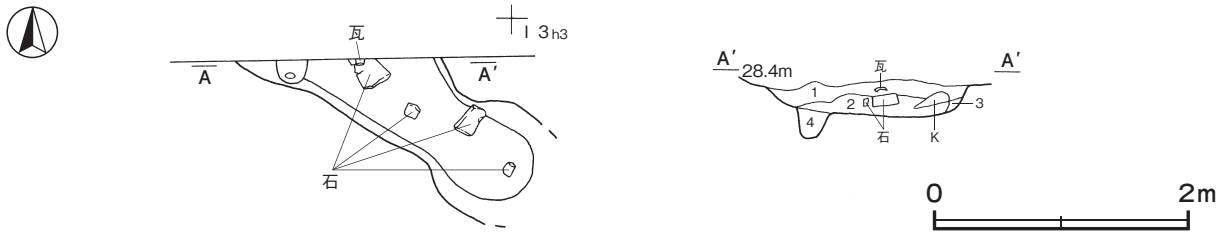
**覆土** 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                               |                           |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・細礫少量       | 3 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・細礫微量 | 4 暗褐色 焼土粒子少量              |

**遺物出土状況** 瓦片8点(丸瓦2, 棧瓦6), 鉄製品4点(釘)が出土している。いずれも遺存状態が悪いため図示できない。

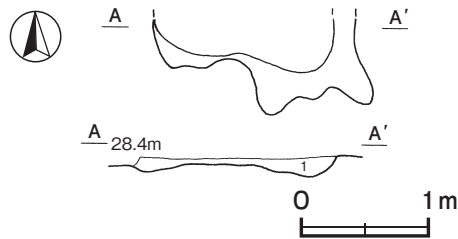
**所見** 時期は、同じ面で、18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。



第76図 第21号土坑実測図

**第165号土坑 (SX11) (第77図)**

**位置** 調査区中央部のI 2h0区, 標高28.3mの台地上平坦部に位置している。



第77図 第165号土坑実測図

**規模と形状** 北部が攪乱を受けているため、長軸は1.60mで、短軸は0.72mしか確認できなかったが、不定形と推定できる。本跡の範囲に、円礫を確認した。深さは10～14cmで、底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層である。整地を行う際に埋め戻されたと考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 大円礫中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 陶器片3点(碗1, 皿2), 磁器片1点(碗), 瓦片58点(丸瓦6, 棧瓦52)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、同じ面から18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。

④柱穴列跡

**第4号柱穴列跡 (第78図)**

**位置** 調査区西部のI 2h9～I 2j8区, 標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

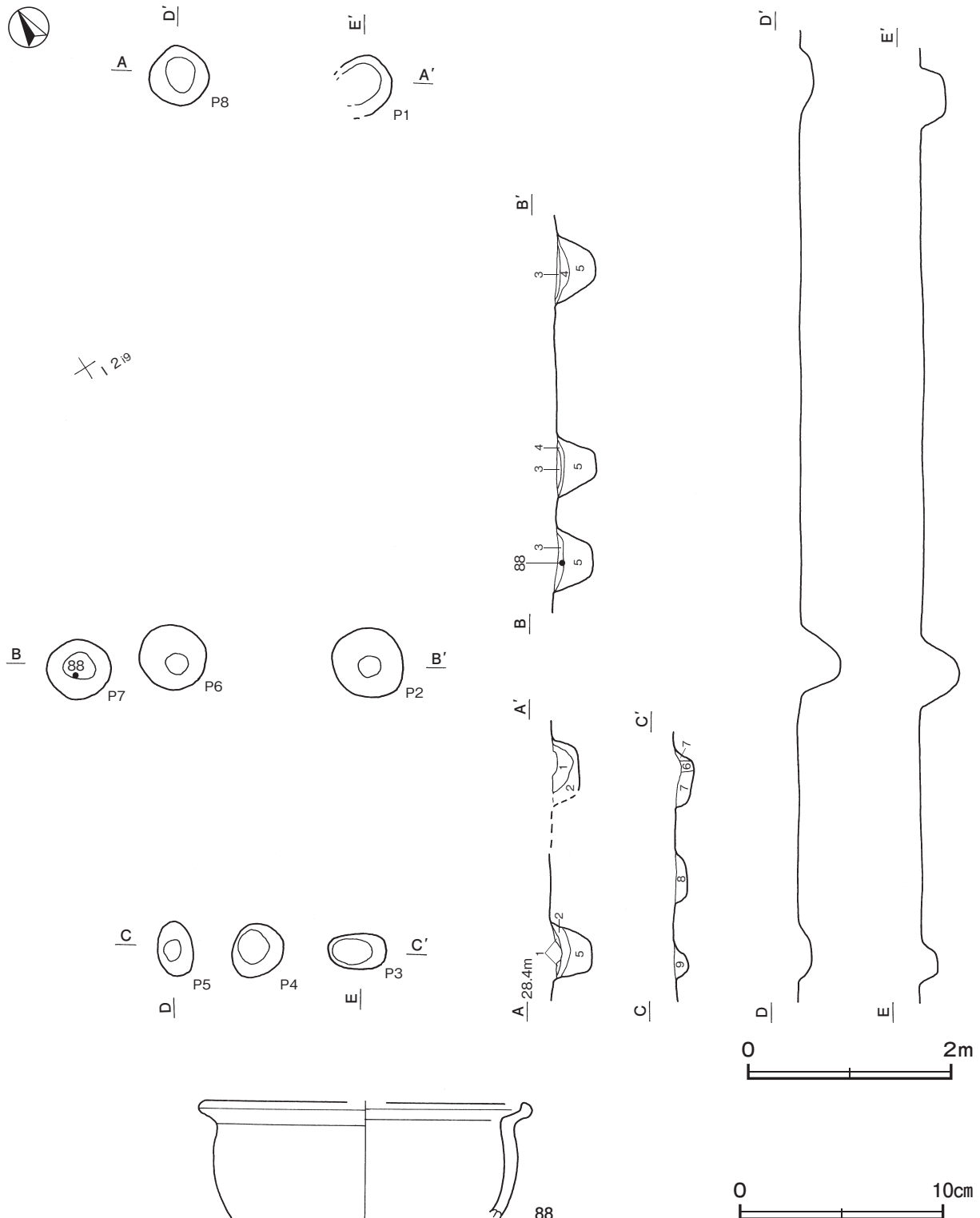
**重複関係** 第6号ピット群P5～P8を掘り込んでいる。

**規模と構造** I 2j8区から北東方向(N-31°-E)に2条の柱穴列跡が並行して延びている。確認できた長さは、北東・南西軸が8.60m, 北西・南東軸が1.90mで、P1とP8, P2とP6, P3とP5が、それぞれ対応する。P7は、P1・P2・P6・P8と同様に礫が確認でき、一連の柱穴の可能性のあることから、本跡に含めて記載する。間尺は、1間を6尺3寸としている。柱間寸法は、P1・P2の間が5.7m(3間), P2・P3の間が2.8m(1間半)である。P8・P6の間, P6・P5の間もほぼ同様である。平行して延びる2条の柱穴列跡の柱間寸法は、1.9m(1間)である。P7はP6から北西方向に0.90m(3尺)の位置に配されている。

**柱穴** 平面形は円形または楕円形で、長径 34～68cm、短径 32～67cmである。深さは 6～39cm で、断面形はU字状及び皿状である。P 1・P 2・P 6～P 8では礫が確認でき、根石と考えられる。

**柱穴土層解説 (各柱穴共通)**

- |                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| 1 灰褐色 大円礫・焼土ブロック微量        | 6 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子微量  |
| 2 にぶい褐色 大円礫多量             | 7 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子微量    |
| 3 黒褐色 ロームブロック・細礫少量、粘土粒子微量 | 8 褐色 大円礫・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 細礫中量、ロームブロック微量      | 9 褐色 細礫少量、焼土ブロック微量   |
| 5 暗褐色 大円礫中量、焼土粒子少量        |                      |



第 78 図 第 4 号柱穴列跡・出土遺物実測図



**遺物出土状況** 陶器片9点（碗4，鉢1，土瓶4），磁器片4点（碗），土師質土器片10点（小皿7，鍋1，鉢1，甕1），瓦質土器片1点（火鉢），瓦片52点（丸瓦12，棧瓦40），鉄製品1点（釘）が各柱穴から出土している。また混入した土師器片1点（坏）が出土している。88はP7の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は，出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから，19世紀代に比定できる。性格は，P1・P2・P6～P8にそれぞれ礫が確認されることから，二の丸御殿の一部屋を構成していたものと推定される。P3・P5は礫が確認されないことから，上屋を有するものではなく，廊下などの一部と想定されるが，明確ではない。

第4号柱穴列跡出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
88	陶器	鉢	[16.0]	(5.8)	-	精良 海鼠釉	青灰	良好	外・内面施釉	P7 (SA1P1)	20%松岡 PL17

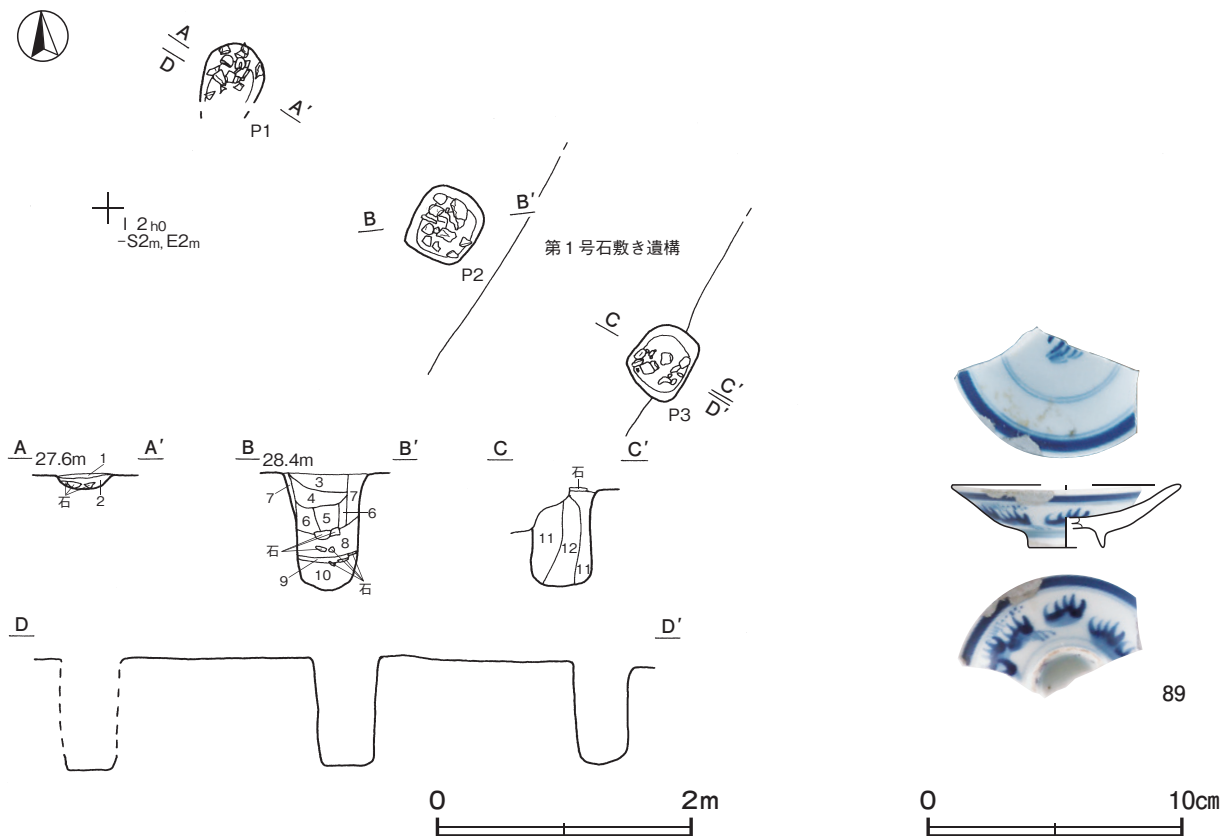
**第5号柱穴列跡（第79図）**

**位置** 調査区中央部のI2h0～I3h1区，標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号石敷き遺構，第6号ピット群P11を掘り込み，第6号瓦溜まりに掘り込まれている。

**規模と構造** I3h1区から北西方向（N-60°-W）に延びている。確認できた長さは，3.96mである。柱間寸法は，1.98m（6尺5寸）である。

**柱穴** 平面形は楕円形または隅丸方形で，長径55～59cm，短径43～47cmである。深さは14～91cmで，断面形は皿状である。各柱穴の底面で礫が確認でき，根石と考えられる。P1は第6次面，P2・3は第3次



第79図 第5号柱穴列跡・出土遺物実測図

面で確認されたが、間尺や礫が用いられていることが共通しており、同時期に構築されたと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |         |                             |         |                             |
|---------|-----------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒褐色   | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量         | 7 灰褐色   | 粘土ブロック少量                    |
| 2 暗褐色   | 中角礫中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量     | 8 褐色    | 大円礫・ローム粒子少量                 |
| 3 暗褐色   | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・細礫微量       | 9 にぶい褐色 | 粘土粒子中量                      |
| 4 にぶい褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量 | 10 褐色   | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量         |
| 5 黒褐色   | 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量         | 11 黒褐色  | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細礫微量 |
| 6 暗褐色   | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細礫微量 | 12 黒褐色  | ローム粒子微量                     |

**遺物出土状況** 陶器片1点（碗）、磁器片3点（碗2、小皿1）、瓦片56点（丸瓦2、平瓦15、棧瓦39）が各柱穴から出土している。また混入した土師器片3点（坏）が各柱穴から出土している。89はP2の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから18世紀後半から19世紀代に比定できる。性格は、根石と推定される礫が確認されることから、上屋構造を構成する柱穴の一部と推定できるが、部分的な確認のため、明確ではない。

**第5号柱穴列跡出土遺物観察表**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
89	磁器	小皿	[9.0]	2.5	[2.9]	緻密	灰白	良好	染付 外面草花文 施文	P2 (SK12)	30%瀬戸

**⑤ピット群**

**第7号ピット群（第80図）**

**位置** I2j8区からI3i3区、標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第6号ピット群P6、第8号ピット群P1を掘り込み、第4号溝、第4号用排水路に掘り込まれている。

**規模と形状** 南北9.5m、東西19.5mの範囲に、14か所のピットを確認した。

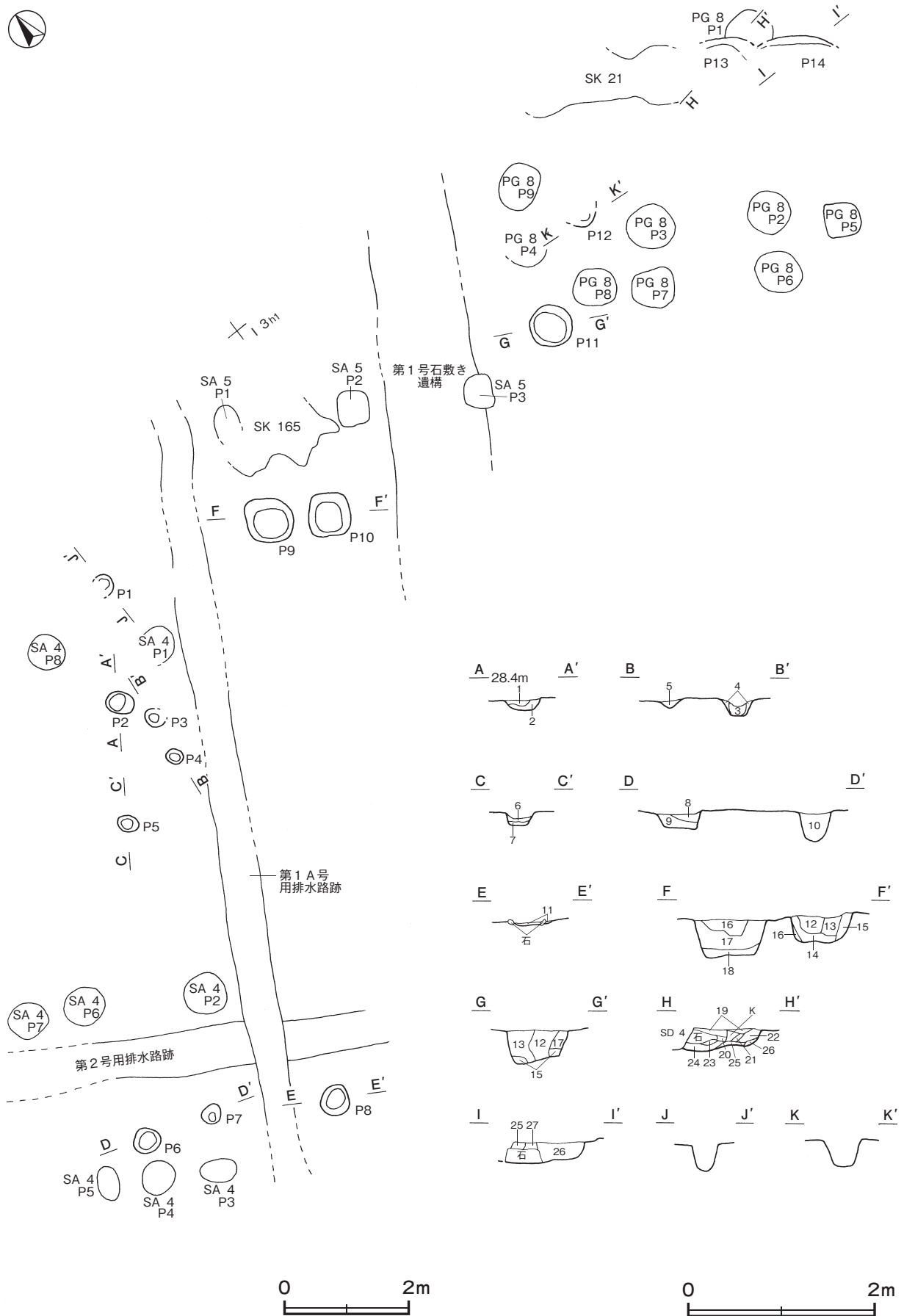
**ピット** 14か所。長径28～80cm、短径23～71cmの円形・楕円形・隅丸方形で、深さは4～42cmである。

**ピット土層解説（各ピット共通）**

- |           |                     |        |                         |
|-----------|---------------------|--------|-------------------------|
| 1 灰褐色     | 焼土ブロック・大円礫・炭化粒子微量   | 15 黒褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子微量           |
| 2 褐色      | 大円礫少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 16 褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量、大円礫・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色     | ローム粒子少量             | 17 黒褐色 | 炭化粒子中量、大円礫少量、焼土粒子微量     |
| 4 褐色      | ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 18 褐色  | 焼土粒子少量、炭化物微量            |
| 5 暗褐色     | 大円礫中量、ロームブロック少量     | 19 褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量             |
| 6 褐色      | ローム粒子・炭化粒子微量        | 20 暗褐色 | ローム粒子少量、大円礫微量           |
| 7 灰褐色     | ローム粒子少量、粘土粒子微量      | 21 灰褐色 | 焼土粒子微量                  |
| 8 褐色      | 大円礫少量、焼土粒子微量        | 22 灰褐色 | 焼土ブロック・大円礫・凝灰岩片微量       |
| 9 暗褐色     | 焼土粒子・炭化粒子微量         | 23 褐色  | ローム粒子多量                 |
| 10 にぶい黄褐色 | 焼土粒子微量              | 24 暗褐色 | 炭化粒子少量、大円礫・焼土粒子微量       |
| 11 褐色     | 焼土粒子・炭化粒中量、大円礫少量    | 25 褐色  | 焼土ブロック少量、炭化物微量          |
| 12 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子少量         | 26 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、大円礫微量       |
| 13 にぶい黄褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量       | 27 褐色  | ローム粒子多量、焼土粒子微量          |
| 14 暗褐色    | 焼土粒子少量、ローム粒子微量      |        |                         |

**遺物出土状況** 陶器片6点（碗4、小皿1、甕1）、磁器片8点（碗7、鉢1）、瓦質土器片2点（火鉢）、瓦片78点（丸瓦9、平瓦5、棧瓦64）、鉄製品2点（釘）が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、同じ面で18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確でない。



第 80 図 第 7 号ピット群実測図

第8号ピット群 (第81図)

位置 調査区東部のI 3h1 ~ I 3i2区, 標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第36号土坑を掘り込み, 第4号用排水路, 第7号ピット群P13・P14に掘り込まれている。

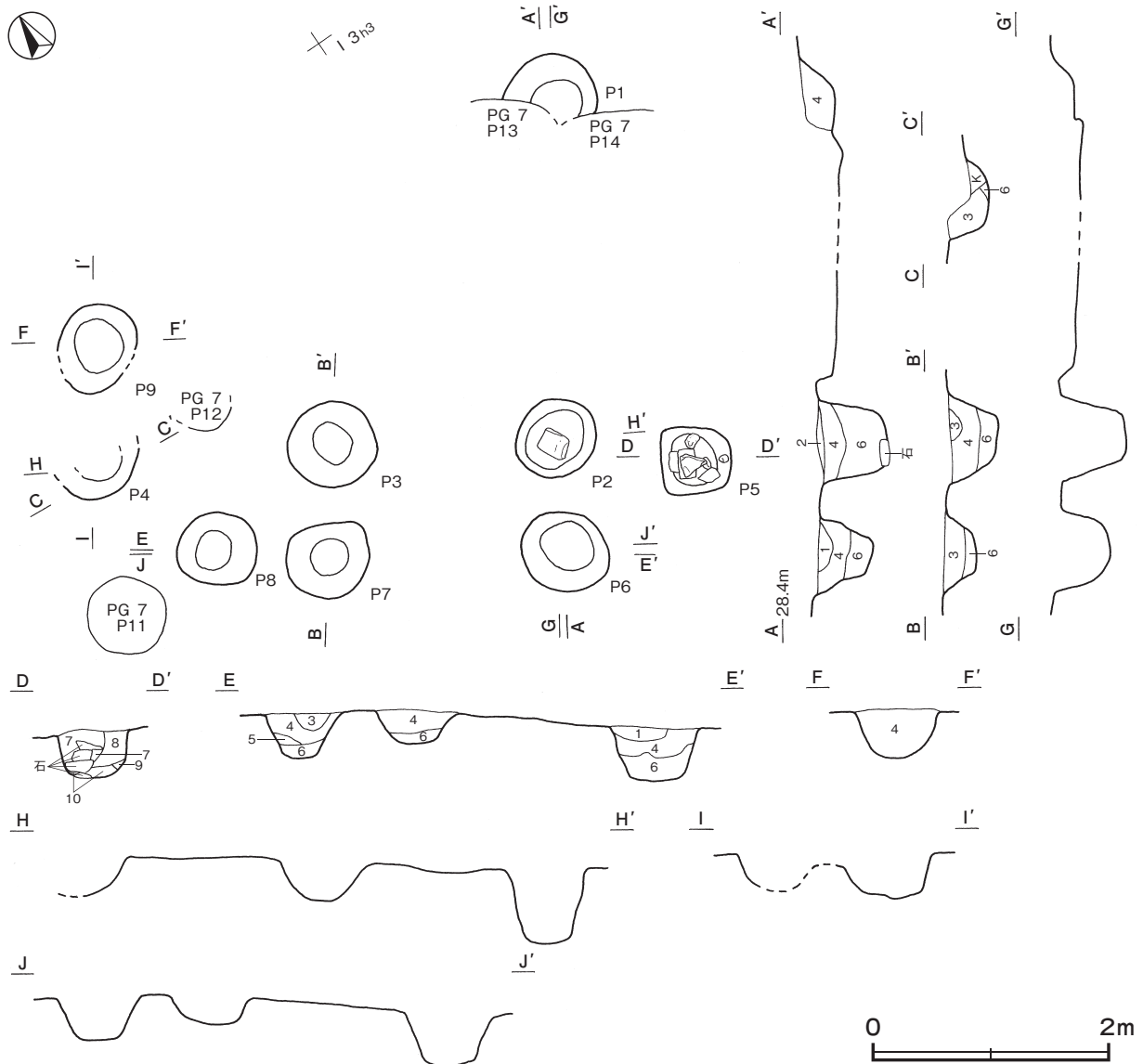
規模と形状 南北4.4m, 東西5.8mの範囲に, 9か所のピットを確認した。

ピット 9か所。各ピットで礫が確認されることから, 第7号ピット群と区別できる。長径57~78cm, 短径55~74cmの円形・楕円形・隅丸方形で, 深さは26~60cmである。断面形はU字状及び皿状である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- |                                   |                                    |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量, 大円礫少量, 炭化粒子微量       | 7 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・細礫微量 |
| 2 明褐色 大円礫多量, ローム粒子中量              | 8 褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子・細礫微量  |
| 3 暗褐色 炭化粒子少量, 大円礫微量               | 9 褐色 ローム粒子微量                       |
| 4 褐色 大円礫少量, ローム粒子微量               | 10 暗褐色 ローム粒子少量, 大円礫微量              |
| 5 暗褐色 中円礫多量, ローム粒子中量              |                                    |
| 6 暗褐色 大円礫中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |                                    |

遺物出土状況 陶器片9点 (碗4, 鉢1, 土瓶4), 磁器片4点 (碗), 土師質土器片10点 (小皿7, 鍋1, 鉢1, 甕1), 瓦質土器片1点 (火鉢), 瓦片34点 (丸瓦7点, 平瓦1, 棧瓦26点), 鉄製品1点 (釘) が各ピットから出土している。また混入した土師器片1点 (坏) が出土している。

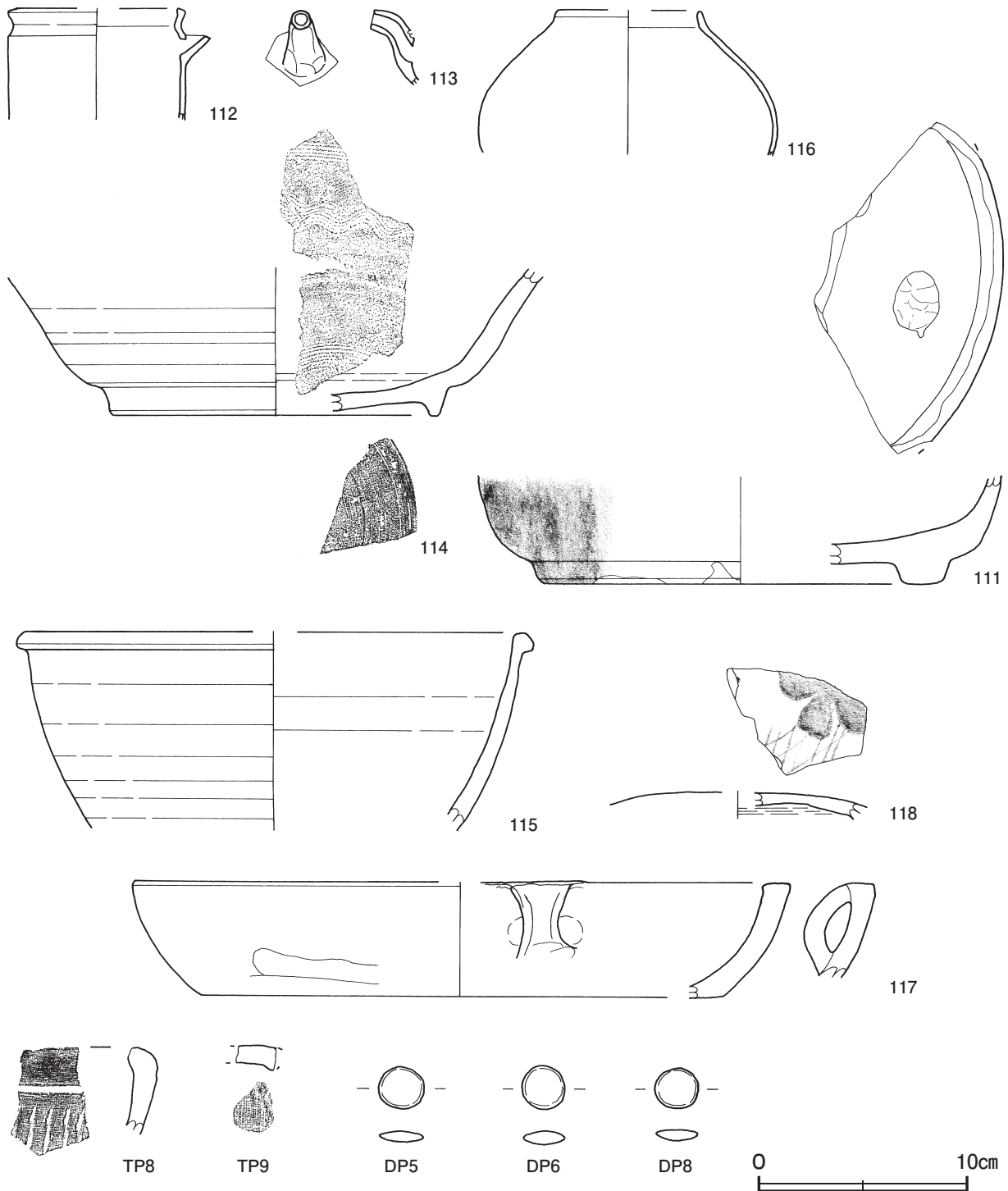


第81図 第8号ピット群実測図

所見 時期は、同じ面で18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。性格は、各ピットで礫が確認されることから、柱穴と推定できるが、並びが明確ではないため、上屋構造は不明である。

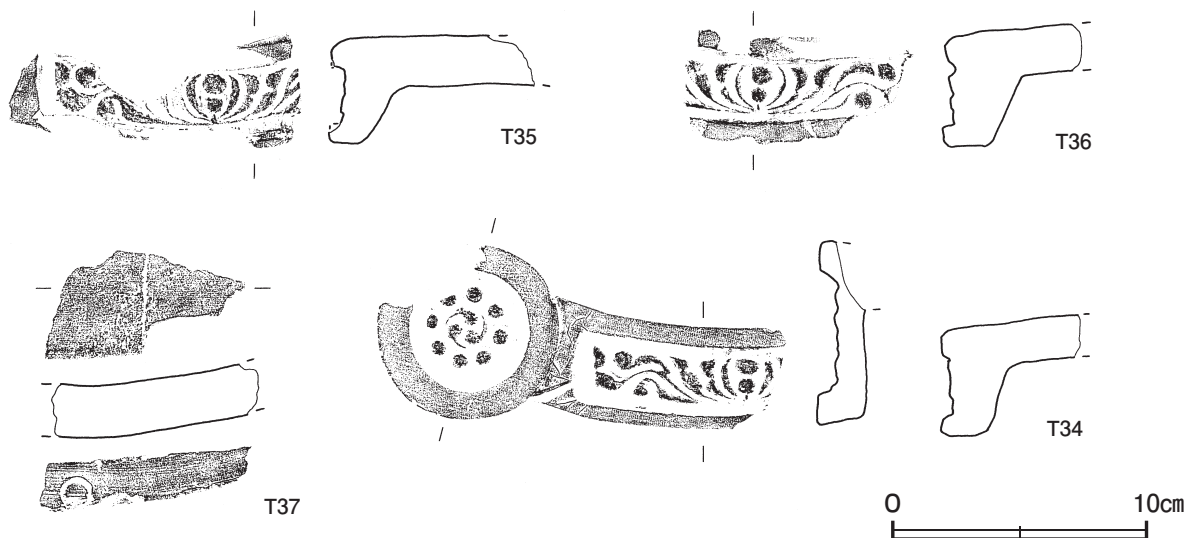
⑥遺構外出土遺物（第3次面）（第82・83図）

当次面の遺物は、18世紀中葉から19世紀代の遺物が主体となる。



第82図 遺構外出土遺物実測図(1)





第 83 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

第 3 次面遺構外出土遺物観察表 (第 82・83 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
111	陶器	甕	-	(5.2)	[19.0]	長石・石英 銅緑釉 鉄釉	緑・灰白 浅黄	良好	外・内面銅緑釉 底部外面鉄釉 内面トチン痕	I 2h8	10% 笠間
112	陶器	ちろり	[7.8]	(5.4)	-	長石 鉄釉	暗褐	良好	外・内面施釉	I 2h9	10%
113	陶器	水注	-	(3.6)	-	精良 灰釉	灰オリーブ	良好	注口貼付 外・内面施釉	I 2h9	5% 瀬戸・美濃
114	陶器	鉢	-	(7.1)	[15.7]	長石・礫 灰釉	灰黄	普通	高台貼付 体部内面波状の櫛目 見込みに櫛目 高台内側露胎	I 2h0	5% 瀬戸・美濃
115	陶器	鉢	[24.0]	(9.5)	-	長石・石英 海鼠釉	暗青灰	普通	外・内面施釉 体部外面ロクロ目	I 2i8	5% 松岡 PL18
116	陶器	壺	[6.8]	(6.9)	-	精良 透明釉	にぶい黄褐	良好	外面施釉 口唇部露胎	I 2j9	20% 松岡カ PL17
117	瓦質土器	焙烙	[31.6]	5.5	[25.1]	長石・石英・ 赤色粒子	黒褐	普通	体部下端ヘラ削り 耳貼付	I 2j9	10% PL11
118	陶器	蓋	-	(1.3)	-	精良 長石 長石釉	灰白	良好	外・内面施釉 外面鉄絵による草花文	-	5% 唐津 PL18

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 8	瓦質土器	火鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	体部外面横位に 1 条の沈線 縦位に数条の沈線	I 2j9	PL12
TP 9	土師質土器	焼塩壺蓋	長石・雲母	にぶい橙	内面布目痕	I 2j9	

番号	器種	径	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 5	彈碁石	2.2	-	0.5	2.28	長石	表面ナデ	I 2h8	PL13
DP 6	彈碁石	2.0	-	0.6	2.24	長石	表面ナデ	I 2j9	PL13
DP 8	彈碁石	2.1	-	0.5	2.18	長石・角尖石	表面ナデ	I 3h1	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T34	瓦	軒棧瓦	(5.4)	(16.9)	7.0	4.8	0.6~ 0.7	8	(8.2)	2.4	0.7	0.5	4.8	灰	長石・石英	普通	巴文右 唐草文	I 2h8	PL15
T35	瓦	軒棧瓦	(8.0)	(12.1)	-	-	-	-	(10.2)	(2.1)	-	-	4.1	暗灰	長石・石英	普通	唐草文	I 2h8	
T36	瓦	軒棧瓦	(6.0)	(8.9)	-	-	-	-	(8.7)	(2.4)	0.7	0.7	4.3	にぶい 赤褐	長石・石英・ 赤色粒子	普通	唐草文	I 2h8	
T37	瓦	棧瓦	(4.3)	(8.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	2.1	にぶい 橙	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	普通	○の刻印	I 3h3	

(4) 近世遺構一覽表

表7 石組み遺構一覽表

番号	次面	位置	主軸方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)					
2A	4	I 2h9	N-29°-E	方形・台形	1.92×1.52	167	-	直立	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 煙管, 釘, ガラス製小玉	第2B号石組み遺構→本跡→SK24
2B	4	I 2i9	N-34°-E	長方形	1.37×0.97	104	-	直立	人為	陶器, 磁器, 土師質土器	PG3→本跡→第2A号石組み遺構, SK24
1	5	I 2h0	N-32°-E	長方形	2.02×1.17	80	平坦	直立	人為	-	-

表8 用排水路跡一覽表

番号	次面	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1A	3	I 2h0~I 2j9	N-30°-E	直線状	(12.2)	0.48~0.62	0.20	60	U字状	外傾	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦	第2号用排水路跡, SK161, 164→本跡→第1B号用排水路跡, SK161, 164, SK165
2	3	I 2i8~I 2j9	N-58°-W	直線状	(7.0)	0.60~0.74	0.44~0.50	14	平坦	外傾	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦	本跡→第1A号用排水路

表9 土坑一覽表

番号	次面	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
22	4	I 2h9	-	-	1.48×(0.50)	39	皿状	緩斜	人為	-	-
24	4	I 2h9	N-30°-E	方形	1.56×1.42	44	平坦	緩斜	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘	第2A・2B号石組み遺構→本跡
36	4	I 3i2	-	[円形]	2.39×(1.54)	182	凹凸	内傾・波状	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 泥面子, 釘, 鏡, 銭貨	SE2→本跡→PG6・8
37	4	I 2h0	N-55°-E	[隅丸方形]	1.60×(1.22)	24	平坦	外傾	人為	磁器, 土師質土器	-
118	4	I 3h1	-	円形	0.50	45	平坦	外傾	人為	瓦, 銭貨, 砥石	-
163	4	I 2j8	-	[円形]	(2.06×1.00)	(140)	-	垂直	人為	-	SK161, PG5, SK24→本跡→第1A・1B号用排水路跡, SK164, PG6
164	4	I 2j9	N-34°-E	長方形	2.18×1.54	94	平坦	外傾	人為	陶器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘, 鏝	SK163, PG5→本跡→第1A・1B号用排水路
14	3	I 2h9	N-30°-E	隅丸長方形	(5.86)×1.75	24	皿状	緩斜	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦	-
21	3	I 3h2	-	-	(1.32)×0.60	25	皿状	外傾	人為	瓦, 釘	本跡→SD4
165	3	I 2h0	-	不定形	1.60×(0.72)	10~14	凹凸	外傾	人為	陶器, 磁器, 瓦	-

表10 柱穴列跡一覽表

番号	次面	位置	方向	長さ(m)	柱間寸法(m)	柱穴				主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
						柱穴数	平面形	長径/短径(m)	深さ(cm)		
4	3	I 2h9~I 2j8	N-31°-E	8.60/1.90	5.7, 2.8×1.9	8	円形 楕円形	0.34~0.68/ 0.33~0.76	6~39	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘	PG6→本跡
5	3	I 2h0~I 3h1	N-60°-W	3.96	1.98	3	楕円形 隅丸方形	0.55~0.59/ 0.43~0.47	(14)~91	陶器, 磁器, 瓦	第1号石敷き遺構, PG6→本跡→第6号瓦溜まり

表11 ピット群一覽表

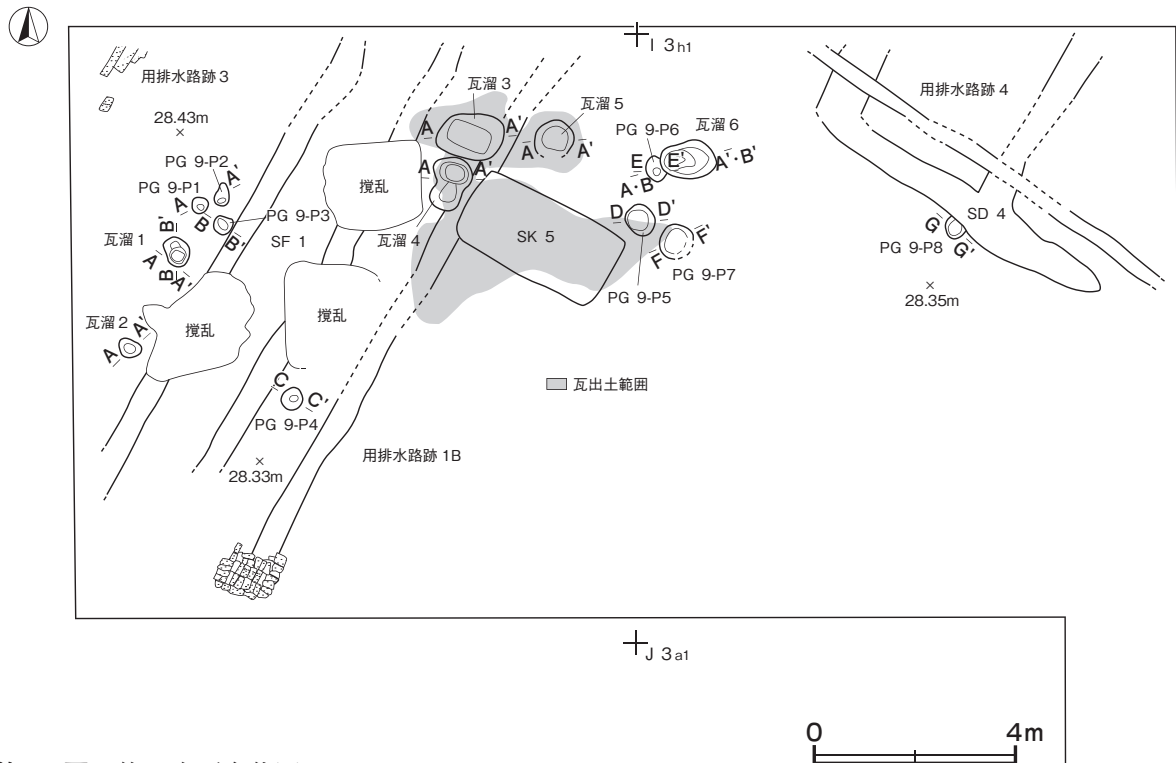
番号	次面	位置	形状	範囲(m)	柱穴				主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					柱穴数	平面形	長径/短径(m)	深さ(cm)		
6	4	I 2h9~I 3h3	不定形	[10.5×25.5]	15	円形 楕円形 不整楕円形	0.39~1.32/ 0.33~0.76	4~84	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘	SK36・163→本跡→第1号石敷き遺構, SA4・5, PG7
5	5	I 2h8~I 3h2	不定形	[9.0×16.7]	31	円形 楕円形 隅丸方形	0.32~0.86/ 0.27~0.68	7~65	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘	SK93, SA3, PG4→本跡→SK163・164
7	3	I 2j8~I 3i3	不定形	[9.5×19.5]	14	円形 楕円形 隅丸方形	0.28~0.80/ 0.23~0.71	4~42	陶器, 磁器, 瓦質土器, 瓦, 釘	PG6・8→本跡→SD4, 第4号用排水路
8	3	I 3h1~I 3i2	方形	[4.4×5.8]	9	円形 楕円形 隅丸方形	0.57~0.78/ 0.55~0.74	26~60	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 釘	SK36→本跡→第4号用排水路, PG7

#### 4 近代の遺構と遺物（第2次面）

当時代の遺構は、用排水路跡3条、道路跡1条、溝跡1条、瓦溜まり6基、土坑1基、ピット群1か所を確認した。

##### (1) 第2次面（第84図）

当次面は、出土遺物などから、尋常師範学校の創立に伴い整地されたものと考えられる。19世紀末葉から20世紀中葉まで機能していたと推定される。



第84図 第2次面全体図

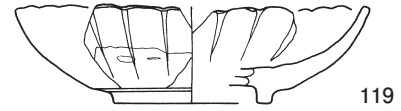
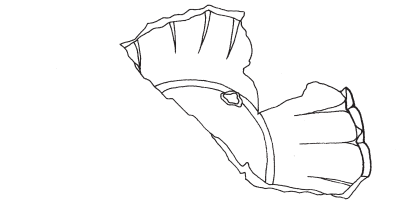
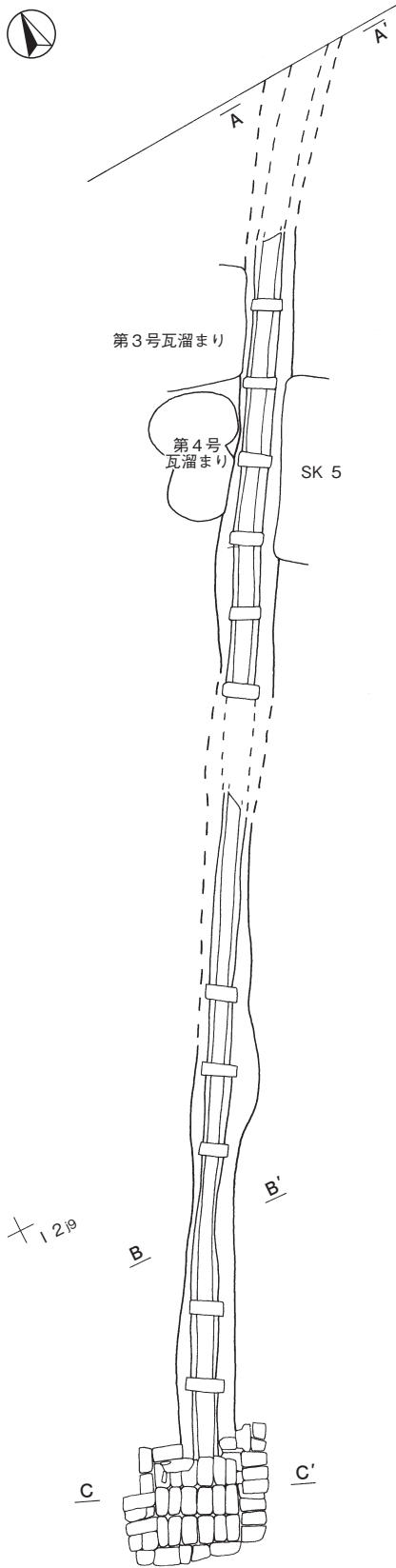
##### ①用排水路跡

##### 第1B号用排水路跡（SX 7新）（第85図）

**位置** 調査区北西部のI 2h0～I 2j8区、標高28.4mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1A号用排水路跡、第163・164号土坑を掘り込み、第3・4号瓦溜まり、第5号土坑に掘り込まれている。

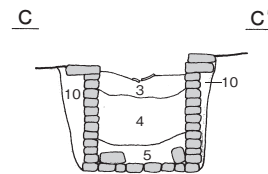
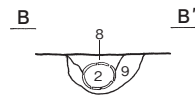
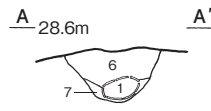
**規模と形状** I 2j8区から北東方向（N - 30° - E）に直線状に延び、陶器製土管が埋設されている。北東端が調査区域外に延びているため、長さは12.4mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.36～0.52m、下幅0.12～0.26m、深さ30cmほどで、U字状に掘り込まれている。埋設土管の大きさは、長さ約0.70m、幅約0.22m、連結部幅約0.30mである。南西端には、長軸1.16m、短軸0.98m、深さ84cmの煉瓦で方形に組まれた柵が土管と接続している。煉瓦の大きさは、長さ約20cm、幅約12cm、厚さ約6cmである。柵の内側の壁面は、厚さ約2cmにモルタル状のものが塗られていた。



119



T39



第 85 図 第 1B 号用排水路跡・出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第6～10層は、掘方への埋土である。

**土層解説**

1	黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子微量	7	褐色	粘土ブロック・ローム粒子・細礫少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子微量	8	褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・細礫微量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・細礫微量	9	暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子微量	10	灰褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
5	灰褐色	炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量			
6	暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・細礫少量, 炭化物・粘土粒子微量			

**遺物出土状況** 混入した陶器片6点(碗4, 菊皿1, 皿1), 磁器片10点(碗7, 皿2, 瓶1), 土師質土器片7点(小皿1, 鉢4, 甕2), 瓦質土器片2点(鉢, 甕), 瓦片495点(丸瓦113, 棧瓦375, 有刻印[全]棧瓦4, 雁振瓦3)が出土している。119・T39は覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 出土遺物と当次面が近代の整地層であることから19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。第3次面で確認された, 第1A号用排水路跡の直上に, 同じ軸方向で構築されており, 水戸城二の丸御殿の軸方向を踏襲していることが推定できる。柵に接続しており, 排水路として機能していたことが想定される。

**第1B号用排水路跡出土遺物観察表(第85図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
119	陶器	菊皿	[13.6]	3.8	[6.3]	精良 長石 灰釉	浅黄橙 オリーブ	普通	口唇部輪花 高台部貼付 内面打出し菊花文 トチン跡赤変	覆土中	30% PL18 瀬戸・美濃

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T39	瓦	棟込瓦	(5.4)	(8.0)	[10.0]	[8.2]	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・ 黒色粒子	普通	巴文右	覆土中	

**第3号用排水路跡(SX12)(第86図)**

**位置** 調査区北西部のI 2h8区, 標高28.2mの台地上に位置している。

**規模と形状** 北東部が調査区外に延び, 南西部が攪乱を受けているため, 北東方向(N-36°-E)に長さ1.46mしか確認できなかった。幅は0.56mで, 凝灰岩を底部に敷き, 両側に花崗岩を立てている。

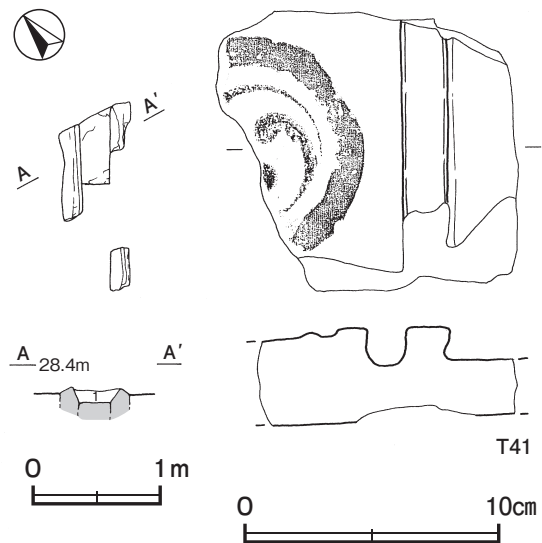
**覆土** 単一層である。炭化粒子を中量含むことから埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子微量

**遺物出土状況** 混入した瓦片64点(丸瓦14, 棧瓦50)が出土している。T41は覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 当次面が近代の整地層であることから, 19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。



**第86図** 第3号用排水路跡・出土遺物実測図



第3号用排水路跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T41	瓦	不明	(11.0)	(11.9)	(9.0)	(6.4)	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	長石・石英	普通	巴文左	覆土中	

第4号用排水路跡（SX 9）（第87図）

**位置** 調査区東部のI 3h1～I 3i3区、標高28.4mの台地上に位置している。

**重複関係** 第4号溝跡、第7号ピット群P12・第8号ピット群P9を掘り込んでいる。

**規模と形状** I 3i3区から北西方向(N - 57° - W)に直線状に伸び、陶器製土管が埋設されている。両端が調査区域外に伸びているため、長さは8.30mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.22～0.32m、下幅0.06～0.12m、深さ48cmほどで、U字状に掘り込まれている。埋設土管の大きさは、長さ約0.6m、幅約0.12m、接合部幅約0.18mである。

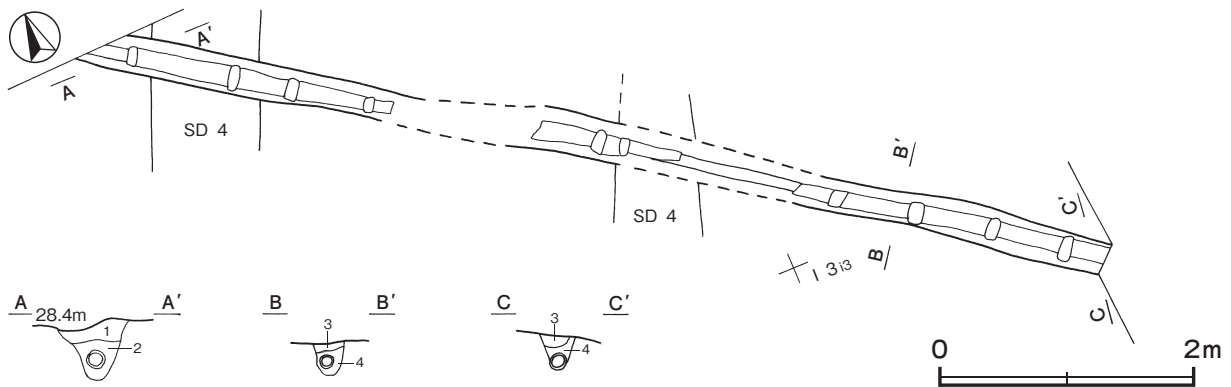
**埋土** 4層に分層できる。第1～4層は、掘方への埋土である。

**土層解説**

- |   |        |                  |   |     |                      |
|---|--------|------------------|---|-----|----------------------|
| 1 | オリーブ黒色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、細礫微量 | 3 | 褐色  | ロームブロック・細礫少量、炭化粒子微量  |
| 2 | 暗オリーブ色 | 炭化粒子・細礫少量、焼土粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量 |

**遺物出土状況** 混入した瓦片54点（丸瓦1、棧瓦53）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、当次面が近代の整地層であることから、19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。第4号用排水路跡と同種の土管が確認でき、排水路と推定できるが、柵などは確認されず、明確ではない。



第87図 第4号用排水路跡実測図

②道路跡

第1号道路跡（第88図）

**位置** 調査区西部のI 2h0～I 2j8区、標高28.5mの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** I 2j8区から北東方向(N - 30° - E)に直線状に伸び、北東・南西端が調査区外へ伸びているため、長さ12.0mしか確認できなかった。路面の規模は、幅約1.30m、厚さ10～16cmで、路面の断面形は台形である。路面の両脇に、花崗岩が敷かれた2条の溝が平行しており、位置や形状から側溝と考えられる。側溝の規模は、上幅0.40～0.52m、下幅0.24～0.36m、深さ14～26cmで、断面形はU字状及び箱状である。

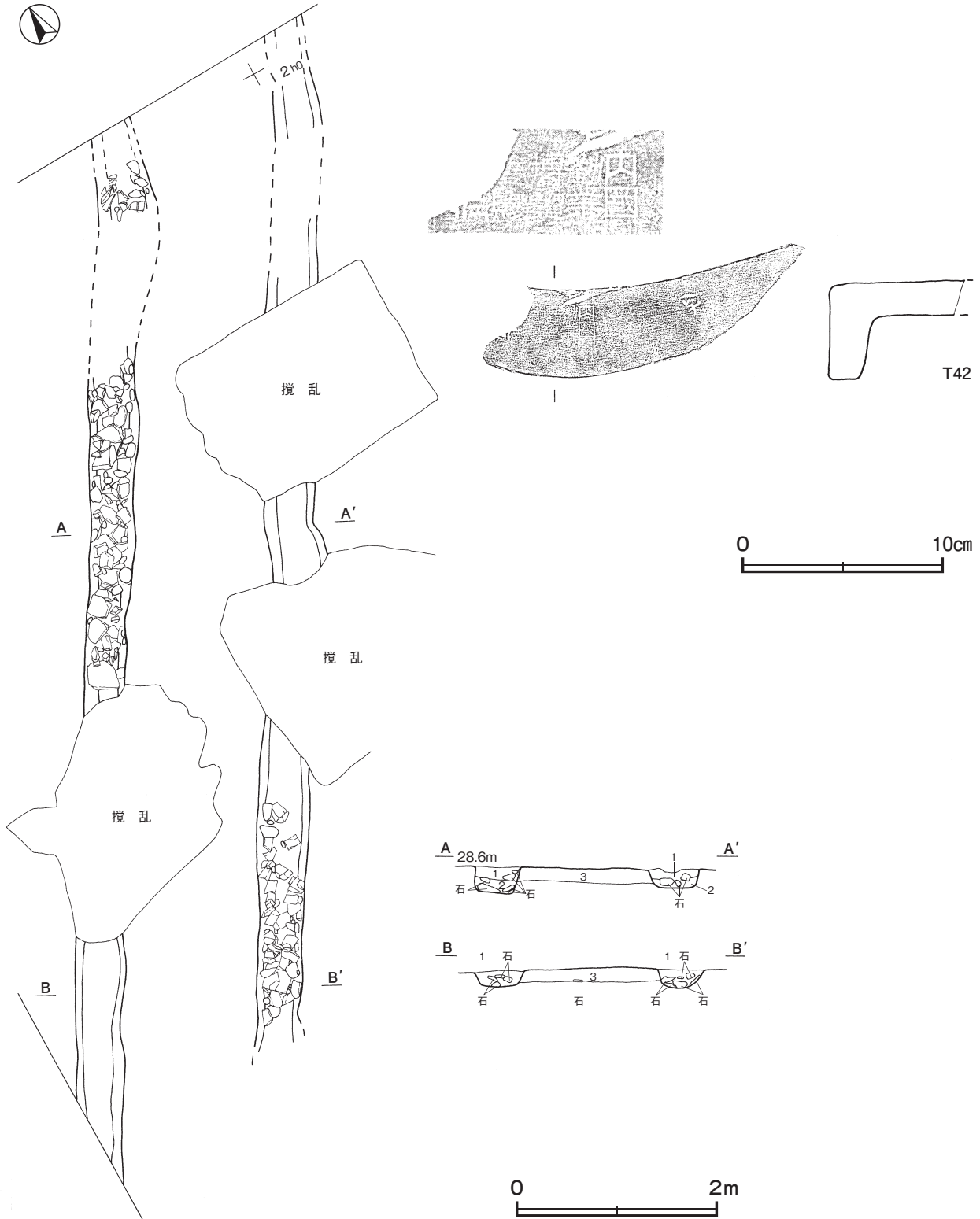
**覆土** 2層に分層できる。円礫を少量含むことから、埋め戻されている。第3層は路面の構築土である。

**土層解説**

- 1 明 褐 色 ローム粒子中量, 大円礫少量
- 2 暗 褐 色 大円礫・ローム粒子少量

- 3 にぶい褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量

**遺物出土状況** 混入した陶器片3点(碗2, 土瓶蓋1), 磁器片8点(碗4, 鉢3, 小鉢1), 瓦片128点(丸瓦2, 棧瓦126)が出土している。T42は路面の構築土中から出土している。



第88図 第1号道路跡・出土遺物実測図

所見 構築時期は、出土遺物から 20 世紀前葉に比定できる。側溝に花崗岩を敷き、粘土を用いて路面を構築していることから、尋常師範学校内の主要な道路の一つであったことが想定できる。

第 1 号道路跡出土遺物観察表 (第 88 図)

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T42	瓦	軒棧瓦	(6.8)	(17.6)	-	-	-	-	-	-	-	-	4.6	灰	長石・石英・ 黒色粒子	普通	全・内國勸業博 覽會賜 <sup>□</sup> 刻印	構築土中	PL15

③溝跡

第 4 号溝跡 (SX8) (第 89 図)

位置 調査区東部の I 3h2 ~ I 3i3 区, 標高 28.6 m の台地上平坦部に位置している。

重複関係 第 21 号土坑, 第 7 号ピット群 P13・第 9 号ピット群 P8 を掘り込み, 第 4 号用排水路に掘り込まれている。

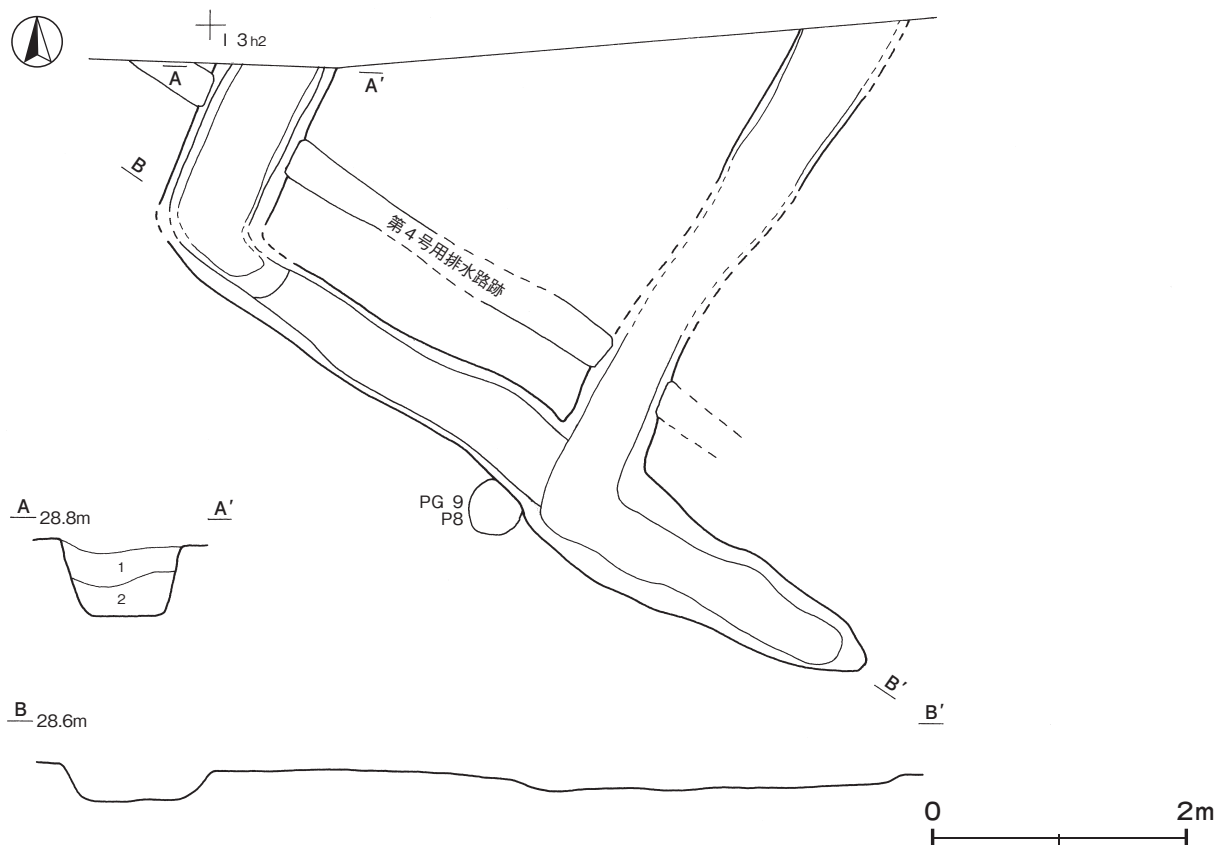
規模と形状 I 3h2 区から北東方向 (N - 31° - E) に平行して延びる 2 条の溝が, 同区内で南東方向に直角に曲がり, 連結している。北東部が調査区外に延びており, 北西・南東軸は 6.68m で, 北東・南西軸は 4.80m しか確認できなかった。規模は, 上幅 0.64 ~ 0.92m, 下幅 0.36 ~ 0.54m, 深さは 52cm ほどで, 断面形は逆台形状である。平行している, 北西側の溝の内部は 10cm ほど高まっており, 北東側の溝は, 北西側の溝より約 10cm 低い位置に構築されている。連結した溝は, 南東方向に延び, 途中で消滅している。

覆土 2 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示すことから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・円礫少量

2 暗褐色 花崗岩片中量



第 89 図 第 4 号溝跡実測図

**遺物出土状況** 瓦片 19 点 (棧瓦) が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、当次面が近代の整地層であることから、19 世紀末葉から 20 世紀中葉に比定できる。北東から南西にかけて、徐々に勾配が下がっていることから、排水施設が想定されるが、詳細は不明である。

④瓦溜まり (第 90・91 図)

当次面で、瓦溜まり 6 基を確認した。いずれも断面図と土層解説及び一覧表で、平面図と瓦の分布する範囲は、当次面の遺構全体図で掲載する。第 2・6 号瓦溜まりは遺物出土状況図を、特徴的な遺物については、遺物実測図と観察表を掲載する。

第 1 号瓦溜まり土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 2 号瓦溜まり土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子微量

第 3 号瓦溜まり土層解説

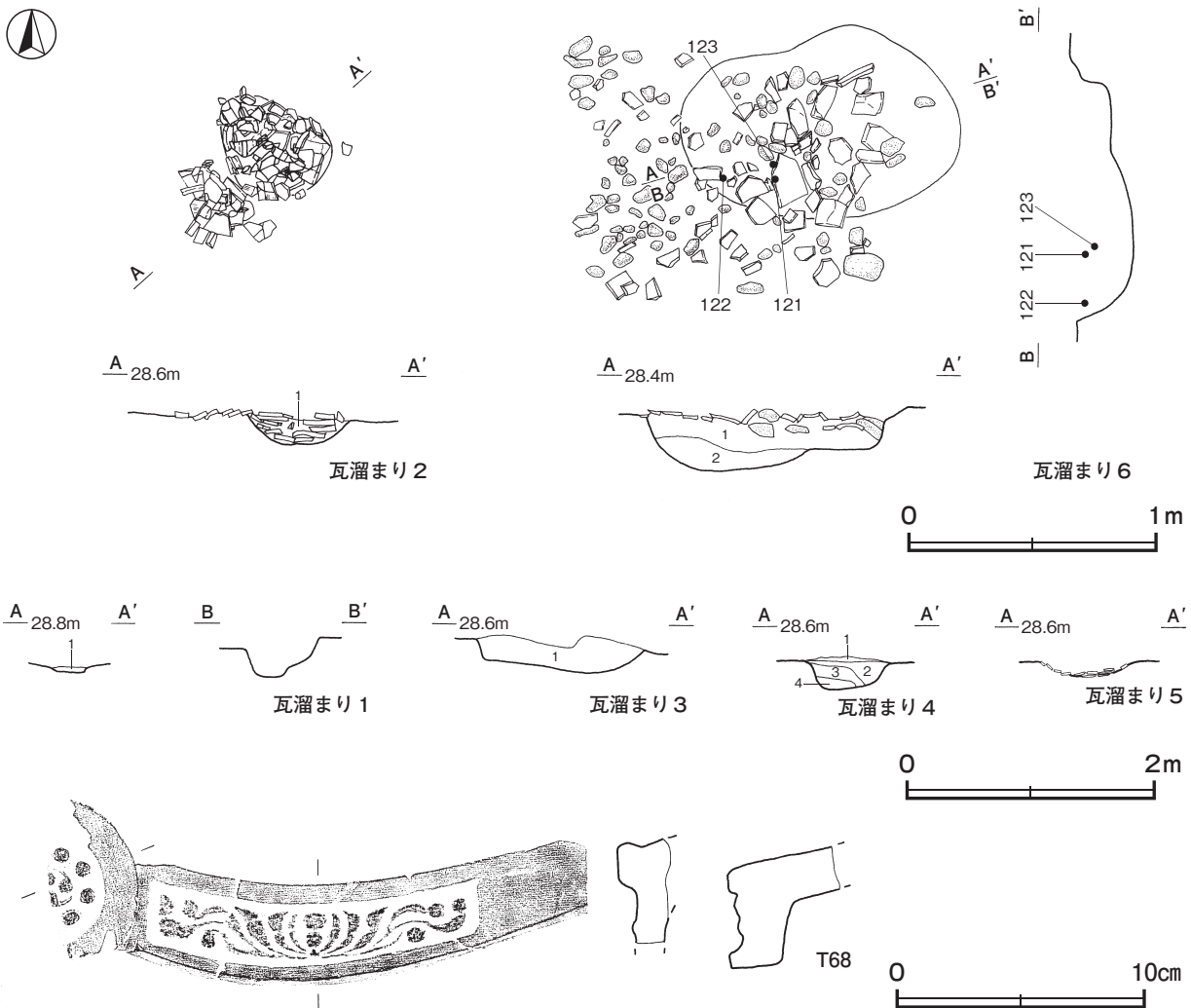
- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・漆喰少量

第 4 号瓦溜まり土層解説

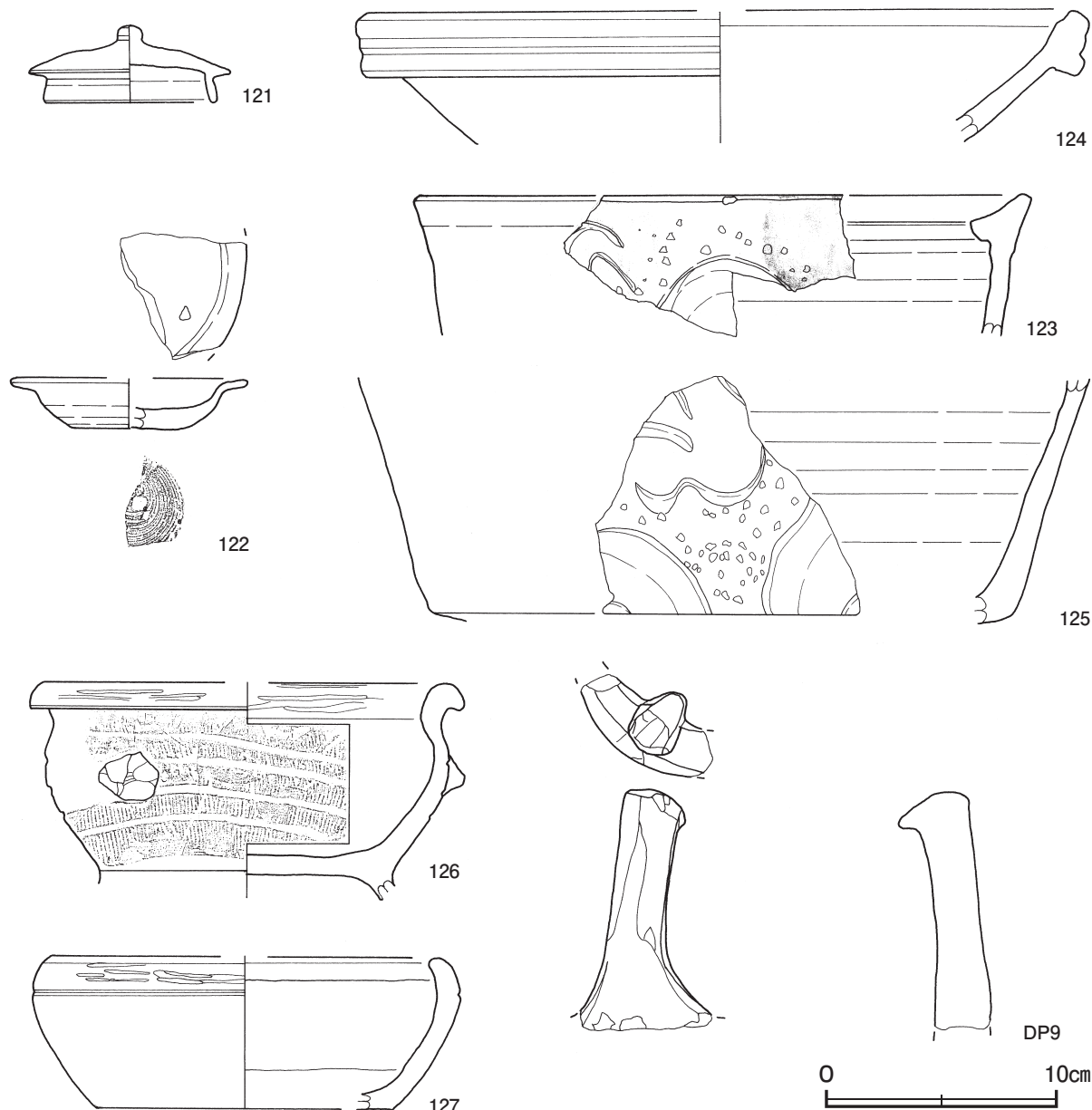
- 1 褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量, 粘土ブロック・焼土粒子・細礫微量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

第 6 号瓦溜まり土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量



第 90 図 第 1～6 号瓦溜まり・第 5 号瓦溜まり出土遺物実測図



第91図 第6号瓦溜まり出土遺物実測図

第5号瓦溜まり出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区					色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)	高さ						
T68	瓦	軒棧瓦	(7.5)	(23.0)	(7.4)	(4.6)	0.7	(4)	13.4	2.4	0.8	0.7	4.1	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	巴文石 唐草文	覆土上層	

第6号瓦溜まり出土遺物観察表 (第90・91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
121	陶器	土瓶蓋	7.3	3.3	-	長石・石英・黒色粒子多量 海鼠釉	青灰椀	普通	外面施釉 径1.1cmのつまみ	覆土上層	60% 七面カ PL11
122	陶器	急須蓋	[10.4]	2.2	[4.6]	石英 灰釉	灰白	普通	外面施釉 底部回転条切り	覆土上層	30% 瀬戸・美濃
123	陶器	水鉢	[26.0]	(6.2)	-	赤色粒子 灰釉 銅緑釉	灰白緑	良好	外・内面灰釉, 外面部分的に銅緑釉 外面文様へら描き, 流水文カ 外面刺突文	覆土上層	5% 瀬戸・美濃
124	陶器	播鉢	[31.2]	(5.7)	-	長石・石英・礫	にぶい赤褐	普通	播り目9条一単位カ	覆土中	5% 堺カ
125	陶器	水鉢	-	(10.7)	-	黒色粒子 灰釉	浅黄	良好	外面文様へら描き, 流水文カ 外面刺突文	覆土中	10% 瀬戸・美濃



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	土師質土器	火鉢	[17.7]	9.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部外・内面へら磨き 体部外面縦位の櫛目充填後、横位に幅4mmの沈線を4条 外面つまみ貼付	覆土中	30%
127	土師質土器	火鉢	[16.8]	6.6	[12.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	明赤褐	普通	口縁部の1.5cm下、横位に1条の沈線 口縁部と沈線の間をへら磨き	覆土中	30%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 9	五徳	(10.5)	1.9~3.1	-	(109.5)	長石・石英・礫	外面へら削り 脚部を芯にして粘土貼付で土台形成 上部2/3 黒変	覆土中	PL13

表12 瓦溜まり一覧表

番号	次面	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長径(軸) × 短径(軸) (m)	深さ (cm)					
1	2	I 2 i8	N - 26° - W	楕円形	0.60 × 0.47	34	皿状	外傾	人為	陶器, 磁器, 瓦	-
2	2	I 2 i8	N - 38° - W	不定形	0.48 × 0.38	11	皿状	緩斜	人為	磁器, ネジ, 瓦	-
3	2	I 2 h0	N - 69° - W	不定形	1.21 × 0.96	20	平坦	外傾	人為	陶器, 瓦	第1A・1B号用排水路跡→本跡
4	2	I 2 h0	N - 24° - E	瓢箪形	1.06 × 0.80	20	平坦	外傾	人為	瓦	第1A・1B号用排水路跡→本跡
5	2	I 2 h0	-	[円形]	0.78 × (0.66)	15	皿状	緩斜	人為	陶器, 磁器, ガラス製品, 瓦	-
6	2	I 3 h1	N - 85° - W	楕円形	1.12 × 0.70	19	皿状	緩斜	人為	陶器, 磁器, 土師質土器, 瓦質土器, 五徳, 瓦	第1号石敷き, SA 5, PG 9→本跡

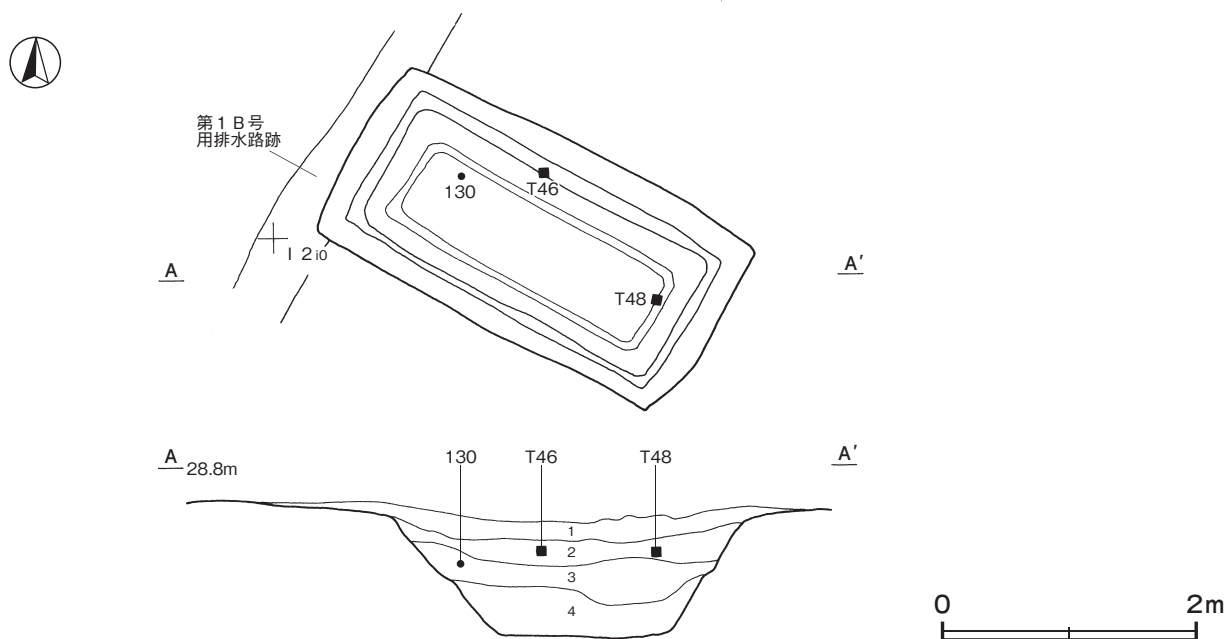
⑤土坑

第5号土坑 (第92～94図)

位置 調査区中央部の I 2 h0 区, 標高 28.4 m の台地上平坦部に位置している。

重複関係 第1A・1B号用排水路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 コンクリートで壁と底面が構築されている。長軸 3.20m, 短軸 1.62m で, 長軸方向が N - 61° - W の長方形である。深さは 88cm で, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がる。



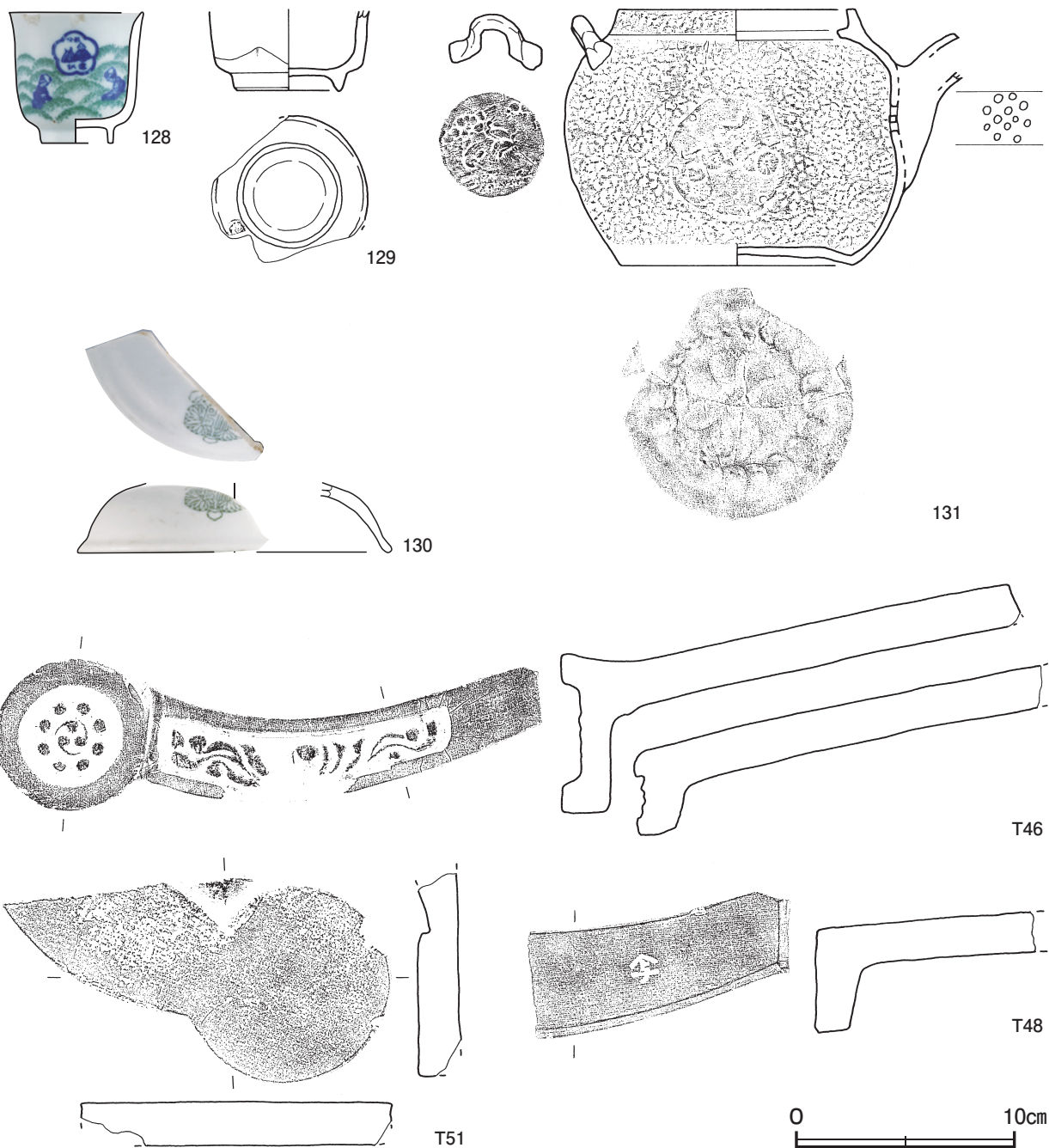
第92図 第5号土坑実測図

**覆土** 4層に分層できる。多様な含有物を含み、ブロック状の堆積状況を示すことから、埋め戻されている。

**土層解説**

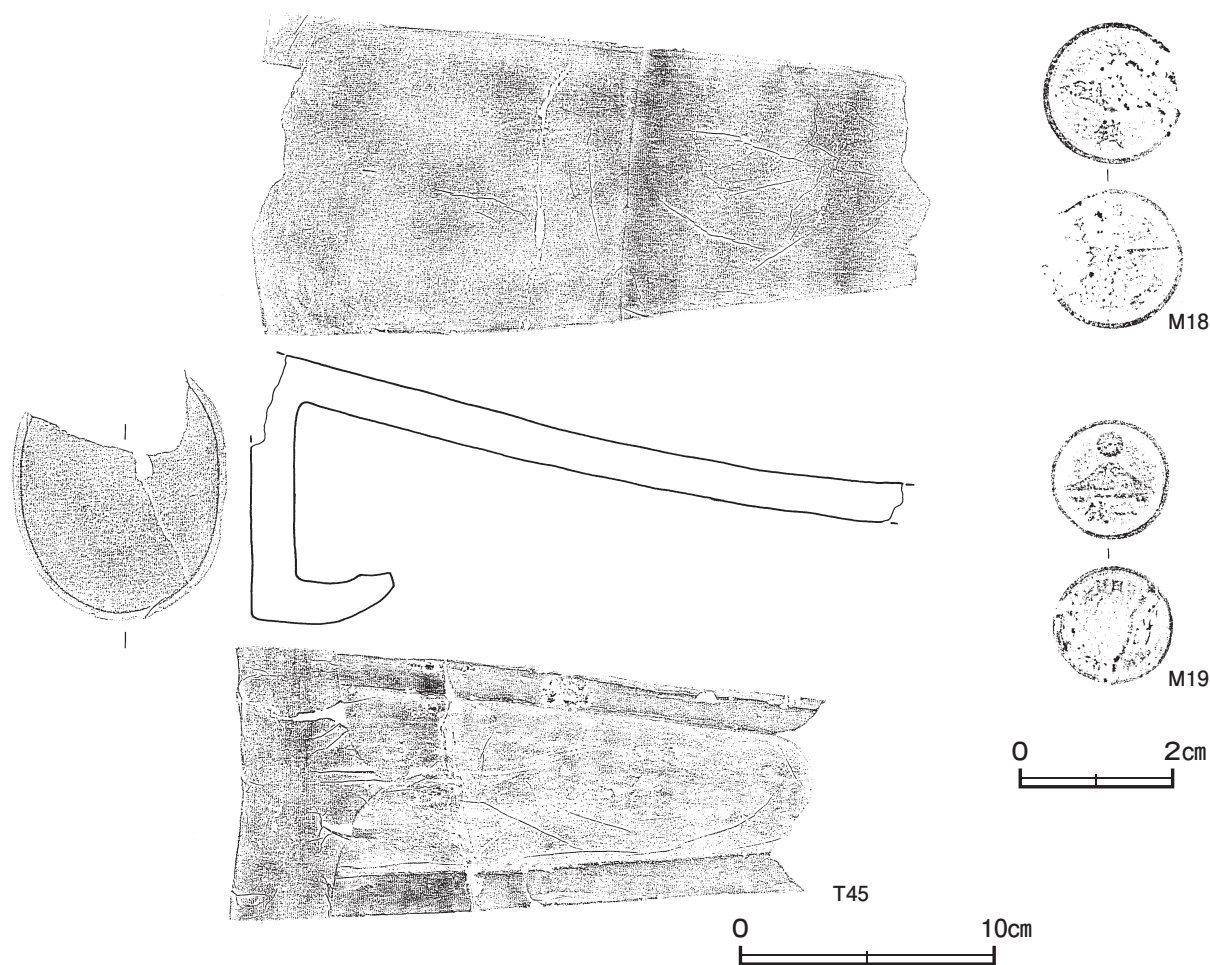
- |                               |                              |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 におい赤褐色 焼土粒子・瓦片多量, 炭化物中量     | 3 灰褐色 炭化物少量, ローム粒子・コンクリート片微量 |
| 2 黒褐色 瓦片多量, 焼土粒子少量, 炭化物・石灰カ微量 | 4 におい黄褐色 砂粒・細礫多量             |

**遺物出土状況** 陶器片 25 点 (碗 6, 土瓶 1, 急須 3, 箱形容器 2, 鉢形容器 1, インク瓶 1, 甕 3, 土管 1, 不明 7), 磁器片 62 点 (小坏 1, 碗 45, 井蓋 1, 蓋 2, 急須 3, 土瓶 2, 箸置き 1, 箱形容器 1, 鉢 4, 不明 2), 土師質土器片 13 点 (鉢 9, 甕 4), 瓦質土器片 1 点 (鉢形容器), 銭貨 2 点 (一銭, 五銭), 鉄製品 9 点 (薬莖 1, 釘 2, 鋸 1, 不明 5), 石器・石製品 4 点 (削器 1, 硯 3), 瓦片 5609 点 (丸瓦 60, 平瓦 81, 棧瓦 5336, 有刻印棧瓦 89 [又川 9, 傘 80], 道具瓦 2, その他 41), ガラス製品 31 点 (蓋 3, 小瓶 3, インク瓶 1, スポイト 3, 不明 21), プラスチック製品 4 点 (三角定規 1, 薬箱 1, 釘 2) が出土している。130・



第 93 図 第 5 号土坑出土遺物実測図 (1)

T46・T48は覆土中層から出土している。128・129・131・M18・M19・T45・T51は覆土中から出土している。  
**所見** 時期は、出土遺物から、20世紀初頭～中葉に比定できる。形状から、本来は貯水榼として機能していたと考えられる。本来の機能が停止した後、廃棄土坑として用いられたと推定できる。



第94図 第5号土坑出土遺物実測図(2)

第5号土坑出土遺物観察表(第93・94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
128	磁器	小坏	6.2	6.0	3.2	緻密	灰白	良好	端反形 体部外面茶摘み図 茶は井幸 電話八六五番」銘	「列公遺訓」「よい	覆土中	100% 瀬戸系 PL18
129	陶器	碗	-	(3.7)	4.8	緻密 透明釉	灰オリーブ	良好	外・内面施釉 体部下端「借口」刻印、借楽カ		覆土中	30% 借楽焼カ PL11
130	磁器	井蓋	[14.3]	(3.2)	-	緻密	灰白	良好	外面葵に「師」銘		覆土中層	20% PL18
131	陶器	土瓶	10.8	11.7	10.8	緻密 鉄釉	灰赤	良好	側面松文、後面鶴文、底部同心円に指頭痕、外面叩き状を呈する、鉄瓶模倣カ		覆土中	90% PL11

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M18	五銭	1.85	-	0.12	(0.87)	アルミニウム	1940	「大日本 昭和十〇」「五銭」銘 片面に菊花文、 片面に鳥カ	覆土中	PL13
M19	一銭	1.60	-	0.11	0.65	アルミニウム	1941	「大日本 一 昭和十六」「一銭」銘 片面に富士 と菊花文	覆土中	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T45	瓦	鳥袞	(25.7)	8.3	-	-	-	-	-	-	-	-	(10.6)	黒	長石・石英・ 黒色粒子	普通	瓦当面取り	覆土中	
T46	瓦	軒棧瓦	21.1	25.9	7.0	4.7	0.7	8	13.5	2.4	0.5	0.7	10.5	黒	長石・石英・ 黒色粒子	普通	巴文右 唐草文	覆土中層	PL15

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区					色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)	高さ						
T48	瓦	軒棧瓦	(10.1)	(11.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	4.7	にぶい赤褐	長石・石英	普通	瓦当「今」刻印	覆土中層	PL15
T51	瓦	鬼瓦カ	(10.0)	(18.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	長石・石英・白色粒子	普通	-	覆土中	PL15	

### ⑥ピット群

当次面で、ピット群1か所を確認した。各ピットの断面図を掲載し、詳細については文章で解説する。平面図は当次面の遺構全体図で掲載する。

### 第9号ピット群（第95図）

**位置** I 2h8区からI 3h2区，標高28.4mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号石敷き遺構を掘り込み，第4号溝，第6号瓦溜まりに掘り込まれている。

**規模と形状** 南北3.4m，東西10.3mの範囲に，8か所のピットを確認した。

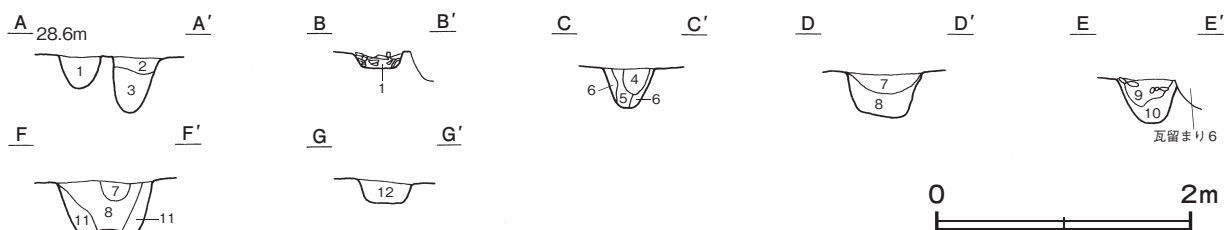
**ピット** 8か所。長径32～71cm，短径30～54cmの円形・楕円形・不定形で，深さは7～43cmである。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1 暗褐色	炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量	7 暗褐色	中円礫・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・漆喰・細礫微量	8 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 黒褐色	炭化物・ローム粒子・細礫微量	9 暗褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 暗褐色	ローム粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子少量	11 暗褐色	炭化粒子中量，大円礫少量，焼土粒子微量
6 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	12 暗褐色	焼土粒子・細礫少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

**遺物出土状況** 混入した陶器片6点（碗4，土瓶1，甕1），磁器片2点（碗），瓦質土器片1点（甕），鉄製品2点（釘），瓦片118点（丸瓦1，棧瓦117）が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は，出土遺物と当次面が近代の整地層であることから19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。



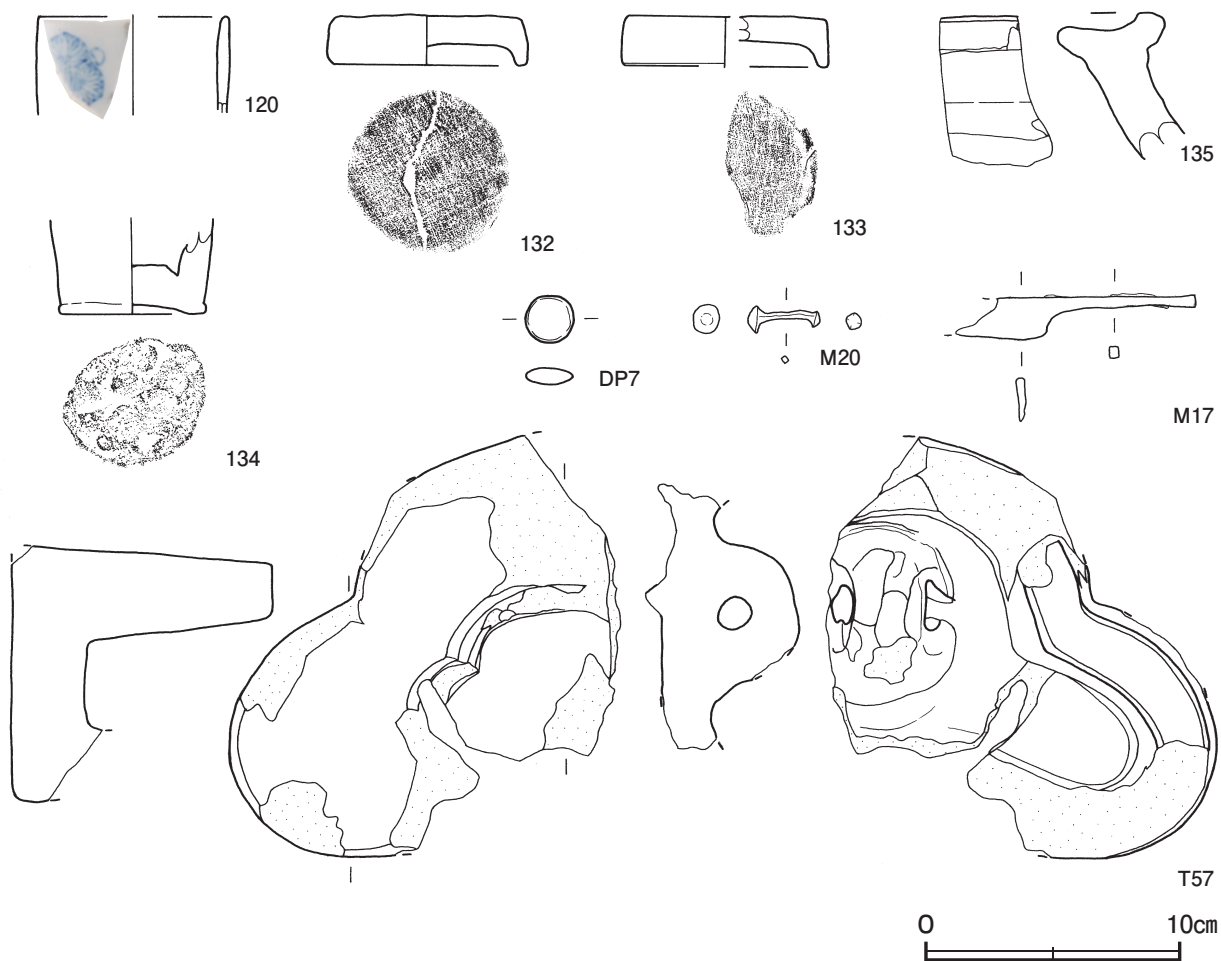
第95図 第9号ピット群実測図

### ⑦遺構外出土遺物（第2次面）（第96図）

ここで取り上げている遺物は，19世紀代の遺物が主体となる。近世の遺物が多く出土していることから，当次面が近世と近代の過渡期であることが窺える。

#### 第2次面遺構外出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	磁器	碗	[7.4]	(3.9)	-	緻密	灰白	良好	外面葵に「師」銘	I 2j9	10% PL18
132	土師質土器	焼塩壺蓋	7.3	2.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	内面布目痕	I 2j8	90%
133	土師質土器	焼塩壺蓋	[8.0]	2.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	内面布目痕	I 2j8	40%
134	土師質土器	焼塩壺	-	(3.8)	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	板作り成形	I 2j8	40%
135	陶器	甕	-	(5.8)	-	長石・石英 鉄釉	明赤褐	良好	外・内面施釉	I 2j8	5% 常滑



第96図 遺構外出土遺物実測図

番号	器種	径	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 7	弾碁石	1.9	-	0.6	1.86	長石	表面ナデ	I 2j9	PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 17	剃刀	(9.5)	1.8	0.4	(13.3)	鉄	柄断面方形 刃断面逆三角形	-	PL13
M 20	鋌	2.8	1.2	0.3	2.6	銅	断面方形	I 2i0	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T57	瓦	鬼瓦	10.4	(15.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	(16.6)	浅黄	長石・石英	普通	裏面有孔固定部貼付, 釘留めカ	I 2h8	PL15

(2) 近代遺構一覧表

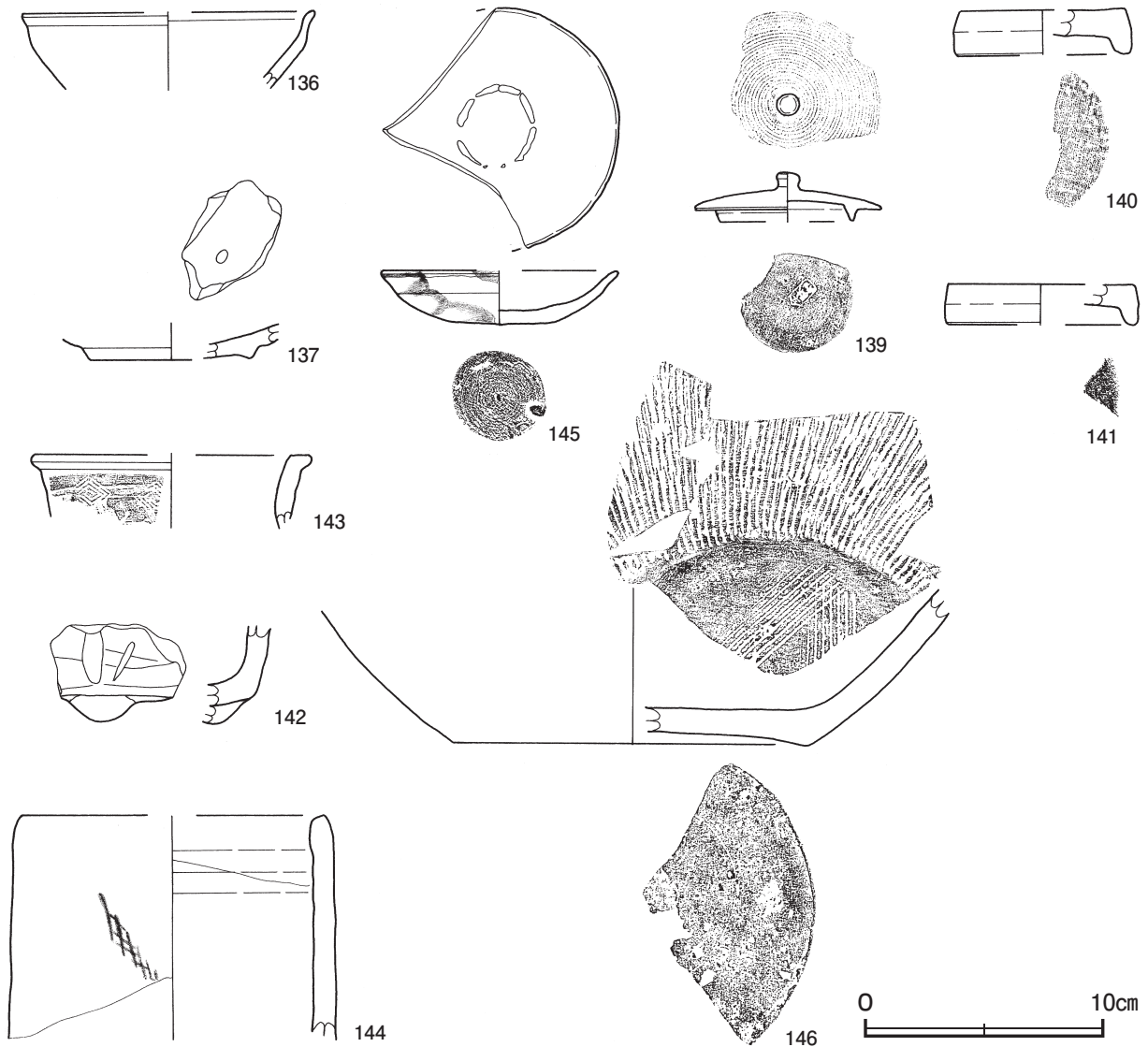
表13 用排水路跡一覧表

番号	次面	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1B	2	I 2h0 ~ I 2j8	N - 30° - E	直線状	(12.4)	0.36 ~ 0.52	0.12 ~ 0.26	30	U字状	外傾	人為	-	第1A号用排水路, SK163・161→本跡→第3・4号瓦溜まり, SK 5
1B(桝)	2	I 2j9	N - 30° - E	方形	1.16 × 0.98 (長軸×短軸)			84	箱状	直立	人為	-	-
3	2	I 2h8	N - 36° - E	直線状	(1.46)	0.56	-	-	箱状	直立	人為	-	底部は凝灰岩, 側面は花崗岩を使用
4	2	I 3h1 ~ I 3i3	N - 57° - W	直線状	(8.30)	0.22 ~ 0.32	0.06 ~ 0.12	48	U字状	外傾	人為	-	SD 4, PG 7・8 → 本跡



5 遺構外出土遺物（第1次面）（第97・98図）

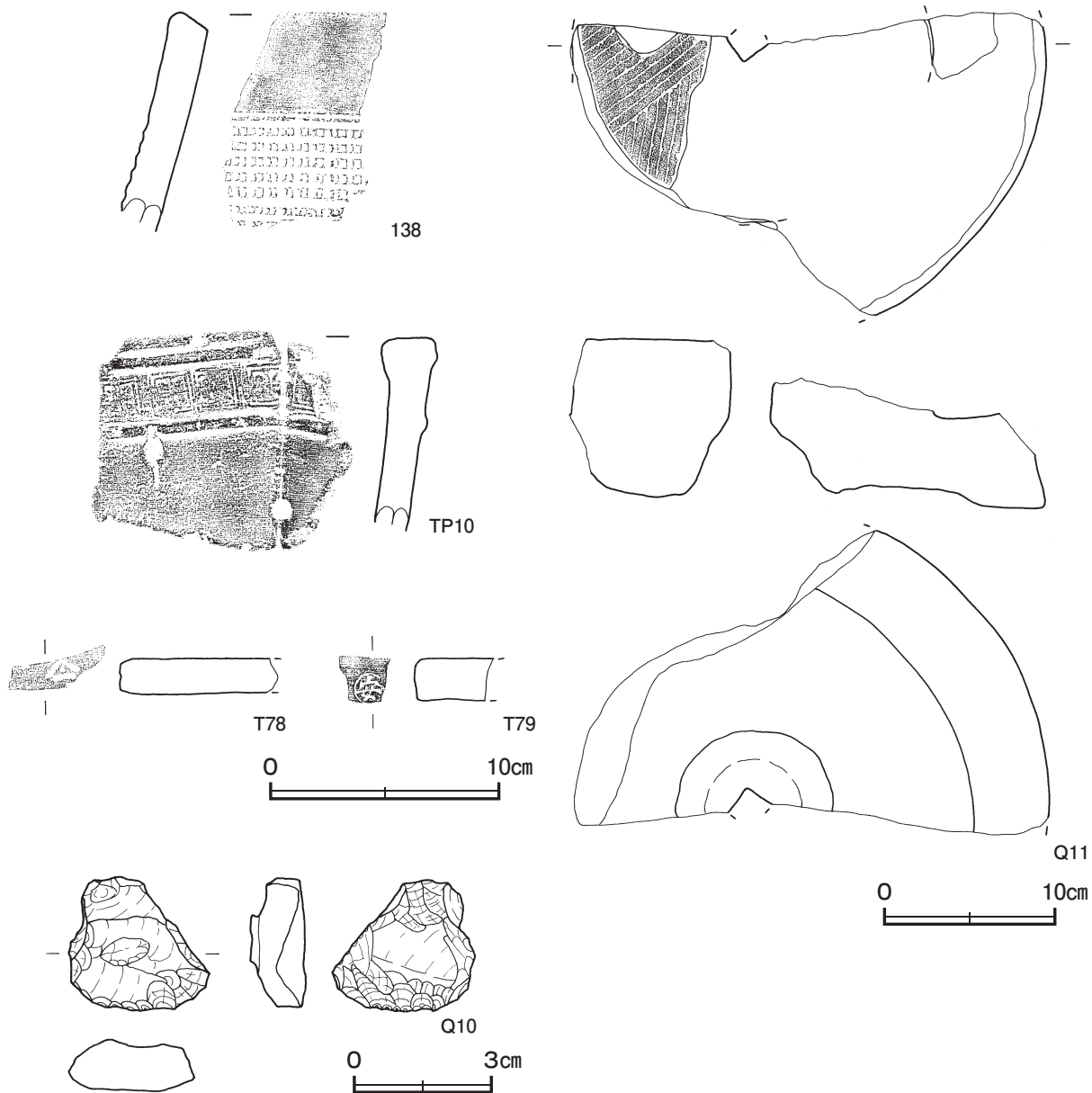
第1次面で確認された遺物を，図版と観察表で記載する。



第97図 遺構外出土遺物実測図（1）

第1次面出土遺物観察表（第97・98図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
136	陶器	天目茶碗	[12.3]	(3.3)	-	精良 鉄釉	暗赤褐	良好	外・内面施釉	表土	10% 瀬戸・美濃 PL18
137	陶器	皿	-	(1.5)	[6.8]	精良 長石釉	灰白	良好	外・内面施釉 貫入 志野	表土	10% 美濃
138	陶器	卸皿カ	-	(9.6)	-	長石・細礫 鉄釉	暗赤褐 青黒	普通	外・内面施釉 縦位の沈線を入れた後、横位の沈線を重ねて卸目を形成	表土	5%
139	陶器	土瓶蓋	[5.6]	2.1	-	長石 鉄釉	にぶい赤褐	良好	外面施釉 外面同心円の沈線 内面「全駄知」刻印	表土	20% 在地カ
140	土師質土器	焼塩壺蓋	[7.2]	1.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面布目痕	表土	40%
141	土師質土器	焼塩壺蓋	[7.8]	1.7	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面布目痕	表土	10%
142	土師質土器	鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面角ヘラ削り 脚部貼付後、接合部刺突	表土	5%
143	瓦質土器	香炉	[11.6]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面スタンプによる雷文	表土	10%
144	陶器	花生	[12.8]	(9.4)	-	精良 長石釉	灰白	良好	外面・口縁部内面施釉 外面鉄絵による格子目文 貫入 志野カ	表土	20% 美濃 PL18
145	陶器	皿	[9.8]	2.3	4.0	長石・礫・赤色粒子 鉄釉	灰黄褐 褐	良好	外面釉拭き取り 内面重ね焼きによる同心円状の剥離	表土	60% 七面 PL18
146	陶器	播鉢	-	(6.6)	[15.0]	長石・礫	明赤褐	普通	見込み8条一単位の播り目	I 2h8	20% 堺カ



第98図 遺構外出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP10	瓦質土器	火鉢	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	黒褐	外面2条の隆帯貼付 隆帯間スタンプによる雷文	表土	PL12

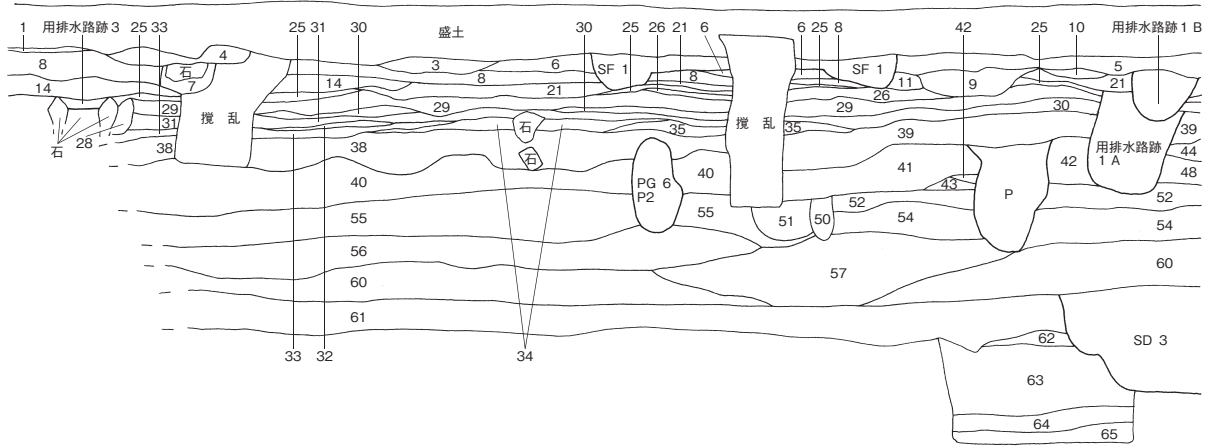
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	削器	29	3.1	1.2	12.1	瑪瑙	両面調整 細かい連続する周辺調整を施す	表土	PL12

番号	器種	上径	下径	芯棒孔径	高さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	茶臼(下臼)	19.4	[33.2]	1.9	9.8	(3.81)	安山岩	主溝2条・副溝17条カ	表土	PL12

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	外区幅(上)	外区幅(下)							高さ
T78	瓦	棧瓦	(6.9)	(4.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	1.6	灰	長石・石英	普通	△刻印	表土	
T79	瓦	棧瓦	(4.3)	(3.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	1.9	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	⊕刻印	表土	

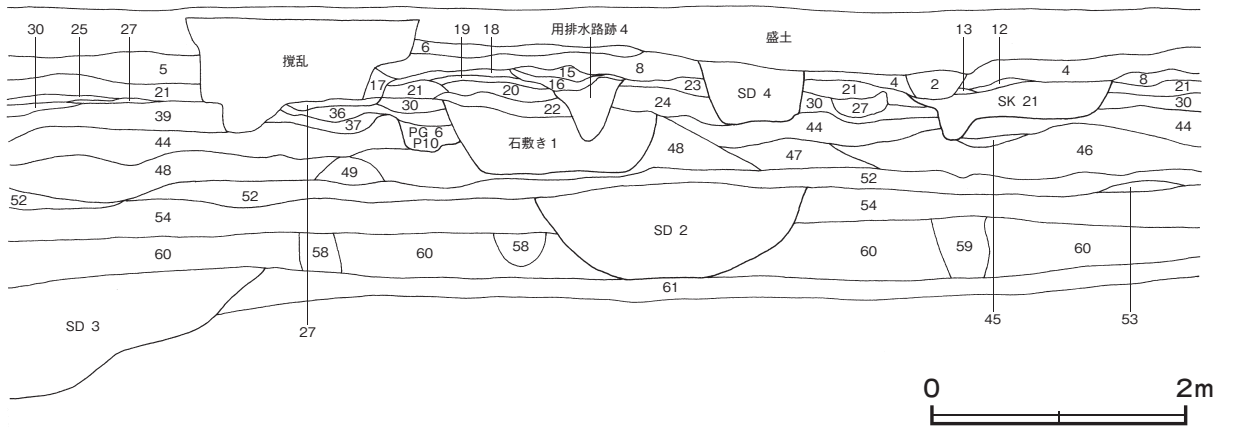
A 29.2m

A'



A'

A''



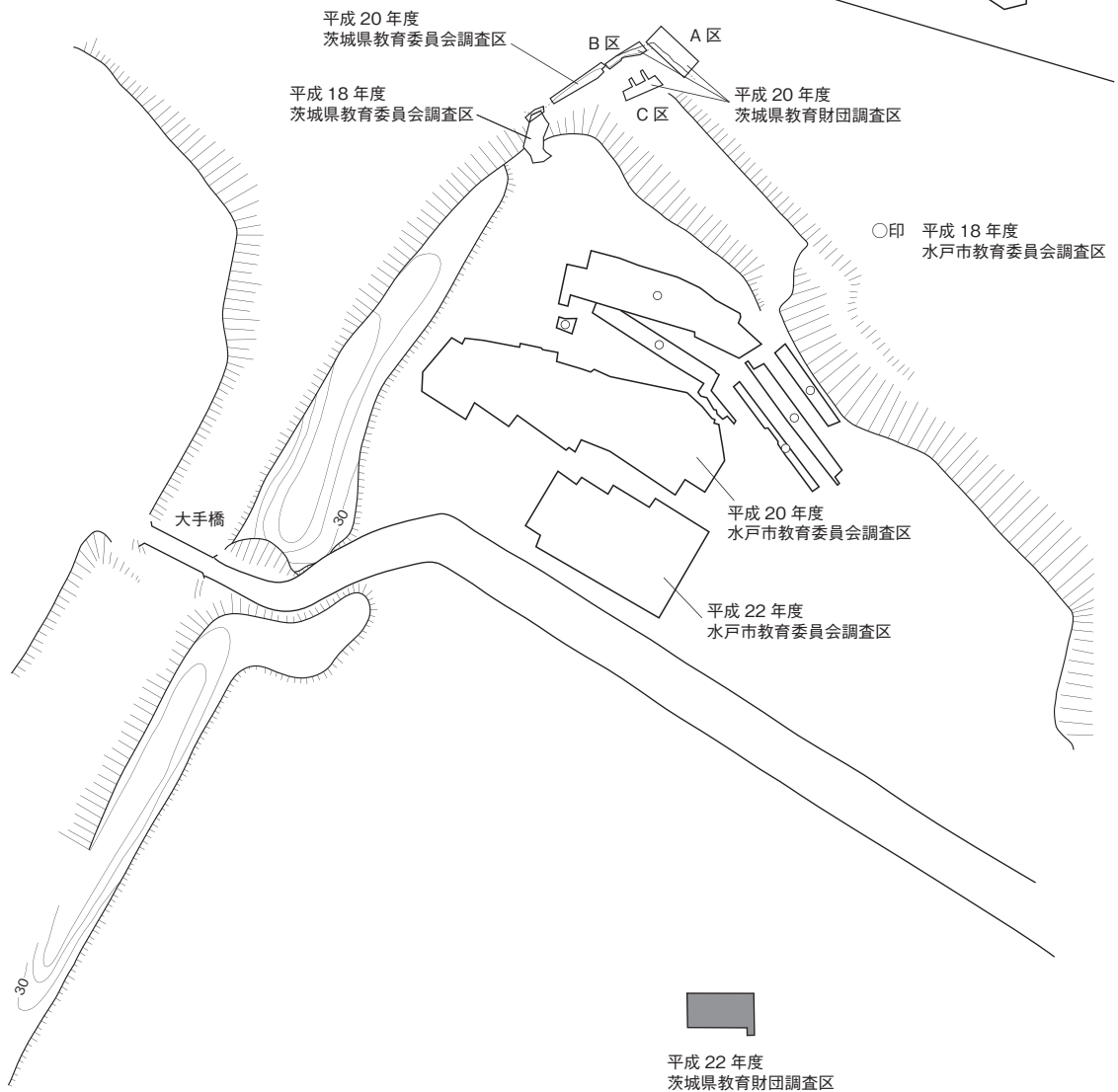
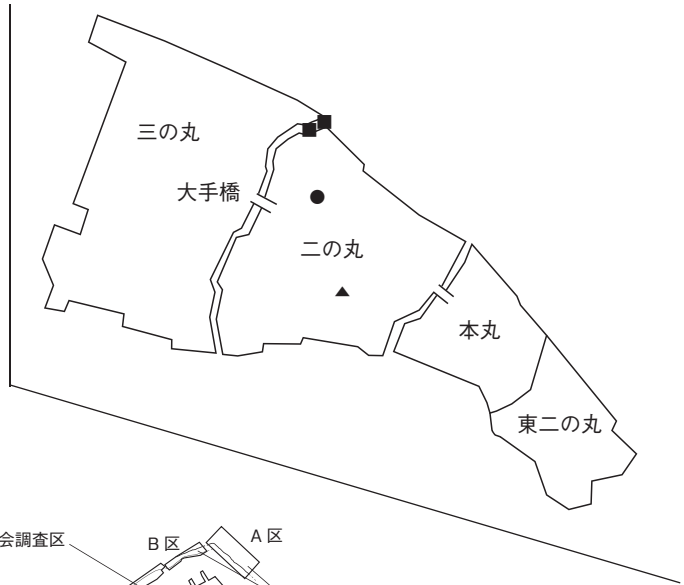
第 99 図 調査区北壁土層断面図

土層解説

- |           |                         |            |                            |
|-----------|-------------------------|------------|----------------------------|
| 1 褐色      | 細礫多量, 漆喰少量              | 34 褐色      | ローム粒子中量, 炭化粒子少量            |
| 2 オリーブ黒色  | 瓦片・煉瓦片微量                | 35 褐色      | ロームブロック・炭化粒子少量             |
| 3 暗褐色     | 炭化粒子中量, 焼土粒子・細礫少量       | 36 暗赤褐色    | 焼土粒子・細礫少量                  |
| 4 黒褐色     | 瓦片中量                    | 37 暗褐色     | 焼土粒子・炭化粒子少量, 大円礫微量         |
| 5 暗褐色     | 細礫少量, 炭化物微量             | 38 暗褐色     | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 中円礫微量   |
| 6 橙色      | 粘土ブロック中量                | 39 褐色      | 細礫少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 7 褐色      | 砂粒・細礫少量                 | 40 にぶい褐色   | ローム粒子多量, 中円礫中量, 焼土粒子少量     |
| 8 暗褐色     | ローム粒子・細礫少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 41 褐色      | ローム粒子・炭化粒子少量, 細礫微量         |
| 9 暗褐色     | 焼土粒子・炭化粒子少量, 中円礫微量      | 42 暗褐色     | 焼土粒子・炭化粒子中量                |
| 10 灰褐色    | 小碎石多量                   | 43 暗赤褐色    | 焼土粒子中量, 粘土粒子少量, 炭化物微量      |
| 11 暗褐色    | 大円礫少量                   | 44 明褐色     | ロームブロック・粘土ブロック・細礫少量        |
| 12 オリーブ黒色 | 焼土粒子微量                  | 45 黒褐色     | 炭化粒子少量                     |
| 13 暗赤褐色   | 焼土粒子多量                  | 46 にぶい橙色   | 粘土粒子多量, 細礫中量               |
| 14 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子・細礫少量          | 47 暗オリーブ色  | 細礫中量, 粘土ブロック微量             |
| 15 黒褐色    | 瓦片中量, 炭化粒子少量            | 48 橙色      | ロームブロック・大円礫少量, 粘土ブロック微量    |
| 16 褐色     | 粘土ブロック・中円礫・焼土粒子・炭化粒子微量  | 49 褐色      | 細礫中量, 粘土粒子少量               |
| 17 暗褐色    | 中円礫・焼土粒子少量              | 50 暗オリーブ褐色 | 細礫少量, 粘土粒子微量               |
| 18 褐色     | 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量        | 51 オリーブ褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細礫微量  |
| 19 にぶい黄褐色 | コンクリート片少量, 中円礫微量        | 52 暗褐色     | 中円礫・炭化粒子少量                 |
| 20 暗褐色    | 焼土粒子・砂粒・細礫少量, 炭化粒子微量    | 53 黒褐色     | 中円礫少量                      |
| 21 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子・細礫少量          | 54 黒色      | 赤色粒子微量                     |
| 22 灰黄褐色   | 炭化粒子中量, 焼土粒子・細礫少量       | 55 暗褐色     | ローム粒子・炭化粒子・細礫少量, 焼土粒子微量    |
| 23 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量          | 56 暗オリーブ褐色 | ローム粒子少量                    |
| 24 オリーブ黒色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・細礫微量 | 57 暗オリーブ色  | ローム粒子・炭化粒子少量               |
| 25 黒褐色    | 炭化粒子中量, 焼土粒子・細礫少量       | 58 極暗褐色    | 細礫少量, ローム粒子微量(59層より締まりが強い) |
| 26 褐色     | 焼土粒子・炭化粒子中量, 細礫少量       | 59 極暗褐色    | 細礫少量, ローム粒子微量              |
| 27 褐色     | 細礫中量                    | 60 黒褐色     | ローム粒子微量                    |
| 28 灰褐色    | 炭化粒子少量, 細礫微量            | 61 黒色      | ローム粒子微量                    |
| 29 灰褐色    | ローム粒子多量                 | 62 黒色      | 黒色バミス少量                    |
| 30 褐色     | ローム粒子多量, 炭化粒子少量         | 63 黒色      | 赤色粒子微量                     |
| 31 暗褐色    | ローム粒子多量, 炭化粒子少量         | 64 黒褐色     | ローム粒子微量(60層より粘性が強い)        |
| 32 明褐色    | 粘土粒子多量                  | 65 暗褐色     | ローム粒子中量                    |
| 33 褐色     | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量    |            |                            |

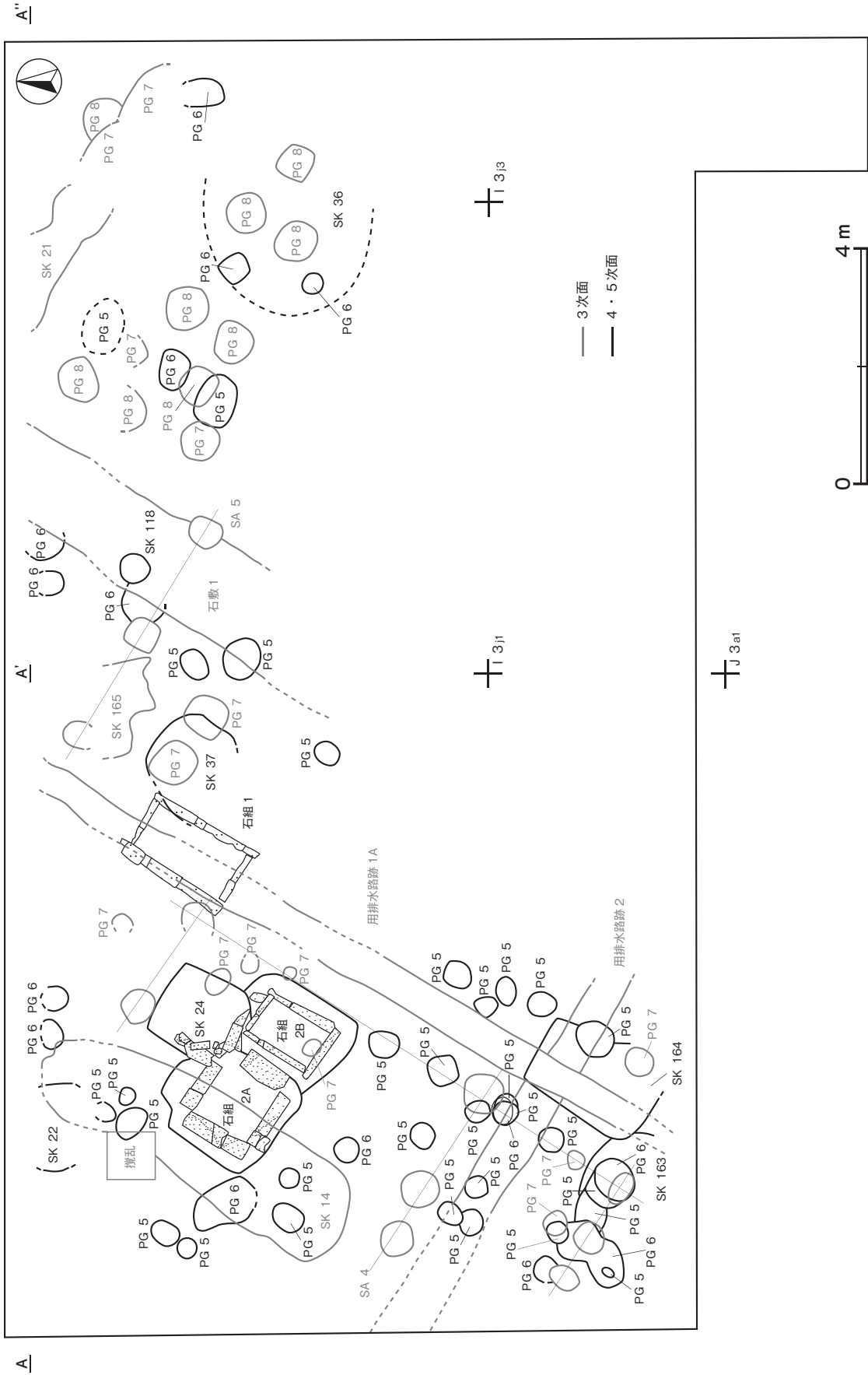


- 平成 18・20 年度 茨城県教育委員会調査地点
- 平成 20 年度 茨城県教育財団調査地点
- 平成 18・20・22 年度 水戸市教育委員会調査地点
- ▲ 平成 22 年度 茨城県教育財団調査地点



第 100 図 水戸城跡調査区位置図

(水戸城全体図は「常陸国水戸城絵図」(国立公文書館蔵)を参考に作成、平成 22 年度水戸市教育委員会調査区位置図は水戸市教育委員会提供)



第 101 図 水戸城跡近世（第 3～5 次面）遺構全体図



## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

当調査区一帯は、鎌倉時代から明治時代にかけて、居館・城郭、そして教育施設へと、改修を繰り返しながら、連綿と土地利用されてきた。今回の調査で、基礎地業面・整地面を含めて大きく9次面を確認した。自然堆積層の上面である第9次面以降、現在の地表面に至るまで、すべてが改修による人為的な盛土であり、大規模な改修の様子が窺える。特に今回の調査は、徳川氏入城以後の、水戸城二の丸御殿跡を調査した初めての事例であり、これまで詳細が明らかではなかった御殿の一端を確認することができた。以下、各次面ごとに確認された遺構と遺物を概観し、改修の記録との照合から各次面の時期を捉え、その中で近世の特徴的な遺構について考察し、まとめとする。

### 2 各次面の様相

表14に各次面の出土土器及び瓦の数量を記載する。数は破片数であるが、出土遺物の変化と数量の推移を捉える資料としたい。また、第102図は各次面の出土土器を掲載したものであり、編年を示すものではない。

#### (1) 第9次面

9世紀中葉に比定できる第1号住居跡、第3号溝跡と、中世に比定できる第1号火葬土坑が確認できた。平安時代と中世の遺構が同じ面で確認できたことから、当次面は自然堆積層の上面である。第1号火葬土坑の時期は、形状から15世紀後半以降と推定できる<sup>1)</sup>が、出土している遺物が少量なため、詳細な時期は明確ではない。当次面の遺構及び遺構外で確認できた遺物は、土師器と須恵器が大半を占め、中世に比定できる陶器などの出土がわずかである(表14参照)。

#### (2) 第8次面

当次面は、第9次面上に構築されており、改修の最初期と考えられる。確認できた遺構は、第2号柱穴列跡(N-38°-E)や第2号ピット群などで、当次面が生活面として機能していたか否かを判断することは困難である。出土遺物は、土師器と須恵器が主体であるが、常滑産陶器片や土師質の小皿がわずかながら確認できた。時期を比定できる遺物が少量であり、時期を明確にすることは難しいが、第1号火葬土坑が埋め戻されて当次面が構築されていること、土師質小皿の時期が15世紀後葉から16世紀前葉のものと形状が近似していることから、当次面は15世紀後葉から16世紀前葉に構築されたと推定できる<sup>2)</sup>。

#### (3) 第7次面

第1号井戸跡や第2号溝跡などが確認できたことから、当次面は生活面として機能していたと推定できる。第1号井戸跡からは、土師質の内耳鍋や陶器片などが出土している。内耳鍋は深さのある形状で、11は底部が丸底と推定でき、15世紀後葉から16世紀代のもと考えられる<sup>3)</sup>。共伴する瀬戸・美濃系陶器は、藤澤良祐編年の大窯3期(1560～1590)の前半に比定できる反り皿に形状が近似している<sup>4)</sup>。しかし残存しているのが、口縁の一部分だけなので明確ではない。また、瓦の出土は当次面からである。いずれも細片のため、棧瓦か平瓦かの選別は困難であるが、平瓦として記載する。これらの遺物から、当次面の時期は、概ね15世紀後葉から16世紀代と推定される。

#### (4) 第6次面

第2号井戸跡、第3号柱穴列跡などが確認でき、当次面が生活面として機能していたことが窺える。第3

号柱穴列跡は、南西・北東軸（N - 33° - E）に並んでいる。第2号井戸跡からは、永楽通宝、土師質の小皿などが出土している。各1点ずつのため、時期を特定することは困難であるが、第4号ピット群及び遺構外から、16世紀前葉から17世紀代に比定できる土師質小皿などが出土しており、同時期と考えられる。第7次面が15世紀後葉から16世紀代であることを考慮すると、当次面は、16世紀代以降に比定することができる。

(5) 第5次面

当次面は細礫・中円礫を主体として構築されている。土層からは、均一に整地された様子が確認できないことから、第4次面に伴う基礎地業面と推定される。確認できた遺構は、第1号石組み遺構、第5号ピット群である。第1号石組み遺構は、長軸方向がN - 32° - Eで、第4次面で確認できた第2A・2B号石組み遺構と近似している。出土遺物は少量であり、遺物から時期を判断することはできない。第5号ピット群及び遺構外から出土した遺物の中で、37は

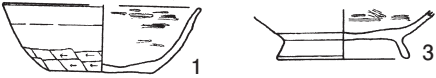

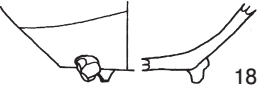
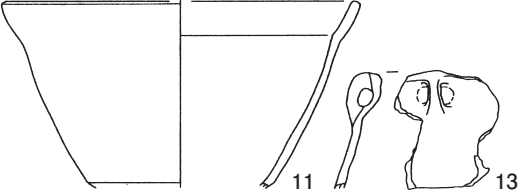
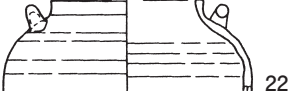
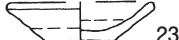
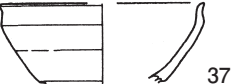

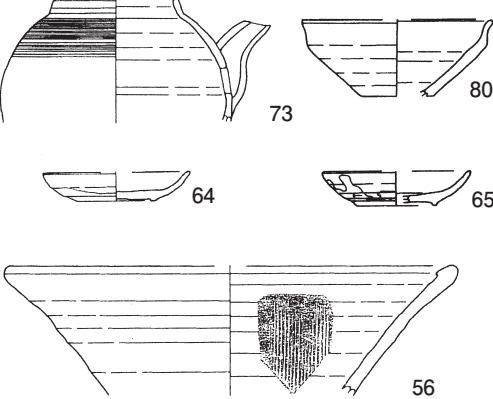
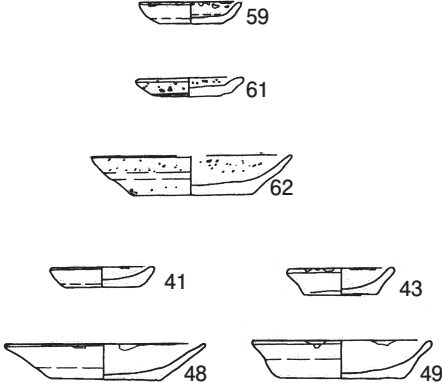
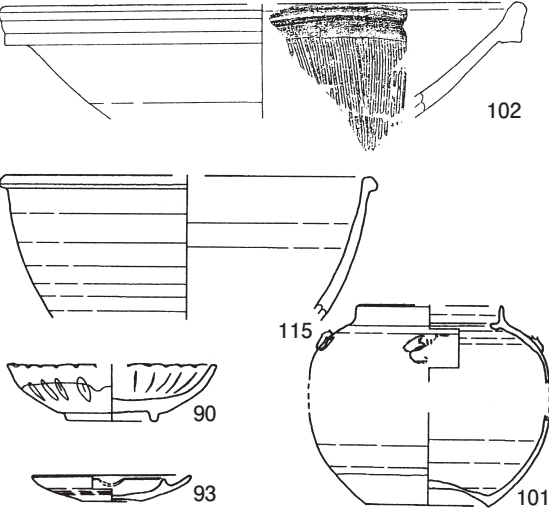
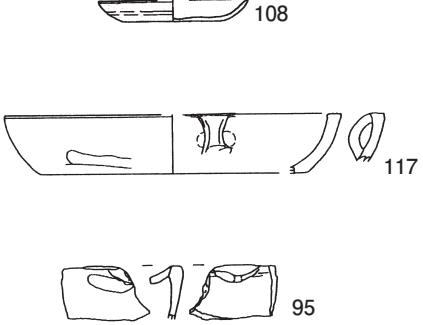
16世紀後葉から17世紀前葉<sup>5)</sup>、27<sup>6)</sup>・32・36<sup>7)</sup>は17世紀前葉のものと形状が類似している。また棧瓦が確認され始め、出土量も徐々に増加している。出土遺物は、17世紀前葉と推定できるものが主体的であり、当次面の構築時期を示すものと捉えられる。

(6) 第4次面

当次面では、石組み遺構2基、土坑7基、ピット群1か所を確認した。石組み遺構からは、残存率の良い土師質小皿及び皿が出土している。形状から17世紀中葉から18世紀代に位置づけられる土師質皿に類例が求められる<sup>8)</sup>が、時期決定には慎重な検討を要する。軸方向は第2A号石組み遺構がN - 29° - E、第2B号石組み遺構がN - 34° - Eであり、第1号石組み遺構とほぼ同じ軸方向である。出土遺物は土師質土器、とりわけ皿類の出土が各次面の中で最も多く、当期に多用されていたことが窺える。また棧瓦の出土量も増加しているが、平瓦・丸瓦も多く確認でき、本瓦葺きから棧瓦葺きへ移行しつつあったことが想定できる。

表14 遺物集計表（表中の数字は各器種の破片数の合計を示す）

種別	器種	第9次面	第8次面	第7次面	第6次面	第5次面	第4次面	第3次面	第2次面
土師器 (須恵器)	坏	73 (118)	36 (43)	16 (44)	13 (8)	4 (7)	11 (18)	8	(4)
	高台付坏	(3)	(6)		(1)		(1)		
	高台付椀	2							
	高台付盤		(2)	(1)					
	蓋	(9)	(3)	(1)	(1)	(2)	(2)		
	短頸壺	(1)							
	甌	2							
甕	147 (62)	49 (16)	33 (18)	20 (7)	5 (3)	15 (7)	(1)	1	
灰釉陶器	長頸瓶	2	2				2		
陶器 (磁器)	碗	1	(3)	(1)	1 (7)	4 (26)	12 (26)	53 (92)	27 (110)
	小坏							(1)	
	皿類		1	1	1	4 (2)	6 (3)	6 (4)	4 (7)
	菊皿					1		2	1
	灯明皿					1		1	
	香炉							1	
	鉢			2 (1)		(1)	4 (3)	30 (2)	5 (16)
	播鉢		1	1		3	4	7	2
	水鉢								1
	植木鉢							1	1
	蓋						1	1	1 (2)
	井蓋								1
	壺				1		2	6	2
	甕	1	12	6	5	12	9	16	14
	土瓶					2	1	36 (1)	10 (3)
	土瓶蓋							2	
	急須					1	2		4 (3)
	急須蓋							2	
	水注							1	1
	ちろり							1	
	箱形容器								2 (1)
	花生							1	
	箸置き								1
インク瓶								1	
ソケット								2	
土管								14	
土師質土器 (瓦質土器)	皿・小皿		3	8	7	32	88	13	1
	香炉						1		
	火鉢		(1)			(4)	4 (5)	9 (7)	3 (2)
	鉢類		(2)	2	1 (2)	9 (6)	57 (8)	45 (8)	24 (3)
	鍋類			21	7	14 (1)	7	14	
	焼塩壺・蓋						1		3
	壺						1	7	
甕		1			3 (4)	4 (1)	13 (4)	6	
七厘							1		
瓦 [刻印]	丸瓦				9	32	274	257	317
	平瓦			37	39	94 [1]	554 [1]	479	221
	棧瓦					192	611	2268	17150 [101]
	輪違瓦					1	44 [4]	1	
	棟込瓦				1	2	26	1	1
	板塀瓦						28	2	
	鬼瓦								2
	雁振瓦						2		12
鳥衾								1	
不明					3	22	1		

	次面	陶器	土師器・土師質土器
9 中葉 9 世紀	9		
15 世紀後葉 16 世紀代	8		
	7		
16 世紀 17 世紀前葉	6		
17 世紀前葉 18 世紀代	5		
	4		
18 世紀後葉 19 世紀代	3		

第 102 図 各次面出土遺物の変遷（第 2 次面を除く）

当次面は、第5次面の上に構築されていることを考慮すれば、17世紀前葉以降から18世紀代に比定できる。

(7) 第3次面

当次面はロームを主体とする化粧土が施されており、凝灰岩の切石で構築された用排水路跡や柱穴列跡など、生活面として機能していたことが窺える遺構が確認できた。第4次面で確認された石組み遺構を明確にバックして構築されていることを考慮すると、近世に二つの生活面があったことが分かる。柱穴列跡には異なる間尺が確認でき、第4号柱穴列跡は、1間を6尺3寸(約1.9m)とし、第5号柱穴列跡は1間を6尺5寸(約1.98m)としている。この間尺は、前者が中京間であり、後者が京間である。統一がなされていないのは、焼失などで建て替え行う際に、異なる間尺が採用されたことが想定できるが、今回の調査は限られた範囲であるため、明確な上屋構造の復元に至る遺構が確認できず、詳細は不明である。出土遺物は、土師質の皿類の出土量が減少し、陶磁器類へと使用の中心が移行している様子が確認できる。陶器は、七面焼や松岡焼など19世紀以降の遺物が確認でき、当次面が19世紀以降に機能していたことが窺える。瓦は棧瓦の出土量が飛躍的に伸び、この時期の水戸城は、棧瓦葺きの景観を城下に示していたことが想定できる。

(8) 第2次面

当次面からは、陶製土管が埋設された用排水路跡や、コンクリートを用いた土坑などが確認できた。また「師」の銘が入った師範学校に関連すると推定できる磁器が出土しており、近代以降に機能していたことが確認できた。第1B号用排水路跡は、第1A号用排水路跡の直上に構築されている。当次面で確認できた遺構は、水戸城の二の丸御殿と軸方向が近似しており、水戸城の二の丸御殿と同じ軸方向で建物が造られていたことが分かる。

2 水戸城改修史

ここでは、当地に初めて居館を築いたとされる馬場氏から、江戸氏、佐竹氏、徳川氏と、各時代の改修の歴史を中心に概観し、今回の調査で確認された、各次面について考察するための背景とする。

表 15 水戸城改修年表 (財団報告第 329 集を基に作成)

昭和	明治		江戸						桃山・安土		室町		鎌倉	時代			
	1888	1872	1871	1796	1662	1638	1629	1627	1625	1602	1593	1591	1590	1426	1400	1193	
昭和二十	明治二十一	明治五	明治四	明和六	寛文二	寛永十五	寛永六	寛永四	寛永二	慶長七	文禄二	天正十九	天正十八	応永三十三	応永七	建久四	年号
水戸大空襲により、三階槽などの残存建物も焼失する。	尋常師範学校が水戸城跡に移転する。	放火によりほとんどの建物が焼失する。	水戸城廃城。	六代徳川治保、火災により焼失した二の丸御殿や三階槽を再建する。	二代徳川光圀、笠原水道の建設に着手、翌年完成。	三の丸南北郭門などを新設。改修工事が完成する。	城の諸門が完成。この年までに城の外郭が次第に整う。	本丸多間・二の丸帯曲輪・田町水門の普請を開始。	初代徳川頼房、水戸城の大改修と城下町の整備を開始、佐竹期の二の丸を本拠に改める。	佐竹氏が秋田に移封後、徳川信吉が入城し、藩主となる。	佐竹義宣は、本格的な改修に着手する。まず堀や土塁の外郭整備を進め、その後、城内の整備を進めた。江戸氏の頃に本丸であった場所は継続して本丸とし、新たに整備した。また宿城と称されていた場所に自身の居館を新築する。	佐竹氏は、本拠を太田城から水戸城へ移す。入城直後は改修は行っていないとされている。	佐竹義宣、江戸重通が城主であった水戸城を攻め落とす。	江戸通房、馬場大掾満幹の留守中に城を占拠する。江戸氏の居館が築かれた部分を「内城」、有力家臣や職人・商人が居住していた部分を「宿城」と称していた。内城は徳川期の本丸付近、宿城は同じ時期の二の丸付近であったとされる。	馬場氏が居館の修築を行う。江戸時代に城門の建て替えが行われた際、中御門の肘木の内面に「応永七辰建始」という銘文が見つかり判明。	馬場資幹、常陸大掾に任命され、徳川期の本丸付近に館を築く。	出来事

馬場氏の居館建設から尋常師範学校の移転までの概略は表に記載する。大規模な改修としては次のようなものが挙げられる。詳細な時期は不明であるが、江戸氏は自身の居館を置いた「内城」(徳川期の本丸付近)、有力家臣や職人・商人が居住する「宿城」(徳川期の二の丸付近)を築いた。佐竹義宣は文禄2年(1593)から、まず堀や土塁の外郭整備を進め、江戸氏の頃に本丸であった場所を継続して本丸とし、宿城を置いていた場所に自身の居館を新築した。徳川期には、寛永2年～寛永15年(1625～1638)の徳川頼房による改修、明和6年(1796)の徳川治保による焼失した三階櫓や二の丸御殿の再建などが行われている。江戸氏の改修に関して、平成18・20年度に、水戸市立水戸第二中学校の校舎改築に伴い行われた発掘調査で、様々な遺構と、4mの盛土を伴う普請が行われたことが確認されており、当期の改修が大規模であったことが窺える<sup>9)</sup>。

### 3 各次面と改修記録の対応

明確に時期を異にするのが、近世～近代へと移行する、第2・3次面間である。これらの次面を軸に、改修の歴史を照らし合わせながら、各次面の時期を検討してゆく。

#### (1) 第2次面

当次面は、出土遺物や遺構から、近代の整地面であることが分かる。水戸城の廃城後、茨城県尋常師範学校が設けられており、出土遺物に同校で支給されたと考えられる遺物が出土していることから、当次面は尋常師範学校期に比定できる。明治21年(1888)に当地に移転してから、現在の茨城県立水戸第三高等学校校舎が建てられるまで、機能していたと考えられる。

#### (2) 第3次面

近世に整地された最後の面と考えられる。改修の記録によると、寛永15年(1638)に大規模な改修が完成し、明和6年(1796)に二の丸の火災後の改修が行われたとされており、当次面の構築時期は後者に比定できるであろう。七面焼や松岡焼など、19世紀代に位置づけられる陶器が出土していることも、時期を決定する一つの根拠となる。当次面は改修の行われた明和6年(1796)から水戸城が廃城となった明治4年(1871)まで機能していたと推定できる。

#### (3) 第4・5次面

第3次面の時期を、明和6年以降と考えると、当次面は、寛永15年(1638)に完成した、徳川期で最初に行われた改修の整地面であると推定できる。当次面で出土している土師質皿は、17世紀中葉から18世紀後葉に位置づけられるものと推定でき、改修の時期とも矛盾はない。改修の完成から第3次面の構築までは158年間あり、近世で最も長期間に渡り利用されていたことになる。当次面の機能していた時期は、寛永15年(1638)から明和6年(1796)と推定できる。第5次面は、第4次面に伴う基礎地業面であると考えられ、当期の改修が開始された頃の面である。

#### (4) 第6次面

当次面の時期は、前後の次面との関係や出土遺物から、16世紀から17世紀前半に位置づけられ、時期は佐竹氏の居城であった頃と重なる。確認できた第3号柱穴列跡の軸方向が、徳川氏入城後の二の丸御殿とほぼ同じであり、同じ軸方向で建物が築かれていたことが窺える。徳川期の城郭構造の基礎が、佐竹期に築かれたという想定との共通性が感じられる。

#### (5) 第7～9次面

第7次面は、15世紀後葉から16世紀代に位置づけられる。16世紀後葉の佐竹期に位置づけられる瀬戸・美濃産陶器が出土しており、佐竹氏の頃か、それ以前の江戸氏の頃かの判断は難しいが、佐竹氏の入城直後



は改修が行われていなかったことを考慮すると、第7次面が構築されたのは江戸氏の時であり、佐竹氏が入城し、文禄2年から改修を行ったため、第6・7次面の時期が一部重なりと推定される。第8次面は、時期が明確ではないが15世紀後葉から16世紀前葉と推定でき、江戸氏の頃に位置づけられるが、時期決定の根拠となる遺物が少量であるため、明確ではない。また生活面であったことを裏付ける根拠は無く、第7次面と同じ時期の地業面の可能性も考えられる。第9次面は改修が行われる以前の段階である。火葬土坑が確認できたことから、改修が行われる以前、おそらく15世紀末葉以前は、墓域であったことが想定される。第8次面から9次面にかけて、馬場氏の居館が存在していた12世紀末葉から15世紀中葉の遺物が出土しておらず、馬場氏による盛土を施すような大規模な改修の痕跡は確認できなかった。

#### 4 二の丸御殿部屋割り図と当調査区の対応

当調査区は中世から近代までの整地の様子を確認することができた。中でも、遺構・遺物共に多様なものが、徳川期の二の丸御殿が存在していた時期に比定できる、第3～5次面である。絵図面との対応から、当調査区が二の丸御殿のどこに位置するのかについて検討してゆく。

##### (1) 二の丸御殿における当調査区の位置

当地が二の丸御殿跡に位置することは、現存する絵図面などから判断できる。しかし御殿のどこに当たるのかを知る手がかりは少ない。現在の地図との対応が可能な資料として、「茨城県師範学校創立五十周年記念誌」に掲載されている絵図が挙げられる<sup>10)</sup>。これは師範学校と二の丸御殿を対照させたもので、烈公（徳川斉昭）時代と記載されており、幕末期のものと考えられる。御殿の詳細な部屋割りや名称は記されていないが、この絵図には縮尺と大手橋、虎口などが描かれており、現在の地図との照合が可能である。ここから推測すると、当調査区は御殿のほぼ中央部に位置すると考えられる。しかしこの絵図が実際の縮尺で描かれたものなのか、概略図的に描かれたものなのかを検討することはできず、あくまでも想定域を脱し得ない。

##### (2) 詳細な部屋割り図との対応

二の丸御殿の詳細を知る資料として個人蔵の水戸城部屋割り図（第103図）がある。この絵図には、各部屋の名称や柱などが詳細に描かれている。当調査区は、この図の二ノ間・御書番所周辺に位置すると考えられる。部屋割り図の時期は不明であるが、取り上げた二つの絵図は、部屋割りや記されている名称が共通しており、幕末期の御殿を描いたものと推定される。今回の調査では、第3次面が江戸時代後半に位置づけられ、絵図の推定時期と重なる。確認できた柱穴列跡と絵図面に描かれている柱の並びを検討したが、確認できた遺構に限られており、絵図との一致をみるには至らなかった。また石組み遺構や、火に関わる施設と想定される第24号土坑の位置や名称は確認できず、その詳細を絵図から確認することはできなかった。

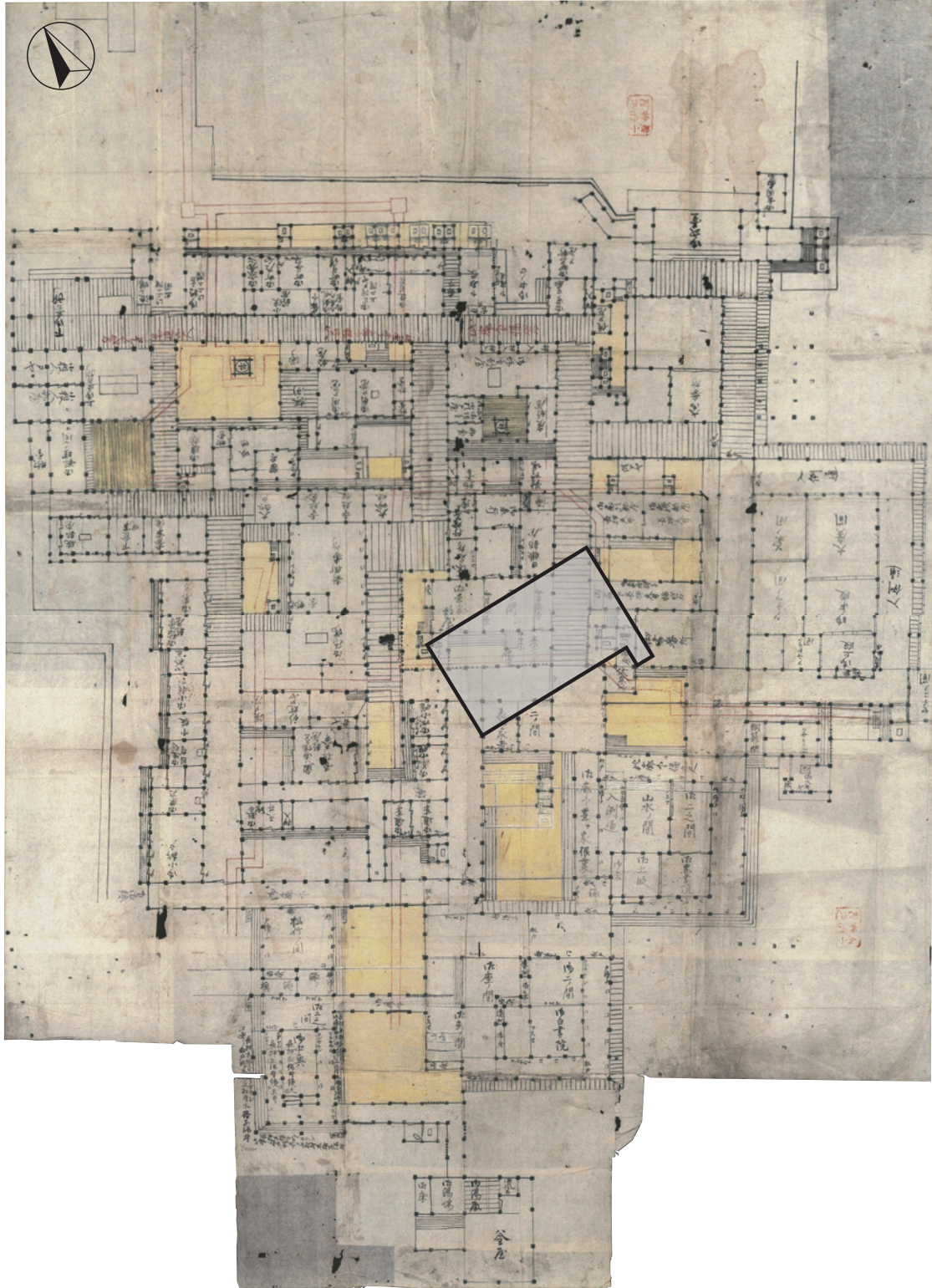
#### 5 凝灰岩の切石を用いた遺構について

今回の調査で確認できた当遺跡の特徴的な遺構として、凝灰岩の切石を用いた遺構がある。第1・2A・2B号石組み遺構、第1A・2号用排水路跡、第1号石敷き遺構がそれである。これらの遺構は、第3～5次面で確認でき、いずれも近世に位置づけられる。詳細は本文に記載しているので、ここではその類例や性格について検討してゆく。

##### (1) 石組み遺構

当初、石材が組み立てられている状況から井戸跡を想定した。しかし最も深さのある第2A号石組み遺構で深さ約1.7mで底面に達し、湧水もなく、井戸跡とは考えにくい。次に同遺構で、石組みの北東部に張り出し状

の石組みが構築されており、張り出しが金隠しとしての機能を有していると考え、トイレ遺構を想定した。石組み内の土壌サンプルを採取し、寄生虫卵が検出できるか分析を行ったが、付章に記載したように、寄生虫卵は検出されず、土壌からトイレ遺構と性格づけることはできなかった。トイレ遺構には、汲み取りが可能なように甕や桶が設置されている例が多く、本跡も同様であるならば、土壌から寄生虫卵が検出されなかつ



第 103 図 水戸城部屋割と調査区の対応図 (約 1 / 800) (網伏せ部が調査区)



たことも不思議ではない<sup>11)</sup>。しかし深さ 1.7m とトイレとしては深く、トイレ跡とするにも疑問点が多い。石組み遺構が確認されている遺跡として、東京都の汐留遺跡や尾張藩上屋敷跡遺跡がある。汐留遺跡で確認された石組み遺構の性格は明らかではないが、尾張藩上屋敷跡遺跡で確認された石組み枘は、石組み溝と連結して、雨水の一時的な貯水や排水、またトイレの便槽として用いられていたとされており<sup>12)</sup>、当遺跡の石組み遺構も広い意味で枘として捉えるが適当であろう。

## (2) 用排水路跡

今回の調査で、2条の凝灰岩の切石を用いた用排水路が確認できた。水戸藩に関わる凝灰岩を用いた水路跡ということで、笠原水道との関連が想起される<sup>13)</sup>。笠原水道の石樋が底石の両側面に側石を立てて設置されているのに対して、今回の調査で確認できた第1A号用排水路跡の石樋は、凹字状に切り出された石材が用いられている。また工具痕も笠原水道の石材が5cm程であるのに対して、本跡で確認できた工具痕は幅2.6cmと狭く、差異が認められる。斜位に工具痕が確認できることやその幅などは、当遺跡の石組み遺構や石敷き遺構に近い。用水路・排水路のどちらで用いられていたのかは判然とはしないが、凹字状に切り出された形状が、排水が漏れ出さないための処置と捉えるならば、排水路と考えられる。笠原水道との形状の違いは、用途が異なるために生じたものと推測される。第2号用排水路跡は、笠原水道同様、底石と側石が分かっていたと考えられるが、遺存状況が悪く、詳細及び性格は明確でない。

## 5 おわりに

今回の調査で、中世から近代にかけて繰り返されてきた水戸城跡の改修の様子を、確認することができた。特に近世に関しては、徳川氏入城以後の改修の記録との一致がみられ、また二の丸御殿の様子を垣間見ることができ、石組み遺構や用排水路を確認できたことは、近世城郭を知る上で貴重な資料となる。改修の記録と整地面の整合性は、調査範囲が限られており、また中世に関しては出土遺物が少量であることから、強引に結びつけた感は否めない。今後の調査で詳細が確認され、今回の調査結果が修正されながらも、水戸城の全容解明の一端を担うことができれば幸いである。

### 註

- 1) 狭川真一編『日本の中世墓』高志書院 2009年3月
- 2) 芳賀友博他「小幡城跡 前新堀遺跡 前新堀B遺跡 諏訪山塚群 藤山塚 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT) 建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第314集 2009年3月  
小幡城跡の第1号堀跡、第144号土坑から出土している土師質小皿の形状に類似している。
- 3) 櫻村宣行「(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書白石遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第82集 1993年3月 第4号溝跡、第8号井戸跡から出土している内耳鍋の形状に類似している。
- 4) 藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～実行委員会 2005年9月 藤澤氏の瀬戸・美濃大窯製品編年に準拠する。
- 5) 註4に同じ
- 6) 永越信吾「中世末から近世初頭のかわけと内耳鍋」『江戸遺跡研究会第21回大会 発表要旨 近世江戸のはじまり』江戸遺跡研究会 2008年2月 東京駅八重洲北口遺跡の1264号遺構、丸の内三丁目遺跡52号土坑出土の土師質皿の形状に類似している。
- 7) 稲田義弘「新善光寺跡 宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第256集 2006年3月 第2号池跡出土の土師質小皿の形状に類似している。
- 8) 註6掲載の日本橋一丁目遺跡10・11面・12面出土の土師質皿の形状に類似している。
- 9) 水戸市教育委員会『水戸城跡(第5地点・第6地点)現地説明会資料』2008年11月
- 10) 田口美雄『茨城県師範学校創立五十周年記念誌』茨城懸師範学校内水城校友會 1928年10月
- 11) 大田区立郷土博物館編『トイレの考古学』東京美術 1997年5月
- 12) 江戸研究会編『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 2011年2月
- 13) 水戸市教育委員会「笠原水道-第6次・10次・11次発掘調査報告書-」『水戸市埋蔵文化財調査報告』第36集 2010年3月

### 参考文献

- ・茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会『茨城県考古学協会上世シンポジウム 茨城中世考古学最前線～ 編年と基準資料 第1分冊 発表資料編 基準資料編(県北・県央・鹿行・県西地区)』2011年1月
- ・江戸出土陶磁器研究グループ『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I 発表要旨』1992年12月
- ・(財)東京都生涯学習文化財団「尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第97集 東京都埋蔵文化財センター 2001年3月
- ・汐留地区遺跡調査会『汐留遺跡-汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書-』1996年3月

# 付 章

水戸城跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水戸徳川家の居城として知られる水戸城跡は、那珂川が形成した沖積低地（那珂川低地）および那珂川の支流である河川が形成した沖積低地によって画された台地上に立地する（早川，2004）。

本報告では、水戸城内の発掘調査で検出された近世の石組み遺構の性格（トイレ遺構の可能性）、石組み遺構および桶埋設土坑から出土した施設材に由来するとみられる木材の樹種の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

## I. 寄生虫卵分析

### 1. 試料

試料は、石組み遺構（第2A号石組み遺構）内より採取された暗褐色を呈する粘土質シルトである。なお、今回の分析調査では、寄生虫卵分析の工程で確認できる花粉・孢子類の産状も含め検討を行った。以下に、分析方法を示す。

### 2. 分析方法

寄生虫卵分析は、金原・金原（1992）等を参考に処理を行った。堆積物 1cc あたり 10,000 個体以上検出されるような場合（金原・金原，1994）は簡便な方法で観察可能である。ただし、分析に供された土壤試料の状態から、寄生虫卵の数が少ない可能性が想定されたため、花粉分析に準じた方法で寄生虫卵の濃集を行った。

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容し、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵ならびに随伴する花粉・孢子化石を同定・計数する。結果は検出個数の一覧で示す。さらに、花粉化石は定法に基づいて出現率を計算し、図示する。

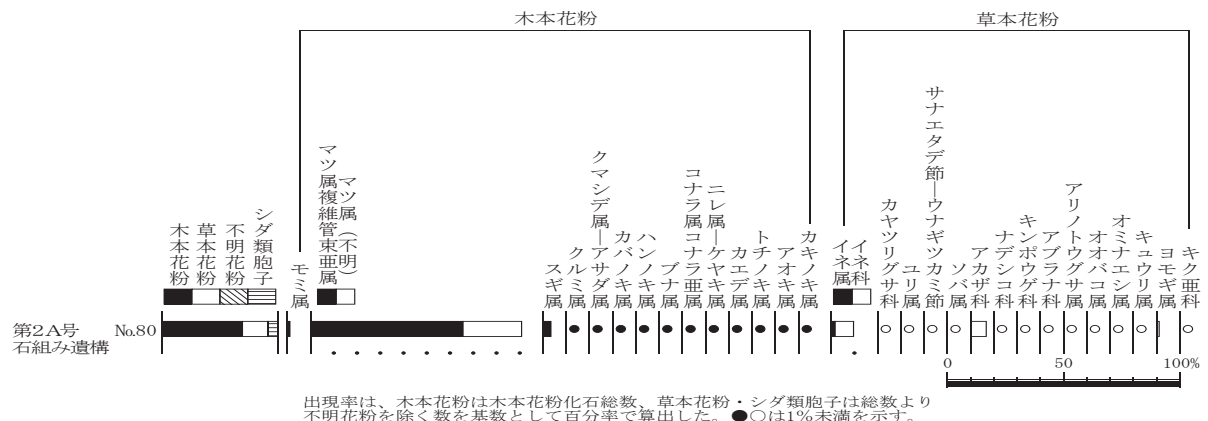


図1. 花粉化石群集

表 1. 花粉分析結果

第 2 A 号石組み遺構 No.80	
分類群	
木本花粉	
モミ属	3
マツ属複維管束亜属	171
マツ属 (不明)	66
スギ属	9
クルミ属	1
クマシデ属 - アサダ属	1
カバノキ属	2
ハンノキ属	1
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
ニレ属 - ケヤキ属	1
カエデ属	1
トチノキ属	1
アオキ属	1
草本花粉	
カキノキ属	1
イネ属	6
イネ科	30
カヤツリグサ科	1
ユリ属	1
サナエタデ節 - ウナギツカミ節	2
ソバ属	1
アカザ科	25
ナデシコ科	2
キンポウゲ科	1
アブラナ科	3
アリノトウグサ属	2
オオバコ属	1
オミナエシ属	1
キュウリ属	1
ヨモギ属	4
キク亜科	1
不明花粉	1
シダ類胞子	
ゼンマイ属	1
他のシダ類胞子	31
合 計	
木本花粉	261
草本花粉	82
不明花粉	1
シダ類胞子	32
総計 (不明を除く)	375
堆積物 1cc あたりの個数	
花粉・シダ類胞子	1400
寄生虫卵	-

城郭や庭園ではマツがよく植えられていたことから (飛田, 2002), 近傍の植栽に由来する可能性もある。カキノキ属も自生する種類が含まれるが, 植栽されることが多い種類であることから, マツ属と同様に植栽の可能性がある。この他に確認された木本類は, 現在でも周辺の山野に生育する分類群であることから, 周辺の森林植生に由来すると考えられる。一方, イネ科, アカザ科, ヨモギ属等の草本類は, 人里等の開けた場所に草地をつくる雑草等であることから, 城内や周辺に生育していたと考えられる。また, イネ属, ソバ属, キュウリ属等の栽培植物の花粉化石が検出されたことから, 周辺域における栽培も示唆される。

### 3. 結果

結果を表 1, 図 1 に示す。土壌試料 (第 2 A 号石組み遺構 No. 80) からは寄生虫卵は検出されなかった。花粉化石は, 保存状態が良い個体と悪い個体が混在し, 堆積物 1cc あたりの花粉量は 1400 個 /cc 程度である。これは, 花粉化石の保存が良い沼沢域の泥質堆積物に比べると 1/10 以下である。また, 花粉化石の保存状況から堆積後の経年変化や風化等の影響を受けていると考えられる。

確認された花粉化石は, 木本花粉が多く, その大部分はマツ属 (特に複維管束亜属) である。この他にスギ属, コナラ属コナラ亜属, カエデ属, トチノキ属, カキノキ属等も検出される。草本類は全体的に少ないが, その中でもアカザ科とイネ科が比較的多い。なお, イネ科花粉中には栽培種のイネ属が僅かに認められたほか, 栽培植物のソバ属やキュウリ属等も検出される。

### 4. 考察

今回の分析調査では, 石組み遺構 (第 2 A 号石組み遺構) 埋積物からは寄生虫卵は検出されなかった。そのため, 寄生虫卵の産状からトイレ遺構の可能性を言及することは困難である。

なお, 同試料における花粉化石群集は, 木本花粉を主体とし, マツ属が多く, 栽培種の種類を含むという特徴を示した。このような花粉化石群集は, 関東地方の近世の堆積物では普遍的にみられる組成であり, マツ属の多産は近世以降の植生破壊等により, マツの植林や二次林が関東地方で増大したことに由来する (辻ほか, 1986 など) と考えられる。また, マツは痩せ地でも育ち成長が早く, 木材は有用で樹形も美しいことから, 庭木や護岸用として, 植栽される場合も多い。中世末から近世の



## II. 樹種同定

### 1. 試料

試料は、石組み遺構（第2A号石組み遺構）から出土した（柾目）板状の木片と、桶埋設土坑（SK24）から出土した（板目）板状の木片の2点である。石組み遺構の木片は、遺構内より折重なるように出土しているが、状態が悪く、細片化しているため、本来の大きさや形状は不明である。また、桶埋設土坑から出土した木片は、出土状況から桶側板と推定される。

### 2. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートとする。プレパラートは，生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やRichter 他（2006）を参考にする。

### 3. 結果

石組み遺構（第2A号石組み遺構）および桶埋設土坑（SK24）から出土した板状の木片は，いずれも針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。以下に，解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は，仮道管，柔細胞，水平樹脂道，エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列，1-10細胞高。

### 4. 考察

石組み遺構（第2A号石組み遺構）および桶埋設遺構（SK24）から出土した板状を呈する木片は，いずれも針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属の木材は，軽軟で加工は容易である一方，強度・保存性が比較的高いことから，加工や保存性を考慮した木材利用の可能性が考えられる。

茨城県内では，稲岡遺跡（つくば市）や宍戸城跡（笠間市）等で16～17世紀頃の桶を対象とした分析調査が実施されており，針葉樹のヒノキが確認されている（財団法人茨城県教育財団，2002；能城，2006）。また，近世のマツ属複維管束亜属の利用についてみると，鉢形地区条里遺跡（旧鹿島町）では板状製品，棒状製品，杭，鋏柄，下駄，叶南前B遺跡（北茨城市）では井戸杵，宍戸城跡では敷居，柱，下駄，不明品等に確認されている（鈴木・能城，1990；大成エンジニアリング株式会社，2005；能城，2006；パリーノ・サーヴェイ株式会社，2006）。これらの事例から，当該期には建築材をはじめとして土木材や施設材等のほか，身近な木製品にもマツ属が利用されていたことが示唆される。

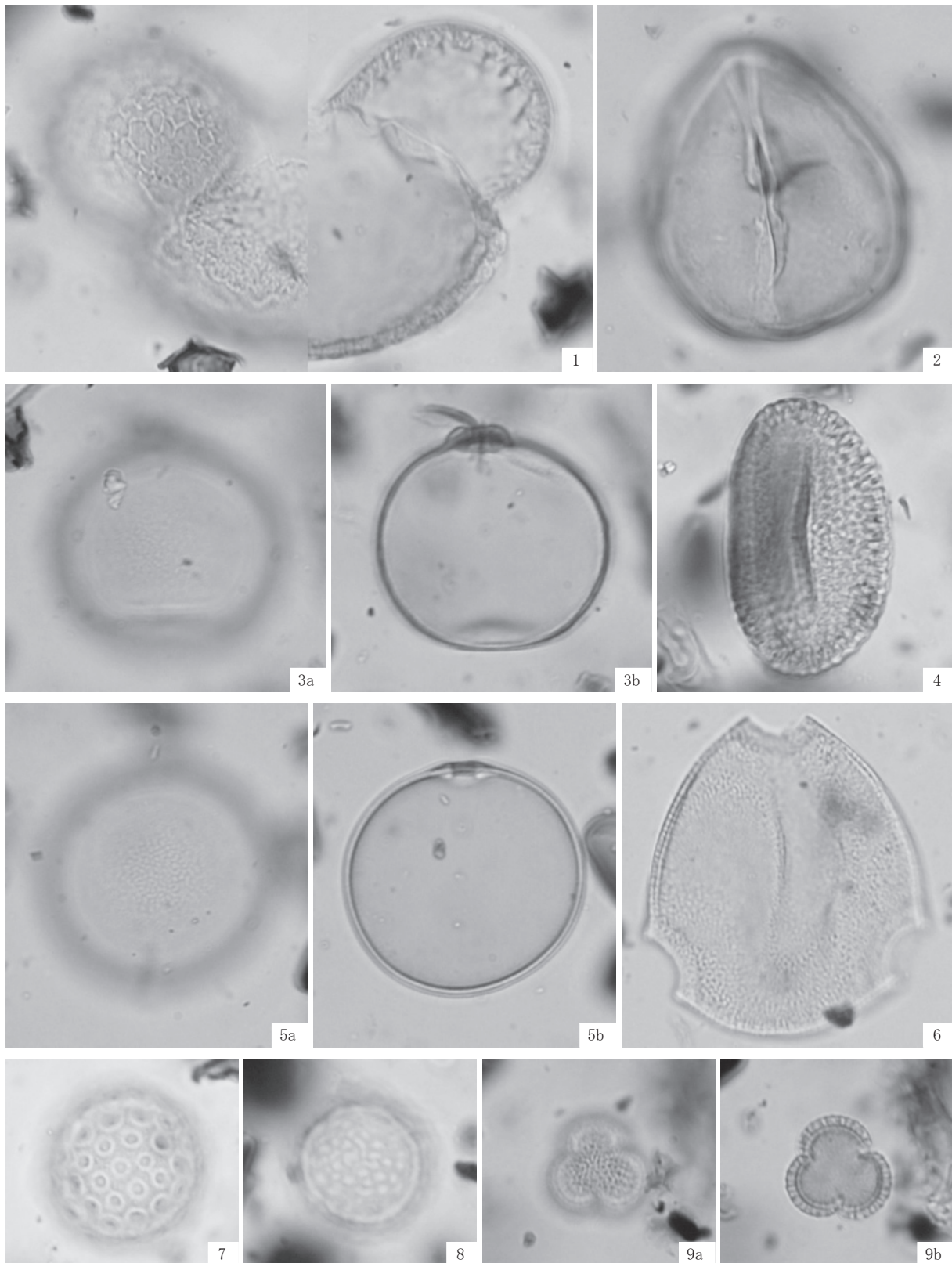
## 引用文献

早川唯弘，2004，I 地形分類図．土地分類基本調査 水戸，茨城県農地局農村環境課，5-25.

金原正明・金原正子，1992，花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構 - 右京七条一坊西北坪 - ，奈良国

- 立文化財研究所, 12-15.
- 金原正明・金原正子, 1994, 堆積物中の情報の可視化. 可視化情報, 14, 9-14.
- 能城修一, 2006, 宍戸城跡出土木製品の樹種. 新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書, 茨城県教育財団文化財調査報告第 256 集, 茨城県水戸土木事務所・財団法人茨城県教育財団, 159-160.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 出土した木製品の樹種. 宍戸城跡 - 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -, 株式会社コメリ・山武考古学研究所, 13-14.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 鈴木三男・能城修一, 1990, 材同定. 鉢形地区条里遺跡発掘調査報告書, 鹿島町の文化財第 66 集, 鹿島町教育委員会, 78-83.
- 大成エンジニアリング株式会社, 2005, 叶南前 B 遺跡井戸跡 SE01 出土井戸枠の樹種同定. 県営ほ場整備事業 神岡上地区埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集 富士ノ腰遺跡・神岡遺跡・叶南前 A 遺跡・叶南前 B 遺跡・古屋敷遺跡・仁井谷遺跡, 北茨城市教育委員会, 34-38.
- 飛田範夫, 2002, 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 435p.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人, 1986, 文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第 2 集 館林の池沼群と環境の変遷. 館林市教育委員会, 110p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 財団法人茨城県教育財団, 2002, 稲岡遺跡. 茨城県教育財団文化財調査報告第 187 集, 茨城県教育財団, 28p.

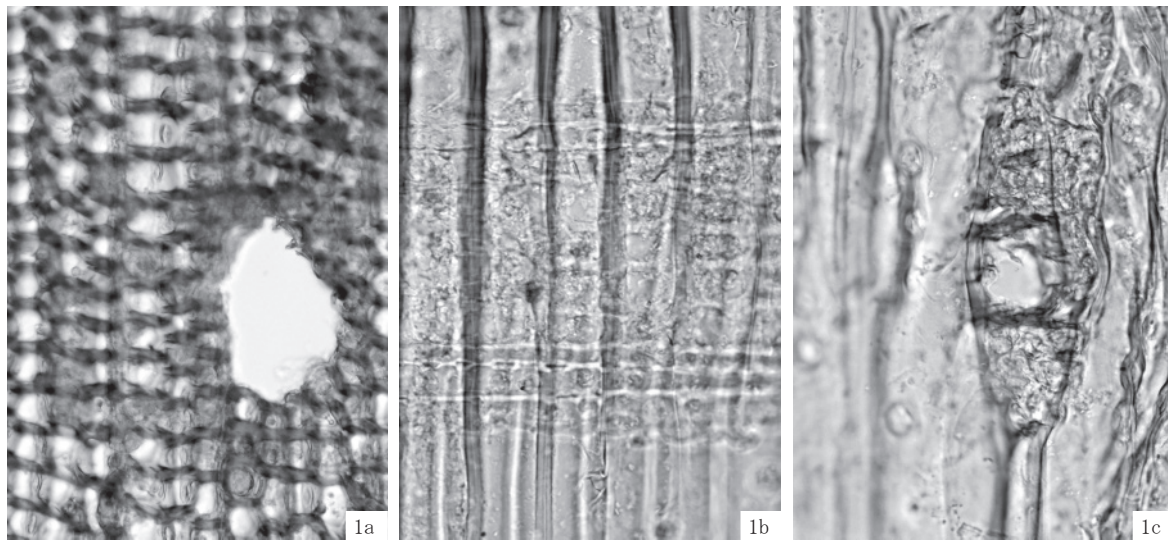
図版1 花粉化石



1. マツ属複維管束亜属(第2 A号石組み遺構;No.80)
3. イネ属(第2 A号石組み遺構;No.80)
5. イネ科(第2 A号石組み遺構;No.80)
7. アカザ科(第2 A号石組み遺構;No.80)
9. アブラナ科(第2 A号石組み遺構;No.80)

2. カキノキ属(第2 A号石組み遺構;No.80)
4. ソバ属(第2 A号石組み遺構;No.80)
6. キュウリ属(第2 A号石組み遺構;No.80)
8. オオバコ属(第2 A号石組み遺構;No.80)

図版2 木材



1. マツ属複維管束亜属 (SK24:No.41)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μm: a  
50 μm: b, c



# 写 真 图 版



調査区北壁土層断面







第9次面完掘状況



第1号住居跡完掘状況



第1号住居跡竈遺物出土状況



第3号溝跡遺物出土状況



第1号火葬土坑完掘状況



PL2



第 8 次 面  
完 掘 状 況



第 7 次 面  
完 掘 状 況



第 1 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 6 次 面  
完 掘 状 況



第 2 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況

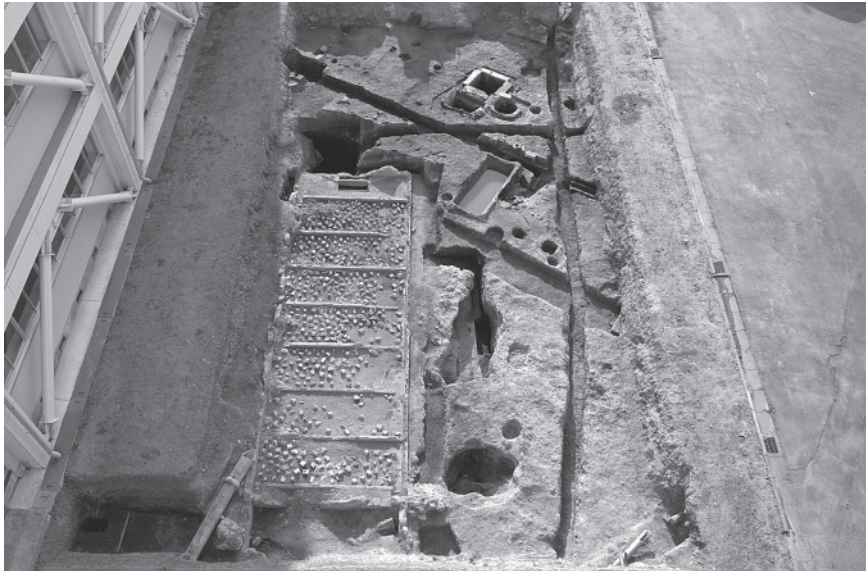


第 1 号 石 組 み 遺 構  
完 掘 状 況





PL4



第 4 次 面  
完 掘 状 況



第2A・2B号石組み  
遺構, 第24号土坑  
完 掘 状 況



第 2 A 号石組み  
遺構完掘状況





第2 A号石組み遺構板材出土状況



第2 B号石組み遺構遺物出土状況



第24号土坑遺物出土状況



第24号土坑桶出土状況



第36号土坑遺物出土状況



第36号土坑完掘状況



PL6



第 3 次 面  
完 掘 状 况



第1A号用排水路跡  
凝灰岩出土狀況



第1A号用排水路跡  
遺物出土狀況



第1号石敷き遺構  
完掘状況



第1号石敷き遺構  
遺物出土状況



第2号用排水路跡  
完掘状況







第2次面完掘状況



第1 B号用排水路跡完掘状況



第1 B号用排水路跡レンガ製柵出土状況



第1号道路跡花崗岩出土状況



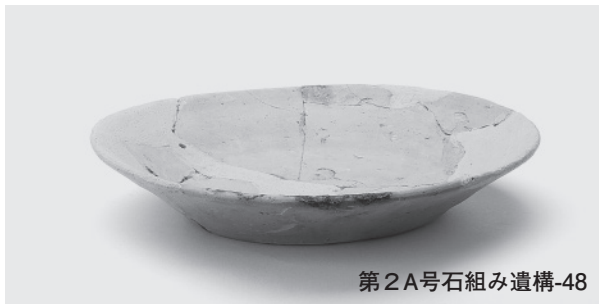
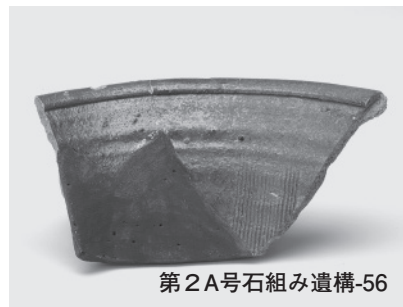
第5号土坑遺物出土状況





第1号住居跡，第1号井戸跡，第3号溝跡，第36・164号土坑，第4・5号ピット群，遺構外出土土器  
[第4～9次面]





第2A・2B号石組み遺構，第6号ピット群出土土器 [第4次面]



PG 5 P25-29



SK37-74



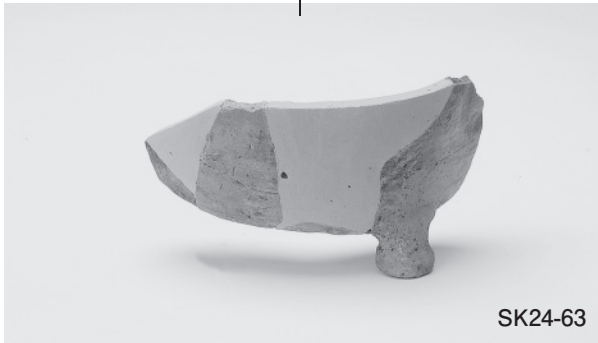
SK36-71



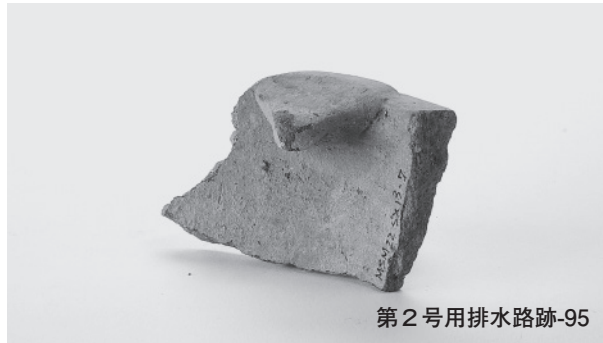
SK24-63



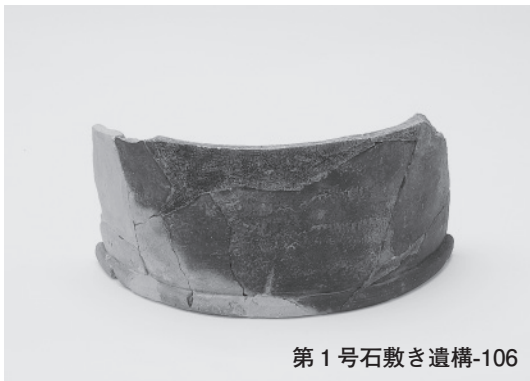
SK36-72



SK24-63



第2号用排水路跡-95



第1号石敷き遺構-106



12j9-117



SK 5-129

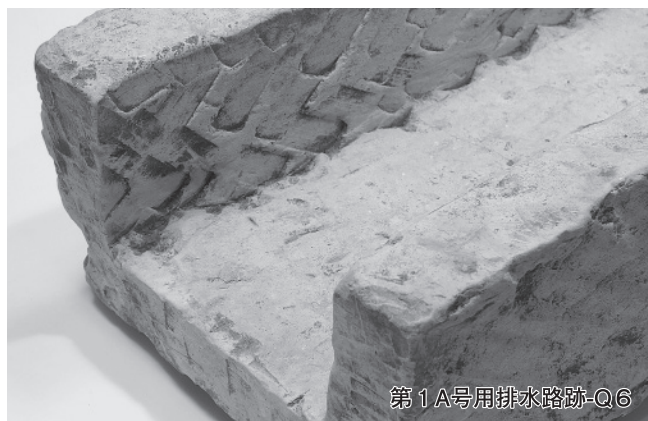
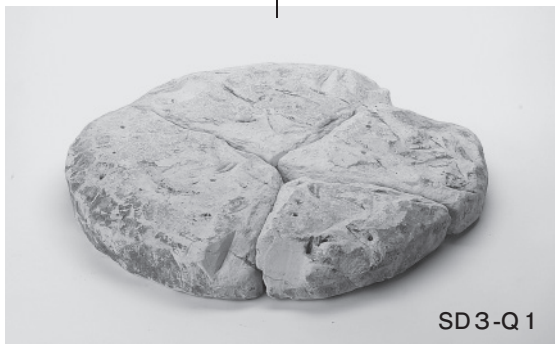
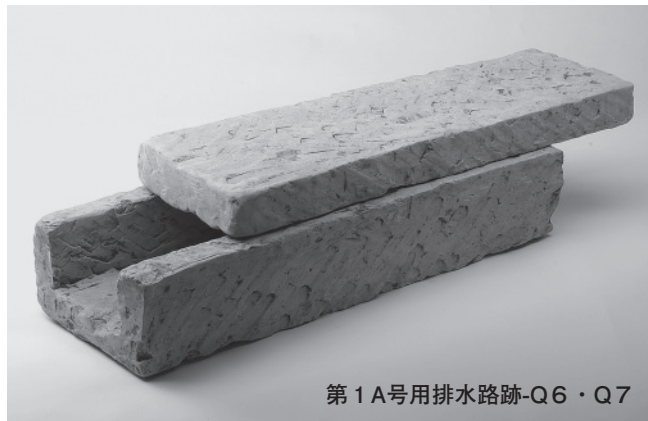
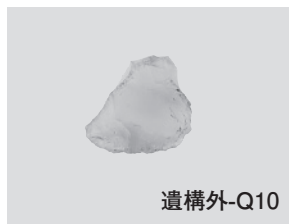
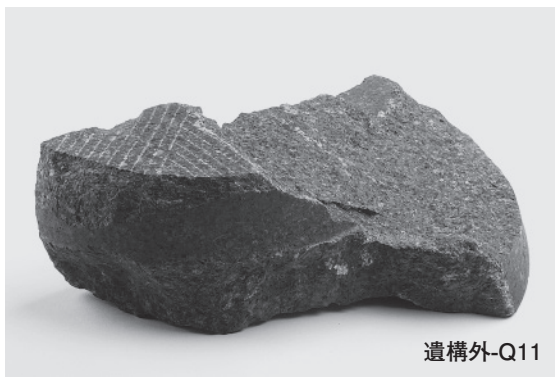
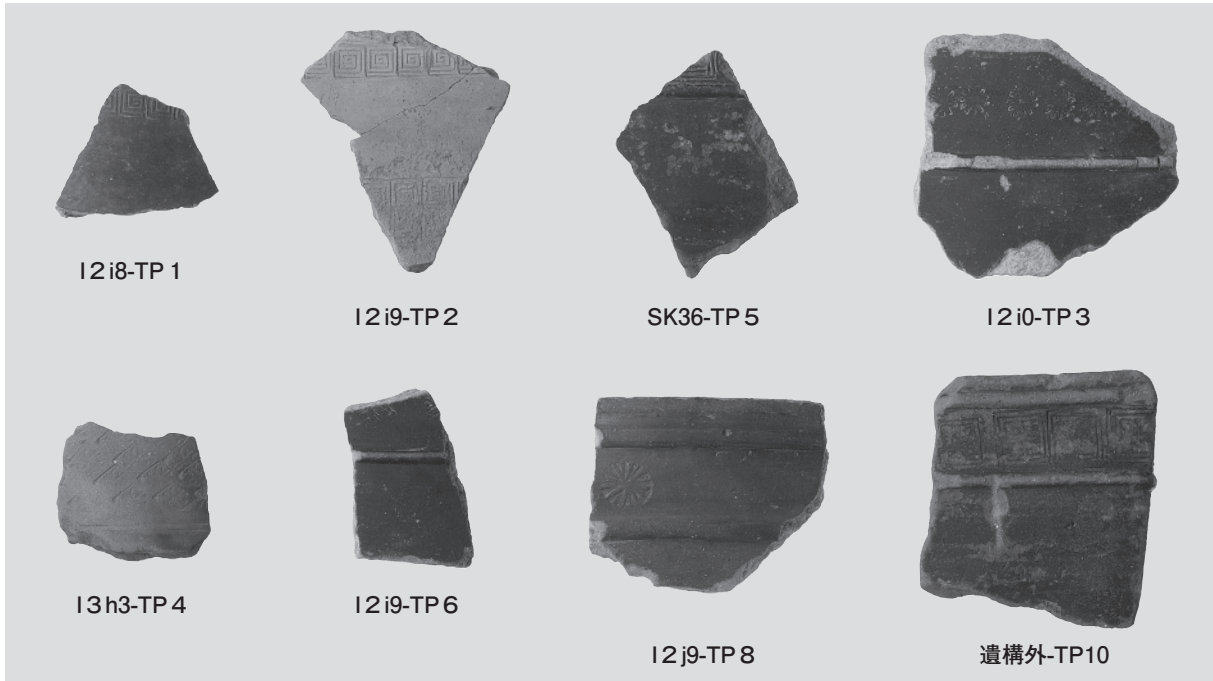


第6号瓦溜まり-121



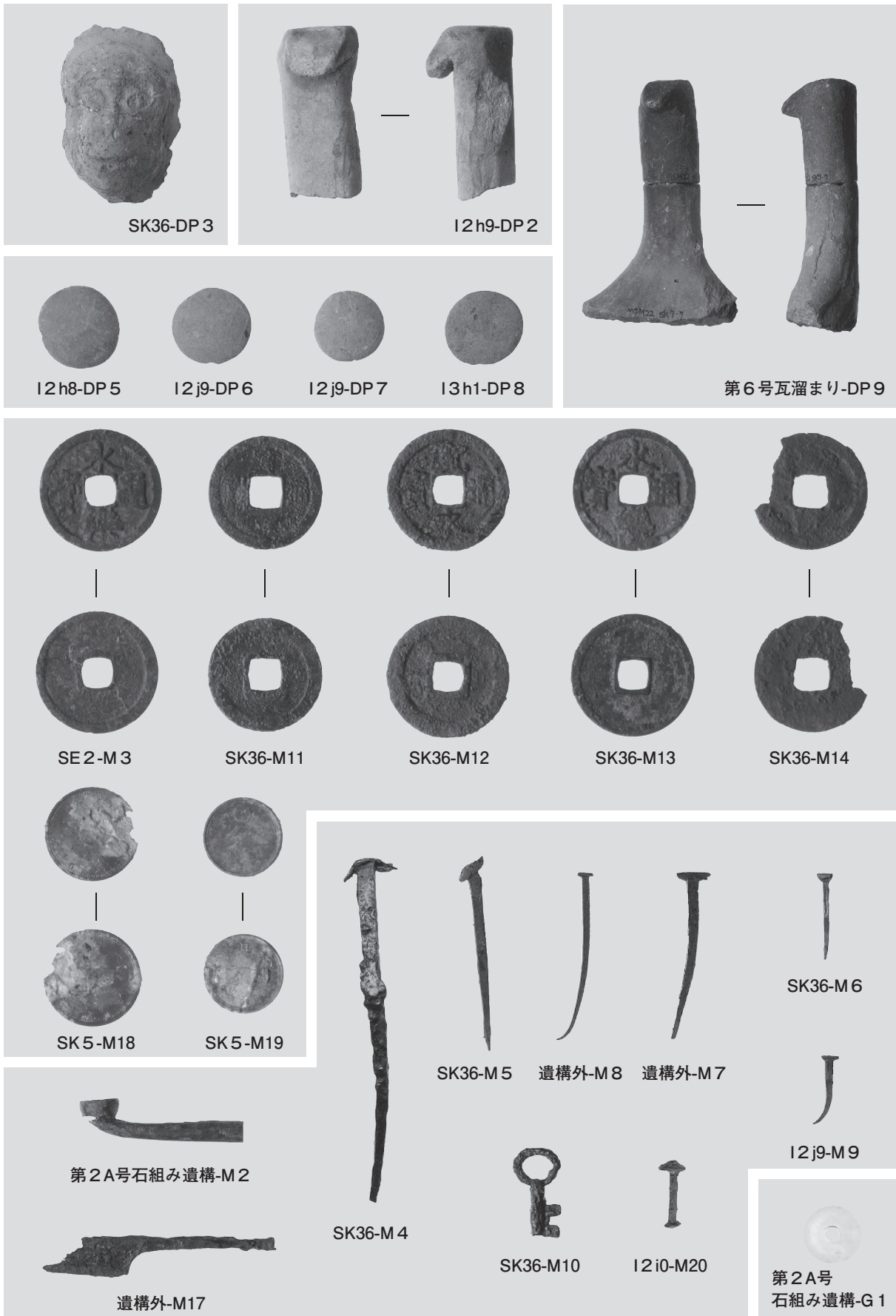
SK 5-131

第2号用排水路跡, 第1号石敷き遺構, 第6号瓦溜まり, 第5・24・36・37号土坑, 第5号ピット群, 遺構外出土土器 [第2~5次面]



第36号土坑，遺構外出土土器，第3号溝跡，第1A号用排水路跡，第118号土坑，遺構外出土石器・石製品（削器・茶臼・砥石・石槌・蓋）[第1・3～5・7・9次面]





第6号瓦溜まり, 第36号土坑, 遺構外出土土製品 (五徳・泥面子・弾碁石), 第2号井戸跡, 第2A号石組み遺構, 第5・36号土坑, 遺構外出土金属製品 (釘・鍵・鋏・剃刀・煙管・銭貨), 第2A号石組み遺構出土ガラス製品 (小玉) [2~6次面]





第2A号石組み遺構，第36・164号土坑，第3号柱穴列跡，第4号ピット群，遺構外出土瓦（軒丸瓦・軒平瓦・輪違瓦・棟込瓦）[4～6次面]



SK24-T12・T13



I2j9-T24



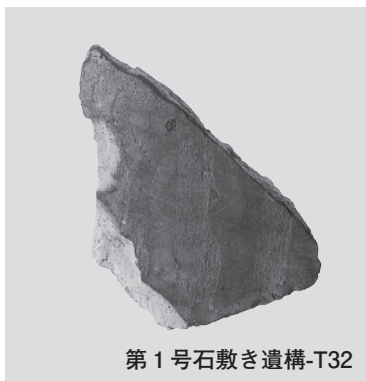
第1号石敷き遺構-T27



第1号石敷き遺構-T28



第1号石敷き遺構-T30



第1号石敷き遺構-T32



SK14-T33



I2h8-T34



SK5-T46



I2h8-T57



SK5-T48



SK5-T51



SF1-T42

第1号道路跡，第1号石敷き遺構，第5・14・24号土坑，遺構外出土瓦（鬼瓦・軒平瓦・軒棧瓦・板塀瓦・平瓦・軒込瓦・不明瓦）[2～4次面]



第2A号石組み遺構，第36号土坑，第4・5号ピット群，遺構外出土土器 [第4～7次面]





SK36-73



12i9-80



12j9-85



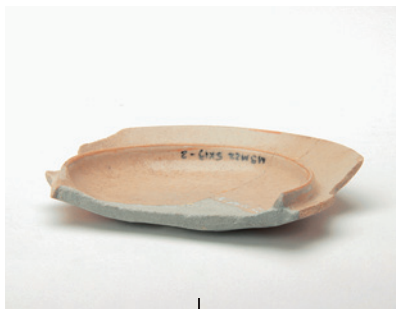
SK14-109



第1号石敷き遺構-97



第1号石敷き遺構-96



第2号用排水路跡-93



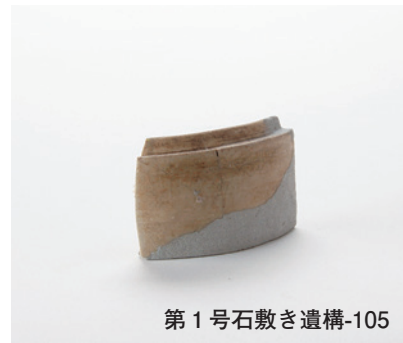
第1号石敷き遺構-101



第2号用排水路跡-93



第1号石敷き遺構-99



第1号石敷き遺構-105



SA4 P7-88



12j9-116

第2号用排水路跡，第1号石敷き遺構，第14・36号土坑，第4号柱穴列跡，遺構外出土土器 [第3・4次面]

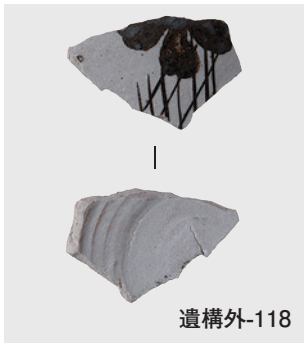




第1A号用排水路跡-90



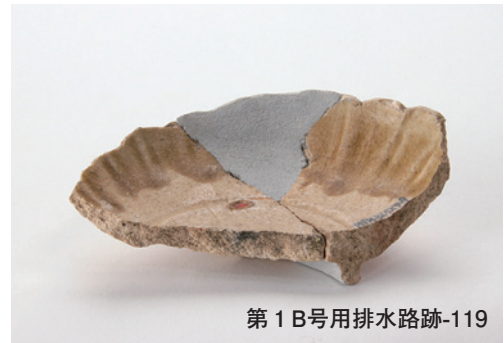
第1A号用排水路跡-91



遺構外-118



I2i8-115



第1B号用排水路跡-119



SK5-128

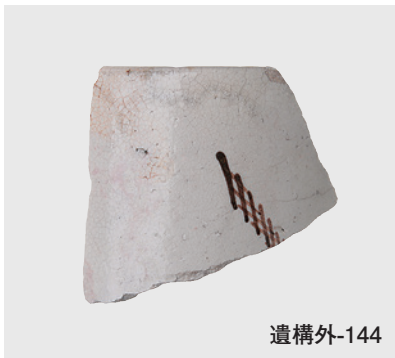


SK5-130

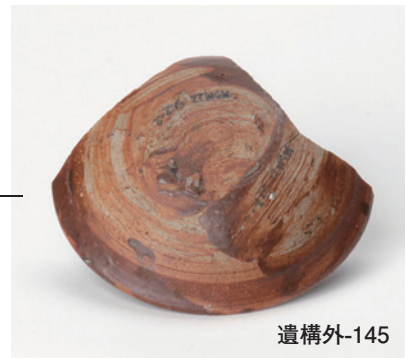


I2i9-120

遺構外-136



遺構外-144



遺構外-145

第1A・1B号用排水路跡，第5号土坑，遺構外出土土器 [第1～3次面]

# 抄 録

ふりがな	みとじょうあと							
書名	水戸城跡							
副書名	茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第362集							
著者名	松林秀和							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
水戸城跡	茨城県水戸市 三の丸2丁目 7番地の27	08201 - 172	36度 22分 13秒 (36度 22分 25秒)	140度 29分 02秒 (140度 28分 50秒)	20 ~ 30 m	20100601 ~ 20101031	270 m <sup>2</sup>	茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水戸城跡	集落跡	平安時代	堅穴住居跡	1軒	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石製品(蓋カ)			
	城館跡	中世	溝跡	1条	土師質土器(小皿・内耳鍋・火鉢・鉢), 瓦質土器(火鉢・鉢・香炉), 陶器(皿・鉢・壺・甕), 金属製品(釘・銭貨)			
			柱穴列跡	1条				
		近世	ピット群	1か所				
			火葬土坑	1基	土師質土器(皿・内耳鍋・火鉢・鉢・壺・甕), 瓦質土器(火鉢・鉢), 陶器(碗・皿・播鉢・土瓶・甕), 磁器(碗・皿), 土製品(五徳・泥面子・彈碁石), 金属製品(釘・鍵・煙管・銭貨), 瓦, 石製品(石樋), ガラス製品(小玉)			
			炉跡	1基				
			井戸跡	2基	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			溝跡	2条				
			土坑	5基	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			柱穴列跡	2条				
			ピット群	3か所	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			不明遺構	1基				
			石組み遺構	3基	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			用排水路跡	2条				
			石敷き遺構	1基	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			土坑	10基				
			柱穴列跡	2条	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			ピット群	4か所				
			用排水路跡	3条	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			道路跡	1条				
			溝跡	1条	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			瓦溜まり	6基				
			土坑	1基	陶器(碗・蓋・土瓶), 磁器(碗・皿・蓋・土瓶), 瓦(棧瓦・鬼瓦), 金属製品(銭貨), ガラス製品(瓶), プラスチック製品			
			ピット群	1か所				
要約	調査区は近世の水戸城二の丸御殿跡に位置し、御殿の柱穴や用排水路跡、石組み遺構などの施設が確認できた。部屋割図との対応から、今回の調査区は御殿のほぼ中央に位置すると考えられる。また中世から近世にかけて、水戸城は継続的に利用されており、その中で大規模な整地事業が、複数回にわたり行われていたことが明らかになった。							

## 印刷仕様

編集 OS Microsoft Windows XP  
Home Premium.ServicePack1  
編集 Adobe InDesign CS4  
図版作成 Adobe Illustrator CS4  
写真調整 Adobe Photoshop CS4  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
図面類 EPSON ES-10000G  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第362集

## 水戸城跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館  
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成24（2012）年 3月14日 印刷

平成24（2012）年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒311-4152 茨城県水戸市河和田1丁目1704番12号

TEL 0120-23-1473